

吉村 夜

ウォーシミュレーションクロニクル 第三卷

まえがき

朝でも昼でもこんばんは。吉村夜です。

この『ウォーシミュレーションクロニクル』三巻は、ファンタジア文庫にて打ち切りとなった、『自作ゲーム世界で俺が、神戦略で無双する』を改題したものであり、続編です。

当初は『小説家になろう』に投稿していたのですが、運営の方から、利用規約第14条11項（ア）に抵触する行為との指摘を受けました。書籍として販売している物語の内容掲載は可能であるものの、途中から始まっている物語だと読者の方が十全に楽しめないと判断され、書籍の販売促進のための広告行為にあたる、とのことでした。

つまり、1巻と2巻の内容も全文投稿するのであれば、3巻の内容の投稿も可能という運営方針であり利用規約なのです。

私としては1巻と2巻の内容もいずれ全文投稿するつもりでしたが、それが可能となるのは、著作権を私が取り戻す、刊行から三年後のこととなります。ちなみに、2巻の奥付にある刊行年月日が平成28年2月25日です。

というわけで、ひとまず『小説家になろう』に投稿したものは削除し、こうして私のサイトに、一太郎ファイルから生成したPDFファイルをアップすることにしました。

なお、この まえがき の後に、一巻と二巻のおおまかなあらすじ、主要な登場人物の紹介などをつけることにしました。未読の方、一巻と二巻の内容をもう忘れてしまった方は、ご一読いただければ、と思います。

それと、この物語は四巻で完結のプロットを立てており、物語が終わるのは次巻となります。必ず完結させるつもりですが、この後、再入院と手術が控えている等々の問題もありますし、モチベーションの問題もあり、いつ原稿があがるかは、わかりません。気長にお待ちいただければ幸いです。

ともあれ、『ウォーシミュレーションクロニクル』三巻です。

以下にメールアドレスを記しますので、ご意見、ご感想、お寄せいただければ幸いです。

必ずしも返信するとは限りませんが、読ませていただきます。

skyrim77zz369yy@excite.co.jp

2017 年 3 月 3 日

吉村 夜

ウォーシミュレーションクロニクル 一巻概要

日本のごく平凡な高校に通う兄妹、柴崎剣と柴崎紗良は、将来はゲームクリエイターになるとの夢を実現するため、学校が終わると即座に帰宅、ゲームの制作にいそしんでいた。その自作ゲームのタイトルは『ラクウェルクロニクル』。ヒューム（人間）、エルフ、ドワーフ、リザードマンなどの多様な知的種族が混在する剣と魔法の異世界ラクウェルを舞台にした、国取り合戦型のウォーシミュレーションゲーム……。三年の時を費やしてついに完成の目処が立った日、二人はどういうわけか異世界ラクウェルに転移する。

そこは自作ゲーム『ラクウェルクロニクル』そっくりの、大戦乱に見舞われている大陸だった。シヴァ——柴崎剣には、ゲームで主人公専用と設定していた強大な特殊能力が備わっていた。シヴァはゲームでヒロイン的立ち位置としていた美しき少女にして女王パッシェリカに懇願され、将軍として彼女を助けることとなる。

しかし、パッシェリカの麾下はわずか三百ほど。しかも、パッシェリカの持つ王の証にして聖遺物の聖剣を奪うべく、隣接する東リザード自治領の領主バルゴが、三千の兵を率いて攻め寄せつつある。シヴァは主人公専用能力のドラゴンハーツと、ゲーム制作者であるがゆえに戦闘の仕様を知悉していることを武器に、バルゴと戦う作戦を立案するのだった。

ウォーシミュレーションクロニクル 二巻概要

一巻にてバルゴとの戦いを制し、東リザード自治領と同盟を結ぶこととなったパッシェリカ陣営。しかし、大陸に乱を呼んだ元凶である暴王ラディンは強大で、これと対抗するには兵を増やし武器防具を用意して軍団を強化しなければ話にならない。が、日本だろうが異世界だろうが、先立つものがなければ話にならないのが世の常。さて、どうするか——。

シヴァは自作ゲームにおいて、バルゴの領内に巨大なダンジョン『ザガロの墓所』を設置していた。そのダンジョンが自作ゲームのものと同じなら、強いが、倒せばお金をもりもり稼げちゃうモンスターがわんさかいるはず……！ というわけでシヴァは、資金稼ぎのため精鋭部隊を編制してダンジョンへ潜る。

ところがこのダンジョン、どういうわけか自作ゲームの『ラクウェルクロニクル』とは何かがちがう。モンスター退治で大金を稼ぎ、浮かれ調子でついつい奥へ奥へと進んだ結果、一同はダンジョン内で迷子に。食糧も水も限られた量しか持ってきていないから、それが尽きる前に地上へ戻らなければ。焦りと恐怖で平常心が失われてゆく……。そんな一同の前に、恐るべき敵が姿をあらわした。

主要な登場人物

しばさき けん
柴崎 剣

シヴァ。日本の高校二年生。ゲーム好きが高じて、中学生の時に将来はゲームクリエイターになるとの志を立て、独学でプログラミングを身につけゲーム制作に乗り出す。その自作ゲームにして国とり合戦型ウォーシミュレーションゲームである『ラクウェルクロニクル』が完成間近となったある日、どういうわけかゲームそっくりの異世界であるラクウェルに転移してしまう。

自作ゲームで主人公専用の強力な特殊能力に設定していたドラゴンハーツの力を持つ。これは自身及び直属部隊の戦闘能力を大幅に強化できる特殊エンチャント。また、自作ゲームには部隊を構成する兵士の絆の力……チェインが強いと、戦闘能力にボーナスがついたり部隊全員の力を集めて特殊な攻撃や魔法を発動できたりする仕様があったのだが、この仕様は異世界ラクウェルにも適用されている。そしてシヴァには、誰が誰を好きなのか、誰が誰を嫌っているのか、絆の強さを確認できる読心術じみた能力も備わっている。

自作ゲームでヒロイン的立ち位置のキャラクターであった美少女パッシェリカの本物と出会い、彼女に懇願されて、将軍としてパッシェリカ陣営の軍事全般をとりしきることとなる。

さくら
柴崎 紗良

サラ。シヴァの妹。高校一年生。幼いころから絵が好きで、兄のゲーム制作にグラフィッカーとして参加。設定画からドット絵から、とにかくグラフィック全般を担当してきた。

兄思いの良い子であり、兄妹仲はすこぶるいい。『ラクウェルクロニクル』には主人公の相棒的魔法使いとして登場。そして異世界ラクウェルに転移したサラには、魔法使いの能力が備わっていた。攻撃魔法だろうが回復魔法だろうが、系統を問わず様々な魔法を習得できるオールラウンダー。

パッシェリカ・イスカリエン

シヴァが自作ゲームでヒロイン的な立ち位置にしていた美少女の実物。シヴァとほぼ同じ年格好。

ラクウェルに一千年の平和をもたらしたイスカリエン王朝には、流行り病や政変による王家断絶を防ぐため、王がひそかに子をもうけておく散種の儀があった。それによりもうけられた前王アーウィンの娘。

その事実を知らず一庶民として成長。だがラクウェルが戦乱に見舞われた後、事実を知って、ラクウェルに平和をとりもどすべく、基盤となる領地も持たないまま、女王として旗揚げ。しかし、父である前王を殺害して王位につき、戦乱の元凶となった暴王ラディンから目の敵にされており、彼がさしむけてくる手勢から逃げ回る羽目に。結果、大陸の端へ端へと追い詰められていった。

ドラゴンハーツの力を持つシヴァと出会い、彼を将軍に抜擢。

アノン・アレリア

アレリア卿。日本でいえば女子大生の年齢。大陸北東の辺境、アレリア自治領の領主。ラディンの手勢に負われて保護を求めてきたパッシェリカらを受け入れると決めた。

愛馬メディを駆る姿は、凜とした女騎士。しかし内面は、気の弱いところが……。

じつは散種の儀でもうけられたアーウィン王の娘であり、パッシェリカの異母姉にあたる。しかし女王として旗揚げする気概はなく、その事実を秘匿し続けている。とはいえ、パッシェリカを保護すると決定した裏には、すでに両親を亡くしているアノンにとって、肉親を守りたいとの感情もあった。

ネビウス

ネビウス老。白髪の老人で、召喚魔法の使い手。パッシェリカに王家の聖遺物である聖剣を渡し、王家の人間であるとの真実を告げて旗揚げをうながし、のみならず、少ないが旗揚げ資金も用意した人物。

しかし、身勝手で、口が悪く、嫌われ者。そんな人物が、なぜ正義を旗印とするパッシ

ェリカ陣営にいるのか？ いやそもそも、暴王ラディンが厳重に保管しているであろう聖剣なんてものを、どうやって持ち出したのか？ 色々と不自然な点が多い。

ミモリー

ラクウェルの知的種族のうち、唯一翼を持ち飛行能力を有している種族、セフィラ。そのセフィラの傭兵。圧倒的不利にあるパッシェリカに味方し、彼女が女王となれば莫大な恩賞があるはず！ とヤマッ気たっぷり。ほれっぽい性格で、英雄的な力を持つシヴァにほの字。

リドリー

ミモリーの弟。熱しやすく冷めやすい姉の性格を危惧している。

グレイン

直立歩行の猫、ともいうべき外見の種族、ケットシーの男。初期からパッシェリカを支えている。猫科動物そのまんまの能力を備え、隠密行動が得意。

バルゴ

アレリア自治領の西、東リザード自治領の領主にしてリザードマン。リザードマンは臂力に優れる戦士むきの種族で、バルゴ自身も名うての戦士。

この乱世は力ある者が平定しない限りいつまでも終わらない、自分こそが覇王になってやる、と……パッシェリカの聖剣を奪取して新たな王を名乗ろうとする。

しかしシヴァに敗れて考えをあらため、パッシェリカに臣下の礼をとって、同盟を結ぶ。

ロルカ

バルゴの妹。リザードマンは男女の性差による体格差がほとんどない種族で、小柄なバルゴより体格面で優れている。だが、兄よりもずっと理性的で、感情的な兄をたしなめるのが自分の役所と心得ている。

シャノーラ

ロルカに雇われた傭兵で、風術師の少女。リザードマンではなく、ヒューム（人間）。その活躍により、シヴァたちを、あわや作戦破綻寸前まで追い詰める。バルゴがパッシェリカ陣営に与すると決めたため、以降はパッシェリカ陣営で雇用してもらうことに。

ウィード

ダークエルフの少年。若干十四歳、日本でいえば中学二年生だが、戦乱により難民化した多くの子どもたちをまとめあげ、傭兵集団として率いてきた。大人顔負けの戦闘能力を持つ。

ユリア

ウィードとともに子どもたちの面倒を見てきたエルフの女の子。およそ傭兵らしからぬぼやんとした性格。ウィードと仲がいい。どのくらい仲がいいかというと、一緒に混浴風呂に入っちゃうくらい仲がいい。

ダンガン

中年の男性。前王アーウィンの命により、パッシェリカをひそかに見守ってきた人物で、パッシェリカが女王として旗揚げしてからは騎士長を務める。若造だらけのパッシェリカ陣営においては、年長者として常識を踏まえた発言をする。

しかしその一方、話のわかる好人物でもある。シヴァが画策した混浴風呂の建設に際し、多大な貢献を果たした。

ザガロ

シヴァが資金稼ぎのため潜ると決めたモンスターだらけの大ダンジョン、ザガロの墓所の最深部にいた、元・魔法使いとおぼしき霊体じみた存在。

シヴァを見て、イスカリエン王朝の開祖であるジェド王と混同。ジェド王に何か恨みがあるようで、シヴァたちを激しく攻撃してきたが、敗北。ただし倒されたわけではなく、どこかへ逃げた模様。

ラディン・イスカリエン

父であるアーウィン王をはじめ一族を惨殺して王位につき、暴政を開始した怪物。通称、『暴王』。彼の暴政に憤って各地の領主が反旗を翻したことにより、ラクウェルは群雄割拠の戦乱の世となる。大陸の中央、王都とともに一大経済圏を形成している巨大な湖・内海周辺を支配し、その経済力を背景に、各地の群雄より頭ひとつ抜きんでた兵力を有している。

作・吉村 ^{よしむら} 夜 ^{よる}

TURN1

戦乱の時代！ 勝利の栄光と敗北の屈辱が交差する、熱き時代！

——エレナ・ディアツァ

季節は春を過ぎて夏にさしかかった。

暑い季節の朝夕は天候が不安定だ。山間部は特にそうで、からりとした胸のすく晴れ間が一転、白き闇に等しい濃霧が立ちこめることもあれば、雷と強風を伴う豪雨が地上のすべてを薙ぎ倒さんばかりに荒れ狂うこともある。

我々が^{おおいくさ}大戦を目前に控えたその日、天はそうした気まぐれな一面を見せた。

シェドラ山は女の乳房のごときなだらかな^{りょうせん}稜線の山で、どこもかしこも樹木の緑に覆われて岩や崖の峻烈さは皆無、遠くから見れば心和むほど穏やかだ。けれども、夕刻、一番星が輝き始めたころ、にわかに空がかきくもって、激しい雨が地を^{うが}穿たんばかりに降り始めた。

「幕屋は！ 早くしろ！」

私は兵を^せ急かしてあわただしく幕屋を設置させると、緋色のマントを脱いで椅子の背にかけ、雨に濡れた髪を手で絞った。

「おいおい。女ってのは、雨ごときでどうしてそう大げさなんだ？ 兵の手前ってもんをちっとは考えろよ。たかがこんなことでぎゃんぎゃんでかい声張り上げてたんじゃ、將軍って地位が軽く見られちまうぜ。だろ？ だいたいよお、エレナ。お城の舞踏会じゃなく戦場へ行こうってのに、なんなんだ、その長い髪は。もっと短く切れ、短く」

私のすることを見て、副将のガラックが鼻を鳴らした。

「口を^{つし}慎め！ 私は若干十二歳で宮廷魔法使いとなった才女だ。貴様のような野人丸出しの傭兵風情とは違うのだ！ だいたい、兵の手前と言うなら、將軍であるこの私に、副将にすぎない貴様が出すぎた口をきくなど言語道断！ 貴様の方こそ、そのくらいわきまえ

ろ！」

私が睨み顔になって怒鳴りつけると、幕屋に机や燭台を設置していた小者たちが首を縮めた。彼らが（また始まったよ）と言いたげな目つきをしている様は、いちいち確認せずとも手にとるようにわかる。その認識が、余計に私のいらいらを募^つらせた。

「おうおう、こいつはまた怖^{こえ}ェ將軍様だ。だがよ、魔女さん。ことあるごとにお前が口にする『弱冠十二歳で宮廷魔法使い』なんて謳い文句は、戦場じゃ誰も気にしちゃくれねえし、二十歳をとくにすぎた今じゃ、昔話もいいとこだろ。こいつは善意の忠告だが、兵にナメられたくなけりゃ、そんなやくだいもない自慢話はしねえことだ。それとよ、おれに文句があるんなら、おれに言わずラディン陛下に直言しろよ。このガラック様が一介の傭兵から副将の地位にまで成り上がったのは、ラディン陛下の信頼あればこそだぜえ」

私に叱責されたガラックはといえば、謝罪するどころか、倍返しの勢いで言い返してきた。

私は、こいつが嫌いだ。

いや……それでは正確さを欠く。

私は、こいつが『大』嫌いだ。

第一に、粗野だ。口の悪さ、ぞんざいきわまりない所作の数々、とにかく目に余る。育ちの悪さを隠そうともしないふてぶてしさには、反吐^{へど}が出る。第二に、醜い。低い背丈、ずんぐりむっくりの身体つき、猪首、その猪首の上に鎮座している小柄な体軀には不釣り合いにでかい顔！ ギョロ目、大きすぎる鼻と鼻の穴、その鼻の穴から伸び放題の太く長い鼻毛、太すぎる唇、乱杭歯……。たとえ高名な芸術家が^{たくみ}匠の技のすべてを振るって醜悪な彫刻を造ろうとしたとて、ここまで醜悪にはできまいとさえ思える。

かてて加えて、なにが耐えがたいといって、私のような美しくて生まれも育ちも優れた女に向けてくる、劣情剥き出しの視線……！ こいつが私の胸や股間に向けてくる目つきのいやらしさときたらない。べったりと肌に貼りついてくるような粘っこさだ。この醜男は、夜になると寝所にて、私を組み敷いて好き放題に犯す妄想にひたりながら逸物をしごいているに違いない。

ゲスめ。ゴミめ。下等な虫けらめ。

だが、戦場たたき上げの男だからか、兵には人気がある。なによりイスカリエン王家の正統な王位継承者たるラディン陛下の信頼を得ているので、始末に負えない。こいつがなにか不始末をしでかしたなら、私は大喜びでその件をラディン陛下に報告し、この害虫を光輝ある陛下の軍団から追放してやるのだが。

「おう、食いモンと酒を頼む」

そのガラックは、睨み殺さんばかりの私の視線などどこ吹く風とばかりに小者に言いつけると、角つきの兜を脱いで机の上に転がした。薄くなって禿げ同然となった頭頂部を、気づかう手つきで撫で回す。兜を被りっぱなしの兵に若禿げはまああることなので、それは許せるが、しかし……。

「なあおい、エレーナ」

ガラックは運ばれてきたチーズの塊を手づかみにして口へ運んだ。

「おれは、この雨は幸先のいい恵みの雨と見るぜ。明日の朝まで降り続けてくれりゃ、おれたちにとっては都合がいい。夜の間に止んだとしても、これだけのおしめりとなりゃア、朝は濃い霧になるはずだ」

食べながらしゃべるものだから、乱杭歯の合間からぐしゃぐしゃになった咀嚼物が見える。なんという醜悪さだ。

「そんなことくらい、言われずともわかっている！」

私はいらだちのあまり、バン！ と机を手でひっぱたいてしまった。

「……水を」

私は感情に流されている自分を意識し、冷静になる必要があると感じた。小者が水差しをとってきてグラスになみなみと注ぐ。ひと息に飲み干して、ふーっと息をついた。

「ま、神経質になる気持ちはわかるぜ。これに勝てばラディン陛下の覇業は大きく前進、負ければ大きく後退って一戦だからなア。そんなでかい戦で、これ以上ないくらい重要な役どころを任されたとなりゃ、責任重大だ。だがよ、それだけに、勝てばおれたちはますますもって陛下のおぼえめでたくなり、出世も金もがつつり……てなもんよ。もっとこう、前むきに考えろや」

ガラックは井戸端^{ばた}にたむろする女どものように、言わずもがなのことをべらべらとしゃべり、冷静になろうとする私の努力を無駄にした。

「ガラック。以前にも言った覚えのある言葉だが、貴様は忘れているようなので、今一度言っておく……。私は、おしゃべりな男は好かない」

「ああ、だめだだめだ、そりゃいけねえ。將軍だの千人長だのってなア、部下たちの意見をよく聞かなけりゃ務まらねえ商売だ。風通しをよくして、一兵卒の言葉にさえ真面目に耳を傾けてやるんだよ。宮廷魔法使いとかいうお高く止まってりゃ良かった商売とは、ぜんぜん違うんだぜ？ もういいかげん、そのことに気づけ」

副将にすぎないガラックが、將軍である私に対して上から目線のものいいをするのは、なにも今に始まった話ではない。だが、さすがにこれは言葉が過ぎると感じたのだろう、小者たちがいっせいに息を呑む気配があった。私はといえば、このような屈辱を受けて冷

静でいられるはずもなく、拳をきつく握りしめていた。

と——私がガラックに言い返そうとした、まさにその時だ。

ゴオッと耳を聳^{ろう}するばかりの風唸りがあり、続いて、天幕に小さなものが大量にばらばらと落ちてきた。雨粒の落下音とは少し響きが違う。無数の小枝が落ちた……？　と思っただけだが、続いて、大きな塊がどさっと落ちてきて天幕をへこませた。

「なんだッ」

叫んで、ガラックが幕屋の外へ飛び出す。弾かれたように私もその後が続いた。

外の雨はますます激しさを増しており、風も強くて、視界が悪かった。私はてのひらを頭上に掲げ、「ライト！」と唱えて魔法の光球を出したが、小さくして光を絞った。我々は大事を待つ身だ。このシェドラ山に私と私の軍団が潜んでいることは、誰にも知られてはならないのだ。

手を振って光球を天幕の上へ移動させる。目を凝らす。落下してきた物体は人の形をしていた。よくよく見ると翼がある。セフィラだ！

セフィラ。ラクウェルの知的種族の中で、唯一、翼を持ち飛行できる者たち。その特技ゆえに、伝令や偵察には欠かせない。

「う……」

セフィラはうめいて、翼の先を微かに動かした。壮年の男で、名前までは記憶していないが、右の眉に刀傷が走っている顔には覚えがある。戦乱が始まってからというもの、多年、我が軍で働いてきた伝令兵だ。

「おい、手を貸せ！」

ガラックがおっとり刀で駆けつけてきた兵たちをどやしつけ、彼を下ろして幕屋へ連れこむ。

「おい！　おい！　しっかりしろ、おい！」

ガラックが軽く頬をたたくと、セフィラは咳き込み、口から少量ではあるものの血を吐いた。この悪天候の中、無理を承知で飛んできたが着陸に失敗、幕屋のそばに立っていた樹木に激突した……そんな光景が思い浮かぶ。

「医者を呼べ！」

私は言いつけて小者を走らせると、血の気を失ったセフィラの上にかがみこんだ。なんにせよ、こんな天候なのにあえてやってきたとなれば、重要な指示なり情報なりを運んできたに違いない。

「重大な報を伝えに来たのではないか？　であれば、役目を果たせ！」

耳の穴から吹きこむように告げると、セフィラの男は目を開けた。

「割り符……。あります……」

右手をおっくうそうに持ち上げて指先で胸もとを示す。ガラックがセフィラの胸もとをまさぐり、木製の割り符を見つけて私に差し出した。私は自分の割り符を取り出し、あわせて、本物であることを確認した。

「確認した。私は将軍のエレーナ・ディアッツァだ」

「申し上げます……。ハイデン軍の集結、予想よりも迅速……。すでに敵は、サウザ盆地にて陣容を整え……。これと対峙したラディン陛下は、予定を変更し、夜のうちに攻勢に出ると決定……。エレーナ将軍は、ただちにシェドラ山を下り、敵の背後をつくべし……」

セフィラは喘ぎ喘ぎではあったものの、しっかりと仕事を果した。

「なに！　そうか、予定が早まったか。ご苦労だった、ゆっくり休め」

セフィラは満足そうに微笑を浮かべてから気を失った。ちょうど医者が幕屋に入ってきたので、私は「よく介抱してやれ」と言い残すと椅子の背にかけていたマントをひつつかみ、ガラックとうなずきかわして外へ出た。

「集合！　千人長一同、集合ッ！」

ガラックが風雨に負けじと怒声を張り上げる。

私は幕屋の前にじっと立ち、兵の統率にあたる幹部たちの整列を待った。

雨と風が容赦なく身体を打ち、震えるほど寒い。

だが、予想外に早まった出番を前に、心は熱く燃え盛っていた。

「将軍、お乗りください」

側仕えの兵が引いてきた馬に乗る。馬は嵐のせいで興奮しているのかしきりと蹄で土をひっかいていたが、戦いを控えた私の心は馬よりもはるかに猛っていたはずだ。

「エレーナ。千人長、集合完了したぞ！」

ガラックが報告しつつ、私のかたわらに駒を並べた。ちなみにこの小男は、軍馬に比してなんとも貧弱に見える、小さなロバを愛馬としている。

私はうなずいて、三十人の千人長を見渡した。

「みな、聞け。明日未明にここを発つ予定だったが、今しがた伝令兵がラディン陛下のご命令を伝えて来た。ハイデン軍の動きが予想外に迅速で、すでに集結を完了しつつあるとのことだ」

千人長たちはざわめいた。

「落ち着け、やることに変わりはない。我々は行商人や漁師や農夫などに化けて、ひそかに、少しずつ、ハイデン領へ入りこみ、このシェドラ山に集結した。ハイデン側は我々の存在に気づいていない。ハイデン共和国は大貴族の寄り合い所帯、要は烏合^{うごう}の衆にすぎん。

ラディン陛下が大軍団を南下させたとの報を受け、大あわてで各地から集結したようだが、結びつきは弱い。背後をつかれれば動揺し、たちまち瓦解すること必定^{ひつじょう}！そしてこの一戦に勝てば、広大なハイデン共和国領がすべてラディン陛下のものとなる。さすれば、ラクウェルの南部はほぼ掌握したも同然。大陸全土を支配せんとするラディン陛下の覇業は半ばを越えたものとなる。大きな働きをみせた我らには、一兵卒に至るまで、相応の報酬が与えられる。生涯最大の働きどころと心得よ！」

私は滔々^{とうとう}と語って口をつぐんだ。

なにか言いたいことはあるか？ の意味をこめてガラックを見やる。

角つき兜をかぶり、戦斧を担いだ副将は、普段はあれだけおしゃべりな癖に、「野郎ども、兵を整列させろ。整列完了した隊より、暫時進軍開始とする！」と短く吠えた。

かくて――。

この私、エレナ・ディアツァ麾下の一万八千、副将ガラック麾下の一万二千、あわせて三万の兵は、ますます勢いを増す風雨の中、肅々^{しゆくしゆく}と山を下っていった。

＊ ＊

雨に打たれるのは辛くとも、幸運なことに風は味方だった。南から吹く風で、北へと行軍する私たちの背を押してくれる。

「これほどの強風で向かい風だった日にゃ、戦場へ着く前に疲れちまう。吉兆だぜえ、天が味方してるってやつだ。なァ！」

行軍しながら、ガラックはことさら陽気な声を周囲の兵に放った。大博打である一戦を前に、士気を少しでも高めようとの意図が感じられる。痼^{さわ}に障ることが多すぎる男ではあるが、戦場たたき上げの傭兵で、兵の心理をよく理解している点については、私も認めざるを得ない。

「将軍！ エレーナ将軍！」

と、私のそばへ駆けてきて者がある。先行させていた斥候だった。

「何事だ」

「ハイデン軍に動きあり！ 騎馬隊をふくむ中核部隊^{ぼうすい}が紡錘陣形^{さむらい}をとり、戦端を開く構えを見せております！」

「なんだと！」

私は思わず大声をあげて、ガラックを見た。

「ほう、生意気に先手をとろうってか……。ハイデンが寄り合い所帯なのは間違いねえが、どうしてどうして、人材はいるもんだな。中核部隊が紡錘陣形ってことは、様子見なんかせず、正面決戦を仕掛けようって腹だぜ。それだけの勝負度胸があって、しかも寄り合い

所帯の面々に、うんと言わせるだけの統率力のあるやつか。ちと、心当たりがねえな。まあ、国が滅ぶか否かの有事となりゃ、無名の英雄ってやつが出てくるもんだ」

ガラックは憎らしいほど落ち着いていた。

「感心している場合か！ 戦いが始まってしまう！ みな、急げ！ 駆け足！」

私は手を振って命じ、馬を飛ばしかけたのだが、

「うわっ！ 馬鹿野郎、もうじゅうぶん急いでるんだ、これ以上せかすんじゃない！ 大半は鎧を着こんでいる歩兵なんだぞ、今から駆け足なんぞさせたら、戦場に着く前にへたばっちまう。それじゃ、戦場に着いてからやるべき仕事ができねえだろ！」

ガラックは目を剥いて吠えた。

「ふざけるな！ ラディン陛下が動かしたのは十五万、対して、ハイデンの大貴族どもが動員できると推定される兵力は二十万だぞ！ 力押しの正面決戦や、消耗戦になったら、勝ち目がない！ 我々が背後をついて敵を崩すほか、勝機はないのだ！」

「あのなア……。ハイデン側が一気に仕掛けてくる動きはおれにも意外だったが、ラディン陛下だって、でくの棒じゃねえ。おれたちが到着するまで悠々持ちこたえるさ。いやむしろ、おれたちがハイデン軍の背後をつく際、やりやすいようにうまくあしらってくださるはずだぜ。ちったア、総大将を信用しろ。おれたちだけで戦ってんじゃないんだ！」

ガラックはまるで子どもを叱りつけるような勢いでまくしたててきた挙句、「まったく、これだから宮廷魔法使いなんてえ、お嬢様は……」とつけ加えた。

「そのう、エレーナ將軍。ガラック様は戦場のことにかけては一日の長がある方ですし、彼の言葉には理があります。このままの行軍速度でよろしいかと」

私の警護を担う近衛隊長のルバンザが小声で耳打ちしてきた。いや、本人は小声のつもりだったのだろうが、風雨に負けない声量でなければ聞こえない状況下なので、彼の言葉は周囲の兵にも聞こえてしまっていた。

「急ぐな！ 駆け足やめ！ 行軍速度、もどせ！」

ガラックは私の命令を待たず、勝手に叫んだ。

「ガラック、貴様……！」

私は色をなしたが、

「重ねて言うがよ、駆け足なんぞしなくたって十分まにあう。この暴風雨、しかも夜で見通しが悪いとなれば、敵だろうが味方だろうが、そう簡単に鮮やかな決定打は繰り出せねえよ」

「……………」

「これだけ言ってもまだわからねえってんなら、文句はこの戦いが終わった後で聞く。い

いか、エレナ。お前は馬鹿じゃねえんだから、おれのすることを見てよく学べ。ラディン陛下がおれをお前にくっつけてるのは、その意味もある……と、おれは見ている。こういう大一番だと、予定がちょっと早まったってだけでも兵は浮き足だっちまうもんだ。それだけに将軍でなァ、どっしり構えて手本とならなきゃいけねえんだぞ」

私は屈辱を感じながらも、口を閉ざした。心の中では、（もし行軍速度を落としたせいで戦場への到着が遅れ、陛下の軍が瓦解していたなら、ただちにこのぶさいくを殺してやる）と呪いの言葉を繰り返していた。

そんなわけで私は、心は翼が生えて飛ぶほど、しかし平時と変わらぬ行軍速度というじりじりさせられる行軍を続けた。

そうやって、どれほど歩いただろうか？

突然に雨足が弱まった。ただし風はあいかわらず強いままで、その風は天を隙間なく覆い尽くしていた雲をまたたくまに押しやり、空を晴れ渡らせていった。

星々のまたたき。^{こうこう}煌々と輝く半月。月の位置から、私は時刻が深夜であることを察した。「もうじきだ。もうじき、戦場だぞ」

私の焦りをなだめるようにガラックが口を開いた、その矢先――。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

だしぬけに、天地を揺るがす激しい喊声が聞こえてきた。南から北へ強風が吹いていたため、戦場のすぐそばに達するまで、私たちにはなにも聞こえてこなかったのだ。

矢も盾もたまらず、私は馬の腹を蹴って駆け足を命じた。ガラックが「おい、待て！」と制止の声をあげたが耳を貸さず、なだらかな丘の斜面をひと息に駆け登る。

そこに、戦場があった。

広大な盆地におびただしい数の人馬がひしめき、激しい攻防を繰り広げる様子を、月は残酷なほど鮮やかに照らし出していた。

「戦況は？ 敵と味方、どちらが優勢なのだ？」

私は狂おしく視線をさまよわせた。盆地を見下ろす私の位置からだと戦場のほぼ全体を俯瞰できる。両者ともに陣形が乱れて、中央部は激しい乱戦となっている模様だ。

「ほほお！ 感心するぜ、陛下は戦^{いくさ}巧^{こうしや}者だ」

追いついてきたガラックが、口笛まじりに戦場の一角を指さした。

彼が示す場所を見やると……なんと、大戦旗をひるがえした師団が前面に出て、ハイデン軍ともみ合いになっている！

「なっ――なんてことだ！ 陛下が！ 陛下のおわす近衛師団が攻められている！」

「おい、落ち着けて。もみ合いになってる軍団の兵種をよーく見てみろ。陛下直属の近

衛軍団じゃねえ」

「えっ？ あっ！ あのごつい鎧と大きな盾は、重装歩兵師団か？」

「おう。重装歩兵は硬くてちょっとやさっとじゃ倒れねえ。その重装歩兵で固めた師団に大戦旗を持たせて総大将ここにありと見せかけ、わざと前面に出してんだよ。功を焦って突撃してくる敵兵を防ぎつつ、両翼と後方に展開した弓兵や魔法使いが矢だの火炎弾だのを浴びせて消耗させている。ハイデン軍の方が数で勝っているのに、互角かそれ以上の戦いぶりと見たぜえ」

と語ったガラックも、戦場を前にしたこの段になるとさすがに興奮してきたようで、言いながら肩をぐるぐると回した。

「味方の優勢と見ていいのだな？ ならば、我々が後背をつけばこの戦はひと息に…

…！」

「なに？」

「まずはよく眺めて、どこを攻めるかじっくり見定めねえとな。奇襲つてのはしばらくの間、ほぼ一方的に攻撃できる。その利を最大限に活かさなくちゃならねえ。おれたちが突撃して真っ先に蹴散らすべき獲物はどいつだと思う？ さあ、そいつを考えてみな」

「……敵側も、両翼と後ろから投射攻撃を浴びせているな」

私はハイデン軍を観察しながら思案した。

「そうだ。で、投射攻撃をしている敵集団のうち、一番攻撃力が高いのは、魔法使いを集めた師団だ。火炎弾やら稲妻やは、矢や投石よりもはるかにやばい」

「ただ、魔法使いは肉体的に貧弱に見えても、脆いとは限らない。風術師ウィンドメイジのエアキューブの魔法で見えない壁を張ったり、召喚師サモナーなら魔獣を呼び出して戦わせたり、あわてず即応できる胆力が備わっているなら、ちょっとやさっとでは崩れない。そう考えると、いくつかある弓兵師団のどれかを蹴散らすべきではないか？」

「ほっ。宮廷魔法使いらしく、魔法使いを擁護したおっしゃりようだなア。だが——戦場とはいえ比較的 안전한 後方にいる連中が、まさかの奇襲を受けて、あわてず即応だと？ そんな上等な真似ができるほどでかいタマがついてる野郎は、歴戦の兵つわものにだって、そうそういやしねえよ」

「……………」

「てことで、おれたちが攻めるべきは魔法使いを集めた師団だ。そら、あいつらってことよ」

ガラックは火炎弾や稲妻を飛ばしている方形陣の師団へと顎をしゃくった。

「よかろう」

私は少考したものの、首肯した。

さあ、いよいよだ。

私は深呼吸をひとつした。草の香りをふくんだ湿った空気をいっぱいにとりこみ、ゆっくりと吐き出すと、気持ちが落ち着いた。

口の端が自然と吊り上がる。手綱を左手一本で握り、右手には青く閃く小さな稲妻をまとわせて、パチパチと弾ける音を楽しむ。^{サンダーメイジ}雷術師エレナの名を、この戦場に勝利とともに刻みつける瞬間がやってきた！

「我が^{サンダー}雷術の奥義を浴びせ、さんざんな目にあわせてくれる。みな、ついに働き時となった。覚悟はいいな？」

振り返って告げる。兵たちは全身からゆらめく闘気を立ちのぼらせていた。

私は戦場に向き直って、右手を高く掲げた。青い蛇が大きさと輝きを増してゆく。音もバチバチと大きさを増してゆく。

「突撃せよ！」

本隊への合図である雷^{サンダーボール}球を天へと放ちざま、叫んだ。

三万の兵が^{とき}関の声をあげ、力の奔流となって丘を流れくだる。

「サンダーストーム！」

魔法の射程に入ったと見るや、私は腕を振るって必殺の魔法を放った。

無数の青い蛇が生じ、枝分かれして放射状に広がりながら、敵集団めがけて^{はし}疾る。バリバリと大気を引き裂く轟音、そして着弾時の天地を揺るがす爆音――。

刹那、ハイデン軍全体に動揺の気配が広がったのを、私はまざまざと感じた。その瞬間、私は勝利を確信した。

＊ ＊

完全に勝敗が決する形となり、ハイデン軍が乱れ、崩れ、あわてふためいて盆地から逃げ去った時には、太陽が昇りつつあった。

「敵ながら、ハイデン軍はよく粘ったというべきか」

私は独りごちた。

とてつもない数の死体が、目がおかしくなりそうなほど赤い血だまりが、曙光の中にこの世ならざる風景を描き出している。

「おう。存外、粘りやがったな。しかも、余力を残したままで撤退した敵集団もいくつか見受けられたぜ。この後、ラディン陛下はハイデン統治に乗り出すわけだが、しばらくは残党どもが各地でうごめいて抵抗しやがるはずだ」

ガラックが角つき兜を脱いで随伴^{ずいはん}していた兵に渡し、鼻毛を一本抜いた。

「とはいえ、もはやハイデンの大貴族どもには我々と正面決戦できる戦力はない。我々は勝った。ラディン陛下はラクウェル南部を手に入れた！ この偉大なる勝利は、ラクウェルの歴史に残るものとなるだろう！」

屍山血河の風景の中、私は勝利の歓喜によって震えていた。この勝利は、霸王たるラディン陛下にとってはもちろんのこと、私にとっても記念すべきものとなった。

（この私、美と才能に恵まれた強大な魔法使いエレナ・ディアツァは、特別な人間にふさわしい特別な人生を送っている！ その証明となる大きな記念碑が、今ここに建^{こんりゆう}立^{かな}された！）

ラー！

ラディン陛下率いる本隊から、勝利を飾る大きな歓呼の声があがった。

ラー！

私も、ガラックも、麾下の兵たちも、得物を天に掲げていっせいに歓呼の声を放つ。

「南部支配！ もともと抑えていた内海周辺地域とあわせ、ラディン陛下が得る税収は莫大なものとなる。となれば、さらに兵の数を増やせる。もはやラクウェルには、我々に敵う勢力は存在しない！」

私は胸を張って断言した。

しかし、ガラックは首をひねった。

「さて、な。でかい勝ちを拾ったのは確かだが、ここで逃がした残党どもを始末して南部を完全掌握するにはまだしばらくかかるだろう。それに北部は手つかずだ、まだまだ陛下の覇業は道半ばさ。それにエレナ、聞いたか？ シヴァって名を」

「風の噂で耳にした。イスカリエン王家の正統な後継者を自称するパッシェリカなる逆賊に、どこからともなく現れて仕官した男……。東リザード自治領と結んで急激に勢力を拡大しつつあるとか……」

私は北へと視線を飛ばした。

下界の血塗られた風景など知らぬげに、空には白い雲がぷかぷかと浮かんでいる。

「次は北部だ。ラディン陛下は動くとなれば迅速果敢。北部の群雄たちの命脈も、長くはなからう」

私は確信とともに独りごちた。脳裏には、陛下の信^{あつ}頼篤き魔法使いとして、権力も金もほしいままにし、ラクウェル全土の魔法使いの頂点に立つ将来の自分の姿が浮かんでいた。

TURN2

身も蓋もないけど、『圧倒的な物量で押し潰す』、これが最良の作戦だ。

——しばさき けん
柴崎 剣

夏の盛りは過ぎたが、それでもまだまだ暑い。とはいえ、このごろの朝夕は、いくぶんか暑さが和らいできたように感じる。

「みんな、早朝からご苦労。パッシェリカ陛下より将軍の地位に任じられているシヴァだ。これより、月初の恒例となっている閲兵を開始する。といっても、まだ我が軍に入りたてで、閲兵は初めてという者もいるだろう。だから、まずはこの閲兵の意義について説明しておく」

土が剥き出しのだだっぴろい訓練場に、ずらりと並んだ七千名余の兵士たち。おれは白木造りの演壇にのぼって彼らを見下ろし、声を張り上げていた。

「信じようが信じまいが、このおれ……シヴァには、かつて大陸を平定したジェド王と同じく、サーチとドラゴンハーツの力が備わっている。サーチは兵の腕力や持久力を数値化して閲覧できる魔法、ドラゴンハーツは戦闘時におれとおれが指揮する直属部隊の戦闘力を大幅に強化する魔法だ」

兵士たちは真面目な顔つきでおれの話に耳を傾けていた。でも、おれと目があうと（あ。将軍と目があっちゃったぞ）と顔をほころばせたり、照れ笑いを浮かべたりする。自分というものなんだが、おれは人気者でみんなに支持されているってことだ。

「大陸平定を成し遂げたジェド王の偉業を見れば明らかだが、サーチは軍団の強化に大きな役割を果たす。個々の兵の能力を数値として正確に把握できれば、適材を適所に振り分けられるからだ」

かたわらに立っていた妹のサラが「うん。らしいよ、に一ちゃん」と微笑をまじえて言った。まったくだ。将軍になりたてはやはやだったころのおれは、大勢を前にひと演説ぶとうとすると、あがっちゃってうまく言葉が出てこなかった。でも今は、もうそんなことはないぞ！

「また、周囲を見回せばわかる通り、我が軍には、まだ育ち盛りの十代の者も多い。中には、日々の訓練と成長があわさって、わずかな期間で見違えるほどの力を身につける者もいる。だから、こうして定期的に閲兵を行い、サーチで能力を確認し、それを元にして、

能力のある者を部隊長に昇格させるなどの措置をとるわけだ」

この言葉を受けて、自信ありげに小さくうなづく兵がちらほらいる。おれが率いるこの軍団は、ヒューム（人間）、リザードマン、エルフ、ダークエルフなど多様な種族で構成されているが、どんな種族だろうが、どんな若造だろうが、能力さえあれば出世できるんだ。

「サーチした数値は二枚の紙に転写し、一枚は軍が管理、もう一枚は本人に渡す。自分の能力値が気になるのはもちろん、知り合いがどんな能力値なのかも気になるだろうから、見せっこしたところがかまわない。能力値が低かった者はその現実をきちんと受け止めて訓練に励め。また、自分が優れた能力値をしていると知った者は、ますますの精進によりさらに上を目指してほしい。ただし！ 一方で、このことも忘れないでくれ」

おれはすっと背筋を伸ばした。

「サーチで把握した能力値がその兵士のすべてかといえ、それは違う。戦場での豊富な経験、ちょっとやそつとでは動じない剛胆さ、これまで我が軍に尽くしてきた期間の長さなど、サーチでは把握できない能力や実績もある。たとえ人並みはずれた腕力や持久力があつたとしても、それを鼻にかけて仲間をないがしろにするような者では、とうてい、人の上に立つ階級を与えるわけにはいかない。このことを肝に銘じて、日々、自分を客観的に見る習慣をつけてもらいたい」

話を終え、おれはサラを振り返った。

「サラ。なにか言いたいこと、あるか？」

「特にないよ。みんな待ち通してくうずうずしているみたいだから、早く始めてあげようよ」

よし、とうなずいて、おれは兵士たちに向き直った。

「時間がかかるので、全員座ってよし！ かたいことは言わない、少々の私語はかまわないぞ。ただし、程度をわきまえてほどほどにな。なにしろ七千人もいるから、午前中いっぱいかかる。水分の補給、用足しなどは各自の判断で行え。では——閱兵を開始する！」

直立不動の姿勢だった一同が、ザッと音を立てていっせいに座る。

演壇を下りたおれは、サラと三名の雑用係を従えて兵士たちの間を歩き始めた。

雑用係のうち、二名は木箱を抱えている。うち一名の木箱には大量の紙が入っており、もう一名の木箱は空だ。

（サーチ！）

おれが兵士の顔を見つめて念じると、ゲームのステータスウィンドウそのまんまの映像が空中にあらわれる。兵士の名前や性別や種族のほか、STR（ストレングス。腕力。攻撃力や所持限界重量などに影響）、CON（コンスティテューション。体格。HP（ヒットポイ

ント)の量や持久力などに影響)、DEX(デクステリティ。器用さ。攻撃成功率や回避率などに影響)、AGI(アジリティ。素早さ。移動速度などに影響)……といった各種能力が、数値としてはっきりと示される。

その状態で、雑用係が持っている木箱に手を伸ばし、紙に触れる。

すると、まるでデータをプリントアウトするみたいに、おれが見ているウィンドウの内容が紙に転写される。それも、ゴシック体のかっちりとして黒々とした文字で、だ。

軍団管理用のものと、本人用のもの、二枚分転写。雑用係の三人目が、一枚を空の木箱へ移し、もう一枚は賞状を渡すように両手で兵士に差し出す。

「ありがとうございます」

兵士は、まるで通信簿を受けとった学生みたいに、ドキドキとはらはらがらないまぜになった表情だ。待ちきれないとばかりに、自分の各種数値へと目を走らせる――。

「うーん、便利。超便利」

次々に兵士の能力値をプリントアウトしてゆくおれを見て、サラがつぶやいた。

「こんな能力が自分に備わっているなら、最初から知っておきたかったよ。この異世界、おれとサラの自作ゲーム『ラクウェルクロニクル』そっくりだけど、最近のゲームなら絶対にあるヘルプ機能はないからなあ……」

日本で暮らしていたおれとサラがこの異世界ラクウェルに転移したのは、ほぼ半年前……春先のこと。けれど、サーチで閲覧した能力値を紙にプリントアウトできる、そんな便利能力が自分に備わっていると知ったのは、わりあい最近のことだ。

以前は、こうして閲覧した能力値はいちいちペンで紙に書き記していた。そうとうに時間をとられる作業で、(あーもー、ちんたらちんたら、こんなめんどくさいことやってられないな)と思いながら紙に手をついたところ、紙に転写できる能力があると発覚したんだ。

これ、ほんと便利で、おかげで閲兵がはかどるはかどる、はかどっちゃう。

兵の顔を眺め、サーチしてはプリントアウト。またサーチしてはプリントアウト。またサーチしては――。

はかどるのは確かだけど、ベルトコンベアを流れてくるお刺身の皿にひたすたらプラスチック製のタンポポをのっけているような、飽きのくる単純作業だ……。

でも、閲兵してもらい紙を渡された兵士たちが、「おっ、やったぞ!」とか「うーん、まだまだだな……」などと悲喜こもごものつぶやきをもらしているのを聞くと、ちょっぴり心がくすぐったい。採点したテストを生徒たちに返却している教師って、こんな気分なのかも。

早朝から開始した閲兵だったが、終わったころにはお昼を少し回っていた。

「お、終わった……」

朝は涼しかったが、昼を迎えた今は太陽ざらざらで、汗だらだら。しかも今日は風がほとんどないため、暑いったらない。

でも、このくらいで将軍がへばっているのは、兵士たちに示しがつかない。おれは努めて顔をひきしめ、正面の演壇へもどった。

「起立！」

号令をかけて全員を立たせる。

「自分の能力を数値として眺め、感想はどうだ？ おれの印象だが、若くて伸びしろがあり、また真面目に訓練をしている者は、着実に力を増しているようだ。力を増した者はそれに驕ることなく、足踏み状態の者はその現実を真摯に受け止めて、精進を怠らないように。軍団は部隊によって構成され、部隊を構成するのは一人一人の兵士だ。強兵なくして強固な軍団はありえない。みな、強兵となり、おれに……いや、パッシェリカ陛下に力を貸してくれ。パッシェリカ・イスカリエン陛下こそは、ラクウェルの戦乱を終わらせ、かつての平和をとりもどしてくれる真の仁者だ。頼むぞ。では——解散！」

きびきびと言葉を連ねて締めくくり、この日の閲兵は終わった。

＊ ＊

さて。ここまでのいきさつを、ざっと語っておこう。

おれ、柴崎剣は小さいころからゲーム、わけでも SLG（シミュレーションゲーム）が大好きだった。それが高じて、中学生の時に志を立てた。将来はゲームを作る側になりたい。だから、プログラムを学び、自分でゲームを作ってみよう！ と。

妹の紗良は幼いころから絵が得意で、将来は絵を仕事にしたいと言っていた。それで、おれのゲーム制作にグラフィッカーとして力を貸してもらうこととなった。

その自作ゲームの名は『ラクウェルクロニクル』。剣と魔法の西洋中世風異世界ラクウェルを舞台に、ヒューム（人間）、エルフ、ドワーフ、リザードマンなど多種多様な種族が大陸の覇権をかけて争う国取り合戦タイプのウォーシミュレーションゲーム——。

しかし、三年の月日を費やして『ラクウェルクロニクル』の完成が目前に迫ったある日のこと。なにがどうなったものか、おれと紗良はゲームそっくりの異世界ラクウェルに移ってしまった。

ラクウェルはおれの自作ゲームの各種仕様や設定ほぼそのまんまの異世界で、大戦乱に見舞われていた。かつてジェド・イスカリエンなる男が大陸を統一して王朝を開き、一千年も平和が続いていたのだけれど、邪悪な王子ラディン・イスカリエンが父であるアーウィン王や親族をことごとく殺して玉座についた。そのラディンが暴政を開始したため、地

方の権力者たちがこれに反発して中央政府から独立。大陸は群雄割拠の混沌に^{おちい}陥ってしまったんだ。

で、ラクウェルの地に転移したおれには、自作ゲームで主人公の能力として設定していたドラゴンハーツとサーチの力が備わっていた。ぶっちゃけた話、伝説の勇者みたいな感じさ。

おれはその主人公パワーを発動して、危機に見舞われていた少女、パッシェリカ・イスカリエンを助けた。そして彼女から、将軍になって力を貸してほしいと懇願された。パッシェリカは前王アーウィンが王家の断絶を防止すべくひそかにもうけていた隠し子であり、暴王ラディンを倒してラクウェルに平和と安寧をとりもどす大志を抱いて旗揚げしたんだ。

そのころ、パッシェリカに付き従う兵はわずか三百名ほど。しかも、たったそれだけの兵力で何をどうやったって無理だろ、みたいな危機に陥っていた。

でも、その……パッシェリカは、おれが『ラクウェルクロニクル』でヒロインとして設定していた美少女ほぼそのまんまの女の子だった。聡明で、気高くて、凜々しくて……。そんな女の子に「力を貸してください」って懇願された日には、「まかせてくれ」以外の選択肢はない。そうだろう？

いや、ごめん。じつはパッシェリカに助けてくれと懇願された直後、おれは逃げる気だった。でも、やっぱり、パッシェリカを見捨てて逃げるなんてできないと思い直して、あーもう、いったれ、と結局は力を貸したんだ。

そうして、ドラゴンハーツやサーチの力はもちろん、これまでプレイしてきた SLG の知識や、『ラクウェルクロニクル』制作のために読み漁^{あさ}った歴史本の知識などを活かし、なんとかパッシェリカを救った。

以後、パッシェリカの信頼篤い将軍として、彼女の軍団を育てている。

だが。

だが――。

ここへ来て大陸の情勢が大きく変化し、おれたちは過去最大の危難に直面していた。

* *

閱兵を終えたおれは、サラともども訓練場に併設されている休憩所にて、干し肉と香草を挟んだサンドイッチで昼食をとった。

この休憩所は幹部専用のものと一般兵のものに区別されている。当然、将軍であるおれと、おれの右腕ともいえるべきサラが利用するのは幹部専用の休憩所だ。なぜこのような区別が必要なのかというと、戦乱のラクウェルでは各地の群雄が情報収集のため諜者を放っており、幹部には安心して話せる場所が必要だからだ。

「はあ……」

食事を終わると、おれは長いため息をついた。

「ん？ に一ちゃん、どうしたの？ どっか具合でも悪いの？」

たずねてきたサラに、おれは「ため息のひとつもつきたくなるさ」と投げやりに言った。

「自分で言うのもなんだけど、おれはここまでよくやってきたと思う。東リザード自治領のバルゴに力を認めさせて同盟締結にこぎつけ、危険なダンジョンへ潜って巨万の富を稼ぎ出し、その資金を使って軍団を拡充……」

「うん。最初はパッシェリカの手勢はわずか三百だったけど、今や七千だもんね。もう、大陸の一角を占める立派な勢力だよ」

「おれもそう思いたい。日本や中国の古い時代の戦争だと、戦いの際には数を水増しして号していたそうだが、七千の兵なら、号して一万としても問題ない。しかし……。初夏に、情勢が大きく変わってしまった。暴王ラディンが、大陸南部のハイデン共和国と戦って勝利した。やつは、今や大陸の半分がたを手中におさめたことになる」

「……………」

「サラも、『信〇の野望』とか、『シヴィライゼーション』とか、戦争 SLG をプレイした経験はあるだろ？」

「うん……」

「あの手の戦争 SLG の高難易度だと、プレイヤーが内政そのほかあれこれ尽力して、自陣営の十の戦力を倍増させて喜んでたのもつかのま、敵勢力はその間に五十の戦力を二百や三百にしていた、なんてことがままある。今の状況はまさにそれだ。おれはパッシェリカのわずか三百だった兵を、二十倍以上の数にした。けれど、おれたちが倒すべき暴王は、最初から優に十万以上の兵を持っていたのに、今や広大な新領地まで手に入れた……。彼我の戦力差を考えると絶望的な気持ちになる。この後、ラディンが広大な南部から税をとりたて始めたら、やつはその金を元に、さらに軍団を拡充させるはずだ」

大陸各地の群雄同様、おれたちも諜者を放って刻々と変化する情勢に神経を尖らせている。ラディンの南部制圧は、とにかくもう、衝撃の報だった。

「でも、に一ちゃん。制圧したと言っても、旧ハイデン領にはラディンに抵抗する勢力もまだ多少残っているんでしょう？ 諜者いわく、ラディンは本拠地である王都にもどらず、軍団の大半とともに旧ハイデン領に居座って、反乱の鎮圧に奔走しているって話じゃない。完全制圧には、まだしばらくかかるんじゃない？」

「でも、その『しばらく』は、せいぜいあと三か月くらいとおれは睨んでいる。その間に手を打たないと、もはや誰もラディンを止められなくなる。だから、南部制圧の報に触れ

てからこのかた打つべき手を考えているが、はっきり言って手の打ちようがない」

「パッシェリカが、各地の群雄たちに同盟軍の旗の下に集うようにと呼びかける檄文を送りまくっているそうだけど、それも……だめなの？」

「だめなんだ。手ごたえがない。どいつもこいつも、ラディンに正面きって逆らいたくはないって考えや、たとえやつと戦うにしてもまずはほかのやつをけしかけて戦わせたい、そういう小ずるい計算が見え隠れしている」

「……………」

「いずれ、ラディンは南部を完全制圧し、金にものを言わせて増強した大軍団を率いて、北征に乗り出すはずだ。おれたちがいるこの北部を完全制圧するために。そうなったら、終わりだ。ラディンにとって、正統なる王位継承者と称して立ったパッシェリカは絶対に生かしておけない存在だからな」

おれたちはしばし押し黙った。

重い沈黙だ。妹のサラは、日本にいたころからずっとそうだったように、おれならなんとかできると信じているはずだ。

でも、弱音を吐かざるを得ない。そのくらい絶望的な状況なんだ。

「パッシェリカが、さ」

やがて、おれは再び口を開いた。

「うん」

「おれの心情を理解しているからか、よく励ましの声をかけてくれる。彼女の瞳は、まだ諦めてはいない。だけど、おれは——」

思えばつい二、三か月前まで、おれは（いやあ、おれって将軍の才能あるんじゃないの？ なんかもうやることなすことうまくいって、パッシェリカとのラブがロマンスでバレンタインにチョコレートな展開はもうすぐそこじゃないの？）みたいな気持ちだった。

それが、今は……。

いよいよもって重苦しい空気になったその時、「しょうぐーん！ シヴァさまー！」と場違いに明るい声があった。

どきっとしてそちらを見やると、セフィラ隊を束ねる女隊長のミモリーとその弟で副隊長のリドリー、それにケットシー隊を束ねる隊長のグレインだった。セフィラは有翼種族で飛行でき、偵察そのほかお役立ち度満点な連中だ。ケットシーは直立した猫のような種族で、身軽で素早いほか、夜目がきく。

「あ」

おれは急いで暗い表情を消した。将軍であるおれが本音をさらけだせる相手は、サラく

らいのものだ。

「将軍？ お昼ごはん、もう食べ終わっちゃったんですか？ ざんね〜ん。あたし、将軍とご一緒したかったのにい」

ミモリーはこれが兵士とは思えないくらい明るい女の子だ。おれは少し救われた気になった。

「ミモリー。セフィラ隊だが、その後、どうだ？ 新規に雇用できそうなセフィラは見つかったか？」

おれがたずねると、ミモリーは残念そうに首を横に振った。

「いえ、それが……。隊の者に、あちこち、つてを頼ってたずねさせているんですが、二人しか雇用できていません」

「しょうがないですよ。空を飛べるセフィラは傭兵として引く手あまたですから。もうたいがい、どこかの勢力に雇われちゃっているんですよえ」

リドリーが姉を擁護した。

「そうか……。でも、ミモリー。手を尽くしてくれて、ありがとう」

「とんでもない。シヴァ将軍のためなら、辛いことなんてありませんよ！」

にこにこ笑うミモリーを眺めながら、おれは心のうちで（チェインを確認）と念じた。

妹のサラ以外には明かしていないけれど、おれにはサーチとドラゴンハーツのほかにもうひとつ、^{きずな}絆の鎖——チェインを確認する特殊能力が備わっている。自作ゲームの『ラクウェルクロニクル』においては、部隊編制時に仲のいいユニットを集めると、その部隊の戦闘能力にボーナスがつく仕様だった。この異世界もその仕様が適用されており、絆の鎖が強い部隊であればあるほど戦闘能力が強化される。

で、おれにはその絆の鎖が……。わかつちゃうんだ。誰が誰を好ましく思っていて、誰が誰を嫌っているか、把握できる。なぜサラ以外にこのことを明かしていないかという、これはもはや読心術そのもので、気味悪がられる恐れがあるからだ。

ミモリーの頭上にマンガ的な吹き出しが表示された。吹き出しの中には、にこにこした笑顔のアイコン。これは、ミモリーがおれに好意的であることを示している。

ただ、以前のミモリーはこのアイコンがピンク色のハートマークであり、そんなアイコンが見えずともはつきりそれとわかるくらい恋愛感情丸出しでおれに接していた。してみると、ミモリーは熱しやすく冷めやすいタイプで、最近はおれへの熱が下がってきたのか。あるいは、軍団が急成長するのを目の当たりにして、部隊長として一個人の感情を抑えるべきだとの自覚が出てきたのか——。

「ところでシヴァ。今日の午後の会議だが、バルゴとロルカが出むいて来ると聞いた。ほ

んとうか？」

と、グレインが声をひそめてたずねてきた。バルゴは東リザード自治領の領主で、以前は敵だったが、現在は同盟を結んでいる頼もしい仲間だ。ロルカはその妹で、兄のバルゴを助けている。

「ほんとうだ。一昨日、パッシェリカにその旨を記した手紙が伝書鳩で届いた」

おれも声をひそめた。

「ほう。二人がじかにこちらへ出むいてくるとなると、これは……」

「ああ。重要案件と見た」

バルゴはパッシェリカに対して、公式には『正統なるイスカリエンの女王に対して臣下の礼をとる』形だ。ただ、バルゴはおれたちに比して互角以上の兵力を有しているし、気が強いから、ご機嫌うかがいのために出むいてくる、なんてことは絶対はない。

「さて、いい報せか悪い報せか」

「それはわからない。もっともこの戦乱の御時世に、いい報せなんてものがそうあるとは思えないな」

「そうだな。ま、午後になればすべてわかることだが」

「そういえば、グレイン。に一ちゃんが言ってた、ウィードに幹部会出席待遇を与える件だけど、根回ししてくれた？　ほかのみんなの反応はどう？」

と、ここでサラがべつ^{そじょう}の話題を俎上に載せた。

ウィードは、子どもだけで構成された傭兵集団の頭目のダークエルフで、自身もまだ十四歳だ。日本なら中学生二年生の年齢だけれど、戦乱の中でたくましく生き抜いてきた力は本物で、大人顔負けの戦闘能力がある。

「おれが得た感触では、問題なさそうだ。騎士長のダンガンはシヴァの意向なら反対はしないし、アレリア卿も、おれもそうだ。反対しそうなのはネビウス老くらいのものだが、おれがウィードの件を切り出してみたところ、心ここにあらずの有様でな……。どうでもいい、と言いたげな塩梅だった」

グレインは首をかしげて、手の甲の毛をぺろっと舐めた。

「ネビウス老は、いったいどうしちゃったんでしょうね。シヴァ将軍がザガロの墓所で軍資金稼ぎに成功して以来、明らかに変ですよ。以前は、口を開けば人を不愉快にさせる上に、口を開きっぱなし、みたいな嫌われ者でしたが、ほとんど口をきかなくなってしまって……。近頃は、考え事ばかりしている風で……。歳が歳だからといえばそれまでですが、急に老けこんだというか、もうろくしてしまったというか……」

リドリーが背中^{そで}の翼をすぼめつつ首をかしげた。

「そもそも何者なんだろうな、ネビウス老って」

おれも首をかしげた。

「シヴァも奇妙に思うか？ おれも前々から、不思議、いや、いささか不気味な人物だ、とは思っていた」

うなずいたグレインの猫髭が微かに震えている。ケットシーが髭をぴくぴくさせるのは、ちょっと緊張している時、少し興奮している時などだ。

「ネビウス老って、パッシェリカに王家の聖遺物である聖剣を渡して、パッシェリカを女王として担ぎ出した人なんだよな……。だけど、そもそもラディンが王宮で厳重に保管しているであろう聖剣なんてものを、どうやって持ち出したのか。それに、パッシェリカが先王の子って事実を知る者は、先王がパッシェリカを保護するためにつけたダンガンなどごくひと握りの人間だけで、パッシェリカ本人でさえ知らなかった。なのに、どうやってその事実を知ったのか。さらに言えば、他人のことより自分のことのほうがずっと大事、もっといえば大義なんかどうでもよくて自己保身^{きゆうきゆう}に汲々とする性格なのに、なぜ、パッシェリカに暴王打倒の大義を説いて彼女を女王として立たせたのか……。その際、少なくとも資金を提供したというし……」

おれは（どう思う？）と問う視線をサラに送った。

「え？ あたしの意見？ あたしには底意地の悪い頑固な老人、って印象しか……。まあ、このところ顔には生気がないし、肩を落として歩いているし、元気ないなあ、とは感じていたよ。実際、このあいだね、ネビウス老がぼんやり空を眺めているところに出くわしたんで、ちょっと元気づけてあげようかなと思い立って、ささっと似顔絵をかいて渡してあげたの。そしたら、泣き出しそうな顔つきで小さくありがとうって言って、とぼとぼ立ち去って……」

サラもまた首をかしげた。なお、サラには美大生顔負けのデッサン力があり、兵たちに似顔絵をかいてくれとよくせがまれている。

「まあ、ネビウス老にしてみれば、パッシェリカ様を担ぎ出して女王に据えれば、ラクウェル全土の危難を救った大功労者^{たた}として讃えられ、地位も名誉もほしいまま、てな絵図を思い描いていたのかも。だけど強大なラディンを倒すのは容易じゃないって現実を突きつけられ、ラディンの手勢に追われ追われて大陸辺境のこのアレリア自治領まで追い詰められ、見こみが甘かったと知って自暴自棄に。そこへ、なんとなんと、イスカリエン王家の開祖たるジェド王と同じドラゴンハーツの力を持つシヴァ様があらわれて將軍に任じられ、大活躍ときた日には……。自分の居場所がなくなっちゃった、存在感が薄くなって威張れなくなっちゃった、そう思ってしょげかえっちゃったのかも」

ミモリーがおれに視線を注ぎながら言った。どこか他人事でないニュアンスが感じられる。ミモリーも、パッシェリカをかなり早い段階から支えてきた古株の功労者だから、どんどん新参者が入ってきてどんどん軍の規模が拡大してゆく中で、（自分はこの軍団においてどのくらい価値がある存在なんだろう？ 以前と比べて価値が下がっているのでは？）みたいな思いを抱えているのかもしれない。

「ま、なんにせよ、あの老人に『旗揚げ時の功労者だから』と、余計な口出しをされまくってはやりにくいことこの上ない。おとなしくなってくれたことは、歓迎すべきだろう」

グレインの言葉に、おれたちは一様にうなずいた。

さて。

おれたちは訓練場を後にし、連れだって、住居としているアノンの館へと道をたどった。

「おっ」

館のそばに設けられている馬場にさしかかると、もうもうと土煙が巻き起こり、蹄の音が高らかに響いていた。騎馬隊の面々が紅白二組に分かれて模擬戦を行っている。

激しく人馬が入り乱れる中にあっても、白組の女騎士然とした隊長の姿はひととき目立った。愛馬メディを巧みに操る様は、素人目にも優れた技術が明らかだ。

一戦終わったところで、女騎士はおれたちの姿に気づき、太陽を振り仰いだ。

「もうこんな時間か。今日はこのへんでひとまず切り上げるとしよう」

彼女は部下に告げると、おれたちのところへ来て下馬した。

「みんな、お帰り。ナッシュ、メディに水を飲ませてやってくれ」

いいつけられた召使いの男がメディの手綱を引いて水飲み場へと連れてゆく。べつの召使いが女騎士の背後にまわって、胸あてを紐解き手早く外す。するとたちまち、人並み外れた大きな胸がこんにちは……！

アノン・アレリア卿。大陸北東部に位置するこのアレリア自治領の現領主。日本でいえば女子大生くらいの年齢だが、僻地^{へきち}とはいえ、戦乱の世で自領を堅守してきたしっかり者だ。また、馬術の心得があり、戦場で騎馬隊を指揮する様は大胆にして繊細、じつに頼もしい。ラディンの手勢に追われてやってきたパッシェリカたちを保護し、力を貸すと決めた人物で、パッシェリカ陣営への貢献度でいえば、先ほど話題に出ていたネビウス老などよりずっと上だと思う。また、おれにだけ打ち明けてくれたことなんだけど、じつは……アノンもまた前王アーウィンの隠し子であり、パッシェリカの異母姉にあたる。もともと、二人は姉妹といってもあまり面立ちが似ていないし、アノンはおっぱいが大きい。それもかなり。そんなわけで、二人が姉妹だと気づいている人物は他にはいない。

「ただいま。アノン、騎馬隊の調子はどうだい？」

おれはダンジョン攻略で稼ぎ出した軍資金からかなりの額をアノンに渡し、軍馬の購入と騎馬隊の強化訓練をまかせていた。

「当初は、新しく入ってきた者との連携がうまくゆかず難儀させられた。だが、訓練の甲斐あって最近はだいぶ良くなってきた。戦場で使いものになるようになった、と思ってもらってかまわない」

アノンは自信ありげにうなずいた。

「さて。シヴァたちが帰ってきたし、もう会議の時間が迫っているのだな。急いで支度をしなければ」

館の方を振り返った拍子に、アノンの前髪から汗のしずくがしたたり落ちた。時を忘れて無心に訓練に励んでいたのだろう。というかアノンって、愛馬のメディを駆っている姿は元気潑刺、乗馬がほんとうに好きなんだな、と思う。

みんなして、やや早足気味に館へ向かった。玄関ホールにて、執事のキルバが「みなさま、お帰りなさいませ」とおれたちを迎えた。

「あつ。将軍、このたびはありがとうございます」

と、浅黒い肌の少年がおれに挨拶した。

ウィード。若年ながら傭兵団の頭目であり、それに見合うだけの実力を持つダークエルフの少年。おれの推薦により、今日からは幹部会への出席を認められることとなった。その件でひとことお礼を述べるあたりを見ても、若いのにそつがない。

「お礼はいいよ。軍団が急拡大しているから、幹部も増やさなければならない。それに、幹部待遇だと責任も大きくなるし、仕事も増える。ウィード、おれを助けてくれ」

「はい。必ずやご期待にこたえます」

ウィードは大真面目にうなずいたのだけれど、

「ハン！ 有能な人材は高い給金をもらってでかい仕事をこなす。それで雇用する側も雇用される側もお互い助かる、それだけの話だろ」

いささかトゲのある言葉が飛んできた。

その言葉を放ったのは、ウィードと大差ない歳の少女だ。^{ウインドメイジ}風術師のシャノーラ。かつては敵として立ちはだかり、おれたちを窮地に追いこんだが、今は味方であり、幹部の一人だ。実力があるのは確かなんだけどそれを鼻にかけていて、協調性に欠けるのが玉に瑕…。もっとも、小柄で細身のかわいい子なので、少しくらい暴言を吐いても、こまっしやくれた女の子のプチ意地悪、みたいに受け止められてすんでしまう空気がある（ような気がしないでもない）。

「将軍に対して、非礼な物言いだな」

ウィードは剣呑な三白眼でシャノーラを見据えた。

「せいぜいいい子ぶってな。戦場に出たら、あたしのトルネードやエアキューブの魔法は、あんたら雑兵どもの剣や槍なんかよりはるかに役立つんだ」

おれの後ろで、ミモリーが「うわあ」とつぶやいた。シャノーラとウィードは年齢に差がないため、互いをライバル視している……かに見える。

ところが、だ。

おれが（チェインを確認）と念じて二人を見やると、ウィードのシャノーラに対する感情アイコンは無表情、つまりごく普通で可もなく不可も無し。そして、超意外なことに、なんとなんと、シャノーラのウィードに対する感情アイコンはにっこりで、嫌っているどころか好感を抱いている……。まるで、小学生の男女の恋愛感情が、好きな子に意地悪しちゃう形で発露するアレみたいだ。まあ、ウィードってぴりッと横顔の引き締まった二枚目だし、鍛えこまれた身体には黒ヒョウみたいな野性味があるから、わからないでもない。「に一ちゃん。あたしが時々、二人の様子を見ておく？」

サラが小声で心配げにたずねてきた。

「いや、まったく問題ない。少なくとも、今のところは」

むしろおれには、なにかの拍子にシャノーラのウィードに対する好感度がさらに上昇する方が危険な事態と思えた。というのも、ウィードとともに傭兵団を率いてきたユリアっていうエルフの女の子がいて、ウィードとユリアは仲がいい。どのくらい仲がいいかというと、一緒に混浴風呂に入っちゃうくらい仲がいい。そこへシャノーラが割って入ろうとしたら、どうなるか？ ユリアはぼやーンとした争いごとには無縁の傭兵らしからぬ性格だけど、シャノーラは欲しいものは奪いとる性格で、しかも思い立ったら即行動、いっさい躊躇^{ちゅうちよ}がない。まずいですねえ。おそろいですねえ。将軍、どきどきですよ。

……って、今はまだそんなお昼のドラマみたいな事態に至っていないし、そもそも、そんな些事にかまけていられる情勢じゃないんだよ。風雲は急を告げ、大陸は暴王ラディンの手に落ちつつあるんだよ。

「いいか、二人とも。今日の会議はバルゴとロルカが出むいてくる。恥ずかしい振る舞いはするなよ」

グレインが年長者らしく二人をいさめる。ウィードは無言でうなずき、シャノーラはふんと鼻を鳴らした。

とにかく、おれたちは食堂と会議室を兼ねている広間へむかった。

広間の大きなテーブルには、すでに客人を迎えるための料理や酒やジャードが用意されていた。最奥部の席には我らが女王パッシェリカが、その隣には騎士長のダングアンが、ま

た少し離れた席にはネビウス老が、すでに着席していた。

「みんな、忙しい中、ありがとう」

パッシェリカはおれたちを見てねぎらいの言葉を口にした。正統なる王位継承者にして、大陸再統一の大望を抱く、若すぎるほど若い女王陛下。だけど、気品と威厳を備えつつも、威張ってはいない。みんなが（彼女には、人の上に立つ者のカリスマがあるし、支えたい）と自然に思ってしまう、そんな魅力がある。

「忙しいのはお互い様、そうだろ？」

おれが見つめると、パッシェリカは「ええ。でも、手紙をかく私の仕事など、將軍たちの労苦を思えばどうということもありません」と言った。

暴王ラディンは強大だ。そこでおれたちは、ラディン打倒のため各地の群雄に働きかけて同盟軍として束ねる、これを基本方針に据えている。で、パッシェリカは、各地の領主や豪族などに書簡や檄文を送りまくっている。暇さえあれば手紙をかいているせいで最近では臆病炎気味なのか、右手をぶらぶらと振ったり、親指のつけ根を揉んだりしている姿をよく見かける。

「なにも陛下が直筆するのではなく、誰かが代筆してもかまわんと思うのだが、聞き入れてもらえなくてな」

パッシェリカを見ながら、ダンガンが微苦笑を浮かべた。彼は、前王アーウィンの命を受けてパッシェリカを幼少時から見守ってきた人物なので、パッシェリカの芯の強さ、こうと決めたら言ってもきかない性格を、よく知っている。

「とんでもない。かりに私がどこかの地方を治める領主だったとして、同盟軍に加わってほしい、そんな重要案件の手紙さえ自分ではかかない女王など信用しません。そうでしょう？ もっとも、これまで私の書簡に対して色よい返事是一通も来ていませんが……」

パッシェリカは小さな吐息をついた。

「おれたちはまだまだ弱小勢力と侮^{あなど}られているってことだ。それはパッシェリカのせいじゃなく、將軍を任されているおれの責任だよ。ただ、おれは、ひょっとしたらこのあたりで潮目が変わるんじゃないかと期待している」

「ええ。ラディンは南部を一挙に制圧し、急激に勢力を拡大しました。こうなってくると、群雄たちも自身の利益だけを考えているわけにはいかない。恐ろしい暴虐の王と知りながらラディンに従うか、さもなくばこれと対峙する道を選ぶか……。お尻に火がついた状態になりつつあるはずです。そして——今日の会議ですが、そういう大陸の状況が如実に現れた形となります」

パッシェリカのその言葉に、おれはピンときた。やはり、なにか非常に重要な案件が議

題となるらしい。

それにしても、とおれはネビウス老を見やった。

以前は、一言居士かよ、ってくらいひとこと口を挟まなければ気がすまない老人だったはずだけど、今は虚空に視線をさまよわせて、心ここにあらずの様子だ。ほんと、どうしたんだろう、この人は。みんながみんな嫌っていた人物だけど、いざこうして毒舌家だったのが嘘のように変貌してしまうと、それはそれで気になる。

「遅参しました」

ほどなく、着替えをすませたアノンが現れ、パッシェリカ陣営の幹部勢揃いとなった。

「では、キルバ。客人たちを呼んできてくれ」

「かしこまりました」

アノンに言いつけられ、執事のキルバが姿を消す。

じきにバルゴとロルカがあらわれた。

このアレリア自治領と接している、東リザード自治領の領主バルゴ。リザードマンはヒューム（人間）よりも大柄で、腕力に任せて武器をブン回すのが得意な種族だ。バルゴはリザードマンとしては小柄だけど、鍛えに鍛えた身体が自慢の武人で、肩や腰の量感にはちょっとすごいものがある。

そして、バルゴの妹のロルカ。リザードマンは男女にほとんど体格差がない。ロルカは参集した一同の中で最も上背があった。

（うん？）

そんな迫力満点の二人の背後に、べつの人影がある……。

「あれ？ に一ちゃん、エルフ……だよね」

サラがその三人目を見てつぶやいた。人間に似ているが、目がアーモンド型で、耳がやや長い。

「ああ。それも、ひとかどの人物みたいだな」

そのエルフは年齢不詳の男性で、目つきが鋭く、いかにも切れ者といった印象があった。それに、身なりがいい。薄緑色の法衣をまとい、首には大粒の青い宝石がはめこまれたアミュレット。全身から『お偉いさん』のオーラを放っている。

（もしや、ミレディア神国のハイエルフの高官か？ 確か、東リザード自治領とは犬猿の仲だったはず。それが、気性の荒いバルゴと一緒に来た……？）

なにか、大きなことが動き始めている。

しかも、それは急を要する事態の公算が高い。

おれは緊張した。首筋のうぶ毛がちりちりする感覚。のっぴきならない事態の予感――。

果たして、おれのその予感は的中することとなった。

TURN3

女王は諦めない。いえ、諦めることを許されない立場なのです。

——パッシェリカ・イスカリエン

私はシヴァを心から信頼しています。これまでどれほど彼に助けられてきたことか！
彼なくして今日の私は……女王としてかっこうのつく私は、なかったことでしょう。

ところがシヴァの頑張りも虚しく、今や暴王ラディンは南部制圧により、私たちをはるかに上回る勢いでその力を増しつつあります。

どこかで起死回生の手を打たなければ、私たちの負けはほぼ確定といえるほどの状況です。私は大きな危機感を抱いていましたが、表には出しませんでした。女王があわてたり、深刻な顔をしたりすれば、臣下はみな浮き足立ってしまいますから。

ですから、私は努めて落ち着いた表情で日々を送っていました。でも内心では、この状況を覆す手はないかと苦悶し続けていたのです。

きっと、将軍であるシヴァも同じ思いを抱いていたはずです。

ところが、先日のことです。バルゴから一通の手紙がもたらされました。その内容は驚くべきものであり、まさにこれは『起死回生』となりうる、と私は考えました。

ただ、希望は時として冷静さを失わせます。信頼できる人々とともに、知恵を集めて検討しなければ、どのような落とし穴に陥るかわかったものではありません。

そこで、私はただちに、この件について会議を開くと決定しました。

そんなわけで——。

私は興奮と、それを抑える理性とのせめぎあいをまざまざと感じながら、その会議に臨んだのです。

＊ ＊

「女王陛下、ご機嫌うるわしゅう」

ロルカが、私に向かって丁寧に挨拶しました。私は「暑い中、ご苦勞です」と応じましたが、バルゴはカチンと牙を小さく噛み鳴らしたのみで、むっつりと押し黙っていました。

そんなバルゴをちらっと見てから、エルフが私のそばへ来ました。

「お目にかかる機会を得まして恐悦至極。私はミレディア神国の宰相さいしやう、マウラーと申します。暴王打倒を掲げるパッシェリカ陛下、お噂はかねがね……」

いかにも社交辞令になれている様子で挨拶すると、片膝をついて私の手を取り、それを自分の額にもってゆきました。エルフはエルフでも、儀式や格式にうるさいことで知られるミレディア神国のハイエルフ流の作法です。法衣の着こなしといい、じつに洗練された身ごなしで、優れた文化や家柄の香りがしました。

ただ……。

「遠路はるばるの来訪、感謝します」

私は鷹揚^{おうよう}にうなずきましたが、（冷たい感じがする）との印象を彼に抱きました。なぜと問われても説明が付きません。強いて言えば女の勘でしょうか。

「そしてこちらが、陛下の右腕であり、あれやこれや噂^{ふんぶん}粉々の人物、シヴァ將軍ですね？」

マウラーは私の隣に座を占めているシヴァをじっと見つめました。

「ああ。こっちは、おれの妹のサラ」

シヴァもなにか感じるどころがあったのか、どこかよそよそしい態度です。

「將軍、色々と聞き及んでおりますよ。私が送りこんだ、その手の者たちからね」

そういったマウラーの瞳には、ちょっといたずらっぽい光がありました。

「ふうん。どこの勢力も各地に諜者なり密偵なりを放っている御時世だけど、ひょっとして……。以前、傭兵募集に応じてやってきた、実力もないのに口ばかり達者な『メッセルダ山の守護者にして偉大な魔法使い』ベルファスナッツァードとかいうのが、それだったのかな？」

シヴァがたずねると、マウラーは薄笑いを浮かべながらうなずきました。

「え！　じゃあ、あの人ってただのバカじゃなかったってこと？」

サラが目を丸くしました。

「バカとはまた、簡潔明瞭でわかりやすい人物評ですね。ですが実際には『バカのふりをするのに長けた利口者』です。彼は病弱で兵士などは務まらないものの、じつにキレ者でして……。彼の名誉のために、私が信頼している友人、と申し上げておきます」

うそぶくマウラーを、シヴァはじろじろと遠慮のない視線で見っていました。彼を観察し、人となりを把握しようとしていたのでしょう。

「しかし、ベルファスナッツァードの真の姿を見抜く眼力はなかったようですが、シヴァ將軍、あなたはやはりただ者ではありませんね。ここへ来る際、街の様子をざっと見させてもらいましたが、短期間のうちにあれほどたくさんの兵を揃え、その兵のための装備も調達するとは。イスカリエン王朝の開祖たるジェド王と同じく、ドラゴンハーツとサーチの力を持つ男、との噂を耳にした時には眉唾ものだと思いましたが、今は信じられます」

「なんだったら、論より証拠、この場でドラゴンハーツしようか？」

「いえいえ、それには及びません」

ここでアノンが立ち上がり、「さ、どうか、おかけください」と三人の客人にうながしました。バルゴ、ロルカ、マウラーの三人は私の向かい側に座をしめました。

この間、グレインやミモリーはかなり驚いた様子でマウラーを見ながらひそひそ話をしていました。

その気持ち、わかります。ミレディ神国！　バルゴが治める東リザード自治領の西側にある、ハイエルフたちの国。国境を巡る小競り合いを昔から続けていて、リザードマンとは犬猿の仲。そんな国の宰相——高官中の高官が、バルゴ、ロルカとともにやってきたのです。もうこの段階でただごとではありません。

「兄上」

ロルカがバルゴを見やって、発言を促^{うなが}す手つきをしました。するとバルゴは、いかにも気にいらな^{うなが}い様子で、ガチン！　と牙を噛み鳴らしました。

「話すべきことがあるのは、おれではなく、そこのエルフだ。そいつが話せばよい」

彼は吐き捨てるように言い放つと、ぬっと手を伸ばして、香草をつめた鶏の丸焼きの大皿を引き寄せました。給仕が「おとりわけいたします」と急いで寄ってきましたが、バルゴは彼をうるさそうに追い払っても肉を引きちぎり、むしゃむしゃ食べ始めました。

マウラーはそんなバルゴを横目で見やり、（ふふん）と鼻で笑うような気配をよぎらせました。

「さて、皆様。リザードマンとはお世辞にも仲がよくないことで知られるハイエルフがこうして手を携えて現れたのは、もちろん事情あつてのこと……。単刀直入に申し上げます。ミレディア神国は、いえ、北部は、今、大変な危機に見舞われております。そこで我々は、東リザード自治領と同様、パッシェリカ陛下に忠誠を誓い同盟軍の傘下に入って、この難局を切り抜きたいと思っているのです」

マウラーは私たちを見回して切り出しました。私は彼がこれから語る内容をすでに知っていますが、まだ知らない面々はいよいよもって驚きをあらわにしました。

「おっと。話を進める前に、このことを言っておきましょう。我がミレディア神国は森と水の神であるミレディアを信仰し、国の最高位は信仰を守り伝える大神官で、実務全般をとりしきるのが宰相……。宰相の私は国の序列でいうと二番目なのですが、それは建前。ミレディアの軍事において私は指揮系統の最高位にあり、当然、この件に関しても全権を任されております。どうかそのつもりで、耳を傾けていただきたい」

「使者として口上を述べに来たんじゃなくて、いきなりトップ会談ってこと？　に一ちゃ

ん、これ、かなりの大事だよね？」

サラがシヴァに小声でたずねているのが聞こえました。シヴァは顔をひきしめ、無言でうなずきました。

「遅くなりました」

と、ここでキルバが召使いたちとともに、大陸全図を彫った大きな金属板を運んできて、マウラーの背後に設置しました。おおまかな大陸の地理——河川、湖、山脈など——が彫りこまれていて、赤や青や黄色の染料で各勢力を塗り分けた図です。戦乱の世ですから、群雄たちの興亡があるたび、染料を使って色を塗り直し、現状を反映するようになっています。

「ああ、どうも。うん、反映されていますね、ラディンの南部制圧が。我々がそうであるように、皆様も各地に密偵や諜者を放ち、情勢の変化に神経を尖らせていますね？ ラディンの南部制圧には驚愕したことでしょう。私も、滅多なことでは驚かないのですが、あの報に触れた時は耳を疑ったものです」

マウラーは大陸全図を睨んで、軽く唇を噛みました。

「その後のラディンの動向ですが、彼はハイデンへ攻め入った十五万の兵のうち、十万とともに旧ハイデン領に駐留。抵抗を続ける残党の掃除にいそしんでいます。なかなか大変な掃除でしょうが、確実に残党たちを追い詰め、着々と地ならしを進めている模様……。遠からず、南部は完全にラディンの支配下となります。そもそもラディンは、大陸中央の内海周辺が本拠地です。内海は巨大な湖にして、大陸で最も豊かな漁場。またその湖畔は実り豊かな土地で穀物の生産量も高い。ラディンはその経済力を背景に、群雄割拠のラクウェルにおいて頭ひとつ抜けた大軍を養っていたのに、今やさらに強大化してしまった。南部から人と金を吸い上げ、さらに軍団を強化すれば、もはやラクウェルに彼に勝てる者はいなくなります」

ここまでは、私以外の者にもわかりきっている話でした。問題は、この後です。

「我々ミレディアも南部制圧の報からこのかた、どう身を処すべきか大いに議論してきました。従うか。それとも刃向かうか。ミレディアは深い森に守られ、伝統的に魔法に長けた強兵を養っています。ラディンなにするものぞと気炎を上げる人々が多かったのですが、暴王は予想外に早く次の手を、それもとんでもない手を打ってきて、私たちの肝を冷やしたのです」

「暴王に新たな動き？ 王都にて、約三万の軍団が出立の準備を整えている模様、との報は、つい先日部下から聞いた。その軍団を統括しているのは、南部制圧の戦いで華々しい戦功を立てたエレナとガラック、この二将とのこと。それと何か関係が？」

グレインが身を乗り出しました。

「ええ、その件です。ですが、あなたがたはそれ以上の情報はまだつかんでいないようですね」

マウラーの物言いに、グレインはむっとした表情になりました。というのもグレインは諜者たちを束ねる司令塔であり、そうした情報をいちはやくつかむ責任を負う立場なのです。ただ、私たちは兵士を増やすことと、兵士に供与する武器や防具の調達に資金の大半を注ぎ込んできました。このため、グレインが動かせる諜者の数は多くありません。人手が不足しているので、得られる情報量にもおのずと限界があります。

「では、私が得ている、もっと詳細な情報を開示するとしましょう。ラディンは南部制圧後、自身が率いていた十五万の兵のうち五万を、またエレーナとガラック両将が率いていた三万の兵を、本拠地である王都へ戻しました。その王都から先日、エレーナとガラックが麾下三万の兵を率いて発ちました。そう、現時点では、すでにその三万は王都を発っているんです。向かった先は、ラディンの勢力圏の最北部……バロード平原です。その大陸全図だと、青で塗られているジェド騎士団領と、国境を接するあたりですね」

「ジェド騎士団領は、ラディンの勢力圏と北部の間に位置している。じゃ、ラディンは早くも北征に乗り出し、手始めにジェド騎士団領を攻めるつもりなのか？ ジェド騎士団はアデラス家とロムロス家によるいさかいで二分されていると聞いている。マウラーたちは、そのエレーナとガラックの三万によって、あっさりジェド騎士団が敗北する公算が高いと読んでいるのか？ もしくは、ジェド騎士団が戦わずしてラディンに降伏するとの情報でもつかんだのか？」

シヴァが素朴な疑問をぶつけました。

「いえ。ラディンは、ある恐ろしい建設事業を計画し、実行に移したのです。地図を御覧ください。ラディンの本拠地は大陸の中央に位置する巨大な湖、内海及びその周辺です。環状に内海を囲むエレファス山脈から大量の清水が流れこみ、その水は川となって内界から大陸の四方へ流れ出て、海へと注いでいます。わけても、大陸を北へ貫いて流れるセド川、南西へ貫いて流れるキンダス川、このふたつの大河は、農作物の育成、船を使った交通、そのほかもろもろ、人々の生活に必要不可欠な水源であり命を支える自然の恵みです。我々ミレディアの深き森も、偉大なるセド川の恵みによって育はぐくまれたものです。しかし——ラディンはこの地理的条件に着目し、悪魔的な企みをもって、ミレディア神国も、ジェド騎士団領も、東リザード自治領も、とにかくもう、北部全域を一挙に我が物とする腹づもりなのです」

マウラーの発言に、一同、ざわめきました。

「エレーナとガラックが向かった先は、バロード平原を貫いて北部へと流れる大河、セド川です。正確には、セド川にかかっている大陸最大の橋、ナルター大橋です」

「ナルター？ 確かにあの橋はセド川を渡るための要路ではあるが……。しかし、セド川はあのあたりでは、川幅こそ広いが、流れがゆるやかで水深も浅い。悪天候でない限り船を使えば渡れるし、そんなところに兵を配してなにをどうするつもりだ？」

ダンガンが首をかしげました。

「皆様は、アンダイトという鉱石をご存じでしょうか」

マウラーの問いに、風術師のシャノーラが「水の精霊力を蓄積する効果を持つ青い石だろ」と答えました。

「そうです。私の首飾りにはまっているこの青い石を御覧ください、これもアンダイトです。水術師が魔法を放つ際、水の精霊力を蓄積したアンダイトがあれば、それを消費することにより、精神力の消耗を軽減できる。そして、精霊力を消費しても、清い川や潮の香り高い海にひと晩も浸しておけば、アンダイトには再び精霊力が蓄えられる……。しかし、このアンダイトを大量に集め、兵器として運用した例が歴史書に残っています。およそ四百年前、我々の遠戚であるウッドエルフの地、マナリスにおいて内乱が生じました。この時、一方の将であったグラヴァーなる男が、マナリスのリズ川上流に大量のアンダイトを投じて、下流にあった敵の支配地域の水を腐らせ、ついには降伏を勝ち取った、という例が……」

「腐らせる？」

魔法使いであるシャノーラも咄嗟に意味がわからなかったようで、眉をひそめました。

「そうです。アンダイトは水の精霊力を蓄積する鉱石。言い換えるなら、水から精霊力を奪う石なのです。それを大量に川に投じると、川の水が精霊力を根こそぎ奪われて腐り水となり果てる。すると、どうなるか。川の生き物は死に絶え、その水を引いて育てていた作物は枯れ、水を飲んだ者は病にかかります。そんなことになったら、流域の村や町は全滅必至です」

「なにそれ！ 暴王は、それと同じことをやろうとしているの？」

ミモリーが椅子を蹴って立ち上がりました。

「まさしくそうなのです。セド川は大陸随一の大河であり、私が例として挙げたリズ川などとは比較にならない水量を誇ります。そのような大量の水から精霊力を奪い尽くすには、とてつもない量のアンダイトが必要です。ただ、アンダイトは、私の首飾りにあるような純度が高くて美しいものは宝石並に稀少であるものの、純度の低いクズ石ならありふれている。そして、ラディンが制圧した南部にはアンダイトの一大産地であるモンデス丘陵が

あります。ラディンは南部で男手をかき集めて奴隷的な労働に従事させ、アンダイトを大量に切り出してはバロード平原へと運ばせています。邪悪な大事業を実現するために。すでに架かっているナルタール大橋を基礎として、これを改造、水の精霊力をアンダイトで堰き止める、巨大な堰の建造に乗り出したのです。称して、大堰城^{だいせき}。ラクウェルの歴史上、最も悪魔的な大事業です」

「途方もない建設事業に聞こえるけど、簡単にできるものなの？」

サラが質問しました。

「できるはずがない、とミレディアでも軽んじる者はおりました。ですが、私の読みでは『できる』。それどころか、すべての工程が完了し大堰城が兵器として稼動可能な状態になるまでに残された時間は少ない。諜者たちを総動員して建設の進捗^{しんちよく}状況を報告させておりますが、ラディンは目まいがするほど膨大な人力と資金を注ぎこんで工事を急がせています。もしセド川の水が腐れば、セド川とその支流の恵みを受けている北部の人々の生活は破壊されます。北部の勢力は、みなラディンに膝を屈するよりほかなくなる。想像を絶する規模の建設事業ですが、ラディンにしてみれば、北部制圧でお釣りがくる、との計算なのでしょう」

しいん……と座が静まり返りました。

「で、その大堰城がまだ完成していないうちから、ラディンは我々のもとに使者を派遣し、彼の大事業について滔々^{とうとう}と説明した上で脅しをかけてきました。ただちに全面降伏して臣下の礼をとり、イスカリエンの正統なる王を自称するパッシェリカなる逆賊ども、及びその逆賊と同盟を結んでいるリザードマンどもを攻め滅ぼせ、そうすれば勘弁してやる、とね。嫌だというならミレディアを死と腐敗の地にしてやるそうです。我々を脅して従わせれば、なにも大堰城を完成させる必要はないので、さらにお得というわけだ！ 普通、交渉ごとは飴と鞭を使い分けるものです。しかしラディンがよこした使者は高压一辺倒で、飴玉をちらつかせることはついにありませんでした。従えばよし、従わずば滅ぼす、それがラディンのやりかたなんです。まさに『暴王』の面目躍如^{めんもくやくじよ}といったところでしょうか。なお、すでに諜者が情報をつかんでおりますが、ラディンはジェド騎士団にも、同じ内容の脅しをかけました」

マウラーは吐き捨てました。まさに、風雲急を告げる事態です。

「しかし、宰相マウラー、あなたはこうしてここへ来た。ラディンにではなく、私に臣下の礼をとるために」

私は静かに言いました。

「はい。降伏か。それとも戦うか。中立は不可能な状況です。大揉めに揉めましたが、最

最終的には私が中心となった主戦派が勝利してこの決定に至りました。あのような邪悪な大事業を行い、悪魔的な脅しをかけてくる輩の下風に立てば、たとえひとたび命を永らえたとして、その後ずっと安泰でいられるとは思えません」

「つまり暴王は、脅しによる屈服を狙い、かえって敵を作ったわけですね」

「さようです、陛下。かつてジェド王がしたように、真に王徳ある者が大陸を平定しない限り、この戦乱は終わらない。今さらながら、そのことを痛感いたしました。陛下が同盟軍の旗の下に集えと飛ばした檄文にこれまで応じなかった非礼を深く謝罪するとともに、今後は手を取りあってラディンに立ち向かいたいのです」

「ミレディアがそうであるように、北部のほかの群雄たちも同盟の旗の下に集ってくれるとよいのですが」

「今すぐに、は難しいかと。この件、水と森の国であるミレディアに比して、他の群雄たちがどれくらい危機感を抱いているかは、ちょっとはかりかねますので。ただ、我々は、こういう理由でパッシェリカ陛下につくと決めた、との情報を他の群雄たちに積極的に流しています。それを受けて、同様の決定を下す勢力があらわれると良いのですが」

「手回しが良くて助かります」

「お褒めいただき、光栄です。ともかく、皆様。どのような事態が進行中なのか、理解していただきましたね？ 大堰城が完成してしまってからでは何もかもが手遅れです。完成前に、防衛にあたっているエレナとガラックの軍団を撃破しなければならない。では、具体的に大堰城をどう攻略するか。それについて、本日この場にて話し合いたいのです」

マウラーはそこまで語ると、シヴァに視線を固定しました。彼の人となりや能力を、会議を通じて推し量ろうとしている……そういう目つきでした。

「ハイエルフどもと手を結ぶなど癪に障るが、ことがことだ。セド川の水が腐れば、おれの領内に流れている支流のイエリア川やナッダス川にも同様の被害が出るのは火を見るよりも明らか。大堰城を攻略せねば、との思いはおれも等しく同じと思ってもらいたい」

と、ここまで押し黙っていたバルゴが口を開き、やはりシヴァを見つめました。ただ、バルゴの眼差しはマウラーのそれとは違い、シヴァを高く評価していて、彼の勇気や知謀がこの状況を打開してくれるのではないかと期待している、そういう雰囲気でした。

「なるほど……。とにかく、味方が増えたのはありがたい」

シヴァは少考するそぶりを見せました。

「なあ、マウラー。さっき、ジェド騎士団にもミレディアと同様の脅しが入ったと言ったな。おれたちが知らない情報をそれだけ詳細につかんでいるとなると、ジェド騎士団の動向についてもかなり正確に知っているんじゃないか？ おれたちが大堰城を攻めるには、

北部とバロード平原の間にあるジェド騎士団領を通過しなければならないが、彼らはこの件についてどういう態度なんだ？」

「鋭いご指摘ですね」

マウラーは微笑しました。

「じつは、ジェド騎士団とはもう話がついているんですよ。戦乱以降、アデラス家とロムロス家による争いが長く続いていましたが、急転直下、ラディン打倒すべしと結束したのです。これを成し遂げたのはデラウス伯という方でして。なかなかの人物ですよ」

「……そういう情報は、さっさと開示してほしいな」

「失念しておりました、ご容赦を」

マウラーは謝罪しましたが、わざと開示しなかったのでしょうか。シヴァはどのくらい頭が切れるのか、推し量るために……。このハイエルフ、私にとっては、好ましい性格ではありません。

「そうになると、ジェド騎士団も同盟軍の傘下に入ってくれるってことだな？ 戦力として勘定に入れていいんだな？」

シヴァは顔を明るくしたのですが、

「さ、そこは……。なにせアデラスとロムロスの確執は根深い。私はデラウス伯と連絡を密にしておりますが、まだ両家は互いを警戒していて、多くの兵を動かしたくはない、そういう空気なのだそうです。ただ、大堰城を攻めるとなった際、ジェド騎士団領を我々が通過するのを認め道中の安全を保証する、これについては確約を得ています」

マウラーは顎を手で撫でて、考え考え言いました。

「ええ……あてにならない連中だなあ……。その大堰城がどれくらいの完成度かにもよるけど、そもそも城攻めって防衛側が圧倒的に有利なんだよ。当然だよな、城壁や高所の利があるんだから。その防衛側が三万もの兵を擁しているなんて、想像もしたくない。なあバルゴ、正直なところを聞かせて欲しい。動かせる兵の数はどれくらいだ？ おれたちは七千。目いっぱい七千だ」

シヴァはバルゴを見やりました。

「おれの麾下も、動かせるのは七千がいいところだ」

言いつつ、バルゴはマウラーを睨みつけました。

「そこの宰相マウラーとやらは、同盟軍の旗の下に集うという。だが、おれたちリザードマンはミレディアを完全に信用はせん。信用させておいて、軍団を動かした隙に留守を衝く気かもしれん。だから七千、それが限度だ。もしもに備え最低限の防衛戦力は残しておかねばならんのだ」

この物言いを受けて、マウラーは、ふふんと鼻で笑いました。

「その言葉、そっくりそのままバルゴ殿にお返ししましょう。我々も動かせるのは七千が限度です。大堰城を攻めるため軍団を動かした隙に、あなたがこっそり国内に残しておいた戦力で攻めこんでこないか、その危険については国内での議論の席上、さんざん指摘されましたよ」

「なんだと！ 隙あらば国境を越えようとたびたびちょっかいをかけてきたのは、常にお前たちの方だっただろうが！」

バルゴは激昂し、ダン！ と拳でテーブルをたたきました。

「まあまあ、待て待て。二人とも、落ち着いてくれ」

シヴァがなだめる手つきをして、再び少考するそぶりを見せました。

「まとめると、三陣営が七千ずつで、合計二万一千。防衛にあたっているラディン麾下の軍団は三万だから、こちらはおよそ三分の二の兵力しかない。これで城攻めなんて、はっきり言って自殺行為だ。まともに攻めたところで勝ち目はない。しかも、仮におれたちがジェド騎士団を説得し、彼らが一万くらい兵を出してくれて互角の兵力になたとしても、だ。かなりの短時間で一気に敵を撃破する必要がある。もたもたしていたら、ラディンはひとまず南部を放り出し、とんでもない大軍を率いて駆けつけるだろうから……。さらに、だ。おれたちは大堰城を落とす際、多くの兵を失うわけにはいかない。おれたちの兵は失ったら補充に難儀する貴重な兵だ。対して、広大な領土と莫大な経済力を有しているラディンは、三万くらいの兵なら失ったとしても、いともたやすく補ってしまうはず……。そして、おれたちの最終目的は大堰城攻略ではなく、その後に行うラディンとの決戦だ」

考え考えシヴァが口にした言葉は、議論の場を冷えこませるものでした。もっとも、それは認めざるを得ない事実、それ以外のなにものでもありませんでした。

「ですが、シヴァ。大堰城の攻略に成功すれば、暴王を打倒せんとする私たちの力は本物だと、各地の群雄たちも認めるはずです。一気に潮目が変わり、群雄たちが次々に同盟軍の旗の下に集う契機となる、私はそう考えています」

ここで、私も意見を述べました。

「うん。じつはおれもそう思った。希望的観測かもしれないけど、でも、歴史には潮目が変わる転換点、政治的にも宣伝効果の高い勝利ってものがある。織田信長おだのぶながにとっての桶狭間おけはざまのような……。それに大堰城を占拠してしまえば、ラディンの本拠地である王都は目と鼻の先だ。前哨基地として持ってこいの立地だ。やつの喉元に刃を突きつけ、逆王手をかける形となる」

シヴァは私の言葉を受け、強くうなずいてくれました。

「ふむ……。多くの諜者を動かし、多くの情報を得ている身として、このマウラーから、つけ加えさせてください。あくまで私見ですが、兵の質では我々の方が上と思われます。ラディンは金の力で傭兵を大量に雇用している。しかし同時に、民から多くの若者を徴兵している。この徴兵された若者たちは、ラディンの軍団を見かけ上強大に見せるための、いわば水増し要員の色合いが強い。士気が低く、武器の扱いにも不慣れです。勝ち戦ならともかく、ひとたび敗色がよぎればたちまち浮き足だつ弱兵なのです。これはバロード平原に出てきているエレーナとガラックの軍団も同様で、彼らの三万のうち半分がたは、徴兵されて嫌々しかたなく武器を持たされている弱兵と私は見ております」

「とはいえ、戦いはなんといっても数だ。歴史上、数の不利を覆^{くつがえ}した勝利は輝かしいものとして人々に記憶されているが、そんな例は滅多にないからこそ人々の印象に残るんだ。たいがいの戦争では、数的不利は覆せない」

そう言ったシヴァは、小首をかしげてマウラーを見つめました。

「なあ、マウラー。おれは腹の探り合いは嫌いだ」

「おや。奇遇ですね、私もですよ」

「察するに、マウラーにはすでに何かこれという策があるんじゃないか？ 大堰城攻略戦は、暴王と雌雄を決するための前哨戦にすぎない。その前哨戦に勝つ見こみさえ立たない状態では、マウラーが二分したミレディア国内の議論をまとめられたとは思えない」

フッ、とマウラーは不敵な笑みを浮かべました。

「いや、これはこれは。なるほどなるほど……。あなたはお若いが、将軍に任じられるだけの器量がおありですね」

聞くなり、バルゴがガチンと牙を強く噛み鳴らしました。

「無駄口をたたいている場合か？ この期に及んで言葉遊びをしている暇があるのか？ まったく、これだからミレディアのやつらは好かんのだ！」

「そういちいち腹を立てていて、よくまあ一国の領主が務まるものです、と言いたいところですが……。確かに少々私が意地悪でしたね。では、皆様が頼みの綱としているシヴァ將軍にもこれという名案はなさそうですし、私がお持ちした腹案をご披露いたしましょう」

マウラーはこれを切り出すその瞬間が待ち遠しくてならなかったとばかりに、得意げな顔をしました。バルゴが彼に対して嫌悪感をあらわにする心情、わかります……。

「先ほどのシヴァ將軍の言葉通り、大堰城をまともに攻めても我々に勝ち目はない。ならば、まともにぶつかるのではなく、策を用いて戦うべし、これは理の当然。じつは面白い情報がありましてね……。我々は、離間工作が有効と考えています」

「離間工作？ 敵の中に、おれたちが働きかければ裏切りそうな者がいるのか？」

シヴァは半信半疑の様子でしたが、マウラーは自信ありげにうなずきました。

「大堰城の防衛と工事の監督にあたっている、敵将エレナと副将ガラック。この二人、水と油というやつなんです。エレナはアーウィン王存命中のころから、若くして宮廷魔法使いだった女性で、ラディンに気に入られ、今では軍団をまかされる将軍です。対してガラックは一介の傭兵からのし上がった、粗野だが戦場での経験豊富な剛の者。ラディンとしてはお上品な宮廷魔法使いあがりのエレナを陰に日向に支えさせるべくガラックをそばに置いたのですが、その試みは失敗と言わざるをえません。この二人、とんでもなく仲が悪いんです」

「興味深い話だ」

「そうですね。エレナは美女で、軍団の神輿^{みこし}としてはすこぶる見栄えがいい。また雷術師としての実力は本物です。が、戦場で血と泥にまみれて出世を果たした百戦錬磨のガラックの目から見れば、心安らかに軍団の指揮を任せられる将軍の器とはいえないようで……。二人は兵の前で激しい口論をすることが日常茶飯事、陰に回って相手をののしる様は聞いていられないほどひどいものだそうです」

「ふうん。でもその二人、なんだかんだ言って、南部制圧では戦功をあげたんだろう？ 仲が悪くても戦場に出れば将としての責任は果たすってことじゃないのか？」

シヴァは眉をひそめました。

「ところが、ハイデンの貴族連合軍を撃破した戦いで、二人の仲はいよいよもって陰悪なものになってしまったようなのです。彼らはハイデン軍の背後から奇襲をかけ、勝利に貢献する大活躍をした。その戦功を誇ってエレナは鼻高々、一方、ガラックは不満たらたら……。ガラックには、将軍として頼りないエレナの面倒を自分が見てやっているからこそその勝利であり、自分をエレナの部下から切り離して、将軍として独立した軍団を持たせて欲しいとラディンに上申したそうです。というより、ガラックは以前にも同じ要求をしたことがあるものの、受け入れられないまま今日に至っているんですよ。酒が入ると、エレナのせいで自分の出世街道が頭打ちになってしまった、と愚痴ることしきりだそうです」

「なるほど。将軍エレナと副将ガラックの仲が悪い。しかもガラックは、エレナだけでなくラディンに対しても不満がある……か」

マウラーの語り口の熱っぽさもあってか、ようやく、シヴァもこの案を検討に値するものととらえる表情になってきました。

「ずばり言いましょう。ガラックは離間工作を仕掛けるには絶好の相手です。傭兵あがり、で利にさとい性格ですし、働きに釣り合うだけの報酬を約束すれば、必ず乗ってくると私

は読んでいます」

マウラーは断言しましたが、私は危うい、と感じました。

「マウラー。ラディン麾下の兵であれば、暴王の恐ろしさを私たち以上によく知っているはずです。裏切って失敗すればすなわち死。そう簡単に寝返るものでしょうか？ それに、離間工作を仕掛けて失敗した場合、私たちが大堰城に攻め寄せると事前通告するも同然となります。それについてはどう考えていますか」

ためらいがちに、私は問いを發しました。

「陛下のおっしゃりよう、いちいちごもっともです。しかし、じつはガラックには裏切りの前科があるのですよ。彼はもともと、内海の漁業権を独占して莫大な財をなしていたキンドラ家の傭兵頭^{がしら}でした。ところが、ラディンがキンドラ家の税金逃れに気づいて激怒し、攻め寄せた際、多年世話になってきた彼らを裏切って当主のカリム・キンドラの首をラディンに差し出しました。そういう男なんです」

「……………」

私は、アレリア卿へ視線を移しました。

「マウラー殿。ガラックなる男については、私も知っている。ある意味、情報通の貴殿以上に知っていると思う」

アレリア卿が口を開くと、マウラーは眉をはねました。

「ほう、そうなのですか？ あのような男と接点がおありとは」

「パッシェリカ陛下がラディンの手勢に追われ、私を頼ってこのアレリア自治領へやって来る直前、ガラックはラディンの使者と名乗って乗りこんできたのだ」

「ふむ」

「彼はすでに高い地位にあって一介の傭兵ではなかったが、わずか数名の供を連れたのみで現れた。みなが恐れる暴王の威を借りたとて、この戦乱の世でそれだけのことをしてのけるのは度胸がいる。その意味では感心した」

「当てましょう。といっても、難しいことはありませんが。パッシェリカ陛下を受け入れるな、もしくは、保護すると見せかけて捕らえた後、引き渡せと要求してきたのですね？」

「そうだ。この館で、まさにこの部屋で、私は彼と会見した。断れば、こんな小さな領土など草木の一本も残らないほどの業火で焼いてやる、とやつは脅してきた。私はその要求を突っぱねた。その時、彼に抱いた印象だが、『金が好きだ。なによりも大好きだ』と顔にかいてあるような、露骨なまでの俗物だった。ついでに言えば、会見のさなか、私の胸を舐めるように見ていた。卑しい下衆だが、それだけに利に^{きと}聡い性格だと思う。大陸の平

和と安寧といった大義を説いても無駄、しかし利をもって働きかければ、転ぶ可能性はじゅうぶんにあるのではないだろうか」

アレリア卿はそう結ぶと、私を見てうなずきました。

「シヴァ將軍。この離間工作、あなたは どう 思いますか。仕掛ける価値あり、でしょうか」

私がたずねると、シヴァは腕組みをしました。

「おれたちが攻め寄せ、戦いの最中に二人の将のうち一方が裏切ってくれるなら勝ち目があるし、兵の被害も最小限ですむ。ただ、勝敗がどう転ぶかはそのガラックって男の腹づもりひとつで決まってしまう。そこが気に入らないし、危ぶまれる。だけど——時間はラディンの味方だ。こうしている今も、刻一刻、大堰城の工事は進んでゆく。時を費やせば費やすほどおれたちには不利だ。時間をかけて最善の策を練って……と悠長なことをしている暇はない」

彼は虚空を見つめてしばし唇を噛んでいましたが、やがて「諸事情を勘案すると、仕掛ける価値のある策だと思う」と結論を述べました。

マウラーは満足げに微笑しました。

「では、陛下。將軍。私の献策を受け入れてくださるのですね？」

シヴァが私にむかってうなずいたので、私は「やりましょう」と決断しました。

「ですが、マウラー。ガラックを信用させるには、それなりの人が先方へ——敵地へ赴いて交渉しなければなりませんね。私の名代が務まる人物が接触し、莫大な恩賞を約束しなければ、離間工作は不調に終わってしまうと思えます」

みなわかっていることでしょうから、あえて私は口に出しませんでした……交渉にあたるその人物は、大きな危険を覚悟をしなければなりません。もしガラックがラディンに対して予想外に大きな忠誠心を持っていたなら、捕らえられて、生きては帰れなくなることでしょう。

しばし、室内は静まり返りました。

「では——」

我こそ、と立候補する者がいないので騎士長のダンガンが口を開きかけたのですが、「私が行こう」と声をあげた者があります。

アレリア卿でした。

「アレリア卿……。危険な任務であることは承知していますか？」

私は上目づかいに彼女を見ました。

「もちろんです、陛下。私はガラックと面識があります。また、小なりといえどこの地の

領主です。それが出むいてきたとなれば、離間工作の報酬は口約束の空手形ではないと信用させられるかと」

私は胸がつまってしまいました。彼女は、窮鳥であった私たちを受け入れ、ラディンの魔手から庇護してくれた大恩人です。

といって、誰かを、それもきちんとした地位のある人物をさしむけなければ、おそらくこの離間工作は成功しない……。

「いや、アノン。じゃなかった、アレリア卿。それはだめだ」

すると、シヴァが異を唱えました。

「将軍、なぜだ？」

アレリア卿は静かにたずねました。

「もしアレリア卿が捕らえられて人質になったら、それこそ面倒なことになる。パッシェリカ陛下がさんざんお世話になってきた大恩人が人質になり、にもかかわらず大堰城を攻めたとなれば、たとえ勝ったとしてもパッシェリカ陛下の印象が悪くなる。暴王ラディンと同じく、自己の利益のためには手段を選ばない人物だと、大陸中の人々に思われてしまう。そうなのは、おれたちが目指す、群雄を束ねてその力でラディンを打倒する構想そのものが瓦解してしまう」

「しかし、誰か地位のある者が行かなければ……」

「うん。だから、おれとサラもアレリア卿に同行する。正体を隠し、従者として、だ。万が一の時には、おれのドラゴンハーツで重囲を突破して逃げを打つ。サラ、いいか？」

「いいよ。に一ちゃんにとって、というか、このラクウェルに暮らすすべての人々にとって、正念場の戦いになりそうだし。でもって、今はあたしも、その一人なわけだし」

サラはふたつ返事で了解しました。

「シヴァ！ あなたと一緒に来てくれるなら、こんなに心強いことはない！」

笑顔になったアレリア卿を見て、私はどきりとさせられました。

その笑顔を見れば、彼女がシヴァに好意を——それもかなりの好意を寄せているのは、明らかでした。

「さすがはシヴァ将軍。伝説の王ジェドと同じ力を持つだけでなく、勇敢さも人並み外れているようですね。本来、全軍の将たる者が敵地に乗りこむなど軽率のそしりを受けかねない行為ですが、事情が事情です、私も反対はしますまい」

マウラーは満足げにうなずきました。

「アレリア卿。シヴァ将軍。それに、サラ。このような危険な任務を引き受けてくれて、感謝してもしきれません。大陸に平和を取りもどした^{あかつき} 暁 には、私、パッシェリカ・イス

カリエンは、必ずやその労苦に報いることでしょう」

私が^{おごそ}厳かに告げると――。

「おっと。女王陛下の今のお言葉、シヴァ將軍やアレリア卿のみならず、陛下を支えるみなに対してのお言葉と受け止め、今のうちに申し上げておきたい儀がございます」

マウラーがいやに大きな声をあげました。

「なんです？」

「私どもミレディア神国のハイエルフは、大陸に乱が起きてよりこのかた、中立の立場をとって自領を堅守して参りました。が、今回、陛下に全面的に協力することにより、暴王とは完全に敵対する形となります」

「……その危険に見合うだけの報酬を約束してほしい、そういうことですか？」

「そういえなくもありません。陛下の掲げる、平和を取りもどす大義には私どもも賛同しておりますが、大義だけで命がけの働きはできぬという聞き分けのない輩がいるのもまた事実。そうした輩を心から承服させるためにも、陛下に検討していただきたいことがあるのです」

「長々しい前置きはけっこうです、要求を言ってください」

「はは。なに、我々が共存共栄するため双方に利がある献策とお受けとりください。じつは――我が国の最高位である大神官ミューラー・エンディア様には、ご子息がございました。アーロン・エンディア様です。御年六十二歳、ヒュームやセフィラやケットシーにとっては初老の年齢でしょうが、我々ハイエルフにおいては青年の年齢です。婚歴もなく、美男子で、血筋や格の面でも、陛下のお相手としてまず文句のつけようがない方です」

ガターン！

もの凄いい音を立てて椅子をひっくりかえし、バルゴが立ち上がりました。

「なんだと！ 貴様ら、後からのこのこやってきて、ちっぽけな貸しを振りかざし、その対価として、女王陛下の夫の席を確保しようだと！」

壁や天井をびりびり振るわせるほどの大音声、いえ、咆哮でした。

「まあ、お聞きなさい、バルゴ殿」

しかし、マウラーは落ち着いたものでした。

「我々ハイエルフは、ヒュームと婚姻して子をもうけられる種族です。しかし、我々は排他的な純血主義の文化に長らく支配されており、他種族との交わりをよしとしませんでした。このため、ジェド王が大陸を平定してからの一千年、ヒュームのイスカリエン王家が中心となった中央政權の要職の方々と婚姻関係がほとんどなく、結果、大陸全体に及ぼす影響力は減少の一途をたどってしまった。国家と同胞の未来を担う私としては、このまま

ではまずいとの思いがありましてね……。イスカエリエン王家に我々の血を入れたいのです。いえ、我々だけが得をする話ではありませんよ。婚姻関係があるとなれば、裏切りや造反の心配はなくなる。現に各地の群雄は、娘を盟友に嫁がせ、息子に盟友の親類縁者を娶らせて、同盟関係を強固にしている。女王陛下にとっても、味方として確実に信頼できる勢力ができることは、損にはならないはずです」

「笑わすな！　なにが損にはならないだ！　得をするのは、大半、おのれらの方ではないか！」

「兄上、そうやたらと声を荒らげずに……」

ロルカがいさめる手つきをしましたが、バルゴはガチン！　と牙を噛み鳴らして、私を、またシヴァを見ました。

「パッシェリカ陛下。それにシヴァ將軍。今のうちに言うておくぞ。大堰城は攻略せねばなるまい。そのために軍を動かさねばなるまい。それについて、おれは協力を惜しまん。河川を人質にとられては、暴王に手も足も出なくなってしまうからな。だが、おれはミレディアのハイエルフどもを信用はせんぞ。絶対にな。このこと、よく覚えておくことだ！」

そう言い放つと、倒れた椅子をもどして座り直しましたが、ぐっと深く腕組みをして、憤懣^{ふんまん}やるかたない表情です。

「ま……パッシェリカ陛下にも、またバルゴ殿にも言うておきたいのですが、これはあくまで献策、提案です。命令だの強要だのではない。選択のひとつを提示した、それだけです。色をなすようなことではありませんよ」

言い訳気味に言ったマウラーは、目もとが少しひくついていました。忌々しい^{いまいま}リザードマンどもめ、との感情があるのか。あるいは自分でも、あまりに大きな要求なので気恥ずかしい、との感情があるのか――。

「マウラー殿の言葉には、一理ある。婚姻関係があれば、同盟は強固なものとなる、これは事実だ。とはいえ、このような危急存亡の^{とき}秋に、臣下が王に対して婚姻の話を持ち出すなど不謹慎だ、とも思う」

と言ったダンガンは、温和な彼にしては珍しく強い視線でマウラーを見つめていました。彼は私が幼いころから、前王アーウィンの命を受けて見守ってきた人物です。私にとっては実の父親以上に父親的な存在ですし、ダンガンにとっての私も、実の娘に等しいのかもしれません。

私は人さし指を唇にあてて思案しました。

マウラーの要求はあまりに大きすぎます。といって、大陸の趨勢^{すうせい}を決めかねないこの一

戦、ミレディア神国のハイエルフたちの協力は絶対に必要です。

また、マウラーにも立場があります。彼は宰相で国政をほぼすべて取り仕切っていると
の口ぶりですが、代々ミレディアの王に近い立ち位置であった大神官一族の顔を立てない
とやっていけない、そのような雰囲気も感じられます。

「マウラー。その件ですが……検討はします」

やむなく、私は曖昧^{あいまい}な返答を口にしました。

すると、「えっ！」と声をあげた者があります。

シヴァでした。彼は信じられないものを見るような目つきで、私を見ていました。

「……シヴァ將軍」

私はためらいがちに口を開きました。

「私は、女王です。この身は私人であると同時に、公人であらねばなりません。ですから
私は、時には私人としての自分を捨てて、公人としての決断をしなければなりません」

……………。

……………。

しばし、私たち二人は見つめ合いました。

その間、シヴァの瞳は、哀れなほど激しい動揺で揺れていました。

TURN4

上に立つ者は上に立つ者の、下で働く者には下で働く者の、それぞれの苦勞
があろう。

——バルゴ

会議を終えたおれは、最後にもう一度マウラーを睨みつけると、やつと同じ場所の空気
など吸っていたくないとばかりに、さっさと退出した。

アレリア卿が用意してくれた客室へもどり、窓辺のテーブルに歩み寄る。椅子を引いて
腰を下ろす。

するとロルカが、すぐさま向かいの椅子に腰を下ろした。

「兄上！　いくらなんでもあのような態度はいけません。東リザード自治領を束ねるバル
ゴは粗暴で短慮なやつよと、むしろかえってミレディアのハイエルフどもに侮られま
す！」

部屋の外にまで聞こえかねない大声だ。おれの妹は、他人に対しては理性的に振る舞っ
ても、おれに対しては感情をそのまま表出させる傾向がある。

この客室でおれたちの帰りを待っていた老臣や侍従たちは、（何事か）と驚いた様子を見
せた。

「で、あろうな。おい、それを注いでくれ」

おれは侍従に向かって、戸棚の瓶を指し示した。

テーブルにグラスが二つ用意され、琥珀^{こはく}色の液体が注がれる。おれはグラスの中身をす
ぐに飲み干した。

「アレリア領で昔から愛飲されているジャードか。悪くない味だ。最近はおれもこの味が
好きになってきた」

穏やかに述べると、ロルカは戸惑った様子で首をかしげた。

「兄上、どういうことです？　会議の席上で見せていた宰相マウラーに対しての粗暴な態
度は、計算ずくだったのですか」

「ある程度はな」

「ご真意、はかりかねます。聞かせてもらえませんか」

「ふむ……」

おれはしばし妹の顔をじっと見つめた。

兄の欲目を持ってしても、美人とは言いがたい。だが、意志の強さを感じさせる骨太な顔相だ。

「なあ、ロルカ。大堰城を攻略せんとするこの戦い、お前は どう 見ている」

「難物だと思います。敵将ガラックに対する離間工作が不調に終わったなら、他に打つ手が見いだせません。といって手をこまねていることもできないので、厳しいとわかっていながら、戦いに臨まざるを得ないでしょう。ただ、シヴァ將軍は不可能を可能にしてくれた方です。ドラゴンハーツの力といい、ジェド王の再来と呼べるほどの方です。彼が全軍の将であれば、なんらかの攻略法を見いだして大堰城を落としてくれるのではないかと」

「シヴァの力はおれも認めるところだ。誰がどう見ても勝てるはずの戦をひっくり返されたこのおれこそが、誰よりも、恐らくはパッシェリカ陛下以上に、その力を認めている」

「では、兄上は勝てると踏んでいるのですね？」

「いや、そうは思っておらん」

「えっ。では、負けるとお思いなの？」

「そういうわけでもない。——飲まんのか」

おれがグラスを指さすと、ロルカは形ばかりジャードに口をつけたが、味わっている心の余裕はないようだった。

「兄上。わかるように説明していただけますか」

「おれはな、ロルカ。^{いくさ}戦に限らず、世の中のことは万事、水物だと思っている。勝てると思って負けることもあれば、負けると思って勝つこともある。この乱世、そのような例は枚挙に^{いとま}暇がない。実際、おれの人生を見てみる。領主にふさわしい男と父をはじめ皆が思い、おれ自身もそう思っていた兄が病で亡くなり、おれに領主の役目が回ってきた」

「でも、兄上はよくやっているといます」

「世辞はいらん。王の証たる聖剣欲しさに軍を動かし、パッシェリカ陛下に刃を向けたこと、今にして思えば過ちであった。おれの若さと欲がなさしめた愚行だ。もっともパッシェリカ陛下とシヴァは、そんなおれに過ちを正す機会を与えてくれたのだから、皮肉なことに結果としてはむしろ良い方に転がったといえる」

「……………」

「そんなわけで、至らぬ若造、至らぬ領主だと、おれは自覚している。だが、それでも領主である以上は最善を尽くさねばならん。で、ロルカ。この乱世で領主が尽くすべき最善とはなんだろう」

「それは——なんといっても、領民を守ること、でしょうか」

「わかっているではないか」

おれは破顔した。

「ロルカ。その一番根っこの部分さえわきまえていれば、おのずと領主たる者がとるべき道は見えてくる。おれがいなくなっても、だいじょうぶであろう」

「えっ！　なにをいうのです、不吉な！　それとも、どこか悪いのですか？」

「そういうことではない。まあ聞け。『民の立場に立って考えよ』。これは、父が亡くなる直前に遺^{のこ}してくれた言葉だ。シヴァにまさかの敗北を喫して、この言葉が胸に蘇^{よみが}った。おれは聖剣奪取のため、この乱世は力ある者が立たねば終わらん、おれこそがその力ある者だ、と、あたかも天下万民のためを思っているがごとき名目をぶちあげて軍を動かした。その行いを自省し、明日はおろか今日を生きるのさえ不安に思う領民の立場になって考え、思う。領主の仕事は、なにがどう転んでも民の安寧を守ることだ。これを今のおれ……パッシェリカ陛下の側に立って暴王ラディンと戦う境遇にあてはめてみよ。おれがとるべき道はどのようなものだと思う？」

「パッシェリカ陛下は、散種の儀によりもうけられた前王アーウィンの娘御であらせられ、王宮の華美な暮らしなどまったく知らず、一庶民として育ったとか。すなわち、今、兄上^{おとう}が口にした父の言葉通り、庶民の立場でものを考え、感じることもできる方です。パッシェリカ陛下は心から天下万民を思い、人を人とも思わぬ暴王ラディンとはまさに対極にあって、正しく、大義の側に立っています。したがって、我々がパッシェリカ陛下とともに戦うのは、これすなわち王道。陛下とどこまでも行動をともにするのが、領主たる兄上^{おとう}のとるべき道かと」

「それでは考えが浅い」

おれが首を横に振って告げると、ロルカはこれ以上ないほど驚きをあらわにし、不安げにしっぽの先で床をばしばしたいた。その反応、わからんでもない。ロルカは頭がいいし、自分のことを、思慮の足らぬ兄を理性と知恵で補佐するのが己の役目、と心得て今日までやってきたのだろうからな。

「兄上、聞き捨てならないお言葉です」

「いいか、ロルカ」

おれはテーブルに肘をついてぐっと身を乗り出した。

「おれは、大堰城の一戦、勝ちたいと願っているし、シヴァの指揮の下であれば不利を覆して勝てるのではないかと期待している。勝てばよし、万事問題ない。しかし、だ。負けた時のことも考えておかねばならん。シヴァは今日まで英雄的な活躍をしてきたが、古今、英雄と呼ばれながら戦場で剣に斃^{たお}れ、あえなく逸話のみを遺すこととなった者は少なく

い」

「——」

「もし、大堰城での戦いに我々が敗北、それも再起不能となるほどの惨憺^{さんたん}たる敗北を喫する結果となってパッシェリカ陛下の同盟軍構想が瓦解したならば、もはやラクウェルには、暴王と正面切って戦おうとする勢力はあらわれまい。すなわち、ラディンが大陸のすべてを制する暗黒の時代が到来する……。そうなった時、ラディンは刃向かった者たちを許すまい。厳しい処罰が下るであろう。東リザード自治領はラディンの配下^{ちよつかつ}が直轄^しすることとなり、リザードマンはみな反逆種族^{らくいん}の烙印を押されて奴隷的な労働を強いられたり、土地を奪われて帰るところなき流浪の民となったり、苦難を甘受せねばなくなるやもしれん」

「想像したくありませんね」

「おれだってそんな想像はしたくないが、そういう最悪の事態に備えておくのが領主の務めであり仕事なのだ。いいか、ロルカ。今回の戦、お前を、近衛兵のダダルムほか、おれがこれと思う者たちとともに残してゆく。パッシェリカ陛下に対しては、ミレディア神国のハイエルフどもはどうしても信用ならんので、最小限の防衛戦力は必要だ、としておく。そして——もし、おれたちが武運つたなく敗北し、大陸は暴王のものになったと風が伝えたなら、ただちにラディンに使者を送れ」

「使者を……」

「そうだ。そして、こう伝えろ。これまで領主であったバルゴは生来粗暴で直情的な愚か者で、時勢が読めずパッシェリカなる逆賊の口車に乗せられて加担したが、妹である自分や重臣たちはずっとそれに反対してきた。兄とは仲違い^{たが}同然の状態で、現に大堰城での戦いにも参加しなかった。今後はラディン陛下に臣従し、絶対の忠誠を誓う、とな」

「馬鹿な！ そんなことをするなんて！ 兄上はもとより、大堰城で戦った者たちの名誉はどうなるのです！」

「死んだ者の名誉のために、まだ生きている者たちが苦しんでなるものか。ラディンが大陸を制したなら、犬のように尻尾を振り、媚びへつらい、お追従^{ついしよう}を並べて生きろ。やつの恐るべき力が我が領民の上に降りかからぬよう、できうる限り、なだめて、すかして、民を守るのだ」

「そんな——」

「なに、たとえひと時、大陸全土を制したとて、ラディンのごとき暴虐の輩は長くは王でいられんはずだ。そもそもこの大乱は、ラディンの悪政^{いきどお}に憤^{ひるがえ}った各地の領主が次々に反旗を翻^{ひるがえ}したことで始まった。いずれ、それと同じ事になろう。ラディンの恐怖支配が続

くのは、長くともせいぜい十年……。必ずや、暴王を打倒しようとの機運が再び高まる日が訪れる。ロルカ。おれ亡き後は、その日まで^{かんなん}艱難辛苦を耐え抜いて、領民を守って欲しい。このような難しい仕事、よほどのしっかり者にでなければ頼めん。が、お前ならそれができる。きっとできると、この兄は信じている」

我ながら、まるで遺言を口にしているような気分だった。

ロルカは息をするのさえ止めて、おれをじっと見つめた。

「兄上。私は、兄上を見誤っていたようです。もっと底の浅い人だと思っていました」

「ふん、^{きぬ}齒に衣せずいいおる」

「そのように認識していた、私の方こそ浅はかでした。どうか、ご容赦を」

「後のこと、頼んでいいな」

「はい」

「よし。そう言ってくれば、^{こう こ}後顧の^{うれ}憂いなく戦いに臨める……。あのマウラーなる男に、挨拶を忘れるなよ」

「挨拶？」

「おい！　しっかりせんか。会議の席上での^{よど}淀みない弁舌で、やつが切れ者であることはお前もわかっただろう。当然、おれと同じくらいなことは考えているはずだ。腹を立てたおれを見て鼻で笑ったが、あれは『あまりにも芝居がかっていてついつい失笑してしまった』との意味だとおれは読んだ」

「えっ？　あっ！」

「マウラーの方でも、パッシェリカ陛下に^{くみ}与して戦い、武運つたなく敗北した時のことは考えているはず。だからこそ、リザードマンは信用ならんので、最低限の防衛戦力は残した上で軍を動かす、との形をとる……。ロルカ、兄の不法をとりなす挨拶と称し、やつと二人きりで話し合う機会を設け、口裏をあわせておけ。暴王が大陸を制したなら、ことさら、そう、今まで以上に、リザードマンとハイエルフは仲が悪いと見せかけた方が良い。互いにいがみあい、牽制し合っていて身動きがとれないとなれば、暴王にとっては都合がいい。現状のままの方が都合がいいとなれば、重税を課しこそすれ、領有権に関しては現状維持がよかろうとの判断に至るやもしれん」

「兄上。一本とられた、どころではありません。私は兄上を間近に見ていながら、兄上亡き後は自身が領民を守る、そういう覚悟が欠けていたようです」

ロルカは気まずげに頬を爪でひっかいた。

「立場だ。立場が人を作る。凡物であつたおれも、領主の立場になり、大きな責任を担ったことで、少しは成長した。パッシェリカ陛下やシヴァもまた、大きな責任を負うことで

日々成長しているはずだ」

おれは話を締めくくると、椅子から立ち上がって軽く腰をたたいた。

「それにしても、性に合わん。おれにとっては会議の席で腹の探りあいをして考えを巡らせるより、戦場で敵の頭をカチ割る方がよほど楽な仕事だ。少し休ませてもらうぞ」

「では、兄上——」

「マウラーによろしくな」

「はい」

退出する妹の背を見送り、おれは思った。

ロルカも、大きくなった。ほんの小さな子どもだったころのことが、昨日のことのよう
に思える。

（おれは、どうだろうか。父よ。兄よ。今のおれを見てどう思う？ 大きくなったと思う
か？）

答えなき問いを胸に、おれは長椅子で横になった。

TURN5

に一ちゃんが『将軍』。重すぎる肩書きだし、立場だよ。だから、あたしが少しでも軽くしてあげないと……ね。

——^{しばさき}柴崎 ^{さら}紗良

方針決定！ 大堰城攻略のため、離間工作を仕掛ける！

その後、会議では細々とした点についても忙しく話し合われた。アノンはこの地の領主だし、に一ちゃんは軍団を束ねる将軍で、あたしはに一ちゃんの右腕。それが不在になるんだから、何か口実を設ける必要がある。

そこで、アノンは風邪をこじらせて館で伏せっており、に一ちゃんとあたしはバルゴとあれこれ相談するため東リザード自治領へ赴いている、って噂を流すこととなった。

そのほかにも決めるべきことを決めて、会議は終了。あたしはに一ちゃんと自室へ引き上げた。

あたしとに一ちゃんがあてがわれている部屋は、二人で寝起きするには広すぎるくらい広い一室で、地位の差を明確にする必要があるからパッシェリカが使っている^{きひん}貴賓室に比べれば見劣りするものの、調度品類もかなりいいものが揃っている。

「ふー……」

部屋に戻ってくるなり、に一ちゃんは革張りの長椅子に身体を投げ出して、いやに長い時間息をついた。

「に一ちゃん、正念場だね」

あたしが告げると、に一ちゃんは「まあな」と気のない返事をした。

「ちゃんと、わかってる？」

「わかってるさ。戦争 SLG においては、内政を充実させて人口や経済力を増大させ、それを背景に強力な軍団を組織して戦い、領土を広げてゆく——これが無難かつ堅実な王道プレイだ。だけど、おれたちが置かれている状況はそれを許さない。今やラディンは大陸の半分近くを領有している。軍拡競争をしたところでこの差は絶対に覆せない。だからおれたちは、直接対決で大勝利をおさめるとともに、外交で味方を増やすほか道がない。そうした事情を踏まえると、大堰城は絶対に攻略しなければならない。やるしかないんだ」

「んー。まあ確かに」

「ただ、精神的な重圧がやばい……。おれの武器って、『ラクウェルクロニクル』で主人公専用設定していた強力な魔法があるのと、制作者だから仕様に関する詳細な知識があって、それがこの異世界ラクウェルにほぼそのままあてはまるって点だ」

「うん」

「サラも知っての通り、ドラゴンハーツは、おれの能力値を七倍、おれが指揮する直属部隊二十名のうち小隊長四名の能力値を四倍、一般兵の能力値を三倍にする、超強力なエンチャントだ。これがあるから、おれが率いる部隊は戦場で百人分にも匹敵する獅子奮迅の働きができる。でもそれって、自軍の兵力が百で敵の兵力が二百なら互角以上に戦えることを意味するけど、自軍の兵力が一万で敵の兵力が二万だと兵力差を覆すのは不可能って計算になる」

「あ、そっか。戦いに参加する人数が多くなればなるほど、ドラゴンハーツによる優位性は希釈されちゃうんだね」

「そう。『ラクウェルクロニクル』だと味方も敵も最大で十部隊までしか繰り出せない仕様だったけど、この異世界ラクウェルにおいては、そうじゃない……。さらに、だ。『ブリッツシュトラッセ』っていう西洋中世風世界観の攻城戦特化型戦争 SLG があったけど、城を攻め落とすって、ほんとたいへんなんだよ。攻撃側は守備側よりかなり兵力が多くないと無理なんだよ。にもかかわらず、大堰城に配置されている敵兵はなんと三万……。日本屈指の名城と謳われた^{おだわら}小田原城を^{とよとみひでよし}豊臣秀吉が落とした戦いだって、守備側の^{ほうじょう}北条氏があっただけの兵を動員したら、秀吉は彼らの想像を絶する数の兵を動員して城を囲みました、って話だし……」

「……………」

「あーあ。今までのおれは、自分がプレイヤー、自分が主人公、どんな厳しい状況でも自分の働きいかんでなんとかできる、って感覚があったんだけどなあ……」

「あのさ、に一ちゃん」

「うん？」

「ずいぶんと気落ちしているように見えるけど、その原因って、もっと別にあるんじゃないの？」

「ん……」

「確かに大堰城の戦いは、将軍職のに一ちゃんにとって正念場だけど。一人の男としてのに一ちゃんにも、正念場が訪れたよね」

「———」

「わかってるよね？ マウラーが口にした、パッシェリカの政略結婚。に一ちゃん、これ

にもきちんと対処しないと」

ずばり斬りこむと、に一ちゃんは椅子から身体を起こして頭をかいた。

「おれより歳下なのに、いやに鋭いところがあるのって、やっぱりサラも女だからか？」

「そうかも。女の子は、色恋沙汰^{さた}に敏感だから」

「はあ……」

「ため息ついてないで、迷っていることがあるなら、このよくできた妹に相談しなさあ〜い！ に一ちゃんとあたしはそういうことだって臆面もなく相談できる間柄でしょ？ ずっとずっと、ゲームの制作を通じて多くの時間を一緒に費やしてきた、そのへんにはちょっといいくらい仲のいい兄妹でしょ？」

「おれを心配してくれるのはありがたいけど、これ、そうとうにナイーブな問題だぞ」

「ふうん……。へえ……」

「なんだ、その『ふうん、へえ』って小馬鹿にした態度は」

「つまり、に一ちゃんはこれをナイーブな問題と認識してるってことだよな？」

「え？ そ、そりゃあ、そうだろ。ミレディアのハイエルフたちの力は、大堰城攻略はもとより、その後の同盟軍にも絶対に必要だ。少なくとも現時点では、連中の要求をはっきりと断るわけにはいかないだろ」

「なーんて、それっぽい理由を言っているけど、に一ちゃんはさー、じつのところ、パッシェリカがはっきりあの場で断っちゃうことを期待してたんでしょ」

「まあ……ちょっとは……」

「今日までパッシェリカを支え、パッシェリカの軍団を無視できない存在へ成長させたのは、このおれだ、そういう自負だってあるんでしょ」

「……それなりに……」

「ぶっちゃけた話、女王陛下と將軍閣下のラブロマンスを夢見てるんでしょ」

「うわ！ そういうこと面と向かって言うなよ！」

に一ちゃんは耳まで赤くなった。それを見て、あたしは眉をひそめた。

「あのさあ。に一ちゃんには、絆の鎖……チェーンを確認できるんだよね？ 誰が誰にどんな感情を抱いているかわかっちゃう、読心術じみた特殊能力があるんだよね？」

「ある」

「パッシェリカは、に一ちゃんのことどう思っているわけ？」

「それは今もって確認していない」

「はあ？ なんですよ！」

「なんでって、パッシェリカは他の女の子とは違う。本気で好きなんだ。神聖な存在なん

だよ。超能力じみた力で心を覗くなんて、その聖性に対する冒流行為だろ」

「……こりゃ重症だわ……」

あたしは呆れた。もっとも、に一ちゃんってとんでもなく一本気で純な性格だってことは、重々承知している。なんせ、中学生の時に将来はゲームクリエイターとなりゲームで食べてゆくんだと決意し、自分が思う最高の SLG を作るんだって志を立て、それを大真面目に実行しちゃうくらいだもん。イタリアのバイオリン職人って、中学生くらいの年齢から師匠のもとで技を磨くってなんかの番組で見たことがあるけど、日本の中高生にそういう生き方を選択する子はなかなかいないよねー。

「重症とかいうな。これは、そのへんの普通の恋愛とは違う」

に一ちゃんは、むっとした様子で抗弁した。

「どう違うわけ？ パッシェリカは、に一ちゃんが自作ゲームで自分の理想として登場させた凜々しい美少女だったわけでしょ。それがこの、自作ゲームそっくりの異世界へ転移したら、ほんとにいたわけでしょ。普通の男の子だったら、『むしゃぶりつきてえー！』くらいの勢いなんじゃないの？」

「そこがまさに問題だろ。いいか、おれたちは地球の日本から来ているんだぞ。対して、パッシェリカはラクウェルの人間なんだぞ。いつかこの異世界から日本へ帰れる日が来たら、どうするんだ？ 親しい間柄でなければどうとでもなるけれど、抜き差しならない深い関係になっていたら――」

「どうもこうも、その時はまたその時で考えればいいんじゃないのお？」

「おいおい！」

「じゃあ聞くけど、例えば今この瞬間、日本に帰れる方法が目の前にあったとして、に一ちゃんはラディンの脅威にさらされて風前の灯火のパッシェリカを見捨てて、すぐさま帰国するの？」

「馬鹿言え、そんなことできるもんか」

「ほら、即答した。つまり、それが正直な気持ちってことでしょ。今のに一ちゃんにとっては、パッシェリカと帰国を天秤にかけたら、パッシェリカの方がずっと重いってことだよ。それが真実。てことは、に一ちゃんが今言った、日本に帰る日が来たらどうたらっていうのは、自分を誤魔化すための方便ってことだよ」

「うっ……。よ、容赦なく斬りこんでくるな」

たじたじになっているに一ちゃんを眺めて、あたしの方が「ふーっ」とため息をついた。

「に一ちゃん。警告しておくけど、パッシェリカのこと本当に好きなら、ちゃんと自分の気持ちを伝えなくちゃだめだよ。そういうのは、女の方からじゃなく、男の方から切り出

すのがマナーなんだから。煮えきらない態度に見せかけていると、パッシェリカの方でも、脈はないなって判断しちゃうかもよ。そして、そんなパッシェリカの目の前に、政略結婚の話が……！ 仮にパッシェリカがあゝの政略結婚を蹴ったとしても、だよ。学校でもそうだけど、美人は引く手あまたで競争倍率が高いもんなの。パッシェリカは女王だから、みんな気軽にいいよりにくいだろうけど、それでも、放っておいたらどこからどんな^{とんぴ}鳶があらわれてさらっていつちゃうか、わかったもんじゃないよお〜」

「……肝に銘じておく……」

そこまで話したところで、ドアをノックする音があった。に一ちゃんは話を聞かれたんじゃないかと心配したのか、ぎょっとした顔つきになった。

「はいはい、どなたですかー」

あたしがドアを引き開けると、立っていたのはマウラーさんだった。

「失礼。シヴァ将軍、今、よろしいですか」

よろしいですか、なんてたずねながら、こっちがいいとも悪いとも言わないうちに、さっさか部屋に踏みこんできた。パッシェリカにすごい要求を突きつけた件といい、この人って知的な面立ちや丁寧な言葉づかいとは裏腹に、かなり強引なところがある。

「ああ、時間はある。なんだい？」

に一ちゃんは椅子から立ち上がった。

「アレリア卿が、なんといいですか、はりきってしまって……。もう出立の準備を整え、厩^{うまや}に向かいました。動くなら動くで早いほうがいいのはわかるんですが、ね。同行する私も、あわてて身支度を整えましたよ」

苦笑したマウラーさんは目立たない地味な旅装に着替え、焦げ茶色のマントをまとっていた。

そう、マウラーさんもあたしたちに同行するの。といっても彼が足を運ぶのは、ジェド騎士団領まで。ついでと言ってはなんだけど、そこまで同行して、アデラス家とロムロス家の調停にあたっているデラウス伯って人と今後についてあれこれ協議するんだって。

「わかった、おれとサラもすぐ身支度を整えよう」

「そうしてください。ところで、将軍」

「なんだい」

「古今、英雄色を好むはヒュームもハイエルフもそれ以外の種族も変わらないようですが、妹君のほかは女つけがない部屋ですね」

「色恋沙汰にかまけていられるほど暇じゃないから」

「確かに、私の手の者が報告してきたことを信じるなら、将軍はずっとお忙しい日々だっ

たようですね」

「……エルフの長い耳は、遠くの音もよく聞こえます、か？」

「なにぶんこういう世の中ですので、ご容赦を。で、まあ、あるいはお耳汚しかもしれませんが、聞いてください。将軍はイスカリエン王朝の開祖たるジェドと同じドラゴンハーツの使い手……。そのような人物がこの戦乱の世に出現したこと、私としてもたいへん驚いております。しかも、どう探っても、どこから来たのか出自がつかめない。噂によればアレリア領の古い砦にある、古い石棺からあらわれたとか」

「だったら、どうなんだ？」

「なに、それが将軍の神秘性を高めるための嘘であれ、本当のことであれ、私は詮索^{せんさく}いたしません。どのような出自であろうが、将軍のような有能かつ希有な英雄は、ラディンを駆逐した後の政治において、必ずや重職を占めることとなるでしょう。我々は、そういう人物とは、やはり婚姻関係を結んでおきたい。これぞという美姫を幾人か考えております。この件、胸にとどめておいてください」

「……………」

に一ちゃんの沈黙をどう受け取ったか知らないけど、マウラーさんは会釈をして立ち去った。

あたしは心の中で十数えてから、そっとドアの隙間から首を出して彼がじゅうぶん離れたのを確認すると、ドアを閉ざしてに一ちゃんを振り返り、「あれがハイエルフに共通する性格なら、バルゴが気に入らないって態度をとるの、わかるかも」と言った。

「ハイエルフがどうこう以前に、やつはおれのことを嫌っている」

すると、に一ちゃんはこともなげに断言した。

「え。そうなの？」

「会議での席上、チェインを確認してみたよ。マウラーはおれに良い印象を持っていない。嫌っている」

「へー。初対面なのに、いきなり嫌いって、どういうことだろうね」

「あくまで推測だけど、パッシェリカと大神官の息子を結婚させたいなんて言い出したあたりを鑑^{かん}みると、やつはあまりにも気が早い。先の先まで考えをめぐらせすぎている。で、先の先まで考えた場合、やつにとっておれは邪魔者だ。平和を取りもどした後の権力闘争においてな」

「うっわ。策士タイプだ感じていたけど、それが当たっているなら、かなり黒いなあ。そうになると、に一ちゃん、背中にも気をつけないと。もちろん、あたしも」

「うん。味方に後ろから刺されて、戦場でよくある事故死に見せかけられて一巻の終わり

なんて嫌すぎる」

「だよなー」

「もっとも、大陸が平和になった後で、おれにパッシェリカを支える重鎮の役割が務まるかは疑問だ。本多忠勝ほん だ ただかつの例もあるからなあ」

「誰それ？」

「徳川家康配下の四天王の一人だ。一家の重鎮にして家老の酒井忠次さ かいただつぐ、武闘派の榊原康政さかさばらやすまさ、文武両道の井伊直政い い なおまさ、そして——『家康に過ぎたるものが二つあり。唐の頭かしらと本多平八へいはち』とまで謳われた猛将、本多忠勝。あ、ちなみに彼の元服前の名は平八郎で、親しい間柄では、平八とか平八郎とか呼ばれていたらしい。それはそうと、本多忠勝は徳川家臣団で武闘派の筆頭として名を馳せ戦場で大活躍した人だけど、徳川家の天下が確定してからは、さほど厚遇されなかったんだよ。なぜかというところ……」

「あー、なるほど。戦争が終わっちゃったら、戦争が得意な人は無駄飯食らいだもんね」

「そういうこと。おれの能力ってこういう戦乱の時代なら役立つけど、大陸が平和になったら……なあ」

「だけどジェド王って人は、にーちゃんと同じ力を持っていたんでしょ？ で、大陸を平定した後で、一千年もの長きにわたる王朝の祖となったんでしょ？ てことは、ジェド王には安定政権を築くだけの手腕もあったってことだよな」

「そうだな」

「『戦乱の大陸を平定した英雄』って肩書きと、それにともなう大きな人気があれば、たとえ本人の治世能力が微妙でも、自然といい人材が集まってきて、いくらでもサポートしてくれるんじゃないの？」

「うん、ありえない話じゃないな。アメリカの歴代大統領のうち、今も人気の高いロナルド・レーガンって人がいるけど、彼は元々は政治家じゃなく俳優だった。大統領になる前に知事を経験してはいるものの、良いブレーンに恵まれたんだと思う。その……」

にーちゃんは小首をかしげた。

「あのマウラーってやつ、一国のほぼ全権を任されてあれだけ好き放題にしゃべりまくるんだから、ミレディア神国においては絶大な権力を持っているんだと思う。だけど名目のトップはマウラーではなく大神官らしい。ナンバーツールの立場に身を置き、宰相として政権を盛り立てるのが向いているのかもな。今のところ、おれは軍事と内政の両面でパッシェリカをサポートしている形で、パッシェリカの麾下でそういう宰相的な役割が務まりそうなのは、おれ以外ではアノンくらいのもんだ。マウラーみたいなやつが、身の程をわきまえ、ある程度の地位で満足してパッシェリカを支えてくれると、すごく助かる……」

「に一ちゃんも、そーと一先のことまで考えているんだね」

「いや、おれの場合は考えているというより、心配なんだよ、パッシェリカのこと。権力を持つ者には悪い奴らが集まってくる。パッシェリカは聡明だし善良だとおれは確信しているけれど、彼女の足をひっぱって醜い権力闘争を繰り広げようとする連中をさばき殺せるのか……？」

に一ちゃんは真剣な表情だった。あたしにはチェインを……感情を確認する特殊能力は備わっていないけれど、その表情を見れば、に一ちゃんがパッシェリカをどれほど気にかけているのかはよくわかった。

「そこまで真剣なら、なるようになるのかな」

あたしは小声でひとりごちた。に一ちゃんって、女の子の心の機微にうとい朴念仁タイプだと思っていたけれど、本物の恋なら、あたしがあれこれ知った風な口をきくのは、かえって余計なお世話なのかも。

ま、そんな風に、に一ちゃんのこと心配しすぎてしまうのは、それだけあたしが、兄思いのできた妹ってことなんですけどねっ！

TURN6

闘争。本来の私には、あまりにも縁遠い概念だ。

——アノン・アレリア

旅というものに憧れがある。

子どものころ、母とともに東リザード自治領へ赴いて、両家の親睦会的な集いに参加したことがある。しかしそれは多くの家臣に伴われ、立派な馬車に揺られての道行きであり、庶民的な普通の旅とはかけ離れたものだった。もっとも、そのような旅でさえ、とてつもない大冒険に臨んでいるかのごとくわくわくしたのを今でもよく覚えている。

成長するに従って私は乗馬の才を伸ばし、愛馬メディと巡りあったことも手伝って、次第に本物の旅への憧れを募らせていった。

アレリア自治領は、領内の村長や町長といった有力者に顔をつなぐため馬で巡ってみると、案外広く感じられる。しかし、ラクウェル全図で眺めてみると、辺境にあるこの土地の、なんと狭苦しいことか！ 逆に、大陸のなんと広大なことか！

館を訪れる旅商人から遠い異国の四方山話を聞き、心に翼が生えてしまったことが何度もある。見知らぬ文化や風俗を（こんな風だろうか）とベッドで夢想し、眠れなくなってしまったいくつもの夜——。

いつか、愛馬とともに諸国を巡ってみたいと、ひそかに思っていた。

だが、両親が思いのほか早く他界して領主となってからは、戦乱の世に突入したこともあり、気楽な旅など夢のまた夢となってしまった。

それが、今になって、思いもかけず旅をする機会に恵まれた。

もちろん、これは大陸の命運を決しかねない重要な任務なのだと頭ではわかっている。

それでも、旅は旅だ。

しかも、私がひそかに思いを寄せている男性と一緒に、少人数の旅……。

こんなことではいけないと思いつつも、私はわくわくしていた。

* * *

領民には、私は病で伏せっている、との噂を流して不在を隠す。

私たちはみな目立たないよう地味な服装に身を包み、夕闇を待って、見送る者もないまま一人また一人と館を抜け出した。

イオディアの町を出たところで、あらかじめ決めておいた路傍^{ろぼう}の大楠のもとへ集合する。一行は、私、シヴァ、サラ、グレイン、マウラー、それに三名の手練^{てだ}れの兵、あわせて八名だ。

グレインは諸国に諜者のケットシーを放ってこれを統括してきたため、大陸各地の世情に明るい。そこで、グレインは旅の商人でこの一行の頭、私、シヴァ、サラはそれに仕える商人見習い、マウラーは旅籠^{はたご}で意気投合して同行している吟遊詩人、三名の兵は傭兵稼業の用心棒……との触れこみで旅をすることとなった。

なお、シヴァとサラは変装のためかつらをかぶって銀髪に見せかけての旅路だ。なにしろ、二人は髪と瞳の色がカラスの羽根のように黒い。ラクウェルにヒュームは数多いが、こんな髪の色^ののヒュームはついぞ見ないので、そのまま歩けば人目を引いてしまうのだ。

全員が馬に乗り、これに加えて幌つきの荷馬車が二台。背負子^{しょいこ}を担いだ身ひとつの物売りよりずっと富裕な、ひとかどの商人といった風情だ。なお、馬車には食糧や水を積んでいるのはもちろんのこととして、荷台が二重底になっており、離間工作の際に使う金品——地下迷宮に潜った際に得たミスリルなど——も積んでいる。

「旅……。いつの日か、愛馬とともに諸国を巡ってみたいと夢想していた。思いもかけず、願いがかなった」

夜の帳^{とばり}が下りても、月の明るさが手伝ってか、心は軽い。私はついつい、誰にともなく本音を吐露^{とろ}してしまった。

「おや。アレリア卿にそのような夢があったとは。意外です」

するとマウラーが微苦笑を浮かべた。乱世の領主ともあろう者が……と小馬鹿にしている思いを隠そうとして隠しきれていない、そんな笑いだった。

「べつにいいじゃないか。誰だって夢はあるし、人は自分が求めて得られないものだと、よけいに欲しくなってしまう」

すると、シヴァが私の体面を守る言葉を口にしてくれた。マウラーは「まったくです」と如才なく応じて口を閉ざした。

私は、そっとシヴァを見やった。

将軍としてこの任務の重さを感じているのか、彼の顔は引き締まっている。

(敵将ガラックに仕掛ける離間工作、なんとか私が成功させて、彼の心を軽くしてあげたいものだ)

恋をしているがゆえの欲目もあるのかもしれないが、これほど素敵な男性はいないと思う。我が一族が一千年も守ってきた開かずの石棺からあらわれ、ジェド王と同じくドラゴンハーツの力を持ち、圧倒的不利を承知で私たちの側に立って戦ってくれた英雄。ほんと

うに、御伽^{おとぎ}噺^{ばなし}の中から現れた勇者そのものであり、また、今的一幕でもわかるように、心根の優しい人だ。

(だが、私は幸か不幸か、後先考えずに自分の思いを彼にぶつけられるほど愚かではない。領主としての立場、またシヴァの将軍としての立場、そのあたりを考えてしまう。それに、今は大陸が恐るべき暴王のものになるかならないかの瀬戸際だ)

……とは思うものの、ほんとうの思いを素直に彼にぶつけることができたなら、と陰で嘆息する日々が続いている。

(ミモリーの、周囲の視線など気にせず男性に思いをぶつけられる性格がうらやましい。もっとも最近ミモリーも、シヴァの忙しさを知ってか、以前ほど「将軍、将軍」とまとわりついてはいないようだ)

私はふと、セフィラの少女を思い浮かべた。

そのミモリー率いるセフィラ隊、それにシャノーラやウィードといった精鋭を加えた一行が、私たちの後から出立する予定だ。彼らは雇い主を探す傭兵集団と見せかけつつ、私たちの後をそれとなく追尾する。最終的には敵地の一步手前、ジェド騎士団領の南の国境ないしその付近で待機し、私たちが窮地に陥ったと報せる狼煙^{のろし}をあげたなら、援軍として駆けつける手筈だ。

(……………)

私は腰にさげた水筒から、ジャードをひと口飲んだ。ショウガとハチミツをふんだんに使った、アレリア領で古くから愛飲されている飲み物。子どものころから慣れ親しんだ味が口に広がると、不思議と心が落ち着く。

(父よ。母よ。私の行く手に、ご加護を)

私は心で祈りを捧げ、月に白く照らされた街道を、その街道が溶けるようにして消えてゆく彼方を、静かに見つめた。

* *

まずは西へ街道をたどり、隣り合う東リザード自治領へと入る。

この地のリザードマンと、ミレディア神国のハイエルフは、すこぶる仲が悪い。それも、この戦乱が始まるよりずっと前、それこそジェド王以前の果てなき戦乱の時代からその確執は続いていると聞く。

バルゴから部下たちへ『わけありの一行だ、絶対に嫌がらせなどはするな』と命令が下っている。とはいえ、聞き分けのない部下はいるものだ。そして私たちは、みだりに騒ぎを起こすことなく、静かに、目立たず、目的地を目指したい。

そんなわけで、東リザード自治領を通過する間、マウラーには馬車の中に入っている

らうことにした。道中、私たちが旅籠^{はたご}に泊まっている夜も、彼のみは馬車の中で孤独にすごす形なのでいささかもうしわけなかったが、任務の重要性を鑑^{かんが}みればやむを得ない。幸い、マウラーもそのあたりはわかりすぎるほどわかっているようで、これに関する愚痴はいっさいこぼさなかった。

東リザード自治領に入ってから、ジェド騎士団領を目指し、街道を南西へとたどる。幸い、懸念された事態が発生することはなく、道行きは順調だった。

三日の行程の後、水の匂いが風に乗って流れてきた。じきに、光を反射^{さんぜん}して燦然ときらめく川が私たちの前に姿をあらわした。

あちこちに栈橋が設けられて、中小の船が忙しく荷物を積んだり下ろしたりしている。そのように盛っているため、倉庫や旅籠や雑貨店などがこれでもかと軒^{のき}を連ねて、並の町など及びもつかないほどの活況を呈している。また川の周囲には、地を埋めつくさんばかりの田畑が広がり、よく育った種々の作物がそよいでいた。

このあたりでは、ジェド騎士団領から来ているのであろうヒュームや、ミレディア神国から来ているのであろうハイエルフの姿も、数こそ少ないが見受けられた。政冷経熱、すなわち政治的には問題を抱える国家・種族であっても、共存共栄を求め利害が一致する商人らは、このように交流が活発なのだ。

「大きい……。これが、大陸を北へと貫いて海へ注ぐセド川なの？」

サラがグレインにたずねた。

「いや。これはセド川の支流にあたるナッダス川だ」

「え！ 支流？ じゃあ、セド川はもっと大きいってことだね」

「そうだ。ナッダス川のこの様を見てもわかるように、川は交通の要であるとともに、田畑を潤す重要な水源……。大河ともなれば、その恵みも大きい。だが暴王は、己の野望のため、その恵みを奪おうとしている。絶対に許せん」

「むー……。ねえ、あたし、この風景をささっと写生したいんだけど、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ止まってもらってもいい？」

サラは上目づかいにおうかがいを立てた。彼女は絵が得意で、似顔絵をかくことで兵たちの人気を博している。

「悪いが、だめだ。他国でみだりに写生をすれば、地理を把握しにきた諜者と誤解されかねない」

グレインはサラではなく、シヴァを見て言った。

「そういうことなら、しかたないな。サラ、我慢してくれ」

とシヴァが諭す。

「残念……。戦乱の世って、絵ひとつ自由には描けないんだね」

サラの嘆息を受けて、私はうなずいた。

「そうだな。絵もそうだし、旅もそうだ。旅だって、自由気ままにはできない」

こうしてナッダス川沿いに進んだ末、街道はふいと川をそれて細い溪谷へと入り、そのどんづまりが関所だった。

ここを越えればジェド騎士団領だ。

「あっ」

私は目をみはった。関所を守るにしては多すぎるリザードマンの兵団が待機していた。彼らの中に、ロルカの姿がある。またロルカのかたわらには、バルゴ麾下最精鋭の近衛隊の隊長、ダダルムが立っていた。

「ロルカ、先行してここへ来ていてくれたのか」

私は下馬してロルカに歩み寄った。

「ああ。この先は私や兄上の手が及ばない。アレリア卿、くれぐれも気をつけてくれ」

「無論のこと」

「兄上から万が一の事態に備えるよう、命を受けている。なにしろジェド騎士団が信用できるのか否か、そのへんもまだあやふやだ。急報が届いたなら、ここにいるダダルムが兵を率いて、いさいかまわずジェド騎士団領へ入り、みなを救うべく尽力する。ただ、兄上としても、みだりにアデラス家やロムロス家を刺激する事態は避けねばならないから、その際にダダルムとともに動くのはここにいる二百名のみ。これぞという精鋭を揃えてはいるが、他領で大暴れとはいかない兵力だ。その意味でも……くれぐれも気をつけてくれ」

兵たちはある程度の事情は知らされていると見えて、『アレリア卿』と聞いても、またその後ろにロルカが発した困難な任務について聞いても、動揺した様子ではなかった。

「背中を守ってくれる誰かがいるのはありがたい。バルゴに、よろしく伝えてくれ」

シヴァが礼を述べる。ロルカはうなずいて手を振った。

木製だが馬鹿でかい、^{かんぬき} 門 付きの門が開かれる。

私は愛馬メディのたてがみをひと撫でし、緊張とともに関所を越えた。

関所が遠のき、名残り惜しげに眺めていたロルカが門を閉じさせると、すぐにマウラーが馬車から出てきて馬に乗った。

「やれやれ。ようやく狭苦しい空間から解放されましたが、帰路も同じことになると思うといささか憂鬱^{ゆううつ}です。ああ、この先のジェド騎士団領ですが、私の手の者が万事手配りをしておりますので、道中の諸々に関してはいっさいご心配なく」

彼は早速とばかりに口を開いてぺらぺらとしゃべった。

「ご心配なく？ 正式に同盟を結んでいるわけでもないよその領地なのに、たいした自信だな」

グレインがやや皮肉っぽい口調で懸念を示すと、マウラーは「私は、有能な人材だと自負しておりますよ。部下たちも、それ相応の駒を揃えております」とうそぶいた。

（たいした自信家だ。もっとも、このような重大な任務であれば、彼のような男の言葉は頼もしくて勇気づけられるのもまた事実だが）

私は内心で苦笑した。本当のところ、私は戦乱の世で領主を務めるなど不向きな臆病な女だ。マウラーのような性格はうらやましい。

「さて、みなさま。ここから半日ほどで、セド川沿いの街道へ出ます。そこに今夜の宿をとりました。あれこれご用意いたしましたので、ゆるりとおくつろぎください」

さらに、マウラーはそんなことを言った。

「あれこれ？ おいしい名産物とか、そういうの？」

サラが目を輝かせた。

「そんなところですよ。期待しててください」

夕闇迫るころ、その宿についた。

「お待ちしております。グレイド様御一行でいらっしゃいますね？」

街道筋の他の宿を圧する、かなり大きくて見るからに豪勢な宿。しかも主人や料理人がわざわざ路上に出て、丁寧な態度で私たちを出迎えた。なお、『グレイド』は、今回の旅におけるグレインの偽名だ。

「お食事のほか、湯浴みの用意など、万事整っております。どうぞ、旅疲れを癒やしてくださいませ」

案内された部屋は広く、ベッドもふかふかだった。これまで私たちは安宿の大部屋で他の宿泊客と雑魚寝してきたのだが、この宿では私たち専用の部屋だった。

「正気か？ こんな宿を使えば目立つだろう！」

グレインは入室するなり、舌打ちまじりにマウラーを振り返った。

「聞き捨てなりませんね。私たちは馬車を引いて傭兵まで雇っている、裕福な商人一行なんです。それなりの宿をとらなければ、むしろ不自然というものです。実際、治安が悪化している乱世ですから、富裕な商人は安宿を嫌います。安宿は経費削減のため傭兵や用心棒を雇いませんから、馬泥棒や積荷泥棒の心配をせねばなりません」

「まあまあ、どのみちもうとっちゃった宿なんだからいいんじゃないの？ 今晚はゆっくり眠れそう！」

サラがにこにこ顔で二人をなだめた。

グレインの言うこともわからないではないが……恵まれた暮らしをしてきた私にとっては、正直なところ、ここ数日の安宿の夜は辛かった。私はすぐにサラと子ども風呂を使わせてもらい、旅の垢を落としてほっとした。

その後、夕食となったが、これがまた豪勢だった。

「おお～。これ、おいしいな。すごくおいしい！」

シヴァが、湯気の立ちのぼる料理を頬張りながら上機嫌の顔で賛辞を述べた。

「ジェド騎士団領の伝統料理にして名物料理、サッチェンです。内臓をとりだした鶏に豆や穀類をぎっしりと詰めて、松の葉で薫りづけしながら焼いたものですよ」

マウラーはまるで自分が料理したかのように自慢げにこたえた。

サラや私も舌鼓を打って自然と顔がほころんだが、ひとり、グレインのみはむすっとしていた。パッシェリカ麾下で古株の自分より大きな顔をするハイエルフが気に入らないのか。それとも、気に入らないのではなく、なにか危険なものを感じとっているのか。感情的になることがあまりないグレインにしては珍しいことだった。

こうして鋭気を養って出立、私たちは旅を続けた。

だが……。

「ジェド騎士団領はかなり荒れているな。アノンやバルゴの領地とはまったく違う」

街道の家々、途中の村々などを眺め、シヴァはぼつとつぶやいた。

焼け焦げた基礎の上に、ごく最近建て直されたと見える白木の家。手ひどく破壊されたまま放置されている井戸の残骸。雑草が伸び放題になっていてわかりにくいのが、錆びた鍬や鋤が転がっていることから、かつては畑だったのだろうと思える土地。そうした荒廃が、この地にはたくさん見受けられる。

「アデラス家とロムロス家によるいさかいの結果だ。互いの兵が傷つけあうだけでなく、相手陣営に与している村や町を破壊して、軍事力の背景となる経済力を損なおうとする。結果、戦乱で苦しむのは庶民だ。そのことを、庶民として暮らしていたパッシェリカ陛下はよくわかっている。あの方は真の優しさを持つ女王となるはずだ」

グレインはそう言って、シヴァにではなく、マウラーに視線を注いだ。

「ふふん。だから、高い宿をとり、贅沢で無駄金を使うような、庶民的でない行為は許せない、ですか？ 馬鹿馬鹿しい。金は使うべきところでは使わなければ意味がありませんよ」

マウラーは挑戦的な目つきでやり返した。

「お前はそうやってひとことで切り捨てるが、庶民は上に立つ者をきちんと見ているものだ。彼らは愚かではない。彼らの視線をかえりみない、人を人とも思わぬ最悪の王、それ

が暴王ラディンだ。やつと戦うおれたちは、やつの対極にあらねばならない」

「ま、あなたがそう思うのはあなたの自由ですよ、ええ」

マウラーはからかい口調で言ったあげく、大仰に肩をすぼめる仕草までつけ加えた。

この一連のやりとりを見て、シヴァが私に意味ありげな視線を送ってきた。（このマウラーってやつ、だんだん地が出てきたな）とでも言いたそうだ。私はそう受け止めて、軽うなずいてみせた。

マウラーはそんな私たちの反応に気づいていないのか、小馬鹿にした笑みを浮かべてグレインを見ている……。

ともに手を取りあい、怪物と戦おうとする『仲間』がこの有様では、前途が明るいとは言いがたい。

（だが、人は三人集まれば派閥ができる。群を作らなければ生きてはゆけない弱い生き物でありながら、その癖、仲違いが大好きだ。そういうまとまりにくい生き物を束ねない限り、強大なラディンには対抗できない）

パッシェリカの……妹の、多くの群雄を束ねんとする構想はとても難しいものなのだ。

* *

ジェド騎士団領はアデラスとロムロスのいさかい激しい地であるから、兵士が闊歩して睨みをきかせ、臨検やら関所やら、ひどく煩^{わずら}わしいことになるだろう……と私は予想していたのだが、意外なことに、私たちの道行きは落ち着いたものだった。

マウラーいわく、

「私が配下の者に指示し、露払いしておりますので、どうかご心配なきよう。ただ、大堰城建造とそれを背景にしたラディンの脅迫により、アデラス家とロムロス家がひとまず矛をおさめて停戦合意に至ってからは、上の者から下の者にいたるまで、明らかに空気が変わっております。以前は旅商人の積荷の取り調べはもちろん、ちょっと怪しいとみればたちまち詰め所へ連行なんて事態が珍しくありませんでした。が、両家融和以降は、南、つまり王都方面の関所こそ取り調べが厳しくなったものの、それ以外はだいぶゆるくなっています。ま、嵐の前の静けさともとれますがね」

……だそうな。

こうして、ジェド騎士団領を三日かけて南下した末、私たちはラゴス砦に到着した。

丘の上に立つ小さな古い砦で、空を背負って孤独に建つ様にはなんともいえない風情があり、サラは写生したように目を細めていた。マウラーによると、アデラス家とロムロス家は争いあっていたころも、この砦及びその周辺のみは中立地帯と定め、会合の場として利用していたのだという。

今、そのラゴス砦には、ロムロスの青地に白剣、アデラスの白地に赤薔薇の旗が、仲良く翻っていた。

「皆様、お待ちしております。どうかそのまま、馬上にてお聞きください。パッシェリカ陛下の信頼篤き方々をお迎えするにあたり、本来は領内に入った段階で出迎えの者を遣わさねば非礼にあたること重々承知。しかれども、貴殿らの任務の特殊性ゆえ、目立つ騒ぎは避けたいと思い、あえて控えました。ご容赦を。おっと、名乗りが遅れました。これなるはレオ・デラウス、どこにでもいるような武辺者にすぎませんが、この名、ご記憶いただければ幸いです」

砦の入り口で私たちに口上を述べたのは、鉄の甲冑に身を固めた三十がらみの大男だった。

「彼が、デラウス伯爵です。本来、ジェド騎士団領はジェド王に仕えた四騎士による共同統治でしたが、デラウス家とクレイダス家は血筋がほぼ途絶えて没落したため、アデラス家とロムロス家の二家による統治となりました。が、デラウス家は細々とながら命脈を保ってきたのです。彼は両家の和睦に尽力しまして……この地の英雄ですよ」

マウラーが説明をつけ加えた。

「アデラスやロムロスみたいな大勢力に属していないのに、そんな大役をこなしたのか。そうとうに人望があるんだなあ。土佐藩の脱藩浪人にすぎなかったのに、薩長同盟締結に奔走した、坂本^{さかもとりょうま}龍馬みたいな人ってことかな」

感心したようにシヴァがつぶやいた。

砦に入ると、早速、私たちは広間へ案内された。

大きなテーブルがいくつも用意され、^{こわもて}強面がずらりと勢揃い。刀傷が見受けられる者も少なくない。アデラス、ロムロス、両家の重鎮たちだ。

彼らは私たちが入室するなり、ザッ！ と音を立てていっせいに立ち上がり、拳で胸を二度たたいた。イスカリエンの王に対し、勇気と忠誠のふたつを示す騎士の礼法だ。

（これは……！ まるで、パッシェリカ・イスカリエンその人に対してするような最上級の礼だ。アデラス家とロムロス家は、まだまだ日和見であてにならないと思っていたが、すでにラディンと戦うパッシェリカ陣営への参加に傾いている？ いや、もうその方向で意思の統一がなされている？ だとすれば、これは嬉しい誤算だ！）

思わずこちらも背筋が伸びた。

「遠路はるばる、大陸の未来のため危険を冒して参られた勇気、軍神ガイダルもご照覧あれ。アデラス家を預かる当主、ユライアでございます。お見知りおきを」

「パッシェリカ陛下の苦境を救い、今日まで支えてきたアレリア卿のご活躍、この老体、

遠きにありても耳にしておりますぞ。ロムロス家を預かる当主、ザドルーでございます。
お見知りおきを」

挨拶をした二人の当主は、いずれも^{しら}白髪の老人だった。

「アノン・アレリアです。このような若輩者に過分の礼を尽くしていただき、恐縮するばかりです」

私は名乗って会釈した。

なお、大堰城の様子を探り離間工作を仕掛けるこの一行に、シヴァやサラが入っている件は、彼らには伏せている。アデラス、ロムロスが信用できる相手なのかまだわからない状態なので、そうせざるを得ないのだ。だから、彼らにとってこの一行の代表者は私であり、マウラーがそれに次ぐ重要人物となっている。

「さて、皆様」

挨拶がすんで私たちが席につくと、すぐにデラウス伯が口を開いた。三十がらみ、すなわちアデラスとロムロスの当主からすれば小僧っ子にすぎない年齢だが、彼が場をまとめている空気がある。

「風雲急を告げる情勢ですので、簡潔に述べます。アデラス、ロムロス、両家はともに手を取り、パッシェリカ陛下の旗の下に集い、暴王打倒のため力を尽くす所存です。無論、両家には長い確執がありました。恨みつらみを捨てきれず、この場には出席していない者がまだまた大勢いるのも事実です。しかし、暴王を^{ようちよう}膺懲すべくパッシェリカ陛下が軍を動かしたなら、ジェド騎士団領の通過を保証するのはもちろん、兵馬を養うための糧食なども可能な限りご用意いたします。そして、具体的な数字についてこの場ではまだ明言できませんが、両家とも、可能な限りの兵を出すここに誓約いたします」

彼が言い終えると、ユライアとザドルーが拳で胸を二度たたいた。するとこの場にいたみながそれに倣った。

じつに嬉しい言葉であり、心意気だが、しかし……私も若輩者ながら、領主をしてきた人間だ。こうした言葉を額面通りに受けとってしまうのは危険だと知っている。

「たいへん心強く、また勇気づけられました。皆様に軍神の加護あれかし。ですが、何事も裏の裏まで疑ってみななければならないのが、この戦乱の世です。なにゆえ、その方針に至ったのかをお聞かせ願えますか」

私は内心の興奮を悟られないように、努めて穏やかな口調でたずねた。

「ごもっとも。ひとことで言うなら、窮鼠が猫を噛むのに似た心境、でしょうか」

「窮鼠はジェド騎士団領、猫は暴王との認識で良いですか？」

「はい」

デラウスはちらりと、ザドルー、ユライアを振り返った。

「ラディンがハイデンの連合軍を撃破し、南部をひと呑みにした報は、我々にとって寝耳に水の驚きでした。それから間を置くことなく、彼は北部全域を屈服させるべく、恐るべき計画を実行に移した。このあたりは、皆様もすでにご承知ですね？」

「ええ」

「我々は皆様よりも南部に近い。それだけに、現在ラディンが自ら指揮している南部の占領政策が、はっきりと耳に届くのです。我々が放っている諜者はもちろん、南部から脱出してこの地へ流入してくる難民たちが、ラディンの恐るべき行状の数々を報せてきています。逆らう者、またその家族はことごとく処刑。兵馬を養うため、民が飢えるのも構わず、種^{たね}も糶^{もみ}に至るまで穀物を奪ってかえりみない。そうやって民を追い詰めておきながら、兵には金も食糧も潤沢に与えるため、民は自らを、また家族を養うため、ラディンを憎悪しながらも彼の軍団に兵として加わらざるをえない。暴王？ そんな呼称は生ぬるい。あれは化け物です。人の姿をした怪物です」

「——」

「その怪物が南部を完全に制圧したなら、矛先はどこへ向くか。彼は大陸全域を支配するまで、血塗られた剣を振るい続けることでしょう。我々は、選ばなければならない。ラディンを王と認めて屈するか。もしくは、彼を王と認めず戦うか。激論が交わされましたが、最終的には、戦うべしとの意見でまとまりました。ラディンには正義や大義がひとかけらもない。イスカリエンの開祖たるジェド王が、永き平和をもたらさんと志を掲げて大陸全土を制圧したのとはまったく違う。今さらこのようなことを申し上げるのはお恥ずかしい限りですが、大陸全体から見ればちっぽけなこのジェド騎士団領にて、ジェド王より領内の安寧を任された四騎士の末裔^{まつえい}たる者が争いあったのは、愚かとしかしいようがありません。ジェド王とともに栄光の輝きを頭上に得たご先祖様に顔むけできるように、また我々自身の名誉を回復するために、遅まきながらのそしりを受けようとも、大義あるパッシェリカ陛下が正統なるイスカリエンの後継者として王座につけるよう、尽力したいのです」

私はじっとデラウスの目を見つめた。いささか熱すぎる言葉だ。といって、芝居がかっているとも思えない。多くの血を流してきた昨日までの敵同士がこうして揃い、共通の敵と戦うべく立つと決意を表明する……損得勘定だけでできることではあるまい。真実のせつなくも峻烈な気配が感じられる。

しかし、やはり言葉を額面通りに受け取るわけにはいかない。私は、シヴァをちらりと見やってから、デラウスに視線をもどした。

「わかりました。それで——大堰城を攻めるべくパッシェリカ陛下が軍を動かした際、現

実に出していただける兵力はどの程度でしょうか。先ほど、あなたは明言を避けましたが、私たちとしては具体的な数字を聞きたいのです」

シヴァがこの場で最も聞きたい情報はこれのはずだ。

「うむ……。現段階で確実にお約束できる数字は、アデラス一千、ロムロス一千、計二千。命は惜しまない兵と思ってください。パッシェリカ陛下が暴王に敗北すれば、このジェド騎士団領の命運も尽きるとの思いを抱いている者ばかりです」

私は軽く唇を噛んだ。

「ええと、諜者によると、アデラス家とロムロス家には、万単位の兵力があるはずでは…
…？」

たまりかねたように、シヴァが横合いから口を挟んだ。

「む？」

デラウスは何かを感じたらしく、シヴァをじっと見つめた。

「アレリア卿、この者は？」

「えっ？ その——詳細は省きますが、この任務に必要なので連れてきた従者です」

「ふうむ」

デラウスは考えこむそぶりをしつつ、シヴァを見つめ続けた。

「では、お答えしましょう。確かに、我々にはもっと多くの兵力があります。しかし、最初に述べた通り、まだ両家の和睦に賛成していないわからず屋どもが大勢います。このため、領内に治安維持のためまとまった数の兵を残しておかざるを得ないのです。ただ、私をはじめ、多くの者が彼らを説得すべく動いています。暴王のごとき邪心に満ちた輩はいざ知らず、たいがいの人間は、こちらが裏も表もないと明らかにした上で真心をもって話せば通じるものです。彼らを説得することに成功すれば、パッシェリカ陛下のために動かせる兵力は、たちまち、先に申し上げた数字の二倍にも三倍にもなります」

この回答に対し、シヴァもまた探るような視線をデラウスに向けながら少考する様子を見せた。

やがて、シヴァは私に向かって軽くうなずいた。

「デラウス伯。あなたの働きはもちろん、アデラスとロムロス両家の忠誠と支援を、パッシェリカ陛下に必ずお伝えいたします。ただ、陛下は暴王ラディンを討って大陸に平和をとりもどすその日まで、恩賞や領地など、働きに報いる約束や手形は与えられないこととします。どうかのその旨、ご了解ください」

「無論のこと。騎士の名誉にかけ、この領地以上のものをみだりに欲して陛下の御心をわずらわせるようなことはいたしません。みなを代表して、私がここに誓約いたします」

デラウスがそう言った際、ユライアとザドルーが何事か言いたげな様子で視線をかわしあったが、結局、二人の老人は何も言わなかった。私は、デラウスと、ユライア、ザドルーには、心の温度差があるなと察知した。このことは……パッシェリカ陛下に報告しておいた方がいいかもしれない。

「デラウス伯。この後、敵地入りを果たした私たちが窮地に陥った際に、それを救うための部隊がここへ到着します」

私は先の印象を心によく刻みつけつつ、口を開いた。

「聞いております。セフィラ隊で、ミモリーなる女隊長が率いる部隊とのこと」

「はい。セフィラのほか、魔術師なども数名。精鋭ですが、数は多くありません。万一の場合、騎士団の皆様も救出に加わってくれと考えてよろしいでしょうか」

「言うまでもないこと。ラディンとことを構えると覚悟した今、彼らの眼前で剣を振るうことを厭^{いと}う者はいません」

「それを聞いて安心しました。私は大陸辺境の領主ですが、どうかこれを機に、親交を深めさせてください」

「こちらこそ。アレリア卿は美人ともつばらの噂でした。そしてそれは事実だった。そのように言っただけるとは、男として嬉しい限りです」

その後は歓談しながらの食事となり、私たちは皆で一泊することとなった。

「シヴァ。ジェド騎士団領の動向だが、どう思う？」

貴賓室へ引き上げて身内だけになると、私はすぐに彼の意見を求めた。なにしろ、この一行の実際の長はシヴァだから。

「想像していたよりは、いい手ごたえだ」

「すべてが急激に動いていますね。私が諜者から聞いていた最新の報告より、情勢はさらに我が方へ有利に傾いている模様です」

マウラーが口を挟んできた。

「過信は禁物だ。ラディンの南部制圧が各地の群雄に与えた影響ははかりしれない。ジェド騎士団領が暴王を倒さずば明日はなし、と判断したのとはべつに、ただちに暴王の下につくほか生きる道はない、と判断する勢力が出現しているかもしれん」

グレインがマウラーをじろっと睨んで反論した。

「うん……。もしグレインの言うような事態が起きていたら、数勘定の上で、おれたちはさらに追いこまれてしまう」

シヴァの深刻そうな表情を見て、私は息を吞んでしまった。デラウス伯の言葉と態度に触れて（幸先が良い）と心躍っていたのだが、冷水を浴びせられた気分だ。

やはり、私は甘いのだろうか。

領主を務めながら、旅を夢見る乙女心を捨てきれないのも、甘さゆえなのだろうか。

(もっとも私には、自分は凡物だとの自覚がある。ことあらば王位を継ぐべく散種の儀でもうけられた子でありながら、辺境の小さな領土を守るだけで精一杯と、その事実を秘匿して生きていた。今だって秘匿し続けている。対して、同じく散種の儀でもうけられたパッシェリカは、拠点となる領土もないまま、自分は前王アーウィンの子であると世に明かし、暴王討つべしと宣言して旗を掲げた。私は、妹とは、生まれついでての器がちがう……)

しかし、逆説的だが、こう思うのだ。

そんな私だからこそ、せめてこの離間工作を成功させて、パッシェリカ陣営の今後に大きな意味を持つ大堰城攻略を成功に導きたい、と。

(シヴァやグレインがすぐそばにいるものの、敵将ガラックと話をするのは私だ。力を尽くそう)

就寝の前に、私は窓辺に立って空を見上げた。そして星々を見つめながら、今は亡き父母の顔を思い描き、ご加護を、と祈りを捧げた。

TURN7

人にはみな、役割がある。

——グレイン

おれの種族ケットシーは、ヒューム、エルフ、ドワーフ、リザードマンなどの他種族から軽んじられる傾向がある。体格が華奢だし、見た目が猫に似ているし、なにより絶対数が少ない。夜目がきくなど他種族にない長所もあるにはあるが、飛行できるセフィラに比べれば突出した異能とは言えない。はっきり言って弱小種族なのだ。

ジェド王は大陸を統一した後、多くの少数種族の領地を安堵してくれた。彼がいなかったら、ケットシーは安住の地を持たない放浪の民となっていたことだろう。

ジェド王亡き後も、イスカリエン王家は彼の意志を継いで、やはり少数種族の庇護者であり続けてくれた。だから、ケットシーはイスカリエン王家を敬愛し続けてきた。

だが、イスカリエン一千年の伝統、格式、正義、それら良きものはすべて、暴王ラディン・イスカリエンによって破壊されてしまった。

戦乱の世となるや否や、おれたちはたちまち種族存亡の危機に直面した。同じ少数種族でも、セフィラは他種族にとって不便極まりない高地に住んでおり、そんな土地を欲しがる者は現れない。が、おれたちの実質的な自治領である大陸西の、丘陵に囲まれた肥沃な盆地——ケットシー^{しょう}庄は違った。

戦乱の世となってからほどなく、南のヴァライエン侯爵領から、大勢の兵士たちが越境してきて、こう言った。「この地はもともと、ヴァライエンの居留地として認められていたに過ぎなかった。我々の領土に間借りさせてやっているのだから、もっと多くの税を払え」と。

早い話が、力にものを言わせたド汚いかつあげだった。イスカリエン王家が大陸全土に正義と法の秩序を行き渡らせていた時代なら、こんな無法は絶対に通らなかった。

庇護者なきおれたちは、税を……重税を払うほか、生きる術はなかった。

だが、そのまま黙ってやつらの搾取を受け入れ続けて良いわけがない。子や孫の安寧のため、ヴァライエンの横暴を食い止めなければならない。そのためになすべきは、なにか。ヴァライエンと戦う？ いいや、連中ごときは小ずるい小悪党にすぎない。問題の根となっている大悪党は、大陸を乱世に追いやったラディン・イスカリエンだ。まっとうな人物

がやつを打倒して大陸を制し、法と秩序を回復しない限り、大陸のあらゆる場所でこの手の横暴がまかり通ってしまう！

しかし、各地の群雄たちは自領の守りを固めたり、隣接する他領を切りとったりと、みな忙しかった。ラディンを打倒して正義と秩序を回復しよう、そういう大志を公然と掲げる者は皆無だった。

そんな時だ。

我こそは前王アーウィンの娘、暴王ラディンを討って新たな王となり、再び平和をとりもどす！ とパッシェリカ・イスカリエンが立った。

これを支持せずして、どうする。おれは、イスカリエン王朝一千年の^{おんこ}恩顧に報いるのはまさにこの時と思ったし、彼女を支援することは一族の未来のためでもあると考えた。賛同してくれる同士も、少なくなかった。

そんなわけで、おれはパッシェリカ陛下の旗揚げを知ると、速やかに仲間たちを率いて馳せ参じ、忠誠を誓った。

無論、口の上で誓いを立てても、いきなり完全に心酔してしまったわけではない。最初は（はてさて、この小娘、王の重責を担えるだけの器量の持ち主か？）との思いがあった。同志たちも同じ思いだったはずだ。中には、「半年だ。半年、そばで見ている、王たりえない小娘と判断したなら、去らせてもらう」とおれに告げる者もいた。

だが、そうした思いは^{きゆう}杞憂に終わった。彼女と行動を共にし、一日、また一日と過ぎるにつれ、おれも、同志たちも、（これは間違いなく王にふさわしいお方！）との思いを深めていった。

彼女に仕えるようになって間もないころ、こんなことがあった。

おれたちは、ラディンを恐れず力を貸してくれる後援者を捜し求めて旅する中、ある小さな町に休息のため立ち寄った。

正確には、戦火で荒れ果て、無惨に破壊された小さな町の残骸だ。多くの難民が身を寄せ合い、その日その日の水と食糧を求めていさかいが絶えない、貧民街よりも過酷な町だった。

まともな身なりのおれたちを見るや、野犬や餓狼のように目を光らせた人々がにじり寄ってきた。彼らは棒きれのような粗末な武器を手をしているのみで、蹴散らすのは容易と思えたが、なにしろ数が多かった。

すると、パッシェリカ陛下は一人の老人をさし招いて、こう告げた。

「今から炊き出しを行います。町のみんなをここに集めなさい」

おれたちは驚愕した。持ち金は少ない。戦乱により食糧は高騰している。おれたちだっ

て十分な食糧があるとは言いがたい。

真っ先に、「とんでもない！ 何を考えているのです！」と抗議したのはネビウス老だった。彼はいけすかない人物だったが、この時ばかりはおれも同意見だった。

しかし、陛下は毅然とした態度で、詰め寄るネビウスやおれをこう諭した。

「私が掲げるのは、暴王ラディンとは対極の旗です。すなわち、彼が暴力や残忍さや冷酷さをもって大陸を制しようとするのに対し、私は慈愛や理性や正義をもって大陸を制しようとしています。ここにいる人たちは、餓えのため理性を失いかけています。その哀れな人々に、自分たちにとっても必要な食糧を分け与えて理性を回復してやる、これ以上の慈愛があるでしょうか？ 今日のこの出来事を、彼らは感謝とともに深く記憶して、私たちの噂を広めてくれることでしょう。その噂を耳にして感銘を受ける有力者もいるはずです。暴王に公然と立ち向かうのは恐ろしいが、密かにパッシェリカ・イスカリエンを支援しよう、そう思う者が必ずやあらわれます」

おれは瞠目した。小娘の口から出た言葉とは思えなかった。

（このお方は庶民育ちゆえに、弱者に対する慈悲の心を持っておられる。同時に、強大な暴王に敢然と立ちむかう覇気がある。といって、感情だけの人ではなく、理性もある。ただ優しいのではなく、優しさを武器として戦略的に使い、それをもって支援者を増やそうとの深謀遠慮。確かに、今すぐ見返りがある投資ではない。だが、後々、こういった投資が必ずやいきってくるのではないか……？）

ネビウス老はそれでもあれこれぐちぐちと言ったが、おれは仲間たちと視線をかわしてうなずきあったものだ。

そうして、陛下の読み通り、この投資は後になって生きた。しばらくして、おれたちを疎ましく思う暴王が手勢をさしむけてくるようになったが、各地を逃げ回るおれたちを、中小の商人、町の有力者、裕福な荘園主といった、領主ほどではないが一庶民よりは力ある人々が、陰ながら支援してくれるようになったのだ。彼らの中には、支援の理由として、先の小さな町の出来事を挙げる者もいた。

それらのささやかだが心意気ある支援が、どれほどおれたちの助けになったことか！ 時には、名乗らぬ謎の人物から暗殺者の情報が流れてきて、おれが間一髪^{うと}のところでお救いしたこともあった。

パッシェリカ陛下には王として最も必要なものがある。人に好かれ、この人のために力を貸したいと思わせるなにか——『魅力』だ。ケットシーはヒュームとはまったく異なる外見で、美的感覚も異なる。けれど、内なる魅力は種族の別を問わず人々を惹きつける。

……………。

.....。

語れば尽きない思い出がある。ラディンはおれたちを仕留められないことに業を煮やし、次第に本腰を入れて多くの手勢をさしむけてくるようになった。そのため、おれたちは常に命の危険を感じていなければならなかった。大陸を逃げ回るうちに、どんどん端へ端へと追いつめられていった。だがそれでもおれは、楽しい日々だと感じていた。生き甲斐とは、まさにこれだと思った。

いつしかおれは、この人のためであれば命も惜しくはないとさえ思うようになっていた。

そうだ。おれは、骨惜しみせずパッシェリカ陛下のために働くことを、人生の喜びとするようになっていた。

パッシェリカ陣営で最もよく働いてきたのはおれを含むケットシー一同だと自負している。ミモリーとリドリーが率いるセフィラ隊も初期から陛下をよく支えてきたとは思いますが……連中はしよせん傭兵だ。ヤマつけたっぷり、最大のお目当ては陛下が大陸再統一を果たした際にもたらされるであろう馬鹿でかい報償、だからな。いざとなればどこへでも飛んで逃げて身の安泰をはかれるし、本当の意味で最後の最後まで陛下につきあう気なのか、そのへんはかなり疑わしい。

ただ、おれは陛下に尽くしてきた自負こそあれど、出しゃばった真似はしないように努めてきた。

陛下に王の証たる聖剣を渡したネビウス老や、陛下が幼少のころから見守ってきた騎士長のダンガンに遠慮していたわけじゃない。身内で権力闘争などやっている場合ではなかったし、なによりおれは比較的初期から自分の仕事の形を、これと定めていた。

最終的に大陸を平定するには、ラディンと戦ってこれを討ち滅ぼさなければならない。そのために必要なのは大軍を指揮できる軍事の専門家だ。だが、おれは将軍など務まる器ではないし、陛下も軍事には疎い。

将軍たりえる能力を備え、陛下が絶対の信をおく人格者。まだ見ぬその人物が出現するまで陛下を支え、その人物が現れたなら、陛下のためと思ってその人物を支える……それが、おれがこうと決めた仕事だった。

追われ追われて、ついに大陸北東の辺境まで追い詰められたおれたちを、アレリア卿が保護すると決めてくれた時、おれは彼女こそ待ち続けてきた人物なのではないかと期待した。

が……そうではなかった。アレリア卿は好人物で、陛下と同じく正義や秩序を愛する心を持っていたし、愛馬を駆れば眉目麗しく勇ましい女騎士だったが、大軍を動かせる軍事の専門家ではなかった。小さな領地を堅守してきただけで大がかりな軍事行動の経験がな

いばかりか、注意深くなければ気づかないだろうか、なにかにつけて自信なさげな表情が表出する。実際、東リザード自治領のバルゴが攻めてくるとなった時、彼女の動揺と狼狽^{ろうばい}、それを必死に隠そうとする努力は、見ていて痛々しいものがあった。

しかし、天から降ったか地から湧いたか、否、一千年もの間封印されていた謎の石棺から、ついにおれが待ち続けていた人物が現れた。

シヴァ。

伝説のジェド王と同じくドラゴンハーツの力を持つこの男は、誰がどう見ても敗北必至の戦いを互角以上の結果に終わらせ、のみならず、バルゴを承服させてパッシュェリカ陣営に加えることに成功した。

シヴァの派手な活躍を前にしても、おれこそ陛下を支えてきた最大の功労者、との思いは変わらない。が、今のおれの仕事は、陛下を、また陛下が信頼する將軍のシヴァを、全力で支えることだ。

人にはみな役割がある。役割をまっとうすれば納得して生きられるし、死んでも悔いは少ない。

他人はどうあれ、このおれ、グレインはそう信じているのだ。

＊ ＊

ジェド騎士団の重鎮たちとの顔あわせもすませ、翌朝、おれたちはラゴス砦を発って南端の国境を目指した。

マウラーは砦に残留。やつの言い分は、こうだ。「来たるべき大堰城攻略戦にて、ミレディアは軍需物資提供の面でも大きな負担を厭わない所存です。輜重^{しちよう}隊を通す道を決め、その警護をジェド騎士団の方々に担っていただくなど、協議してつめておかなければならない事柄が山ほどありますので、この機会に」……。

ラディンの口腔にも等しい敵地へ乗りこむのはごめんこうむりたいがための、いいわけととれなくもない。だが、おれとしては、どうしても怪しげで危険な印象のぬぐえないこの男とひとまず離れられるのは、むしろありがたいくらいだった。

さて。

南端の国境を警備する兵たちの詰め所は、最近になって大急ぎで拡張したのだろう、まだ白木の匂いが香る物見台や宿舎が建てられ、歴戦の兵といった容貌の男たちがわんさか蟬集^{いしゅう}して、ラゴス砦よりも遙かに物々しい有様だった。

ここの南……ラディンの勢力圏からの来訪者をまったく通さないわけではないらしく、門は開け放たれている。ただし、門の先は深い空堀で、縄で細い橋をかけており、敵軍迫ると見ればただちに侵入経路を遮断できる構えだった。また、南から来た者を留め置く大

がかりな待機所が設けられ、そこでは女子どもであっても、厳しい取り調べが行われている様子だった。

おれたちの姿を見て、ここを預かる隊長と思しき男が、数名の部下を引き連れ、怖い顔つきで駆け寄ってきた。

「話はうかがっております。アレリア卿の御一行ですね。どこにどんな目や耳が潜んでいるかわかりません。素通りさせてしまうと、怪しまれます。ひと通りの取り調べをすると装いますので、ご協力を」

彼は声をひそめておれたちに告げると、「おい！ 止まれ！ 止まれ！」とことさら横柄な態度で声を張り上げた。

そんなわけでおれたちは半日ほどここに留め置かれてから、ジェド騎士団領を後にした。「いよいよ、敵地か」

つぶやいたアレリア卿の声音には、不安の色がにじんでいた。

「だいじょうぶだ。おれがついている。サラもいる。グレインもいる。万が一の時には、ミモリーやリドリーやシャノーラやウィード、それにジェド騎士団の面々も駆けつけてくれる」

シヴァが落ち着いた態度で言った。この男、謎の石棺からあらわれた時には泡を食っておたついていたものだが、今は胆力が身について、將軍職が様になっている。精神的な成長^{いちじろ}著しく、そばで見ていて頼もしいし、おれとしても支えがいがある。

「ところで、グレイン」

そのシヴァが、おれを見た。

「なんだ」

「グレインはずっと諜者を束ねてきたし、こういう……正体を隠して行う任務に知識があると思う。注意すべきことがあったら、今のうちに言っておいてくれないか」

「そうだな……」

おれは少考した。

「子は親に似るし、犬は飼い主に似る。暴王麾下の軍団は、兵も荒っぽく、秩序を軽視しがちな気風だ。当然、一庶民にとって彼らは怖い存在だ。シヴァは内心、ドラゴンハーツをもってすれば少々の危難など恐れるものではない、と踏んでいるのだろうが、それを表に出すな。一庶民は兵士に対して、目をあわせるのも恐れるくらいに振る舞うものだ。からかわれたり、罵倒されたりしても、見返したり抗弁したり反抗的な態度をとってはならない。この一行で兵士に対しても同等に振る舞っているのは、一行を率いるひとかどの商人……という触れこみのおれだけだ。このこと、肝に銘じておいてくれ。めったなことでは

剣を抜くなよ。柄に手をかけるだけでもだめだ。それをやっていいのは、荒事以外では切り抜けれない時だけだ」

「わかった」

シヴァは素直にうなずいて、剣を吊るした左の腰をちらりとみやった。

こういう世の中だから、商人や旅行者、果ては大道芸人に至るまで、剣を身に帯びて旅するのはべつだん不自然なことではない。ただし、今、シヴァが吊るしているのは、王家の聖遺物である聖剣ではなく、ありふれた凡剣にすぎない。

「それと、サラ」

おれはシヴァの妹に話しかけた。

「敵地で絵はかけない。写生などしているところを見つかれば、諜者がいるぞと騒ぎになる。だが、大堰城付近の風景をできる限り記憶して、ジェド騎士団領へもどったらざっと描き起こしてくれ。戦いの際、役立つ情報が得られるかもしれん」

「うん、まかせて。に一ちゃんがあたしを同行させたのには、そういう意味もあると思ってる」

サラはにこりと笑った。

高い地位を得ると、それを鼻にかけて傲慢になる者も多い。が、この兄妹はそうした傲慢さとは無縁で、じつに好ましい。もっとも、マウラーのような手合いとりやりあってゆくには、時には強面になることも必要ではないのか？　と思わないでもないのだが。

街道を行くことほどなく、水の匂いが流れてきた。

じきに、セド川のほとりに出た。

見る者の胸を打つ、雄大なるセド川。大陸中央から北部にかけて、魚や貝といった川の幸、農耕に必要な大量の水、船を使った運搬など、多くの恵みをもたらす大河――。

だが。

「……とんでもないことになっているな」

シヴァが眉をひそめて独りごちた。

川そばには、水の恵みで育まれた大森林が広がっている。が、途方もない数の樹木が片っ端から切り倒されて、そこいらじゅう切り株だらけの無惨な様だ。こうしている今も、コォーン、コォーン、と樵^{きこり}が斧を振るう音がひっきりなしに響いている。

川岸には新造されたはしけが無数にあり、材木を積みこんだ船が次々に出て、上流へとむかってゆく。逆に上流からは、空になった船が一艘また一艘と下ってくる。その数たるや、川面を埋めつくしてきらめきをかき消さんばかりだ。

「大堰城建造のために樹木を切り出して運んでいるのだな。とてつもない大工事だろうと

想像はしていたが、これほどとは——」

アレリア卿が度肝^{どぎも}を抜かれていたが、無理もない。少々のことでは動じない自信があるおれでさえ、目をみはる規模の大工事だった。

この切り出し場で働く人々のための宿泊所や休憩所や酒場も、これでもかとはばかりの数が建設されていた。あたりには作業を監督する兵士たちが闊歩し、しかも彼らの中には抜き身の剣を握り締めている者もいて、そうとうに物騒だ。そんな兵士たちが樵や船頭を怒鳴りつける横柄な声がひっきりなしに聞こえてくる。作業にあたっている人々の大半は顔色が優れない。重労働に見合うだけの報酬が支払われていないものの、暴王とその手下に「やれ」と凄まじれば逆らいようがない……そういう実情が読みとれる。

「きりきり働けえ！ 勝手に手え止めてみろ、斬り捨てて死体を魚の餌にするぞ！」

と、左手に酒瓶、右手に抜き身の剣をひっさげた赤ら顔の兵が、胴間声を張り上げて、道の向こうからやってくるのが見えた。兜に羽根飾りをつけており、数名の兵士を従えているから、これでもひとかどの隊長らしい。

「今はこらえろよ。この先、ああいう手合いはいくらでも出てくるぞ」

シヴァがむっとした表情を見せたので、おれは注意した。

「あんなのでも隊長が務まるなら、案外、ラディンの軍団はたいしたことないのかもな」

シヴァはそれでも、吐き捨てた。

「そいつはどうか……。戦で活躍すれば、たとえ人格最低であっても、地位や報償が惜しみなく与えられる、それがラディンの軍団だ。ある意味、誰でも上に行けるよう公平な機会が与えられているとともとれる。で、傭兵などにはむしろそういうわかりやすさを好む手合いも多いと聞く」

などと小声で話していると——。

「おう、なんだお前ら！ 見ねえツラだな、どこのどいつだ！」

赤ら顔がおれたちに目をとめて歩み寄ってきた。おれはすぐさま下馬し、他の面々にも馬を下りよう目配せした。

「や、これはどうも。よいお日和で。隊長さんですか？」

おれは、なにはともあれ腰を低くして挨拶した。

「ふん、ケットシーか。生意気に馬だの馬車だの持っていやがるとは……。どんな悪どいことをして儲けたんだ？ あん？」

「いえいえ、手前の名はグレイド、まっとうなことで知られる商売人でして」

「けっ、どうだかな。そんじゃひとつ、まっとうな荷かどうか調べてやらァ。見せろ！」

赤ら顔の目は欲で光っていた。配下の面々は、露骨なまでにいやらしい視線をアレリア

卿の胸に放っていた。

こういう手合いは旅人や商人を脅し、強請^{ゆす}り、難癖をつけて金品を奪うことを役得と信じて疑わない。下手に出ていると際限なくつけあがって、しまいには収拾がつかない事態へと発展する。刺激しないよう丁寧に應對することは必要だが、同時に、手を出すのはまずい相手だとはっきり教えなければならない。

「ですがね、隊長さん。これは大堰城へお届けする荷でして」

「む？」

「注文なさったのは、エレーナ様でございます。もし荷に問題があれば手前どもの命^{あや}が危うい。失礼ですが、隊長さんのお名前をお聞きしてもよろしゅうございますか？」

赤ら顔は酒瓶を取り落とした。酒瓶は小さな音を立てて砕けた。

「エレーナ様というと、あの……将軍の……エレーナ・ディアッツァ様？」

酔いなど吹っ飛んだ顔でたずねてくる。兵士にとって階級が上の者は怖い存在だが、それにしたって極端な反応だった。

「はあ、はい。エレーナ様は、もともとは宮廷魔法使いだったお方で、魔法はもとよりお洒落も一流、昔から、手前にとってはお得意様でございまして」

「あ……そう。そうなの……。ふうん……。おっと」

赤ら顔は落ち着かない様子で目をきょときょとさせ、今になって（失礼があっちゃいけねえ）と思ったらしく、剣を鞘におさめた。

サラが、ぶほっ、と変な音を立てた。吹き出したいのを必死にこらえている様がおれの背中に伝わってくる。笑うんじゃない！ おれまで笑ってしまいそうになるからやめろ！

「あー、そういうことなら、なんだ。えー……注文書なり、なにかこう、身の証を立てるものを見せてもらってもかまわんかな」

「はい、もちろんでございます」

そのあたりの用意は万全だ。エレーナやガラックの筆跡をまねてかいた書類——用途に応じて使い分けられるように、複数用意している——がある。

「どうぞ、ご確認ください。エレーナ様直筆^{じきひつ}の書状でございます」

おれが差し出した紙きれに、赤ら顔は神妙な顔つきで目を落とした。

さすがに、緊張する場面だ。

「うん？ 将軍閣下の印が押されていないようだが……」

赤ら顔は物問いたげにおれを見た。案外、目ざといやつだ。

「それはそうでしょう。軍需物資ではなく、エレーナ様があくまで一個人として買いつけた品々ですから。将軍として発注したとなれば公私混同になります。誰かが悪意をもって、

『エレーナ將軍は軍の金を私的に流用している』などとラディン陛下に^{さんげん}讒言しようものなら、それこそたいへんなことになります」

「あ、なるほど。もっともだな」

「とはいえ、そうですね、少しでも怪しい者は通すべきでないご時世ですし、隊長さんの顔を立てる意味でも、荷をお見せしましょう。これ、荷ほどきが簡単なものだけで構わない、いくつか見せてあげなさい」

「お……。すまん、気をつかってもらって」

「いえいえ」

この馬車には、言い訳のための荷も積んできている。荷台は二重底になっていて、離間工作に使うための金品や、急を報せるための狼煙筒などを隠しているため、馬車を徹底的に調べられるのはまずい。だが、こちらから進んで荷を見せる態度をとれば、相手の猜疑心もやわらぐものだ。

「どうぞ」

「エレーナ様にお渡しする品々ですので、できればお手を触れず見るだけにとどめてください」

シヴァが、サラが、積荷から油紙の包みをいくつかほどいて赤ら顔に見せた。いかにも女性が好みそうな指輪やネックレスやイヤリング――。

「よし、よし。こういうものか、なるほど。あ、もうしまっつかまわんぞ」

赤ら顔は満足げにうなずくと、ぽん、と手を打った。

「うむ、エレーナ將軍へのお届けものとなれば、おれとしても便宜^{べんぎ}をはからにやな。そう、次の船に乗っていけ。積みこんだ材木を下ろさせる。おい、行け。船を空けさせろ。全部だ、全部荷を下ろすんだ」

部下の兵に向かって、顎をしゃくる。

「いえ、そこまでしていただくはずとも……」

おれは少々あわてた。

「いいっていいって、ここじゃ、おれア王様みてえなものなんだからよ。なんでもおれの思い通りになるんだ。なにより、大堰城の方へ^{さかのぼ} 廻 るんであっても、道を行くより船の方がずっとはええんだ。その代わりといっちゃなんだが、エレーナ將軍によろしく伝えてくれや。切り出し場のグモールがよくしてくれて、えらく助かった、ってな」

「はあ、はい。必ずや」

「頼んだぞ！ おっ、ついでに酒と食べ物もつけてやろう。おい、酒樽ひとつと、そうだな、なにかできるだけいいもんを炊事場でこしらえさせろ。ほら、塩づけ肉のいいのがあ

「ただろ、あれを使わせろ」

というわけで、おれたちは馬も馬車も船に乗せてもらい、上機嫌の赤ら顔に見送られながら、切り出し場を後にすることとなった。

＊ ＊

セド川は、このバロード平原のあたりでは流れがゆるやかだ。長雨により水量が増して氾濫し、流域に災害をもたらしたこともあるにはあるが、過去一千年、そうした記録は数えるほどしかない。

そういうおとなしい川だから、船は流れに身を任せるだけで危なげなく下れる。遡るのは、櫂で漕いだり、帆を張って風の力を借りたりする必要があるものの、そう難しい話ではない。

だが、おれたちを乗せた船は、材木運搬船にしては大仰な代物だった。というのも、船の前に何頭ものセドイルカをつなぎ、御者台で御者が操る船なのだ。獣^{けものぶね}船と総称されるこの手の船は、手こぎ船や帆船に比べ、ずっと速力がある。

「うわー！ イルカに引かせる船！ ファンタジーだなー、いいなー」

サラは御者台のそばでしきりとしゃいでいた。アレリア卿も、物珍しげにイルカの背を眺めている。

「なあグレイン。こういう船って、かなり高くつくんじゃないか？」

シヴァが小声でたずねてきた。

「もちろんだ。獣船は、船を引かせる獣の捕獲と調教、また食わせる餌で、そうとうに高くつく。普通は、海戦で奇襲をかける際に使うなど、軍事目的で使う船だ」

「そういう船をただの荷運びに使っているのか。やっぱりラディンの資金力はそうとうなものなんだな」

「そうなる。広大な森を破壊し尽くさんばかりのあの切り出し場の光景を目の当たりにした段階でわかっただろうが、暴王は……本気だ。あらん限りの資金と人力を注ぎこみ、可能な限り速やかに大堰城を完成させるつもりだ」

「やつが大堰城を完成させたら——」

「北部は終わりだ」

「……このおれが、そうはさせない」

「頼もしい。離間工作で交渉を行うのはアレリア卿だが、失敗した場合、大堰城をどう攻略するか、今のうちに考えを練っておいてくれ」

「もちろんだ。といっても残念ながら、まだこれという案が頭に浮かんでいない」

「そうか。まあ、おれもあるだけの知恵を絞ってはみるつもりだ」

幸い、御者のほかはおれたちだけなので、船の後ろの方に陣取れば、気兼ねなくこうした会話ができる。

川^{おろし} 風の風に正面から挑み、船は軽快に進んだ。ただ、危なかつかしい場面が何度もあった。というのも、大、中、小、大量の船がひっきりなしに川を行き来していて、ひとつ間違えば衝突事故になるであろう混雑なのだ。もっとも、もうすっかり慣れているのか、御者は見事に船を操って速度をまったくゆるめなかった。

「うん？ 妙だな、なんかこう、水の……臭いが……」

ふと、シヴァが顔をしかめた。

「おれの鼻もそう言っている。腐臭とまでは言わないが、嫌な臭いだ。大堰城の工事の影響ではないか？」

おれは手の甲で軽く鼻の頭をこすった。

「南部からは、水の精霊力を奪うため、大量のアンダイトが運搬されているんだよな」

とシヴァ。

「それらの鉱石も船を使って運搬されているはずだ。これだけ川面が船で混雑しているとなれば、衝突事故で転覆することもあるだろう。そうすると——」

「船の積荷の、大量のアンダイトがすべて川底に沈む……わけか」

やがて、見事な夕日が川面と行き交う船を染め始めた。おれの故郷は山中の盆地だから、大河や船には縁がない。なのに、どういうわけか郷^{きょうしゅう} 愁の念がよぎった。

と——行く手に異様な代物が現れて、その郷愁を断ち切った。

「あれは……！」

シヴァが船べりから身を乗り出して前方を見やる。

広大な川に突如としてあらわれた、巨大な中州。その中州に基礎を打ちこんで築かれた、石づくりのナルタール大橋。そのナルタール大橋を改造することにより、今まさに築かれつつある巨大な城！ まだ距離があるため川の水気で煙る 朧^{おぼろ} な遠景にすぎないが、にもかかわらず、その途方もない巨大さがわかって、おれは衝撃を受けた。

（こ、これが大堰城！ 暴王め、とんでもないものを……！）

次第次第に近づき、細部が見てとれるようになるにつれ、おれの驚きは増していった。

工事のため大量の材木で無数の足場が組まれている。そこに、豆粒のように小さな無数の人々がうごめいている。大ぶりに切り出された石材を、複数の魔術師たちが魔法を使って吊り上げている。なにかひとつでも間違いがあればたちまち大事故になり、多くの人命が失われることだろう。いや、これほどの大工事、しかもラディンにせっつかれて一日でも工期を縮めるべく急いでいるとなれば、すでにそうした事故が幾度も発生しているのか

もしれない。

「これ、完成……しつつあるの……？」

サラが目を丸くしてつぶやいた。

中州の幅いっぱいに築かれた中央部は、あるいはまだガワしか作っていないのかもしれないが、ほぼ完成に漕ぎ着けたと見てとれる外観だった。その中央部から、基礎となっているナルタール大橋が両翼となって伸び、中州をまたいで川岸へ。この両翼にも城郭を構築する予定らしく、おれたちから見て左側……東側は、すでにかなり形ができていた。

で、この大堰城の^{きも}肝となるアンダイトだが、城の前面に、跳ね橋のそれに似た巻き上げ機と、青っぽい石材を組んで作られたぶっとい石柱が何本もある。アンダイトの石柱だ。今はそれらの石柱は引き上げられている状態だが、川へ下ろせば、たちまちアンダイトの効果によりセド川から水の精霊力が奪われる仕組みだ。

「もしかして、水の臭いに変なのは、最近、試験的にあのアンダイトの仕掛けを稼働させたからか？　なんてことだ。基礎部分となるでかい橋があると聞いていたから、工期は思いのほか短いのかもしれないと推測していたけれど、これほどどは——」

シヴァも愕然とした様子でうめいた。

「これを放ってはおけない」

うっかりつぶやいたアレリア卿が、「あ」と口をつぐんで、御者の方を振り返った。幸い、御者の耳に彼女の言葉は届かなかったようだ。

おれたちを乗せた船は、中州の西側へと向かった。未完成状態の西側は、工事を急がされているのか、人や資材を積んだ船が、誇張なしに、川面を埋め尽くすほど大量に行き来している。

「旦那方！　もうじきつきます！」

やがて、御者がおれたちを振り返って声を張り上げた。

船を引くセドイルカたちが速度をゆるめる。船と船の間を縫うようにして滑りこみ、たくさんの^{はしけ}のひとつに、ぴたりと停まる。

「ありがとうございました。些少ではありますが、これを」

「旦那、すまねえ。ありがたくいただいております」

おれが心付けとして金を入れた小袋を渡すと、御者は破顔した。

「旦那。もう少し奮発してくだされば、手早く荷下ろしできますぜ。なにせほら、この忙しさで、黙っていたんじゃなかなか人が回ってこねえから」

「そうか、じゃあこれで」

さらにいくばくかの金を渡すと、御者は「おおーい！　荷下ろし手伝ってくれ、おおー

い！」と叫びながら、右手を掲げて親指と人さし指で丸を作った。

するとそれに気づいた数名の男たちが足早にやってきた。御者が金を渡すと、彼らはてきぱきと動いて、馬と馬車を下ろしてくれた。

「旦那方、じきに夜です。ついでといっちゃなんですが、ちょいと弾んでくれりゃ、手癖の悪いのが入りこまねえ、いい宿をご紹介しますぜ」

御者はさらに、そんな申し出までしてきた。

「ラディン陛下の御威光があっても、泥棒が出るのか？」

おれは首をかしげた。この大工事を任されている將軍のエレーナや副将のガラックは、工期の遅れにつながる要因は徹底して排除するよう下知しているはずだが……？

「悪さしてとっつかまったら、その場で死罪でさア。それでも——大きな声じゃ言えませんがね、ラディン陛下は王都からも南部からも、男手という男手を残らずかき集めてここへブッこんじまってる。しかも、どえれえ重労働なのに金払いはよくねえ。おれア独り身ですからどうとでもなりますがね、^{かいかあ}嬢や子どもやじじばばがいるってえやつは、なんとかしなけりゃ……って、なりまさア」

「なるほど」

おれは顔をあげて周囲を見渡した。

樹木を片っ端から切り倒していた森では、兵士たちが横柄な態度で闊歩し、男たちは彼らを怖がって忙しげに働いていたものの、みな顔色が優れなかった。ここも、それは同じだ。

「では、そうだな、案内してくれ」

「すまねえ、旦那。悪く思わねえでくだせえよ、こんなご時世だ、金はちょっとでも貯めこんでおかなきゃねえ」

かくて、おれたちは御者に案内されるがまま歩き出した。

もうかなり暗くなってきているが、夜番の者が仕事を続けるのだろう、たくさんのかがり火が焚かれて辺りは明るい。また、物資を速やかに運搬するため、石畳をしきつめた広い道が設けられて荷馬車がひっきりなしに行き交っている。人はやたらと多いし、^{のみ}鑿や^{つち}鎚を振るう音はやかましいしで、とんでもなく賑やかだった。また、なにもかもをあまりにも急いで進めているせいか、工事現場のまっただなかに飲食店や宿屋が無秩序に点在して、恐ろしく混沌とした風景になっている。

と——。

「道を開けろ！ 道を開けろ！」

「將軍閣下が、工事のはかどり具合をご検分なさる！」

「わきへ退け、下民ども！ 馬の蹄にかけるぞ！」

いかにも格の高そうな立派な鎧に身を包んだ騎兵たちが、声を張り上げ、道のむこうからやってきた。

（なにッ？ 将軍だと？ 敵将エレナその人がこの場にやって来るのか？）

すばやく、おれはシヴァと目配せした。

「いけねえ！ 旦那方、こっちへ！ ほら！」

御者が泡を食っておれの袖を引く。おれたちは急いで道のわきへ退いた。

「サラ。馬と馬車が目立って不安だ。移動させてくれ」

「うん、わかった」

シヴァの指示を受けたサラが、傭兵と見せかけているアレリア卿配下の兵に手伝わせ、そばの路地へ馬車を引きこむ。

後に残ったおれ、シヴァ、アレリア卿の三名は、顔を伏せつつも、目だけはあげて通りを凝視していた。

ほどなく、このむさくるしい場所には似つかわしくない、ひどくきらびやかな一団があらわれた。

きんきらきに飾り立てた、とんでもなく豪華な輿。担いでいるのは、これのために選抜されたと思しき、眉目麗しい若い兵。輿の前後左右には絹張りのローブをまとった魔法使いが配置されてライトの魔法で光球を浮かべ、その周囲を体格のいい完全武装の兵が囲んでいる。

これだけでも唾然とするほど珍奇な光景だったが、どういうわけか、輿の後から、このきらびやかさとは無縁の男がついてくる。

それは、こういう言い方はなんだが、かなり残念な容姿の男だった。

短軀で猪首なのはまだいい。年季の入った鎧を着こんでいるのも、おれに言わせれば輿担ぎの若輩者どもより頼もしく見える。だが、顔が……。禿げた頭頂部、むさくるしい無精髭、でかすぎるギョロ目、太い鼻に空いたほら穴みたいに大きな鼻の穴、そして——その鼻の穴から伸び放題の鼻毛……。ヒュームとケットシーの美的感覚は異なるが、ケットシーのおれが見てさえはつきりそれとわかるほどの醜男だった。

しかもこの男、もっとマシンな軍馬がいくらでもあるだろうに、小さなロバに乗っている。足が短いからロバの方が乗りやすいのか？ なんにせよ、ちんちくりんの見た目がよけいに強調されていた。

（なんだ、あの男は？）

おれが眉をひそめていると、アレリア卿が「ガラックだ。あのロバに乗っている男が、

副将のギャグだ」と耳打ちしてきた。

「えっ？ あれが？ 小男、とだけは部下から聞いていたが……」

人は見た目がすべてではない。とはいえ、高い地位にある人物には、それなりの威厳や風格があるものなのだが……。などと思っていると、おれたちの前を少し過ぎたところで、輿の中から鈴の鳴る音がした。

担ぎ手たちが静かに身をかがめて輿を低くする。魔法使いの一人がそそくさと輿の前垂れを引き開ける。

中から現れたのは長身の女だった。背に長く垂らしたくせ毛の赤髪は燃えさかる炎のようであり、目は少し吊り上がり気味で、美女ではあるものの陰のある顔立ちだ。薄紫地に金糸で稲妻の図柄を刺繍^{ししゅう}したローブをまとい、額には女王もかくやというほど豪華な宝石をちりばめたティアラ――。

（で、こいつが将軍のエレーナなのか？ 将軍と副将とで、ずいぶん違いがあるな）

地に下りたエレーナは、鼻をひくつかせて顔をしかめた。下々の者が汗と埃^{ほこり}にまみれているこの場所の空気は彼女のお気に召さないようだ。

それからエレーナは強い視線で辺りを睥睨^{へいげい}した。

「……………」

エレーナはしばし押し黙っていたが、やがて石組みの基礎部分のひとつに目を留めると、それを指さし、次に手招きの仕草をした。

するとたちまち、一人の兵が青い顔で駆け寄ってきて膝をついた。

「あれの監督をしている者か？」

エレーナが発した声は顔貌そのまま、いい声だが鋭くて、相手を鞭打つ響きがある。

「はっ、さようで」

「私の記憶ちがいであれば、三日前と高さが変わっていないようだが」

「作業を急がせてはおりますが、地盤が弱いとのことで――」

「いいわけをするな。人も金もいくらでも用意すると伝えているはず。もっと急がせろ。もっとだ」

「かしこまりました」

「三日後もこのていたらくなら、許さんぞ」

「はっ」

兵は怖い将軍の前で縮こまっている……かに見えて、人前で女に罵^{なぶ}られるのを屈辱と感じているのか、肩のあたりに怒りの感情が見受けられた。

「おいよお、エレーナ」

と……かっぽかっぽとのんびりした蹄の音を立て、ロバに乗ったガラックがエレーナのそばへ来た。

エレーナは顔をしかめて振り返った。

「ガラック、下りろ！ 私は將軍だぞ！ 上下関係をわきまえろ！」

「わかったわかった、そう怒鳴るんじゃねえ。ラディン陛下に工事をせっつかれていると
いったって、お前は仮にも將軍なんだから、ちったァ落ち着けや」

ガラックはいかにも不満げにぶつくさ言いながらロバを下りた。

「黙れ。私はここの全責任を負っている。ガラック、貴様とは責任の重さが違うのだ！」

エレーナは^{かんしやく}痼癢を起こしたようにわめいた。見た目通り、かなり激しい気性のようだ。

「わかったわかった、落ち着け」

『わかったわかった』は使うなと以前にも言っただろう！ 忘れたか！」

「……わかりましたよ。あのな、エレーナ。大堰城を速やかに完成させりゃ陛下の覇業は
成ったも同然てのはわかるし、そうなりゃ南部制圧の一戦に続いてまたまた大手柄、ての
もわかる。わかるが、あまりに工事を急がせすぎて、完成した後でどこぞに^{ほころ}綻びがあつて
みろ、手柄どころか大失態じゃねえか。こんな、ラクウェル^{かいびやく}開闢以来ってくらいの大工事
なんだぜ？ いくら急がせたって、限度ってものがあらァな」

「とはいえ、こうして現場に出むき、発破をかけねば、どいつもこいつも楽をしようとす
る。牛馬は鞭打たねば働かん」

「そういうのは將軍の仕事じゃねえよ、下っ端の兵がやる。お前はどんと構えて、作業を
邪魔するんじゃねえ。まったく、何度同じことを言わせりゃ気がすむんだ？」

ガラックは鼻毛を一本抜いた。本人がどう思っているかは知らないが、はたから見てい
ると、相手を馬鹿にしているようにとれる仕草だ。

「……………」

エレーナは凄い目つきでガラックを睨み、ふいと背をむけて大またに歩き出した。現場
の見回りなどするな、と言われたことに対する反発だろうか？

「あっ、將軍」

「どうか、独り歩きはなさらぬように……」

輿担ぎほか、兵たちがあわてて後を追う。ガラックも後を追った。

エレーナが向かってゆく先は、基礎を埋めこむために掘られた四角くて深い大穴。監督
の兵が、地盤が弱いと言っていたのが本当かどうか確かめるつもりなのだろうか？

「あっ——」

そのエレーナが、何に^{けつまず}蹴躓いたものやら、穴の手前で前のめりに身体を泳がせた。

すわ一大事、と空気が凍りつく中、おれはガラックが弾かれたように動くのを目撃した。
彼は驚くほどの素早さでエレーナの前に回りこみ、倒れかかった彼女を見事に支えた。

(ほう！ 姿形はああでも、ただ者ではない身ごなした。やはりひとかどの男だな)

おれは内心で唸^{うな}ってしまった。

だが。

「触るな、いやらしい！」

エレーナはガラックを振り払って立ち上がった。支えた拍子にガラックの手がエレーナの胸に回っていたのは事実だが、それにしたってあんまりな物言いではある。

「おい、なんだそりゃ。こんな深い穴に落ちてみる、へたすりゃ首を折っていたって不思議じゃねえんだぞ。それを、礼のひとつもねえのかよ」

さすがにガラックもむっとした顔になる。

エレーナはそれに答えず興へもどると、「気分を害した！ 帰るぞ！」と告げた。部下が開けるのを待たず、自身の手で前垂れをまくりあげて中へ入る。

こうして、きらびやかな興は来た方へ遠のいて行っただが、ガラックはその後を追わなかった。

「けっ。やってらんねえぜ、まったく」

吐き捨てつつ、鼻毛を一本抜き、フッと息を吹きかけて飛ばす。

それからガラックは、エレーナに叱責された監督の兵を手招きした。

「おう、気晴らしにそのへんで一杯やろうぜ」

「しかし、工事を急ぎませんと——」

「かまやしねえ。おれが奢るから、作業場の連中もつきあわせろ。働きづめじゃ、かえって能率が落ちるもんだ。時にはうさ晴らしもせにやな」

「ありがとうございます。では……」

兵は笑顔になり、はらはらした顔で成り行きを見守っていた労働者たちを手招きした。

おれはシヴァとアレリア卿に目配せすると、路地の物陰へひっこんでいたサラたちのところへもどった。

「いやはや、見ていてはらはらさせられましたよ。ああいうこと、よくあるのかね。つまり、エレーナ様の見回りだとか、ガラック様とのいさかいだとか」

おれは御者に向かってそれとなくたずねた。彼ならこの噂に詳しいと思えたからだ。

すると！

「マウラー様の情報通りでしょう？ あの二人、そうとうに仲が悪いんですよ」

御者はいきなりそんなことを言って、おれたちをのけぞらせた。

「え！　ちょっと！　マウラーさんの……部下だったの？」

サラが目を丸くする。

「ええ。あの方が使っている諜者の一人で、ノルムと申します、お見知りおきを……。切り出し場でみなさんを見かけて、大堰城の方にいる仲間に連絡しようと思っていたら、偶然にもみなさんが私の船に乗る運びとなりましたのでね。もうこの際、宿の手配もろもろ、私が引き受けようと思い立ちまして」

内心ではおれたちの驚きが楽しいだろうに、しれっとした顔で言っただけ。このノルムはハイエルフではなくヒュームだが、正体をあらわした今は、どこかマウラーに似た雰^{にじ}囲気が滲み出ている。

「そうならそうでもっと早く名乗ればいいだろう。敵地で驚かさないでくれ、心臓に悪い！」

アレリア卿が抗議すると、ノルムは「なにをおっしゃいます。お言葉ですが、これから化かし合いの極致ともいえるべき、敵将への離間工作に臨むのでしょうか？　私ごときに化かされて驚いているようでは、不安ですな」と、またまた人を食った言葉を吐いた。正論だが、やはりマウラーに似た、鼻につく態度の男だ。

「とにかく、マウラー様のご指示通り、みなさまを安心して泊まれる宿へご案内いたします。ガラックとの接触ですが、そちらもすでに手はずは整えておりますのでどうぞご安心を。ただ、私どもがお手伝いできるのはそこまで。その後はすべて皆様次第となります」

ノルムは茶目つけもなく事務的に告げると、すたすた歩き出した。

なお、宿についた後で、この男が懐におさめた金を返すことはなかった。もっとも、そういう煮ても焼いても食えないような手合いでなければ、臨機応変が求められる諜者という役どころは務まらないものなのだが。

＊　　　　　＊

翌朝、おれが目覚めると、すでにシヴァは起き出して、窓辺に立っていた。

空が白んでこそいるが太陽は昇っていない時刻だ。おれはいつも朝が早いものの、シヴァはそうではなかったように記憶している。

「どうした、シヴァ。お前ほどの男が緊張で眠れず、か？」

話しかけると、

「いや、ぐっすり眠れた。だけど、今朝はなぜか早く目が覚めてしまったんだ」

シヴァは窓の外を眺めたままで答えた。

「シヴァ。なにか、考え事の最中か？」

「考え事っていうか、後悔っていうか、今さら考えてみたところでどうにもならない話な

んだけどさ」

シヴァはいったん口を閉ざし、振り返って、反対側にあるドアへ視線を飛ばした。

ここは敵地、できれば有事に備えて広い一室をとり、全員が同じ部屋で眠りたいところだ。が、ノルムが案内してくれたこの宿は二人部屋しかない構造だった。そこでやむなく、二人部屋を複数とる形で宿泊しており、この部屋にはおれとシヴァがいるのみだ。

シヴァは足音を殺してそっとドアに歩み寄ると、静かに引き開けて、誰も聞き耳を立てていないことを確認してからもどってきた。よくよく切り出しにくい話題のようだ。

果たして。

「じつは、さ。おれたちの目の前に敵の総大将と副将が姿を現したあの時、ちらっと思っただ。これは千載一遇の機会じゃないのか、思い切ってドラゴンハーツを使い、二人を討ちとるべきじゃないのか、と」

シヴァはとんでもないことを言った。

「暗殺だと！ 敵地のどまん中、まわりじゅう敵兵だらけのあの場でか？」

「ああ。たちまち、わんさか兵が殺到してきただろうけど、ドラゴンハーツにものを言わせれば、なんとか突破して逃げきれたかもしれない。ものの本にいわく、勇将の下に弱卒なし。逆に言えば、愚将に率いられた兵は弱体化するってことだ。南部制圧の一戦で大活躍した有能な二人の将がいなくなれば、大堰城の防衛力は半減したも同然、力攻めでもなるとかなった……かもな」

「お前ってやつは、外見とは裏腹にとんでもない暴れん坊だな」

「そうか？ おれはべつだん荒々しく生きたいわけでもない。おれの思考の基本は、あくまで、パッシェリカ陣営にとって何が得になるのか、だ」

「大胆な発想という点以外は評価できんな。エレナは宮廷魔法使い時代からその道では知られた凄腕の魔術師、ガラックも一介の傭兵から昇りつめた男だぞ。ドラゴンハーツをもってしても、一瞬でカタをつけられたかは疑わしい。そしてもし、瞬時に事を成せなかったなら、うんかのごとく兵士が殺到してきて何の成果もないまま逃げるほかなくなり、離間工作は仕掛ける前から終わり。あまりにも分の悪い博打だ。お前に全幅の信頼を置くパッシェリカ陛下でさえ、この場で今の言葉を聞いたなら、軽率だと咎めるのではないか？」

「うーん、やっぱり、そう思うか」

「ああ。それに、あの二人がいなくなったとて、ラディンが抱える将兵には有能な人材が少なくなかろう。新たに大堰城を任されることとなった者が、エレナやガラックよりはるかに劣る大間抜けと期待するのは虫がよすぎる」

「うん……。そうだよな。やらなくて正解だったよな。まあ、おれもそう思ったし、だから仕掛けなかったんだ。忘れてくれ」

ばつが悪そうに人さし指を頬でかくシヴァを見ながら、おれは笑ってしまった。

「ん？ どうしたグレイン」

「なに、頼もしいと思ったんだ。マウラーや、その手下のノルム……ああいう連中を相手にし、うまく扱ってゆかなければ、パッシェリカ陛下は玉座につけん。だが、お前なら——お前ほど剛胆で、時に無謀と思えるほど突拍子もない行動をとることも厭わない男が陛下のそばにいてくれるなら、頼もしい」

「褒め言葉と受けとっておく」

「もちろんだ、褒め言葉に決まっている」

それからおれは、少し迷ったが、思い切って、言おう、と決断した。

「なあ、シヴァ。おれは、お前を助けることがパッシェリカ陛下を助けることにつながると思ってきた。お前がそうであるように、陛下にとってなにが得になるかを合理的に考えた結果として、そういう風に思ってきたんだ。だが、今後は——おれとしては、お前と友人でありたいと思う。今のよう^{うかつ}な迂闊に相談できないことでも、おれには遠慮なく言ってほしい。おれなりに考え、忌憚^{きたん}のない意見を述べる。よそへ漏れたらまずい秘密なら、胸にしまって他へは漏らさないと誓おう」

正直なところ、少し照れ臭かった。ケットシーは弱小種族として蔑視されがちだから、他種族に対して警戒感がある。他種族の友人を作るのが難しい。

だが……シヴァは、迂闊には聞かせられない話を、迷った末、おれに聞かせた。おれはそこにシヴァの孤独を感じた。この男は孤独で、友人を欲している、と解釈したんだ。

パッシェリカ陛下がまさにそうだが、高い地位にある者は、たくさんの人間に囲まれていても孤独だ。政治的な事情そのほか色々あって、容易に本音をもらせない。

シヴァにはサラという妹がいて、とても仲がいい。だから、彼女がシヴァの本音を聞く相談相手になってくれているとおれは今まで思っていた。けれど、シヴァは色々なことが負担になっていて、サラと分け合ってもまだまだ重いのではないか。もう一人か二人くらい、相談相手がいるべきではないのか——。

「友達……？」

シヴァは驚いた様子でしばしおれを見つめていた。

それからうつむき加減になり、何事か深く考えこむそぶりを見せてから、顔をあげた。

「じゃあ、その、グレイン。今の言葉に甘えて、重要な任務の前に、なんだけどさ。聞いてみたいことがあるんだ」

「なんだ、改まって。おれは、今、誓いを立てた通り、秘密は守る」

「……パッシェリカのことなんだけど。そのう、マウラーが政略結婚を持ちかけてきただろ。あれ、どう思う？」

そうとうに深刻な悩みであることが、目つきにあらわれていた。

「なるほど」

おれはうなずいた。陛下とシヴァはどちらもヒュームだし、陛下のシヴァに対する態度を見ていても、シヴァの陛下に対する態度を見ていても、二人の感情は察しがつく。

「あの件、おれは反対だ」

即答すると、シヴァは「あ、やっぱりそう思うか！」と明るい声を出した。

「でもグレイン、どういう理由で反対なんだ？」

「どうもこうもあるか。おれたちが一番大変な時期には知らんぷりしてたくせに、いざ自分たちの身が危ういとなったらすり寄ってきた挙句、女王陛下の夫の地位が欲しくて結婚したがるエルフのお坊ちゃまだと？ 願い下げとはこのことだ。おいシヴァ、そんな政略結婚が成立した日には、お前が結婚式場でドラゴンハーツを使ってパッシェリカ陛下をさらって逃げてもかまわんぞ」

「そこまで言っちゃうか。……って、おれなら、パッシェリカと結ばれてもかまわないって口ぶりだけど……？」

「おれはパッシェリカ陛下を敬愛している。もう他人の気がしない。君臣以上の間柄だと思っている。だが、ヒュームとケットシーは男と女の交わりをもてない種族だ。だから陛下には、おれのお眼鏡にかなう人物と結ばれて欲しいと思う」

「おれなら、お眼鏡にかなうのか」

「今のところはな。ただ、女をものにしてつけ上がる男は少なくないし、お前がそうでない保証はない。仮に陛下と結ばれたとて、常におれの目が光っている。そのことを忘れるなよ」

これ以上ないくらい真剣な瞳で見つめると、シヴァの顔も引き締まった。

「そうか。グレインは、そんなにもパッシェリカを……。わかった、心に留めておく」

うなずいて、シヴァはふっと肩の力を抜いた。

「おれ、どうやら大堰城攻略の前に、ひと勝負かける必要があるそうだな」

「その勝負の結果がどうあれ、心を整理して大一番に臨むべきだろうな」

「ああ。グレイン、話を聞いてくれてありがとう。そして、今後ともよろしく」

TURN8

金はあればあっただけいい。そういうもんだろ？

——ガラック・ダンダムズ

男は顔じゃねえ、なんて言葉を本気で言えるのは、ツラで難儀したことのねえ野郎だ。十人並みよりぐっと下がって、そこからさらにもっと下がって……てなご面相のやつは、口が裂けたってそんな台詞吐けねえよ。

で、このガラック・ダンダムズ様はといえば、蛙や蛇でももうちっと愛嬌^{あいきょう}があるんじゃないかねえのかって御尊顔^{ごそんがん}で産声^{うぶごえ}をあげなされたあげく、おふくろが食わせてくれたモンが悪かったと思えねえのに、猪首で短足、見られたもんじゃねえぶさいくへとお育ちになられたわけよ。

ガキってなァ、時に大人より残酷なもんだ。ラクウェルの片隅の小さな村で、おれは毎日いじめられっぱなしだった。

どんな風だったかって？ こう、みんなが遊んでいるとするだろ？ おれも遊びたい盛りだから、まぜてくれと頼むわけだ。おれは村じゃ裕福な部類のでかい雑貨商の一人息子で、親同士につきあいがある子もいたから、(しょーがねーなー) みたいな空気はあるものの、いちおうはまぜてもらえるんだよ。で、かくれんぼだ、鬼ごっこだ、虫とりだ、戦争ごっこだ、と色んな遊びに興じるわけだが……おれがちょっと活躍して、ほんの少しだけ得意になって「やったー！」なんて言おうもんなら、えらいことになる。

「おい、ぶさいくがなんか言ってるぞ」

「黙れよぶさいく」

「あんたって声も太くて気持ち悪いから黙ってて」

……とまァ、石つぶてよりも痛い言葉を次から次へとぼんぼん投げつけてきやがんの。

ラクウェルは広いから、大陸のどこかには、こういう境遇でも明るさを失わずに育つ子もいるのかもしれねえ。しかしなァ、たいていはそうじゃねえだろ。おれは次第次第に笑顔の少ない、薄暗い目をした、よけいに近寄りた目い見た目の嫌われ者になっていった。

ああ、ニガニガしき我が子ども時代！ どんな集団にも、頭をはって統率するやつがいる。おれが入っていた村の遊び仲間——三十人くらいの集団だった——じゃ、おれより三つ年上のライナスってのがそうだった。手足の長いすらっとした身体つきで、顔はきりっ

としていて、将来は美青年間違いないと誰もが太鼓判を押す美少年でさ。子どもにしちゃ頭の回転も早くて、村にはこいつの対抗馬になりうる同世代のやつはいなかった。

で、この集団には女の子も十二、三人混じっていたんだが、かなりきれいな子が二人いて、その両方がライナスに熱い視線を送りまくっていた。いつもライナスのそばにべったりだし、遊びの途中でどこかへ移動するとなると、競ってライナスの手をとろうとする。なにかの拍子にライナスがちょっとすり傷でもこさえようもんなら、さあ大変。

「やだ、ライナス、血が出ているじゃない。見せて！」

「あ。私、傷薬持ってきているよ。塗ってあげる」

「え……？ いいよ、このくらい、たいしたことないって」

「そんなことない！ こういう怪我から大変なことになる人もいるんだよ！」

「そうだよ！ ライナスがそんなことになったら、あたし、生きていけない！」

……こんなのを、自分には一生縁のねえ小芝居だと本能的に悟りつつも、うらやましさを隠そうにも隠せない表情で指くわえて眺めているぶさいくの気持ちがわかるか？ あん？ 本当の本当にわかるか？ ええ？

おれなんてよ、戦争ごっこの最中に、ぶさいくだからってんで囃し立てられながら石つぶての集中砲火を浴びせられたあげく、額がぱっくり割れて顔面血まみれになったことがあったんだが、それを見て女の子が顔をしかめながら、ひとことこう言った。「うっわ。気持ち悪」……。

てェわけだよ。おれは子ども時代、それともかなり若い時分から、（なにがしかの力を身につけないと、人生の先行きは暗いな）って思いを抱くようになっていった。

ぶさいくなおれでもみんなの輪に入れてもらえるのは、親が裕福だからだ。親同士のつきあってもんがあるから、親の影響下にある子どもも、ある程度は配慮せざるをえない。

裕福。お金持ち。金！ そう、金は力だ。ぶさいくに生まれついた理不尽を、完全に覆せるとまでは言わねえが、ある程度はなんとかできる力、それが金だ。そのことをおれは理屈じゃなく、もっとう、はるかに深く魂にしみとおって根を下ろす『真理』として学んだんだ。

で、だ。

なにしろ小さな村だから、集団の面子^{めんづ}に変わり映えがないまま時が過ぎてゆく。

だからライナスはいつまで経っても女の子の憧れの的であり続けたし、おれはみんなが見下すみそっかすのまんまだった。

おれが十四歳になった時にゃ、ライナスは十七。そのころから、やつは男友達とのつきあいより、女の子との逢い引きに精を出すようになっていった。

十四ともなりゃ、男と女ってもんに興味が湧いてくる。そういう時分に、自分が求めても得られないものを当たり前のように得ているやつがそばにいるってなァ、キツイぜ。

いつしかおれは村を出たいと真剣に願うようになっていた。

そんな折だ。ある暑い夏の日、ひさしぶりに伯父のグスタフが村へ帰ってきた。

伯父は傭兵稼業の男で、内海の漁^{すなど}りで栄えるキンドラ家に雇われている私兵だった。おれと同じくひでえご面相だったが、おれとは違って図抜けたガタイの持ち主だったから、子どものころは悪ガキどもの大将だったらしい。

グスタフは荒稼ぎしているものの金づかいも荒い性分で、弟、つまりおれの親父とは仲が悪かった。なにせ親父は徹頭徹尾、堅い商売人だったからな……。また、はっきり口に出したことはねえものの、うちの親父って、おれの本当の父親は自分じゃなくグスタフじゃないのかと疑っていたフシがあるんだよ。グスタフは酒癖も女癖も悪く、しかもおれとは、その……ぶさいくって点で共通していたから。まあ、だからって、親父がおれとは似ても似つかない美形だったかといえ、それはねえんだけど。

伯父は結婚しておらず、当然、子どももいなかった。そのせいか、おれをかわいがってくれた。遊んでくれたり、王都で買った小粋なおもちゃをくれたり、傭兵稼業ならではの様々な武勇伝を聞かせてくれたり……。

おれも、グスタフが好きだった。

「伯父さん」

そんなわけで、おれは前々から思っていたことを彼に相談してみることにした。

「なんだガラック、真面目な顔しやがって」

「おれ、伯父さんみたいに傭兵になりたい。この村を出たいんだ。連れていってくれよ」

「え？　おいおい、親父に相談したのか？」

「してないよ。反対されるに決まってる。だけど、おれなりに考えてのことなんだ」

「あのなァ……。おれが今日まで生き残ってきたのは、強いからじゃなくて運が良かったからだぜ。そのくらい危険な商売だ、わかってんのか」

「わかってるつもりだよ。伯父さん、いつも自慢げに言ってるだろ。荒稼ぎして、うまいもん食って、いい服着て、いい女抱いて、これこそ人生だ、って。おれも、そういう風に生きたい。この村で、このツラで、みんなに見下されながらも真面目に商売に励むなんて、そんな生き方できるもんか。おれのことを誰も知らない場所で、腕一本で荒稼ぎして、商売女だっにかまわない、女を抱きたいんだよ」

おれの言葉には真実の香りがあると感じたのだろう。グスタフは深く考えた末、親父を説得して（最後は殴り合いになってしまったが）、おれを村から連れ出してくれた。

それが、おれ様の傭兵稼業のはじめの一步ってわけよ。

あれから、色々なことがあった……。伯父は、おれに傭兵として必要なあらゆることを教えてくれた。グスタフ。おれのもう一人の親父。時に厳しく、時に優しくった。

だが、ラクウェルの大戦乱が始まったころ、彼は剣に倒れるのではなく、病に倒れて、この世を去った。

その後、おれに大きな転機が訪れた。おれは伯父の後釜に座る形でキンドラ家の傭兵頭になっていたが、キンドラの当主だったカリムは、でかい稼ぎがある癖に税の支払いを渋って、ラディン陛下の怒りを買っちゃったんだ。で、ラディン陛下がブツ殺してやるとばかりに攻め寄せてきた際、おれは速やかにカリム・キンドラ^{あや}を殺めてその首を陛下に差し出した。

そのう、なあ。当時、世間様は、ガラックは平気で飼い主を裏切る狂犬だって噂したもんだが、おれにも言い分はある。カリムは雇っている私兵と、砦じみた館を頼みにして、ラディン陛下と徹底抗戦しようとしていたんだ。勝てるわけねえ、と傭兵頭のおれが説得しても、聞きやしねえ。徹底抗戦して勝てなかったら、カリムはもちろんキンドラ一族は女子どもにいたるまで皆殺しの憂き目にあう。もちろん、おれやおれの仕事仲間も皆殺しにされる。おれはものの道理をわきまえねえアホを一人を殺し、その首を手土産に嘆願することで、多くの命を救ったんだ。

なんにせよ、おれはラディン陛下の歓心を買った形となった。戦乱の世の中だから、そういうことならそういうことで、その状況を利用しない手はない。だろ？　だから、以後、おれはラディン陛下に仕える正規兵となった。

それからは忙しい毎日になった。平和な時代に一介の商人の私兵をやっていたころは、傭兵だったってけっこうのほほんとしていられたもんだったが……。戦乱の世で、それも戦乱の中心であるラディン陛下の麾下となったんだからな。反乱の鎮圧、砦攻めや城攻め、税の支払いを渋る大商人や村への脅し、毎日毎日やることが山積みだった。

ただし、ラディン陛下は、手柄さえ立てりゃ褒美もばんばん与えてくださるってお方だった。やり甲斐があるってもんだぜ！　ぶさいくでちんちくりんだからこそ、外見のことでなにかと損ばかりしてきたからこそ、おれは勇躍した。

おれは剣に命を託し、労を厭わず陛下のために働いた。またおれは、雑貨商の跡取り息子だったんで読み書きや計算を親父から仕込まれて育ったが、兵士ってなァ大半は無学だ。それだもので、学のあるおれはなにかと重宝された。例えばの話、戦場で食糧や水を公平に分配するのだって、算術ができなけりゃ話になんねえ。なにかの数があわねえとなりや、誰か手癖の悪いやつがちょろまかしているってことになるわけだしさ。

ツキにも恵まれて、おれはとんとん拍子に出世した。しこたま金を稼ぎ、女なんざ、高級娼婦でさえ遠慮なく買えるご身分になった。自信がついたぜ。子ども時代にゃ、自分のことを虫けらみたいな生き物だと卑下していたが、それはもう遠い昔の、苦いことは苦いが、立身出世した我が身をかえりみればオツな苦さの思い出となった。

さて、しかし――。

グスタフが言っていたっけ。

「ガラック、今から言うことを絶対に忘れるなよ。どんなに稼いでも、明日には命が消し飛んで、酒も女も楽しめなくなっちゃうかもしれない、それが傭兵稼業だ。だからみんな金づかいが荒い。金を使わずにはいられない。でも、いいか。おれは金を全部使ってはいない。貯めているんだ。いつかこの稼業を引退する。その後は、平和に、安らかに、生きるつもりだ。それが人間らしい生き方だからだ。お前もそうしろ」

亡くなった時にわかったんだが、伯父は本当に金を貯めていた。金は何通かの手紙とともに箱にしまいこまれていた。その手紙を読むまでおれは知らなかったんだが、伯父はある商売女と将来を誓いあう仲になっていて、引退後は彼女と結婚、故郷の村へもどってすごす……予定だった。お相手の商売女が本気だったかどうかはわからねえが、少なくとも伯父は本気だったようだ。

けれど、その夢をかなえることなく、この世を去ってしまった。

おれは――どうなんだろう。

望外の出世をして、しこたま稼いだ。もう足を洗っても豊かに暮らせるだけの蓄え^{たくわ}がある。

しかし、大商人の私兵だったころなら、「金が貯まったし、そろそろ足を洗います」も通っただろうが、將軍の地位にまで出世したおれが辞めますと言ったとして、ラディン陛下がそれを快く承諾してくださるとは思えねえ……。南部を制圧したことで、陛下は大陸の群雄の中で完全に抜きん出た存在となったが、まだまだ大陸全土の平定にはひと山、ふた山、越えなけりゃならねえだろう。そんな情勢下で將軍ともあろう者が、金も貯まったし一身上の都合で辞めます？ ブッ殺されても不思議じゃねえや。

じゃあ、このままラディン陛下の下で將軍を続けたとして、無事に生き残れるだろうか……？ 陛下は今、圧倒的優勢にある。でもよお、勝負ってなァ、最後の最後までわからねえ。『優勢』なんてのは、あくまで『過程』だ。おれだって生き死にの商売やってきた者の端くれだ、そこんところは骨身に染みてわかってるのさ。

……………。

……………。

いつの日か、おれは伯父のグスタフがかなえられなかった幸せ、平和で穏やかな日々ってやつを送れるようになるだろうか……？

南部制圧戦の後、なぜかこのことをよく考える。

でかい戦いが味方の大勝利で終わり、しかもエレナとおれは大手柄を立てた。燃えつきまったというか、あれでもう人生の頂点が過ぎ去っちゃった、そんな根拠のない感覚があって、どうにも拭うことができねえんだ。

エレナともども、ラディン陛下から大堰城の工事を新たな任として命ぜられたが、ここは斬ったはったがない。暇だ。時間だけは無駄にたくさんある。だから、ついつい考え事をしちまうのかもしれない。

＊ ＊

「ガラック様。少々、よろしいですか」

その日、おれが朝っぱらから豪勢な飯をたいらげてげっぷを吐いていると、ゼルーダが顔を出した。

ゼルーダは、エレナのところにもおれのところにも、顔と名前だけで出入りが許されているエルフの商人だ。エルフはえらく長命な種族なんで、若々しく見えても実際にはかなりの年齢ってやつが多い。こいつもそうだ。まだ中年の見た目だが、実年齢は百を越えるってんだから恐れ入る。

「おう、どうした。とびっきりのいい酒でも入ったのか」

「いささか、こみいった話でして」

ゼルーダは給仕や警護兵にちらりと気にする視線をやってから、おれを見た。

「ふーん……。おい、部屋を出ろ」

おれは軽く手を振って人払いした。

「いや、これはまたあっさりと。今に知れた話ではありませんが、將軍はつくづく豪気なお方ですな」

「ヘッ。たかだかおれごときが、どんだけのやつだってんだ。どこへ行くにも四六時中、警護の部下がくっついてくるなんざ、庶民育ちのおれにはうっとうしいくらいさ」

「はは、ご謙遜、ご謙遜」

「世辞はいいから、さっさと用件を言え。おれア暇をもてあましてはいるがよ、その暇は、できる限り、娯楽の遊び風呂で潰してえんだ」

おれはぞんざいに言い放った。ゼルーダは無駄に年食ってるわけじゃなくて、相手を侮っていてもその感情を隠すのがうまい。ただし、おれのようにご幼少のみぎりから他人様に侮られまくってお育ちになられたお坊ちゃんだと、『隠すのがちょっとうまい』程度じゃ、

やっぱり見えちゃうんだよ、侮りの色が、な。

「では申し上げます。じつは、私の商売仲間で、ぜひ將軍にお会いしたいという者がいます」

「ケッ。とうとう正体をあらわしやがったな」

「は？」

「おい、エルフ野郎。お前がどこぞの諜者か、さもなきゃ諜者まがいの商人だってこたァ、とっくの昔にお見通しよ。お前のように賢ぶってるやつは、馬鹿とみれば際限なくナメてきやがるから、ぶさいくの見た目通りの大馬鹿野郎を演じてきた。おれを観察していただろうが、おれの方でもお前を観察しているとは思わなかったか？ お前が商人にしちゃ不自然なほどあちこちに連絡してるこたァ、調べがついてんのさ」

「——」

「ふん。商売仲間がおれに会いたがっている？ そんな話を切り出すのになんで人払いを要求する必要がある。お前の飼い主様が、内密の話をしたくておれの前に来やがる、そういうこつたろうな。で、そいつは誰なんだ？」

まくしたてると、ゼルーダはこれまでおれの前では一度も見せたことのない、蛇を思わせる危険な目つきになった。ただしその表情からは、初めて、侮りの色が消えていた。

「とんでもない邪推です。私は諜者などでは……」

「じゃあそういうことにしておいてやるから、さっさと話を進めろ。さっきも言ったように、おれは暇だが、つまらねえ暇潰しは嫌なんだ」

「そのう、私は顔の広い商人なので、そのつてを頼って、ある大物が接触してきまして。その方は、ガラック將軍との会見を求めておられます。手土産も持参しており、決して、將軍の損になる話ではありません。そのことは確約いたします」

「お前なんぞが確約したところであてになるか。まあいい、会ってやる」

「え！ ^{かいだく}快諾してくださるので？」

「ただし、時間は午前中。場所はここ、この部屋を指定する。のこのこ出むいて暗殺されました、なんてエ大まぬけな話は嫌だからな」

「ありがとうございます！」

「それより、誰なんだ、その大物ってのは。名前を言え」

「いえそれが、私にもわからないのです。私の間に仲介役が入っていて、その仲介役が名を明かしませんので」

「ま、我が身を守るため、お前としちゃそう言わざるをえねえよな」

「……………」

「ともあれ、暇潰しにはなりそうだ。そら、さっさと連れてきやがれ」

「……はい」

「あ、ちょっと待て。ひとこといいか？」

「なんでしょう」

「つまらんやつを連れてきやがったら、てきとうな罪状をでっち上げてお前を処刑するからな。覚悟しておけよ」

冗談だったが、ゼルーダは本気だと思っただけで、青い顔で退出した。その怯えた表情^{おび}を見て、おれとしてはまずまず溜飲^{おび}が下がった。

だが。

(どうもこいつは妙な話だぞ)

おれは考えこんでしまった。

地位が高くなり、権力を持つようになると、甘い汁吸いたさに色んなやつがすり寄ってくる。商売女どもは「將軍ってすてき！ 一介の傭兵からたたきあげだなんて、本当に男らしい男ですよね！」なんてエ心にもない言葉を平気で吐きやがる。商人どもは「こんな品がございまして……」と目玉が飛び出るほどブッ高い品を並べやがる。出世したいがため、おれに気に入られようとおべっかを使う兵も多い。有象無象、色々と来やがるんだ、ほんと。

(だが、ゼルーダは……やはり、ただの商人なんかじゃねえ。あの蛇のような目つき。生き死にの境目、危ない橋をいくつも渡ってきたやつが目だ。歓心を買ってどうこうって手合いじゃねえ。そんなやつが、内密でおれに会わせようとする大物？ 物騒な話だぜ)

だいたい、この大堰城を預かる最高責任はおれじゃなくエレナだっけなのに、おれに会いたい、ときた。うさん臭い、きな臭いってのは、まさにこのことだ。もっとも、エレナは癩癧^{かんべき}の強い女で、ちょっとしたことで爆発しちまうからな。おれの方が話のわかる相手だっけ判断なら、わからなくもない。

ともあれ、会ってみたいことには、どういう話なのかわからず対処のしようがねえ。

おれは無言で、テーブルに立てかけていた戦斧^{いくさおの}を手にとった。

おれには不釣りあいな馬鹿でかい斧だ。でかくて重いくせに、ものとしちゃア、並の鍛冶屋が鍛えた並の斧だ。今のおれなら、魔法の力を宿した名剣や名槍、なんつうブッ高い代物でも買おうと思えば買える。

だが、おれにとってこの戦斧は特別なんだ。

グスタフの形見だから。

おれは、この戦斧には死の運命を退ける守りの力が宿っていると信じて疑わねえのさ。

「伯父さん、おれを守ってくれよ」

独りごちたおれは、ふと刃の曇りが気になり、純白のテーブルクロスの手拭子を使って拭き始めた。

「あのう、ガラック様。朝食の皿など、後片付けをしてもよろしいでしょうか……？」

と、部屋の外へ追い出された給仕がドアを細く開けて顔をのぞかせ、おそろおそろの調子でたずねてきた。おれはべつだん凶暴な男じゃない。権力をかさにきた行為も、ま、ほどほどだ。だが、なんつってもおれの上にいるラディン陛下はみなに恐れられる存在だ。だから、おれもやたらと恐れられている。

「ん？ あなの、これから客がくる。ちょいと話をするんだ。手早く片づけろ。それが終わったら、おれがいいと言うまで絶対に入ってくるな。誰一人として入るんじゃない、いな」

「かしこまりました」

さあ、鬼が出るか蛇が出るか。

グスタフの戦斧を元通りテーブルに立てかけ、椅子に深く腰かけて、ふんぞりかえった姿勢で待つことしばし。

控えめにドアをノックする音があった。

「ゼルーダか？」

「はい」

「よし。客人だけ残してお前は消えろ」

「……はい」

くぐもった声で、何事かやりとりがあった。

すうっ、とドアが開く。

あらわれたのは、男二人、女二人の四人連れだった。男のうち一人はケットシー、残りの三人はヒューム。ケットシーは重そうな木箱を載せた台車をごろごろ引っ張っている。これの中身が手土産、ってか。

この四人のうち、先頭きって入室してきたのは体格のいい女で、どうやらこいつがこの一団の代表者だと思え――。

「うッ」

なめられてたまるか、滅多なことじゃ驚かぬぞ、と身構えていたおれだったが、思わず椅子から立ち上がってしまった。

「アノン・アレリア……！　なんてこった、とんでもねえ客人だな」

「ひさしいな、ガラック」

アレリア卿はぎこちない笑みを浮かべた。先方にもかなりの緊張が見てとれる。

「あんな^{へんび}辺鄙な土地から、おっと、悪く思わねえでくれよ。あんたのようなすこぶるつきのいい女が、遠路はるばる、おれみたいなぶさいくのツラを^{ちんじ}揉みにまかりこすたァ、椿事だな」

「大陸の覇を争う不倶^{ふぐたいてん}戴天の仇敵同士の会見だ、確かに椿事といえば椿事だろう」

「ふん。『不倶戴天の仇敵』？ そんなのは、互角かそれに近い力関係の相手同士でなければふさわしくない表現じゃねえのか。言っちゃなんだが、ラディン陛下は、あんたらのことをうっとうしい蠅くらいにしか思っていないと思うぜ」

「……………」

「とはいえ、ゼルーダが、とある大物をおれに紹介する、と言ってきた時にゃ、どこぞのチンケな群雄気どりが、ラディン陛下にやなるべく早くゴマをすっという方が得策と考えてやってきたんだろう、くらいに思っていた。まさか、あんたとはな」

「驚いてもらえたなら、来た甲斐があった」

「言うねえ。おっと、立たせたまんまの話ってのもなんだ、まあ座れよ」

顎をしゃくると、アレリア卿はおれの向かいの席に腰を下ろした。ほかの三人は卿の背後に立って周囲に視線を配った。

おれはしばし、この四人を観察する間をとってから、口を開いた。

「で？ 話ってのは？」

「いきなり、引っ捕らえろと叫ばれて大乱闘になるかもしれないと思っていたが、案外、おとなしい対応だな」

「おれはな、アレリア卿、あんたのことをこう思っていたよ。生まれてからこのかた、容姿もふくめてなにひとつ不自由なんざしたことのないお嬢様だつてな。パッシェリカとかいう嬢ちゃんをかばい立てすると決め、ラディン陛下の使いのおれをけんもほろろに追いつ返したのも、お嬢様らしく時勢が読めねえ愚かさゆえだと思っていた。だが、こんな風に敵地に乗りこんでくるたァ、たいした度胸だ。あんたに対する評価を改めたぜ。この後、展開次第じゃあんたらをとっ捕まえて牢にブチこむことになるが、ひとまず、クソ度胸に免じて話くらいは聞いてやるのが人情ってもんだろう。それに——おれァ、暇なんぞでな。あんたみたいなおっぱいのかい女が相手のおしゃべりなら、こりゃ楽しい暇潰しつてもんだ」

軽口をたたきながら胸を凝視すると、アレリア卿は露骨に顔をしかめた。なんだよ、見るくらいべつにいいだろ、減るもんじゃなし。下々の皆々様の税金を集めて暮らす領主様が、そんな狭量なことでもいいのか？

「そちらにとっては暇潰しでも、こちらにとっては危険を冒しての会見だ。あまり長居はしたくない。ガラック、用向きを単刀直入に言おう。パッシェリカ陛下はこの大堰城を落とすと決めた。我々が攻め寄せたら寝返れ。そうすれば、悪いようにはしない」

「うおー、こりゃまたスゲエや。力関係わかってんのかよ。おれは、今や大陸の半分がたを手中におさめたラディン陛下の信頼篤き將軍だぜ。このまま情勢が推移すれば将来安泰ってのに、なにが楽しくてそんな真似しなけりゃならねえんだ？」

「ほんとうに将来安泰だと思っているなら、それは違う」

「ほほおん。詳しくうかがいましょうかね」

「そもそもこの大戦乱は、ラディンの暴政により王徳が地に落ち、各地の領主がこんなやつに従えるかと離反したことにより始まった。仮にラディンが力をもってラクウェル全土を統一したとしても、その統治は長くは続かない。私もふくめ、各地の領主の、こんなやつに従えるか、の思いは変わらないからだ。たちまち、今のような戦乱の世へもどってしまふことだろう」

「……………」

「真の王にふさわしき者があらわれて王徳をとりもどし、各地の領主を力ではなく徳によって承服させたその時、初めて平和が訪れる」

「ま、一理あるわな。ラディン陛下は敵は絶対に許さねえってお方だ。南部だってよ、ひとまず制圧したはいいが、陛下のお気に召さないやつは片っ端から殺しまくるんで、恨みつらみがたんまり、いつ何時、どんなでかい反乱が起こっても不思議じゃねえって有様らしいぜ」

おれが陛下に対し批判的な言動をすると、予想外の反応だったらしく、卿は忙しく目をしばたいた。

「それがわかっているなら、なぜラディンなどの下で將軍をやっているのだ？」

「その気持ちは、あんたにはわからねえだろうさ。おれは平凡な一庶民としてこの世に生まれた。しかも、見ての通りの、ちんちくりんのぶさいくとして、だ。故郷の村じゃ、おれはみんなに見下されていた。だが今は、そんな男でも、剣をとって大出世できる混沌の時代だ。現に、おれは戦功を重ねてここまで出世した。金。地位。あんたは生まれながらどっちも持っていただろうが、持っていなかったおれにとっては……それも、それがなきゃ人間扱いされねえ人生だったおれにとっては、どうしても必要なものだったのさ」

「そうになると……金や地位が保証されれば、所属する陣営は問わないのだな？」

「まあな。だが、長期的にどうなるかはさておき、短期的には、ひとまずラクウェルはラディン陛下のものになるってことでほぼ決まりだろ。後はもう流れに身を任せてりゃ、ラ

クウェルの将来はいざ知らず、おれ個人の将来は安泰ってもんよ」

「ところが、そうでもない」

「ふん。あんたらが、ラディン陛下を打倒するってか？」

「その通りだ」

「根拠は？」

「第一に、パッシェリカ陛下には王徳がある。現に、ラディンに刃向かうのは危険だと知りながら私は陛下に忠誠を誓った。それだけの人物であり、ラディンなどとは比べものにならない器量の持ち主だ。また、私よりもずっと強大な、東リザード自治領をあずかる領主バルゴまでが陛下につくと決めた。もっともこのあたりは、くどくど話すまでもなく、とうに把握しているのだろう？」

「ああ。こっちも諜者はそこいらじゅうに放っているしな」

「第二に、ラディンは南部制圧であまりにも大勝ちしすぎたため、各地の群雄に、このまま暴王を放ってはおけない、力を集めて打倒しようとの機運が生じている。ことに、この大堰城の建造が開始されたことにより、北部のラディンに対する敵意、反感、警戒心は急激に高まっている」

「具体的に、どのくらいだ？」

答えるまでに、わずかながら間があった。その際、アレリア卿の背後に立っていた若い男が、卿の肩先を軽くつついたのを、おれは見逃さなかった。

「ミレディア神国のハイエルフたちが、力をあわせてラディンを打倒せんと、我々に与することを決めた。また、このバロード平原からは目と鼻の先にあるジェド騎士団領も、アデラス家とロムロス家が長年のわだかまりを捨てて、同盟軍の旗を仰ぐと決めた」

「ほう……」

おれは軽く顎を撫でたが、じつのところ心臓がばくばくしていた。

こっちも諜者を放って各地の情勢に神経を研ぎ澄ましているし、北部が団結する展開はおれの読みの範疇に入っていた。だが——予想外に動きが早い！

なにより、こんな重大な情報を敵将のおれにあげすけに言っちゃうってことは、だ。

こいつらはやる気だ。

戦力をかき集めて、この大堰城へ攻め寄せてくる気だ……！

「北部を恫喝^{どくわつ}するためのこの馬鹿げた大工事は、裏目に出たのだ。またこれは、恐怖支配はいずれ瓦解するという真理の裏づけでもある。いいか、ガラック。パッシェリカ陛下は大堰城攻略を決定したが、それは陛下お一人の意志ではない。陛下に力を貸すと決めた領主一同、またその領主が守っている民、そうした多くの人々の総意だ。そして、大堰城攻

略がなれば、これまで日和見を続けていた多くの群雄たちは、ラディンを倒すなら今この時とばかりに、こぞって同盟軍の旗の下に集うことだろう。そうなればラディンは終わいだ。ラディンは大陸の群雄たちの中で最大の兵力を有しているが、各地の群雄が有する兵力を束ねれば、ラディンの兵力など取るにたらないものとなる」

「——」

「ラディンの恐怖支配の根源は力だ。だから、力負けしていることが誰の目にも明らかな状況が現出すれば、我も我もとみなが沈んでゆく船から逃げ出す。結果、その力は加速度的に弱まってはや歯止めがきかなくなることだろう」

その未来図を信じて疑わないかのように、アレリア卿はいつのまにか、傲然とした、おれを見下す眼差しになっていた。

ちょいとばかり、かちんときたんで、おれはお返しをすることにした。

「お説ごもっともだが……話が肝心^{かなめ}のあたりにさしかかってきたことだし、おれとしちゃア、操り人形じゃなく、人形師の方から話を聞きてえな」

さっ、とアレリア卿の顔色が変わった。これこれ、こういうの。おれを見下しているやつの顔色が焦りで変わるってなア、いいもんだ。

「お前のことだよ、若造」

おれはアレリア卿の背後に立っていた若造をじっと見つめた。

「嘘か本当か、イスカリエン王朝の開祖ジェド王と同じくドラゴンハーツの力を持つ男……シヴァ。パッシェリカのもとで将軍に抜擢されて大活躍、と^{ちまた}巷で噂になっていやがるのは、お前だな？」

ずばって言ってやった。

えっ、と声をあげて動揺したのはアレリア卿の方だった。若造はぐっと歯を噛みしめてはいるものの動揺はない様子で、おれの視線をまっこうから受け止めていた。

「こっちが諜者を放っているのと同様、そっちも諜者を放っているわけだからな……。かつらで髪の色を隠しての旅だったが、どこかでバレるかもしれないとは思っていた」

若造は——シヴァは、ゆっくりと口を開いた。

「ふふん。ついでに言い当ててやろう。小柄な嬢ちゃんはお前の妹のサラ、そっちのケットシーは、パッシェリカを最初のころから支えていたグレインってやつだろ。そのサラって嬢ちゃんはたいそう絵が得意らしいが、こっちの諜者にも同じ特技のあるやつがいてな。似顔絵が回ってきたんで、いちおう目を通しておいた。たいがいのやつは、面倒臭えと形ばかり目を通して終わりだが、おれはこう見えても几帳面な性格なんだ」

「シヴァ……」

アレリア卿は、それまでの毅然^{きぜん}とした態度はどこへやら、そのへんの娘っ子と大差ないおろおろした様子で、シヴァとおれとを交互に見やった。つまり、お嬢様育ちのこのご領主様々がこんな敵地でも凜とした態度でいられたのは、背後にこのシヴァが控えていたからだ。

「アノン。交渉を一任する予定だったけれど、ガラックはおれと話すことを望んでいるうだから、ここから先は引き継がせてくれないか」

「わかった」

シヴァに言われてアレリア卿はしょんぼりと肩を落としたが、その顔は、どこかほっとしているようにも見えた。このお嬢様には荷が重すぎる任務だったんだろうなァ。

おれは立てかけておいた戦斧の柄を握り、人形師を睨みつけた。

「おい、シヴァ。なぜ黒子になっていた？ 女に交渉させて自分は陰で操ろうってのは、ちと姑息じゃねえか」

「そもそも、おれが將軍のシヴァだと見破られるとは思っていなかったんだ。その点、アノンはガラックと面識がある上に高い地位にあってパッシェリカの名代がじゅうぶんに務まる『格』だろ。アノンの方が話を進めるのにいいんじゃないかと思った、それだけだよ。おれは万が一の時のための用心棒としてついてきたんだ」

「用心棒ねえ。いざとなったら、ドラゴンハーツの力で、ってか？」

「ああ」

「そいつはおっかねえ話だ。ドラゴンハーツ……。ジェド王の權威を強化するための作り話かと思っていたが、本当にそんな力があるのか？」

「ここで披露したってかまわないが、焦らずとも、大堰城攻略戦で嫌でも目のあたりにすることとなるだろう」

「ケッ。ますますおっかねえことを言いやがる」

「といっても、正直に話すが、数万の軍勢がぶつかりあう規模の戦いにおいて、おれとおれが率いる一部隊だけを強化できるドラゴンハーツなんて、さしたる意味を持たない」

「ほう、謙虚だな」

「いや、単なる事実だし、ちょっと考えれば誰でもわかることさ。自分の力であれ、敵の力であれ、過大評価はだめ、過小評価もだめだ。数字のような形で正確に把握してこそ、有効な戦術を検討できる」

「で？ ありていに言って、お前のドラゴンハーツをもってしても、まともにこの大堰城を攻めたんじゃ勝ち目がねえと踏んで、おれに裏切れってか」

「いや、勝ち目はある。それもじゅうぶんすぎるほどに」

「む……」

「秘中の秘はさすがに明かせないが、この大堰城を攻略するための戦術はもう考えてあるんだ。ただ、その戦術をとれば多くの死人が出ることになる。あ、おれたちにとって意味じゃないぞ、この大堰城の守備兵に、って意味だ。なにしろ、城ごとになにかも全部を叩き潰すって方法だから。けれど、たとえ敵であっても無駄な殺生^{せつしょう}はなるべく避けたい、ってのが王徳あるパッシェリカ陛下の意志だし、おれも同感だ」

「———」

「その点、離間工作を仕掛けておいて、ガラックが裏切ってくれれば、犠牲ははるかに少なくてすむし、大堰城もほぼ無傷で手に入る。暴王を打倒するためとはいえ、あまりに多くの犠牲者を出してはパッシェリカ陛下の正義の看板に傷がつきかねないし、そうやって生じた恨みつらみが多いと、大陸平定後の政権運営に支障をきたすかもしれない。だから、こうして来たんだ。お互いの利益のために」

「おれたちを……城ごと叩き潰す、だと？」

おれは目を剥いた。

はったりだ。はったりを決まっている。そんな馬鹿げた方法、あったまるか。もし本当にそんな方法があるなら、なにもこんな形でほのめかす必要はねえ。いきなり軍団を率いて攻め寄せ、降伏すればよし、嫌ならこういう方法でこうするぞと使者の口から語らせりやすむこった。

しかし、このシヴァとかいう若造の、世間話をするみたいにさらっと言ってのけた表情、口ぶり……。それに、パッシェリカ陣営が正義を旗印としているあたりを考えると、軽々にはったりだと断定するのは危険か……。不気味だ。気味が悪いったらねえや。

「で、だ。アノンとの会話で察したけれど、ガラックはラクウェルの行く末より、自分の将来が安泰かどうか、それが心配なんだろう？ べつに責めたり馬鹿にしたりはしないよ。普通の人の感覚って、そういうものだと思うんだ。だから——あ、グレイン。箱、見せてやってくれないか」

シヴァはケットシーにうながした。

「ああ」

グレインが箱の蓋を開けた。するとたちまち、銀色の燦然たる輝きがこぼれた。

「ミスリルの延べ棒か！」

たいがいの手土産には驚かねえおれでも、思わず首を伸ばして覗きこんじまうほどの量だった。これだけでも、ひと財産どころじゃねえ！

「まず、このミスリルは今この場で無条件に渡すよ。こちらの本気度を示す気持ちの品と

して受けとってくれ。おれたちが大堰城に攻め寄せた際、ガラックが内応してくれてその結果速やかにここを制圧できたなら、その功績に見合うだけの地位と収入も保証する。大堰城攻略が速やかに達成されれば、さっきアレリア卿がいったように、各地の群雄はこぞってパッシェリカ陛下に味方し、ラディンの軍団は凋落ちようらくの一途をたどること間違いなし。大陸に平和がもどれば、ガラックも本当の意味で一生安泰だぞ」

くそう、しゃあしゃあと言いたい放題言いやがるぜ、この若造。

「実際、悪くない話だと思う。上役にあたるエレーナとうまくいってないんだろう？ 諜者の調べによれば、エレーナは宮廷魔法使い時代からラディンのお気に入り、男女の仲にあるとの噂もしきりだ。そして、過去の戦歴を調べてみれば明らかだが、エレーナは明らかに最前ひいきされて今の地位にある。はっきりいって面白くないだろう？ これは、エレーナにひと泡吹かせてやれる機会でもある」

グレインまでが、若造の尻馬に乗って言ってきやがった。

おれは、チッ、と鋭く舌打ちをひとつした。

「見くびるんじゃねえ。ラディン陛下は、世間がなんといおうが、このおれに活躍と出世の場を与えてくださったお方だ。それを裏切れるわけねえだろ、馬鹿野郎」

さっ、と緊張が流れた。おれが衛兵を呼んで斬ったはったの展開になると思ったか、シヴァとグレインはすばやく身構えた。

「と……言いたいところだが」

おれは、フッと苦笑した。

「正直なところ、陛下は——ラディンの野郎は、おれが大嫌いな苦勞知らずのおぼっちゃんってやつなんだよな」

んっ？ とシヴァが眉をはねた。

「エレーナだけでなく、ラディンにも不満があるんだな？」

「そりゃあ、あるさ。おれは泥にまみれ、汗にまみれ、陛下のため一心に働いてきたつもりだ。おれ自身の利益や欲につき動かされての行動にせよ、ほかの誰よりも、忠誠心を働きて示してきたと自負しているぜ。陛下は、戦功さえ打ち立てりゃ誰でも出世させてくださるお方だと思っていた。最初のころは……な」

「今は違うのか」

「ああ。あの野郎、エレーナをえこ最前ひいきしやがる。あんな、魔術の腕に限っては確かかもしれねえが、たいした戦功もなけりゃ泥まみれで働いたこともねえやつが、なんでおれより格上なんだ？ 納得がいかねえぜ。あの女は……そこの猫助が今言った通りさ。噂は本当だ。ラディンとエレーナは男と女の仲なんだよ。あの女は、おっばいやケツで地位を得

たんだ。ラディンはあの女のおっぱいやケツを、おれのような本物の戦士の血と汗の働きより上と評価したんだ。敵に対しては残忍であっても、身内には公正でなけりゃ軍団はまとまらねえ。なのに、その規律を破ってかえりみない。なぜそんな真似ができるのかと言ったら、しょせんラディンは、苦労知らずのおぼっちゃまの典型ってことよ。下々の気持ちなんざわかりやしねえのさ」

「……………」

「あの南部の戦い。南部を一举に制圧して、ラディンを覇王の座にひと息に近づけたあの戦い！ このこと、謀者の口からきいているか？ エレーナとおれは南部に配下の兵を商人や旅人のなりで少しずつ潜入させ、それを現地で結集してハイデン軍の背後をついた。それが決定打となった。あの策を立案したのはラディンだった。だが、それを実行するのが、どんだけ困難だったことか。こんなご時世だ、どこだって関所やらなんやらでの身元調べはきつい。それをかいくぐるために知恵を絞り、手配りし、策を現実のものとしたのは、^{はばか}憚りながら身を粉にして駆けずり回ったこのガラック様だ。エレーナ？ ハッ！ あの女はふんぞり返って、王が臣下にするように、よきにはからえとばかりにおれを顎で使っていただけだ……！ あの腐れアマは！ ただ偉ぶっているだけで出世！ そしてあのアマを出世させているのは、ほかでもねえ、ラディンだ！ 昔は、ラディンを尊敬していた。良かれ悪しかれ、とんでもねえことができる男だ、ってな。だが今じゃ、やつのことを考えただけで反吐が出そうになる。ライナスの野郎のツラが、やつに重なってしょうがねえ」

「腐れって、あの……落ち着け。な？ 　というか、誰だよライナスって」

シヴァは、おれがもの凄い形相で言葉を選ばずまくしたてたのに気おされたか、目を丸くした。

「うるせえ、こっちの話だ。忘れろ」

おれはしばし、ふー、ふー、と肩で息をした。

「えーと、話を元にもどすけれど。そんなにラディンやエレーナが嫌いなら、あたしたちの提案は渡りに船なんじゃないの？」

シヴァの妹が、おずおずと口を開いた。

「まあな。長らく仕えてきた主君を裏切ろうってんだ、ふたつ返事で寝返るってのは癪に障るが…………」

おれは鼻毛を一本引き抜くと、フッと息を吐きかけてあさっての方へ吹き飛ばした。

「このあたりが潮時かもしれねえ、とは思っていた。もうしこたま稼いだし、こんなしんどい稼業からは足を洗いてえのが本音だ。といって、辞めたいと言ったところで素直に辞

めさせてもらえる稼業じゃねえ。しかし、お前らに加担すれば……。お前らとしてもよ、事が成ったら、昨日までの敵将が自陣営に加わるより、一線を退いて田舎にひっこんでもらった方がありがてえじゃねえのか」

「ガラックが望むなら、戦後の処遇はそういう形でも構わない」

シヴァは真面目な顔でうなずいた。

「ふむ……。しかしよお、大將軍。おれが内応すりゃ、この城を攻め落としやすいつてのはわかる。わかるが、言うほど簡単な話じゃないぜ」

おれが『大將軍』と呼ぶと、シヴァは気恥ずかしげに微苦笑を浮かべた。

「じゃあ、問題になる点を言ってみてくれ」

「まず、部下のとりまとめだ。ここに詰めている守備兵は三万。エレーナ麾下が一万八千で、おれの麾下が一万二千だ。で、おれの麾下の内訳だが、一千ずつの隊が十二だ。つまり、千人長が十二人いる。こいつらのうち、少なくとも過半数は得心させなけりゃならねえ。さて、どうする？」

「さすがにそのあたりは、ガラックになんとかしてもらうしかない。ただ、パッシェリカ陣営の軍事における最高責任者として、おれが今ここで明言しておく。部下を寝返らせる工作には、惜しまず金を注ぎこんでくれ。つまりそう、今しがたガラックに渡したミスリルの延べ棒どっさり、みたいに。必要経費として考えるから、使った金は後で請求してくれれば、すべて補填する」

「当然、戦いの後で、おれの部下の地位や安全も保証してくれるんだよな？」

「もちろんだ」

「よし、その言葉を忘れるなよ。おれを登らせておいて、後で梯子を外すような真似をするんじゃねえぞ」

「だいじょうぶだ。信用してくれ」

「じゃあ次だ。むしろこっちが問題だぞ。今言ったように、この大堰城に駐留している守備兵三万のうち、エレーナの麾下が一万八千。あの腐れアマはおれの一・五倍の兵力を持っているわけだ。で、エレーナとその麾下は本丸……大堰城の中央区画に居座っている。一方、おれの兵は、本丸と連結している東翼で寝起きしているんだ」

「ここへ来るまでに、大まかなところは見たよ。中央部と東翼は完成しつつある。残すは西翼の工事、だな」

「ああ。なにが言いたいのかってえと、エレーナの兵はエレーナの兵で、おれの兵はおれの兵で、ほぼ独立した形になってるってことだ。おれがお前らの側についたとしても、エレーナは東翼と連結している通路さえ遮断しちまえば、籠城戦に持ちこめる。で、長期戦

になった日にゃ、ラディンが南部から大兵力を率いてやってくるぞ」

「うん。城の攻略に時間はかけられない。短期決戦でケリをつける以外、おれたちに勝ち目はない。また、おれたちが城のそばに出張った状態だと、さっき言った、ここを城ごとすべて破壊する方法もとれなくなってしまう。万単位の軍団を、それも川の中州から、短時間で退避させるのは難しいからな」

「そこんどこ、どうする？ 大將軍のお知恵を拝借といきてえんだが」

「うん……。色々と考えたんだが、一気にケリをつけるにはエレーナを城外へ引っ張り出しての野戦、これが最善だと思う。ガラック、エレーナをうまく説得してそういう方向へ誘導してくれないか」

「説得う？ おれとあのアマがどんだけ仲悪いか、それを知っていて言ってるのかよ」

「先刻承知だ。それだけに、エレーナの思考を誘導するには手のこんだやり口が必要となる……。まずは、この離間工作の内容をエレーナにバラしてくれ」

「え？ おいおい！ なにを言い出しやがるんだ、わかるように説明しろ！」

目を剥くと、シヴァはにやりと笑った。

「聞いてくれ。まずはこんな風に切り出すんだ。『なあエレーナ、耳に入りたいことがある。パッシェリカ陣営の間抜けどもが、あろうことか、このおれに離間工作を仕掛けてきやがった』と」

「ふむ」

「続きは、こうだ。『やつらはこの大堰城を楽に攻め落とすため、おれを内応させようってんだ。まったくナメた連中だ、おれがラディン陛下を裏切るわけねえのに。だが、おれはやつらが約束した報酬に釣られて、乗り気って風を装った。やつらの離間工作を逆手にとって、おれたちがでかい手柄を上げるためにだ』と」

「む……」

「『そもそも、おれが内応したって大堰城は簡単には落ちない。エレーナの麾下は一万八千。おれの麾下は一万二千。一人一殺でさし違えてもエレーナにはまだ六千の兵が残る勘定だ。その六千が、すでに完成している本丸に立てこもって籠城戦を展開、時間を稼いだなら、南部からラディン陛下が十万以上の大軍を率いて駆けつける。そうなれば逆賊どもは勝ち目なしと見て撤退せざるを得ない。だから、やつらはエレーナを城から出し、野戦に持ち込んで短時間で勝負を決したいと考えている』。さあ、肝心なのはここから先だ、よく聞いてくれ」

「おう」

「『やつらはおれを使って、エレーナを手のこんだ罠にはめようとしている。籠城戦を選択

すれば確実に勝てるが、その場合、ラディン陛下は南部の占領政策を放り出して駆けつける形となる。すなわちラディン陛下のお手をわずらわせることになるし、陛下が留守となればハイデンの残党どもが活発に動き始めるだろうから、南部の占領政策に支障が出る。また、手も足も出ないほどの大軍が来たとなれば、やつらは大堰城攻略は不可能と見切りをつけて速やかに撤退するだろう。その挙句、ラディン陛下が再び南部へ兵を連れて戻ったら、またぞろやつらが堰城を攻め始めた……なんてことになった日には、うっとうしくてかなわねえ』

「ふうむ、その通りだな。籠城戦なら確実にお前らに勝てる反面、色々めんどくさいことになっちゃう、か……」

「そうなんだ。で、ガラックは、こう続ける。『だが、エレーナ。やつらが攻め寄せた際、おれたちが城から討って出てやつらを撃破すれば大手柄だ。そうだろう？ 離間工作を仕掛けてきた時に、やつらはおれに手の内を明かした。連中の兵力はおよそ二万。おれの一万二千が加わらなけりゃ、おれたちの三分の二の兵力しかないんだ。——と、エレーナの功名心を煽り、じゅうぶんに勝ち目があると匂わせて野戦を選択させ、城から出たところでおれの一万二千が裏切り、勝負を決める。これが、やつらの描いた絵図だ』

「ほう。絵図をバラしちゃう、と。で？」

「こうたたみかけてくれ。『なあ、エレーナ、こいつを逆手にとろうぜ。おれの一万二千は、やつらにつくと見せかけて信用させておき、ひそかに、切り出し場の森の奥に隠れておく。やつらがこの中州に上陸して堰城へ攻め寄せたら、エレーナはおれの口車にまんまと乗せられた風を装って、城から討って出る。やつらは事が成ったと、総力を挙げて夢中で攻め立てるだろうが……その時！ おれの一万二千が、あらかじめ用意しておいた船を使ってセド川を速やかに遡り、やつらの背後を急襲する。逃げ場のない中州で逆賊どもは挟み撃ちにされ、しかも兵力はおれたちの三分の二しかねえんだから、たちまち壊滅だ。ラディン陛下はパッシェリカとその取り巻きどもを以前から疎ましく思っていたからな、おれたちのこの働きを聞いたら大喜びなさるに違いないぜ！』。とまあ……エレーナの裏をかこうとしたおれたちの、そのさらに裏をかいてやる、って話でエレーナを信用させるんだ。ただし、実際に戦いが始まったら、ガラックがとるべき行動は言うまでもないな？」

「……………！ なるほど。おれの一万二千は戦場へたどりついたら、お前らの背後に奇襲をかけるんじゃない、味方に加わるって寸法か」

「そういうこと。おれたちが動員する予定の兵力は二万三千から二万五千くらい。これにガラックの一万二千を加えると、三万五千から三万七千くらい。エレーナ麾下の一万八千に比しておよそ二倍だ。この兵力差で、しかも、広いとはいえ面積の限られた中州での野

戦となれば、もうこっちのものだ。側面からがむしゃらに兵をつっこませてエレーナの背後を遮断、大堰城へ戻りたくても戻れない状態にしまえば、おれたちの勝利は確定する」

「うーむ……考えやがったな……」

「エレーナは南部制圧の一戦で大きな戦功を立てたにもかかわらず、ここの工事を異常なほど急がせている。おれが思うに、エレーナは欲深いか、もしくは、ラディン麾下の他の将軍たちに比して特別な存在でありたいと願っているんだ。だから、さらなる功を欲して焦っている。その功名心をうまくくすぐってくれ。要点はふたつ。ひとつは、籠城戦なら確実に勝てる反面、そんな戦法は凡将でもとれるしおれたちを取り逃がすことになる、と強調すること。もうひとつは、おれたちの離間工作を逆用してパッシェリカ陣営を壊滅させれば大手柄になる、と強調すること。じゅうぶん乗ってきそうだと思うんだが……ガラックはどう思う？」

おれはしばし、まじまじと若造を見つめた。

それから、鼻の穴を広げて太い息を吐いた。

「シヴァ。お前って……嫌なやつだとか、悪いやつだとか、言われたことないか？ ひょっとして、人をハメるのが大好きな性格か？」

「え。そ、そんなこと、ないけど。そのう、おれとしては、ただただ、パッシェリカ陛下のために策を考えたまでのことだよ、うん」

うろたえるシヴァを見て、おれはにやりと笑った。

「いや、面白い。じつに面白いぜ、こいつは。お前らが離間工作を仕掛けてきやがったと、わざとエレーナにバラして、手柄を餌にひっかける！ で、最後の最後、土壇場も土壇場で、あのクソ女はこのおれにいっぱい食わされたと知り、地団駄踏むってわけだ！」

「ま、そういうこと。どうだい？ これでいけそう？」

「いける！ エレーナの性格を知りつくしているおれが太鼓判を押すぜ、それならいける！ 乗った！」

「それを聞いて安心した。ただ、エレーナがガラックの話を本当に信用しているか、怪しいと考えているフシはないか、そのあたりはくれぐれも注意を払ってくれ。だめそうなら、他の手を考えるから」

「いやいや、いけるって。おれが舌先三寸で成功させて見せるって。なあ……大將軍。今のうちに頼んでおきたいことがあるんだが、いいか？」

「うん？」

おれは居住まいを正した。

「おれはな、できればあのアマを殺さず生け捕りにしてえ。生き恥をかかせてやりてえのさ。泣きつ面を見てえんだ」

「……………」

「今までさんざん我慢していたあれやこれやを、あの上品ぶったツラめがけてぶつけてえんだよ。もっとも、あのアマに自害しちまうほどの根性があったら無理な話だがな。戦いが『こっち』の勝ちで終わり、あのアマが生きていたなら、身柄をおれに引き渡して、後はおれの好きなようにさせて欲しい。どうだ？ この要求、通るか？」

すると、アレリア卿が「うわっ……」と小声でつぶやいた。そちらを見やると、卿は汚らしい生き物を見るような目つきをしていたが、おれと目があうとあわてて視線をそらした。

「うーん、どうなんだろう、そういうのは……。おれたちは正義が旗印だからなあ」

シヴァは腕組みして難色を示した。

「なに、この場で明言してくれなくてもかまわねえ。前向きに検討してくれや」

「わかった。なににせよ、離間工作に応じてくれてありがとう」

「礼を言われる筋合いじゃねえ。こいつは取引だ。お互いに得になるから手を握りあうんだ。ただし、事が成らなかったら、お互いに損になるんだぜ。そこんところは肝に銘じておいてくれよ」

「だいじょうぶだ。仮にガラックが離間工作のどこかの過程で失敗し、もうどうしようもないとなったら、その時は最終手段だ、大堰城ごとすべてを潰す手に出る。もちろんその時は、ガラックやその配下が逃げられるように、なんらかの手段で連絡すると約束しよう」

「よし、商談成立だ。あんたらを手引きしたゼルーダは気に入らねえ野郎だが、有意義な会見だった」

おれは手を差し出し、シヴァと握手をかわしあった。

ほっ、と場の空気が弛緩する。

「ところで、シヴァ。お前の妹のサラは、絵が上手で兵に似顔絵をせがまれちゃかいてると、諜者から聞いている。記念といっちゃなんだが、ひとつ、おれの似顔絵をかいてくれねえか？ 見ての通り、女にモテるのは夢のまた夢、てなご面相だがよ」

「お安い御用！ じゃあ、早速かきますね。えーと、あたしの額のあたり、このへんを見ていてください。視線を動かさずに……」

サラは愛想よく引き受け、おれの前に椅子を引き寄せて座ると、テーブルに載っていた一枚のお盆を画板がわりにして紙を貼り付け、手慣れた様子でチョークを走らせ始めた。

「できました」

「どれどれ……ほう、うまいもんだな」

「絵だけは自信があるんで、そう言ってもらえると嬉しいです」

「ちなみに、似顔絵をたくさんかいているそうだが、おれくらいのぶさいくてなァ、どのくらいいるものなんだ？ 一千人に一人くらいか？ 二千人に一人くらいか？」

すると……。

「ガラックさんは、そこまでぶさいくじゃありませんよ」

サラはえらく意外なことを、それも真顔で言ってよこした。

「世辞はいらんぜ」

「いえ、本当です。確かにぶさいくだと思います。だけど、ぶさいくはぶさいくでも、『いい顔』ってあるんです。重ねてきた苦勞だとか、真面目さだかとか、そういう内面が滲み出ている顔……。ガラックさんは、そういう『いい顔』してますよ。ちなみにあたし、いつもは似顔絵をかく時、実物より二割増しくらいかっこよくかきます。その方が、かいてもらった人は喜ぶんで。でもガラックさんの顔は、あえてそのままかきました」

「なんでだよ」

「『いい顔』だったから」

「ほんとかねえ。まあ、とにかく記念になったぜ」

＊ ＊

南部を制圧した一戦がまさにそうだったが、でかい戦ってのは下準備が大変だ。というより、下準備の段階で勝ち負けが決まる。この段階で労を惜しまずかけずり回るのが、人の上に立つやつの仕事なんだと、おれは知っている。

てなわけで、大將軍御一行が去ると、おれは身支度を整えてすぐに動いた。

「おう、ついてこい」

警護の兵たちを手招きし、ロバに乗る。立派な体格の軍馬に比して、將軍らしからぬ乗り物だったのはわかってる。だが、おれにとっちゃこいつは愛馬だ。幾多の戦場を共に駆けてきた相棒だ。それに足の短いおれにとっちゃ、でかい馬よりずっと乗り心地がいいし、御しやすい。

ぽっくぽっくと蹄の音を鳴らしながら本丸へむかう。

エレーナは本丸の塔のひとつに造らせた、眺めのいい広間にいた。金遣いが荒い我らが將軍様は、無聊ぶりようを慰めるためと称して、大道芸人やら樂師やらを呼び寄せて賑やかにやっていることが多い。この日は、きれいなおべべで着飾った数名の踊り子たちが、歌いながらひらひらと舞っていた。

「おい。ちょっと話があるんだが、いいか？」

おれが顔を出すと、エレーナは露骨に顔をしかめて「見ての通り、忙しい」とつつけんどんに言った。

「忙しいってこたァ、ねえだろ。歌だの踊りだの、こんななァ、軍団を預かる將軍様の本分じゃないぜ」

「ふん。娼婦どもと遊び風呂につかって目尻を下げているお前に比べれば、はるかに^{みやびび}雅な暇潰しだ」

などと憎まれ口をたたきはしたものの、エレーナは手を振って踊り子たちを退出させた。

「エレーナよう。毎日毎日工事の見回りをして、そうとうにかりかりきているようだが…
…憂さがひと息に晴れちまうような、面白い話を持ってきてやったぜ」

「ふん。お前の言う面白いなど、あてになるものか」

「ま、そう言わずに聞けよ。請け合うぜ、聞いてびっくり、てえやつだ」

「ほう……」

エレーナは目を細め、唇の端を嘲笑する形に歪めた。どうせつまんないことほざくんだろ、このぶさいくが、と言いたげな表情だった。

しかし――。

おれが話を始めると、その表情が変わっていった。

そして最後には、エレーナは「面白い。じつに」と言ってうなずいたのさ。

TURN9

勝つことの意味。負けることの意味。

——柴崎 剣

離間工作を終えて帰途についたおれたちは、最後の最後にへまをやらかさないよう、怪しまれて詮索されることのないよう、あわてず騒がずゆっくりと引き返した。

「皆様、一人も欠けることなく無事に帰還しましたな。いや、よかった」

ジェド騎士団領の関所をくぐると、デラウス伯の姿があった。おれたちは彼に伴われて兵舎に入った。

「アレリア卿、首尾はいかがでしたか」

待ちきれないとばかりに、デラウス伯はたずねてきた。

「危険を冒した甲斐がありました」

「おお！ それを聞けば、まだいさかいをやめない身内のわからず屋どもを説得しやすくなります。大堰城を攻める一戦では、必ずや、以前申し上げた以上の戦力を出してみせましょう」

さて、ここからはもうできるだけ急いで引き上げたい。おれたちは馬車をこの場に預け、馬を急がせてラゴス砦を目指した。

「しょうぐーん！ シヴァ様ー！」

砦が見えてきたところで、頭上に黒い影がさした。バサバサと翼を鳴らして舞い降りてきたのはミモリーだ。

「ご無事でしたか！ ずっと心配していたんですよ！」

「見ての通り、全員無事だ」

「あたしたちの出番はなかったし、うまくいったんですね？ そうですね？」

「ああ、まあ。それはいいとして……あのな、ミモリー」

「なんでしょう」

「おれが將軍のシヴァだってことは、ジェド騎士団領の人たちにはまだ伏せていたんだけど……」

「あ」

グレインが「粗^そ忽^{こつ}なやつめ」と苦りきった顔でつぶやいた。

デラウス伯が連れていた供の者たちは、（えっ！）と驚いた顔になっていた。しかし、デラウス伯はさもありなんとばかりにうなずいた。

「やはり……。初めてお会いした時から、ただ者ではない、と感じていましたよ」

「正体を隠していてすみません。悪意があつてのことではなく、道中、アレリア卿を守るため、誰が味方か確実にわかるまでこの情報は伏せておきたかったんです」

おれは言い訳して、頭をかいた。

「我らの祖たる四騎士を従えたジェド王。そのジェド王のみが使えたとされるドラゴンハーツ。そのドラゴンハーツの力を持つ男が、どこからともなく突如としてあらわれ、パッシェリカ陛下のもとで將軍の地位についたとの噂……。あるいは、権威づけの政治宣伝かとも思っていました——」

「信じようが信じまいが、本当のことです。おれにはドラゴンハーツの力があります」

「ますます勇気づけられる！ このようにラクウェルが乱れた挙句、恐るべき暴王の影が全土を覆いつつある今、あなたのような方があらわれたのは何かの啓示^{けいじ}、あるいは運命的なものと感じられます」

「おれ自身も、そういうものを感じていないわけではありません。けれど、戦いの趨勢^{すうせい}を決めるのは、英雄や將軍といった一個人ではなく、互いの陣営の、多くの兵です。普通の人たちです」

「ふむ。風の噂が伝えてくる通り、あなたは特別な力を持っているばかりか、人格面でも將軍にふさわしい人物のようですね」

「過大評価です。いさかいが続いていたジェド騎士団をまとめあげたデラウス伯のご苦勞を思えば、おれなどただの若造ですよ」

砦に入ると、ミモリー麾下のセフィラ隊の面々やシャノーラやウィードなどが駆け寄ってきた。短い間とはいえ敵地で緊張を強いられていたためだろう、おれは多くの仲間たちの顔を見てほっと気がゆるんだ。

砦で一泊することとなり、ジェド騎士団の重鎮たちと会食。その後、あてがわれた貴賓室に、おれ、サラ、グレイン、アノン、ミモリー、リドリー、シャノーラ、ウィード、デラウス伯、そしてマウラー……幹部一同が顔を集めた。

「ひとまず、敵将ガラックと話し合った内容について、ざっと明かそう」

アノンが口火を切り、簡潔明瞭にまとめて話す。

「なるほど。ただちに、離間工作は首尾上々との報せをミレディアへも送ります。どうやら、この戦いの行方は決まったようですね」

マウラーはにこやかに笑った。

「そんな簡単な話ではなかろう。ガラックがうまくやってくれるかどうか、まだそのあたりは未知数だ」

とグレイン。

「いや、もう決まりですよ。戦う前に誰が勝つかは決まっている、そういうものです。やはり、ガラックを離間工作で一本釣りするのが得策と睨んだ私の読みは当たっていたようですね。傭兵。金で雇われた兵。いくら出世したとて、そういう人間の本质は変わりはありませんから」

うそぶくマウラーの言葉を、

「ふん。このハイエルフの、人を見下した言い方は気に入らないね。とはいえ、あたしもそうだけど、傭兵は信義がどうこうよりもまずは金ありきだ。もっといえば、主君への忠義や大義なんかより、我が身の幸せの方が大事、そういう人種だよ」

とシャノーラが肯定した。

「ええ？ それ、なんか誤解されそうな言いぐさなんだけど。あたしやリドリーも傭兵だけど、傭兵の相場が高騰しているこの御時世に、お安い価格でずっとパッシェリカ陛下を支えてきたんだよ？」

ミモリーが反論し、弟のリドリーが「そうそう」とうなづく。しかしシャノーラが「ハン！ そうは言うけど、パッシェリカ陛下が大陸を平定した暁には、それ相応のモンをもらおうって気まんまんだろ？」とツッコミを入れると、押し黙った。

「なににせよ、大堰城の戦いはこの戦乱の趨勢を決めかねない、後世の歴史に残るであろう一戦だ。だが、おれたちはまだ完全な一枚岩とはいえない。これから一枚岩を目指さなければならぬ寄り合い所帯なんだ。^{どたんば}土壇場で裏切りや日和見がないように、^{せつしょう}折衝やらなんやら、やるべきことは山積みだ。『行方は決まった』にはほど遠い」

おれはマウラーに牽制の視線を送った。

「おや？ もしやシヴァ將軍は、私やミレディア神国をお疑いで？ あれもこれもと疑い始めたらきりがありませんよ。そうした懸念をなくすためにも、我が君とパッシェリカ陛下の婚礼をご提案させていただいたのですがねえ」

「えっ！」

初耳だったらしく、デラウス伯が目を剥く。マウラーはその反応を楽しむように、薄く笑った。

＊ ＊

ラゴス砦を後にし、おれたちは帰路をたどった。

馬を急がせての道行きだし、旅疲れもあって、みんな口数が少ない。

ジェド騎士団領を抜け、東リザード自治領へ入ると、ロルカが関所で出迎えてくれた。リザードマンは人間の美的感覚からするとおっかない顔立ちの種族だが、ロルカの、牙を剥き大口を開けた笑顔を見るなり、おれの肩から力が抜けた。つまりそう、ジェド騎士団領の人々は友好的だとわかったものの、バルゴたちリザードマンの方がより信頼できる相手だと、おれは思っているわけだ。

そして、アレリア自治領へ……。

「ああ、見慣れた風景が広がっている！　ずいぶん、ひさしぶりに思える！」

アレリア自治領の中心にして居館があるイオディアの町が近づいて来ると、アノンは鞍から腰を浮かせ、感極まったように叫んだ。彼女の愛馬メディも、嬉しそうにひと声いかなかった。

「長い旅だったな」

おれも微笑してうなずいた。

往復で費やした日数は十四日。一か月どころか半月にも満たない。でも、バスや電車や飛行機を移動手段とする現代日本人の旅行とはまったくちがう。馬だぞ？　自分の足ではないにせよ、てくてくと一歩ずつ大地を踏みしめての行程だ。しかも途中からは敵地へ踏みこむ旅路だったから、精神的にもかなり消耗した。長く感じられたのも無理はない。

ついに、とうとう、やっと、アノンの居館にたどりつく、パッシェリカ以下、みんなが出迎えてくれた。

「アレリア卿。シヴァ將軍。サラ。グレイン……。伝書鴉がすでに無事の帰還を知らせてくれてはいましたが、顔を見てほっとしました」

そう言ったパッシェリカの瞳はうるんでいた。その輝きに、おれはひさしぶりにドキドキさせられた。

かくして、おれは館の自室に引き上げると、サラともども旅装を解いた。

窓辺のテーブルに向かい合って座り、ジャードをグラスに注いでひと息つく。

「なあ……サラ」

ジャードを飲み干したところで、おれは口を開いた。

「おれ、サラに謝らなくちゃならないと思う」

「えっ？　なに？　藪から棒に、どうしたの？　にーちゃん、復路の間、ずっと考え事をしている様子だったけど……」

「うん、色々と考えていた。大堰城攻略戦のこととか、そのほかもろもろ」

「んー。『そのほかもろもろ』のあたりに、なにかありそうな雰囲気だけど」

「そうなんだ」

おれはうなずいた。サラは勘が鋭くて察しがいい。仲がよくてさらにそういう特質があると、話相手として本当に助かる。

「じつは、さ」

「うん」

「グレインが、おれと友達になろう、って言ってくれたんだ。話しぶりいことでも、なんでも相談してくれ、って」

「へー。よかったじゃない」

「意外な申し出で面食らったものの、すごく嬉しかったよ。おれ、小学生までは人並みに友人がいたけれど、将来はゲームを作って生きてゆく、と志を立てて以降は……」

「毎日毎日、学校の授業が終わると、すぐさま家にとんぼ返りして、ゲーム制作に没頭してきたよね」

「ああ。帰宅部の上に、友達と放課後遊ぶわけでもない日々。友達はいないも同然だった。そういう境遇にサラを巻き込んでしまったこと、悪かったな、って今になって思った」

「なにを今さら……。確かに、にーちゃんとゲーム制作に没頭するようになってから、あたしも友達は減ったよ。だけど、にーちゃん。あたしは、あたしたち柴崎兄妹ほど仲のいい兄妹は日本じゅうさがしたっていないと自負しているよ。友達はいなくても、あたしはそのぶん、にーちゃんと長い時間を一緒にすごしてきたし、それは自分で選んだ道だから、後悔してない」

「そうか」

「そうだよ。こんな、もろ全部ファンタジーのラクウェルなんて異世界に転移したのに、日本にいたころと変わらず正気を保っていられるのも、にーちゃんと一緒なればこそ、だよ。あたしに謝りたいことって、それ？」

「もうひとつ、あるんだ」

「……ふーん……。まあ、言ってみてよ」

おれはジャードをグラスに新たに注いだ。サラのグラスのジャードも減っていたので、注ぎ足した。

「なあ、サラ。唐突だけど、^{ゲーム}と^{リアル}現実の差、ないし境界線って、なんだと思う？」

「え。いきなりそんなこと言われても……」

「結論から言うが、おれは感情移入の度合いが境界線だと思う。どれだけ真剣になれるかの差、と言ってもいい」

「むー。もっと具体的に説明してくれる？」

「そうだな、例えば——男性ゲーマーの場合、『ドラ○ンクエストⅣ』で、主人公の勇者は

自分の分身と位置づけ、自分の本名やあだなをつける。で、パーティーメンバーはアリーナ、マーニャ、ミネアの三人で固定し、まわりみんな女の子のハーレム状態。ライアン？

クリフト？ ブライ？ トルネコ？ そんなやつらいたっけとばかりに、馬車の中に押しこめたまんまエンディングまで一直線。そういうプレイをする人って多いと思う」

「あー、わかるわかる。まあ道中、トルネコは人質として出番があるけど」

「もしくは、『信長の野〇』で、自陣営に姫がいる。政略結婚の駒として使えば強力な同盟関係を結べる。それは自陣営の将来にとって明らかに有効な一手だとわかりきっている。でも顔グラフィックが……美人でかわいい。うちのたいせつな娘を政略結婚の駒なんぞに使ってたまるか！ この子は嫁になんか出さない！ ずっと親元、もっと言うとプレイヤーの手元に置いておく！ とかな」

「それも、あるあるネタだよな」

「ほかには……そうだな。クソゲーの、あるいは凡ゲーのレッテルを貼られて、世の中ではさほど評価されていない、とあるゲームソフト。だけど、自分はそのゲームのキャラクターが、あるいはゲームシステムが、もしくは雰囲気、とにかく大好きで、自分にとっては忘れがたい印象の一本になっている——」

「あるある。あたし、お父さんから薦められてプレイした初代プレステの『バロ〇ク』が大好きだもん。セールス的にもっと成功した有名なゲームがほかにいっぱいあるけど、あたしにとっては魂の一本。なんでって言われても困るけど、あのシュールで独特の世界観がとにかくあたしの心に響いちゃって……。んで、『バ〇ック』ってプレステ2でリメイクされていたのを後で知ってプレイしてみたけれど、なぜか、リメイク版はあわなかったなー。グラフィック面で粗さが目立った初代プレステ版の方が、あたしにはあの世界観にマッチした『いい絵柄』に感じられたんだよね」

「うん。ゲーマーなら、あるよな、そういうの。というか、これはいわゆるコンピューターゲームに限った話じゃないと思う。なあサラ、チェスや将棋を想像してほしい」

「どういうゲームかはわかるけど、駒のルールとかほとんど知らないよ」

「おおまかな概念を理解できればいい。チェスも将棋も、戦争を模して戦術を競いあうゲームだ。ポーンや歩は雑兵で、戦力の評価としては、たいしたことがない駒だ。しかし、それらの駒がすべて本物の人間で、駒をとられることが本物の戦争同様に死を意味したら、命令を下す立場にあるプレイヤーはどうするだろうか？」

「……普通のゲームみたいに、クレバーに駒を動かすことはできないと思う」

「そうだ。ましてや、ポーンや歩のひとつが自分にとって大切な人だったら……。プレイヤーは、ゲームの勝敗に直結するキングや王の安全など度外視して、その特別なポーンや

歩を死守し、一手でも二手でも長生きさせるための戦術をとると思う。それも、ただ単にチェスや将棋を指すのとは比べものにならない真剣さで、もてる知恵のすべてを振り絞って……」

「んー。じゃんけんやかくれんぼや鬼ごっこだって、勝敗に命がかかれば真剣にならざるをえないよね」

『命がかかっている』が一番単純明快だが、要は感情移入の度合いの問題だ。同じ将棋というゲームでも、暇潰しの遊びととらえているプレイヤーにとって、それは遊技だ。だが、お金や名誉や自身の存在意義をかけ、全知全能を振り絞って将棋を指すプロの棋士にとってはそうじゃないだろう。彼らにとって将棋はもはや遊技じゃない。人生そのもの、現実そのものだ」

「なるほど……。どんなゲームであれ、感情移入してのめりこむことによって、遊技ではなく現実なるわけだね」

「おれはそう思う」

「逆もまた真、なのかな。実人生があまりにつまらなくて、感情移入できなくて、真剣になれなくて、ゲーム以下だと感じられる人が、こんなつまらないことやってられるか、と自らゲームオーバーを選択するのが自殺……なのかも」

「かもしれない。で……おれとサラが作っていた戦争 シミュレーションゲーム S L G『ラクウェルクロニクル』だけれど」

「うん」

「おれにとっては、これ以上ないくらい感情移入しているゲームだった。当然だ、自分が思い描く理想のゲームを作るぞと志を立て、三年もの時間を費やしてきたんだから」

「あたしにとってもそうだよ。設定画、キャラのドット絵、とにかくグラフィックは全部あたしが担当したんだもん」

「で、だ。もうサラにはわかっていることだけど、おれが、戦乱の大陸ラクウェルにおける正史、大陸を統一すべき正統な人物として定めたのは、パッシェリカだった」

「に一ちゃんが、こんな女の子が彼女だったら、って夢想していた理想の美少女だよね」

「そっ、そうなんだ、うん。で、その……プレイヤーの分身である主人公キャラのデフォルトネーム（プレイヤーが特に名前をつけない場合、自動で適用される名前）は、おれのあだ名からとってシヴァとした。つまり、その一、『ラクウェルクロニクル』は、突き詰めれば、おれというヒーローと、パッシェリカというヒロインの物語なんだ」

「そのへんは、パッシェリカの顔グラフィックについてに一ちゃんからありえないくらい細かい描写をかき連ねた注文がきた段階で、あたしも察したよ」

「そんな『ラクウェルクロニクル』完成の目処がついに立った日……おれはどういうわけか、サラともども、この異世界ラクウェルに転移してしまった。そしてこの世界には、おれが思い描いた通りの、いやそれ以上に魅力的な、パッシェリカがいた。彼女は、暴王ラディンを打倒する志を立てたはいいが、やつの手勢に追われ追われて大陸の端っこまで追い詰められていた。おれはパッシェリカを助けたいと思った。彼女のために戦おうと思った。感情移入したんだ。真剣になったんだよ。この異世界ラクウェルって、なぜか自作ゲームの戦闘仕様がそのまま適用されているし、おれにはゲームで主人公キャラに設定していたドラゴンハーツの力が宿っていた。なんなんだこのゲームっぽい世界は、と思ったよ。だけど、感情移入したから、真剣になったから、この世界でパッシェリカを支えて戦うことは、おれにとって^{ゲーム}遊戯じゃなく^{リアル}現実となった」

「……………」

「だけど、ラディンが南部を制圧したとの報が届いてから……だめなんじゃないのか、っと思いが芽生えてしまった。今までは、パッシェリカのために絶対に勝つって思いが魂の中心にあったのに、それが揺らいだ。ラスボスが大陸の半分がたを手中におさめた現状を前に、もう勝つのは無理だ、って方へ次第に心が傾いていった……。みんなを率いる將軍の立場があったから、可能な限り隠して振る舞っていたけれど……。でも……。最悪の場合、戦って、敗北して——パッシェリカとともに戦場で、あるいは落ち延びた人知れない場所で、ともに最期を迎える、そんな悲劇的だが美しいラストがこの物語の結末としては妥当なんじゃないのか、そんな風に夢想するようになっていった」

「ラディンが南部を制圧してから、に一ちゃん表情が硬いな、とは思っていたけれど……そこまで思いつめていたの？」

「ああ」

おれはサラから目をそらし、ガラスのジャードに映っている自分の目を凝視した。

こんな懦弱な言葉を連ねておいてなんだが、その目には力が宿っていた。

「だけど、グレインが友達になると言ってくれて、目が覚めたよ。パッシェリカはおれにとって大切な人だ。サラはおれの大切な妹だ。だけど、このラクウェルにはそれ以外にも大勢の人が暮らしている。彼らはモブキャラなんかじゃない。一人一人が、それぞれに思いを抱え、自分の考えを持って生きている。これはゲームじゃない。リアルなんだよ。いや、この世界を、おれの観念において、ゲームにしてはならないんだ。悲劇的だが美しいラストを思い描くなんて、將軍にあるまじきことだ。勝たなければだめだ。勝って、ラクウェルを平和にする。ラディンの魔手からパッシェリカやサラや、グレインや……。多くの人々を救うには、やつを倒すほかないんだ」

改めて顔をあげ、ひと息に言い切る。

サラはまぶしいものを見るように、目を細めておれを見つめていた。

「つまり、に一ちゃんは、ここんとこずっと落ちこんでいたけれど、真剣さをとりもどしたんだね？」

「ああ」

「まー確かに、パッシェリカとの悲劇的な結末を思い描くなんて、あたしに対して失礼だよ。その結末の、どこにあたしの居場所があるわけ？」

「……………」

「でも謝ったから許してあげる。ただ、このことはわかって。あたし、に一ちゃんってすんごくしっかり者だし、一念をもってどんな困難をも貫く性格だと思ってた。だから、に一ちゃんがじつは半ば諦めてましたって聞いて、ちょっぴりショックではあるよ。に一ちゃんのこと、もっとタフだと思ってた」

「おれは將軍なんて肩書きがついても、ただの人だ。どこにでもいるような高校生だ」

「そうだとすると、今は、どこにでもいるような高校生じゃいけないんだよ。パッシェリカも、あたしも、みんなが一ちゃんを頼りにしているんだから」

「そうだな……。そして、こうも思う。この物語をハッピーエンドに導けるだけの力がなかったら、パッシェリカを守れなかったのなら、おれには彼女と、男と女の関係になる資格はない、って」

「あたしもそう思う。だから——に一ちゃん。勝って。ラディンを打倒して。そうすれば、に一ちゃんが至高の女王陛下と結婚したって、誰も文句なんか言わないって！」

おれはうなずいた。

「サラ。まずは大堰城を攻略する。力を貸してくれ」

「まかせて。もうこの際だからあたしも言っちゃうけど、に一ちゃんと一緒なら、戦場で散っても後悔しない。悲劇的な結末を望んでいるんじゃないくて、覚悟の上で……に一ちゃんが言うところの、ゲームとリアルを分ける真剣度の面で、あたしもそれだけのものを持っているんだと思って。あたしにとっても、この世界は遊戯じゃなくて現実なんだ、って」

「わかった」

おれは立ち上がると、微笑した。

「この後、離間工作の結果を踏まえての軍議が予定されているが……その前に、パッシェリカのところへ行ってくる」

「あ！ 勝負に出るの？」

「ああ」

＊ ＊

パッシェリカは、この館の貴賓室を使っている。館で一番広くて豪華な一室で、アレリア家がこの居館を建てた際、王の行幸^{みゆき}に備えて用意した部屋なんだそう。おれとサラが出てきた石棺は、開祖ジェドがもしもの時にとの言葉とともにアレリア家に管理を託したものだと聞いているし、アレリア家は大陸辺境の地にありながら、王家とのつながりがかなり深い一族といえる。

（実際、アノンはパッシェリカ同様に、前王アーウィンが王家断絶の事態に備えてもうけておいた子の一人なわけだし……）

廊下を歩きながら、アノンとミモリーのことを思った。

おれには、絆の力、チェーンを確認できる読心術的な能力が備わっている。だからアノンとミモリーがおれに強い好意を抱いているのは、もうわかっている。

（だけど、おれは思わせぶりの態度はとらなかった。ごめん。おれの想い人は、パッシェリカなんだ）

ただし、そのパッシェリカがおれに好意を抱いているかどうかは不明だ。おれにとって彼女は神聖な存在であって、チェーン確認の能力で心のありようをこっそり見てしまうのは避けてきたから……。

伏せられたカード。めくってみたら、予想外の図柄が描かれている可能性もある。彼女は女王の立場があるから、仮におれに好意を抱いていたとしても、軽率な振る舞いは控えざるをえない。逆もまた真で、おれのことを好みのタイプじゃないと思っていても、將軍として有能な人材だから、ある程度は好意的に振る舞うほかないはずだ。

（でも、今日、これから、パッシェリカの本心を知ることになる）

そうとうに緊張してきた。

「おい、シヴァ」

と、廊下で声をかけられた。グレインが腕組みして壁に背を預けていた。

「んっ？ ああ、グレインか」

「パッシェリカ・イスカリエン陛下は、裏庭におられる。供を連れず、お一人で、だ。おれが手を回して、そういう風にとりはからっておいた」

おいおい！

「そこまでするのは、たとえ友人でもおせっかいがすぎるんじゃないのか」

「嘘をつくな、本当は嬉しい癖に」

グレインはニヤッと笑った。こいつうー、寡黙で本心を隠すつつきにくいやつだと思

っていたけれど、気心が知れた相手に対しては面倒見がいいのか？

「裏庭に一人で？ それはたいへんだな、すぐに誰かが警護しないと」

「その警護役がドラゴンハーツを使う大陸一の戦士なら、陛下も安心することだろう」

そこで、おれは向きを変えて裏庭を目指した。

この館は、バルゴの居城などに比べれば^っ慎ましやかな大きさだけれど、庭はかなり広い。裏庭も、『裏』って言葉のイメージとはかけ離れている広さで、日当たりも悪くない。

おれはざっと裏庭を見渡した。ほどよく手入れされていて、人工的すぎず、といって山野のような野放図な繁茂でもなく、一定の調和の中にある木々や草花……。

パッシェリカの姿は檜の大木のそばにあった。

彼女は女王といっても飾り物は身に帯びず、衣服も白を基調にしたこざっぱりとしたものだが、単に美人ってだけでなく、あたりの空気が清浄になるようなえもいわれぬ気品がある。

パッシェリカは、てのひらにこぼれた木漏れ日をじっと見つめていた。

「パッシェリカ」

声をかけると、びくっと肩先を震わせておれを見た。

少し表情が硬い。緊張が見てとれる。

「シヴァ。困難な任務、お疲れ様でした」

「大きな収穫があったよ。そのあたりは、この後、会議で話すけれど」

「収穫……。では、大堰城攻略の目処は立ったのですね」

「ああ。もっとも、実際にどうなるかは蓋を開けてみるまでわからない。人事を尽くして臨んでも、勝つか負けるかは時の運だ。でも——おれは勝ちたい。絶対に勝ちたい」

「なぜ？」

「なぜもなにも、負ければ終わりだ」

「……………」

おれたちは見つめあった。風を受けて^{こずえ}梢が葉擦れの音を鳴らす。それががいやに大きく聞こえた。

やばい。緊張してきた。逃げたい。これ、勇気は勇気でも、戦場で敵と戦うのとは別種の勇気が必要な事案のようだぞ。

でも、これは言わなければならないことだ。おれがきちんと向きあわなければならない問題だ。

「パッシェリカ。発つ前の軍議で、マウラーから政略結婚の話が出たけれど。どう対処すべきか、任務の道中でずっと考えていたんだ」

おれは（いくぞ！）と自身の心に勢いをつけて切り出した。

「……シヴァはあの件、どう思いますか？」

「断ってくれ。変に期待をもたせては、後々、ミレディアの連中に恨まれることになりかねないから、できるだけ速やかに断ってくれ」

「理由は？」

「理由は……」

おれは、決定的な言葉を口にしようとした。

べつに、決定的瞬間の前に演出として間をとろうとの意図はなかった。だけど、あれれ？ こっ、声が、うまく発声できないような、言おうとすると上ずっちゃいそうな、変な感じが……。失敗の予感が……。あがってるのか？ おれ、あがっちゃってるのか？

コン。

いきなり、頭になにか小さなものが当たった。

え？ なんだ？ と反射的に目だけ動かしてそちらを見やると……うわー！ この樹なんの樹、大きな樫の樹の枝にグレインがこっそり登っておれを見下ろしながら（なにやってんだ、ほら！）と手を振ってうながすジェスチャーをしている！ あ、あの野郎、おせっかいにもほどがあるだろー！ というか、いつのまに登ったんだよ！ ケットシーが猫そっくりの生き物だとしても、隠密スキル高すぎだっつーの！

しかし、その、なんだ。驚愕で全身からどっと汗が噴き出し、それを風がひと撫ですると、緊張が解けた。

「パッシェリカ。今から、将軍ではなく、あくまで一人の男として言う。そう思って聞いてほしい」

おれは背筋を伸ばして彼女を見つめた。

「は——はい。では私も女王ではなく、一人の女性としてあなたの言葉を聞きます」

「パッシェリカ。この戦いを最終的な勝利に導いたら、おれは君に結婚を申しこもうと思ってるんだ。パッシェリカを、ほかの誰にも渡したくないんだ。君の気持ちを聞かせてくれ」

言った。

伝えるべきことをおれは伝えた。

次は、パッシェリカの番だ。

パッシェリカは動悸を抑えるように、両手を胸にあてた。

「私は……」

彼女はいったんそこで言葉を切り、もじもじした。

「あっ、あの、私は……」

パッシェリカは、いつだって毅然としていた。これが同年代の女の子とは思えないほど
たいぜん じ じやく
泰然自若としていた。おれが、こんな戦い勝てるわけないと判断して逃げだそうとした時
も。もはや天命ここに尽きたと思って、うろたえてしまった時も。ほかのみんながパニック
に陥ってしまった時でさえ、パッシェリカだけは冷静で、正気だった。

そのパッシェリカが、言葉につまっている――。

おれは、樹上のグレインが、おれにしたように、いと気高き女王陛下に小石だか木の実
だかを投げつけるトンデモ無礼を働くんじゃないかとひやひやしたが、そんな事態が生じ
る前に、パッシェリカは顔をあげておれを見つめた。

「シヴァ。私は、その申し出を受け入れます」

そう言って、パッシェリカはおれに近づいた。互いの吐息がくすぐったく感じられるほ
どの距離だった。

「本当に？」

「ええ」

「本当の本当に？」

「ええ。もうずいぶん前から、あなたという人に惹かれていました。いつかどこかで出会
い、結ばれ、死によって分かれたるも再び巡り会った、そんな気さえしていました」

「じつは、おれもなんだ。初めて会った時からずっと、どこかで会った気がしていた」

実際、彼女とは初めて会った気がしなかった。なにせ、自作ゲームで理想の美少女とし
てヒロイン設定していたパッシェリカの本物に出会ったわけだから。

「ですが、シヴァ」

パッシェリカは頬を桜色に染めてはいたけれど、もう落ち着きをとりもどした様子で、
いたずらっぽく笑った。

「女王である私の結婚相手となると、そうおうの人物でなければ、私がよくてもまわりが
納得しませんよ」

「わかっているさ。おれは大堰城を攻略し、暴王ラディンを倒す。伝説のジェド王と同じ
力を持ち、女王パッシェリカを助けて大陸に平和をとりもどしたシヴァ將軍！ ……とな
れば、みんな文句のつけようなんかない」

「ええ！ そうなれば、誰も私たちの婚姻に反対などしないことでしょう」

「そのためにも、つまりくことは許されない。まずは大堰城を攻略だ」

「シヴァ。じつのところ、その……あなたが離間工作のため出発してからは、やきもきし
っぱなしでした」

「心配してくれたんだ」

「ええ、身の安全の点で心配だったのは事実です。でも、ほかにも心配事がありました」

「というと？」

「あるいはあなたもすでに気づいていたかもしれませんが、アレリア卿はあなたに好意を抱いています」

「……………」

「旅の解放感から、あなたが、あるいはアレリア卿が、夜這いなどするのではないかと、心配で心配でしかたありませんでした」

おれは驚愕して、まじまじとパッシェリカを見つめた。

つまり、こういうことだ。おれがパッシェリカを他の誰にも渡したくないと思っているのと同様、パッシェリカもおれを他の女性に渡したくないと思っている……！

「おれは——パッシェリカ以外の女性は、恋愛対象として眼中にない」

「ああ！ その言葉を、どんなにか聞きたかったことか！」

「お互い忙しい身だから、こんな風に二人きりで話せる機会はなかなかなかった。今後は、もっとこういう機会を得たいな」

「私もそう思います。だけど、難しい……。ドラゴンハーツの力を持つシヴァと違って、私は非力です。暗殺を警戒するため、警護の者がそばを固めるのはやむを得ないことです」

「そうなんだよな……。でも、大陸を平定して、新政権が安定すれば、今のような厳重な警護は必要なくなる。というより、結婚を発表すれば、おれたちは気兼ねなく二人きりの時間をもてるようになる」

「ええ、そういうことです」

そこで言葉を切って、おれたちは見つめあった。

ほどよい微風がさらさらとパッシェリカの髪を揺らす。こ、この雰囲気は！ 映画のワンシーンのようなこのシチュエーションは……！ この後、両思いの二人がすべきことはもう決まっている。なんてこった。もしかしたらそこまでいっちゃうかもしれないとの予感があったが、ファーストキスという人生のハイライトシーンが、こんな美しい風景の中で成就するなんて！ 樹上にグレインがいる？ 知るか。

「パッシェリカ」

おれがそっと彼女の肩に手を回し、抱き寄せようとした——その時ッ！

「陛下ー！」

「女王陛下！ いずこにおわしますかー！」

無粋きわまりないでかい声が聞こえてきた。

うわー！ お邪魔虫がきちゃったよ！　ちくしょうめえー！　と心で叫びつつも、おれはパッシェリカから身を離した。

「あっ、こちらにおいででしたか」

「うん？　シヴァ將軍……？」

侍従と警護役を兼任する体格のいい女性たちが駆け寄ってくる。彼らはおれたちを見て（おやっ？）といぶかしむ顔つきになった。サラいわく女性は色恋沙汰に敏感らしいから、脳内に（この二人、逢い引きしてたんじゃないのお～？）との疑惑がよぎったんだろう。……って、その疑惑は当たっているんだけど。

「みな、黙って抜け出してすみません。しかし、今日はこの後、私たちの大きな方針を決める軍議があります。その前にシヴァ將軍と二人きりで、いくつか確認しておきたいことがあったのです」

パッシェリカは落ち着き払った態度で彼らをあしらった。

「そうでしたか」

「ですが、玉体になにかあっては一大事です。こういう時は、せめて書き置きなり、残していただきたいのですが……」

「それで、將軍とのお話は、すでにお済みですか？」

侍従たちの視線がおれへと移る。おれはやむなく「ちょうど今しがた、終わったところだ」と言った。

「では、シヴァ。ひとまずこれで」

パッシェリカはごく自然な態度で別れを告げ、侍従たちと去っていったが、途中、一度だけ振り返った。

そして振り向きざまに、にこっと笑った。振り返った瞬間の髪の毛の流れといい、瞳の輝きといい、この上なくすてきで茶目つけのある笑顔だった。（キスできなくて残念でしたね！）って感じの――。

「……まったくも一、我らが女王様ときたら、どうしてああ魅力的なんだろうなー」

ぼやいていると、音もなくグレインがかたわらに降り立ち、「同感だ」とうなずいた。

「お前な、お節介を焼くにしたって、程度ってものがあるだろ。二人きりだと思っていたから、焦ったぞ」

「だが、おれがいて助かっただろう」

「否定はしないが……」

「ついでに言っておくと、おれが部下たちを動かして、侍従たちをここへ呼んだ」

「なにー！」

「若い二人が情熱にまかせて、いきつくところまでいってしまう事態になったらたいへんだ。男と女ではあるが、同時に将軍と女王なのだから、大陸の命運を決する一戦の前に浮わついたことになってはこまる。ほどほどのところで歯止めをかけておかなければな」

「したり顔で言うようなことかー！」

こいつをこのまま放っておくと、初夜の寝所にさえ忍びこんできかねないんじゃないか？　なんだか恐ろしくなってきた。

「ま、話は聞かせてもらった。暴王を打倒して結婚を発表する、か。パッシェリカ陛下が女王になったら、お世継ぎはなるべく早くもうけてもらった方が、臣民は安心できる。頼んだぞ」

ぽん、とグレインはおれの肩をたたいた。とんでもない友人ができたんだ……。

「それはそうと、グレイン。この後は大堰城攻略についての軍議だ」

おれは額の汗を拭って話題を変えた。

「離間工作を仕掛けたことで大きな方針は決まったな。となれば、後は細かいことを詰める作業だ。もっとも、大きな一戦だ、その細かいことひとつに齟齬^{そご}があっただけで、歯車が狂いかねんのだろうが。そうだ——シヴァ。お前がガラックに言った、『大堰城を城ごとたたき潰す方法がある』だが、あれはどうなんだ？　離間工作を優位に立って進めるためのはったりだと思っていたが」

「あれははったりだよ。そんな凄い方法があるならこっちが教えて欲しいくらいだ」

「やはりそうか」

「で……おれは今日の軍議で、まずはみんなに、離間工作を踏まえて立案した作戦を提示するわけだが、グレインにあらかじめ言っておきたいことがある」

「賛成票確保のため、すぐさま賛成に回ってほしい、か？」

「いや、ちがう。おれとしては考えに考えた上で立案した作戦だから、心情としては賛成してほしい。でも、まわりを、なんでもかんでもはいはいと賛成するやつで固めてしまったら、多様な意見を検討できなくなる。だから友人の立場を離れ、客観的に考えた上で、賛成するか反対するかを決めてほしいんだ」

「なるほど……。口ぶりから察するに、シヴァにとっても必勝の自信があるわけではない作戦なのだな。詳細を教えてくれ」

「それは軍議の席上で語るから、それまで待て」

「なんだ、もったいつけるな。友人だろう」

「おれとパッシェリカの甘いひと時を邪魔されたんだ、それくらいの意地悪はするさ」

おれはグレインと並んで館の方へと歩き出した。

(それにしても……この世界の女王となったパッシェリカと結婚するってことは、おれはもう、かりに元の世界へもどれる方法が見つかったとしても、日本へ帰らないことを意味する。それについて、サラはどう思うだろうか)

ふと、そう思ったが、軽く頭を振ってその考えを打ち消した。

(いや。とにかくにも、大堰城を攻略しなければ。それがかなわなければ、その先の心配などすべて無意味だ。暴王ラディンのおれたちの命の火は消され、ラクウェルは暗黒時代へと突入する)

おれの双肩にこの世界の未来がかかっている。

その責務は重すぎて苦痛だと感じたこともあった。今後だって、そう感じることはあるだろう。

でも、パッシェリカが、グレインが、サラが……心通った人々が愚痴を聞いてくれるなら。弱味を見せられる相手がいるなら……。そう考えるだけで、ずいぶんと心が軽い。

(ユリウス・カエサルとか。織田信長とか。ナポレオン・ボナパルトとか。歴史上の偉人にして戦争の英雄たちも、普通の人間が抱くのと同じように、色んな苦しみや悲しみや喜びを抱いて生きていたんだろうな)

この世界が遊戯ではなく現実として感じられるのと同様、おれには彼らのことが、書籍や映像で知った単なる情報以上の、血肉を備えた存在として感じられていた。

TURN10

お母さん。私を見守っていてください。

——パッシェリカ・イスカリエン

これまでの人生、私は色恋沙汰に縁がありませんでした。

私は自分が王家の血筋に連なる者と知らず、ごく普通の町娘として育ちました。ですから、女の子同士で集まり、同年代の男の子について、誰それがかっこいいとか、誰々はお金持ちで結婚すれば将来安泰だとか、小鳥が集まってさえずりあうように噂話の花を咲かせることなら、よくありました。また私には、母がそうであったように、容色に恵まれている自覚もありました。

にもかかわらず、私は男性から言い寄られることは滅多にありませんでした。後で知ったのですが、ダンガンと母が結託して、私に悪い虫がつかないように、あれやこれや手を打っていたのです。なにしろ私は、いざという時は女王として立つ身であり、若さと勢いにまかせてろくでもない男と結婚、などという事態があってはならなかったのです。

ただ……そうした事情とは別に、私の心には、どういうわけか、ある思いがありました。いつの日か運命の人が現れる、との思いです。

思春期の空想好きな少女なら、そうした思いを抱くのは珍しいことではないのかもしれませんが。けれど、私のそれは、どういうわけか確信と呼べるほど強い思いでした。

一部の魔法使いたちは、人の魂は肉体が滅びても四散せず、ひとたびは別の世界へと旅立つものの、いずれ再びラクウェルに戻って肉体に宿ると主張しています。そうした、いわゆる輪廻転生^{リーインカーネーション}の思想は、一般的には眉唾ものと考えられています。ですが、私はものの本でそれについて読んだ時、非常に強い共感を覚えました。

私には運命の人がいる。

かつて出会い、夫婦の絆で結ばれた人がいて、この生においてもいつかその人と再び出会い、そして結ばれるはず——。

その不思議な思いは成長とともに強まるばかりでした。ですから、私は（もしかしてこの人が……）の直感がない限り、男性と恋愛関係になろうとはしませんでした。そして、私が（もしかしてこの人が……）と直感する人は、ずっと現れなかったのです。

その後、ラクウェルが戦乱に見舞われ、生まれ育った町にも戦火が及んでからは、母と

の離別、難民となって流浪、自身が王族であると知り女王として旗揚げ、ラディンの手勢に追われて逃げ回る日々……と生活のすべてが激変したため、運命の人がどうか、そのような思いにかまけている暇はありませんでした。

でも――。

ついに大陸辺境のアレリア自治領まで追いつめられ、絶体絶命となった状況で、その人は何の前触れもなく、唐突に現れました。

一千年も封印されていた謎の石棺から現れた男性――シヴァ。彼は私と同じくヒュームであり、歳かっこうも私とほぼ同じと見受けられましたが、およそラクウェルでは見かけたことのない黒い髪と瞳をしていました。服も黒地に金ボタンの、やはり見たことがない異装でした。

私とシヴァは初対面の間柄。なのに、シヴァは私を見るなり、見知っている風な口ぶりで話しました。じつはその時、私も（この人と、どこかで出会っているような……？）と既視感に似た印象を受けていたのです。

そう、私は（もしかしてこの人では……？）と、生まれて初めて直感したのです。

彼を将軍に抜擢し、私たちの運命を託すと決めたのには、彼が伝説の王ジェドと同じくドラゴンハーツの使い手であることのほかに、そうした心情も手伝っていました。

ただし、この初対面の段階では、（彼こそ私の運命の人）と確信するほど強い思いではありませんでした。いつか夢で見た風景を現実で再び目の当たりにしているような、そんな朧であやふやなものだったのです。

ただし、私の中の（もしかして）の思いは、彼とともに過ごす日が一日また一日と重なるにつれて、じわじわと、しかし確実に、強まってゆきました。最初は輪郭だけだった絵が、次第に色がついて鮮明になってゆくように、です。

ですからシヴァと二人きりになり、将来について切り出された時、私にはそれを受け入れる準備ができていました。

シヴァと将来を誓いあった時、私は……本来あるべき場所にあるべきものが戻ったような、幸福というより、安堵に近い思いを抱きました。

ただ、なぜそのような思いが私の中にあるのか、それについてはあいかわらず謎のままです。

また、私は女王、シヴァは将軍、立場があります。お互いの気持ちを確認しあっても、周囲の誰もが正式に認めてくれる婚姻関係にならない限り、普通の恋仲の男女のように振る舞うことは許されません。なにより、ラクウェルは暴王の魔手に落ちる寸前であり、私は公然とその暴王に刃向かっているのですから、私たちの手で悪を討ち平和を取りもどさ

ない限り、将来の誓いなど意味を持ちません。

そう……私とシヴァの恋路は、空恐ろしいほど前途多難なのです。

とはいえ――。

私とて一人の女性である以上、こうしたことが嬉しくないわけがありません。

緊迫した状況、また女王としての立場ゆえに、みんなの前ではその感情を隠すほかありませんでしたけれど……ね。

* *

大切な約束を交わし、ひとまず別れた私とシヴァは、すぐに、軍議の席で再び顔をあわせました。

私がそうなのですから、きっと彼も面はゆかったはずです。しかし、ラクウェルの命運をかけた大堰城攻略のための軍議となれば、そんな感情の出る幕はありません。

女王である私は議長としてみなをねぎらい、軍議の開催を宣言すると、早速、離間工作の正否とそれを踏まえた作戦について、シヴァに発言をうながしました。

起立したシヴァは、当然といえば当然ですが、浮ついたところなど微塵^{みじん}もなく、引きしまった顔でした。

「離間工作のため敵地へ出むいた収穫は大いにあった。それをもとに立案した作戦について、今から概要を説明する。よく聞いて欲しい」

そう前置きして、シヴァは大堰城攻略作戦の詳細を述べ始めました。

その内容は、私たちの多くが事前に予想していた内容とは、いささか異なるものでした。「……以上だ。肝に銘じて欲しいのは、敵将エレナが籠城戦を選択したらおれたちの勝ち目は絶無って点だ。大堰城は未完成だが、それでも本丸となる中央部はほぼ完成に漕ぎついていると、おれがこの目で確認した。通常、正面きっての城攻めは、攻撃側に守備側の数倍もの兵力がなければ勝負にならないが、おれたちにそこまでの兵力はない。また、城を囲んで敵兵を外へ出さず、城内の食糧が尽きるのを待つ、いわゆる兵糧攻めって手があるんだが、それもだめだ。城を囲んでだらだら時を費やしていたら、ラディンがおれたちの数倍の規模の軍団を引き連れて南部から駆けつける。だから、野戦に持ちこんで一氣にカタをつける、これ以外に勝機はない。おれが今述べた作戦は、ガラックがエレナを説得し、野戦に持ちこんでくれることを大前提としている。もしガラックのエレナに対する説得が不調に終わり、エレナが籠城戦を選択したとわかったなら、大堰城攻略は諦めるほかない。また、エレナに野戦を選択させることに成功したとしても、戦闘の最中にエレナが城へ逃げこみ、籠城戦に移行となった場合、やはり勝ち目はないと諦めて可及的速やかに撤退する」

みな、ざわめきました。

無理ありません。この一戦に大陸の未来がかかっている、それだけはみな痛いほどわかっているのです。絶対に勝たなければならない一戦なのです。けれどシヴァは撤退もありうる、それどころか戦わずして攻略を断念することもありうる、と言うのです。

「うーむ……。シヴァ將軍、ガラック一人の働きにあまりにも多くがかかっているようだ。その点については、どう思う？」

考え考え、騎士長のダンガンが口を開きました。

「それについては、おれも重々承知している。だけど、大軍を動かす関係上、準備だけで一か月くらいはかかる見こみだ。その間、諜者を使ってガラックと連絡を密にし、なにがどうなっているかきちんと把握した上で作戦を発動する」

「なあ、ダンガン。おれは、ともに離間工作を仕掛けてガラックという男をこの目で見た。それも踏まえて、シヴァ將軍を支持したいと思う。マウラーは、どうだ？」

真っ先に賛成票を投じたのはグレインで、彼はいささか挑戦的な目つきでハイエルフを見やりました。

「さて……」

マウラーは咄嗟にこたえかねる様子で首をひねりました。

「そもそも離間工作を提案したのは私です。ガラックがエレナを裏切ってくれば手っ取り早く、しかも味方の被害を最小限に抑えて城を落とせる。これについては間違いないし、みなさまも同意見だったからこそ、離間工作を仕掛けようとの決定が下されたはず。だが——野戦、ですか。両軍が激突することになるので、どうしても、ある程度の被害が出ることとなるでしょう。我々の兵力は、パッシェリカ陛下直属の兵が七千、バルゴ殿の麾下が七千、私の麾下が七千で合計二万一千。これに加え、ジェド騎士団のデラウス伯麾下の兵が、現状、期待してよさそうな数字としては二千から三千くらい。対してラディンとはいえば、我々の十倍近い兵力がある。従って我々は可能な限り被害を抑えて勝たなければ、たとえ大堰城を落としても、その後、ラディンに対抗できなくなってしまう。シヴァ將軍、それについてはいかがお考えですか」

「うん……。さっきも言ったが、籠城戦を選択されたら勝ち目はない。だから、野戦なんだ。こちらの兵はそれこそ一兵たりとも損じたくないけれど、さすがにそれは無理だ。とはいえ、おれの立案した作戦なら、味方の被害は最小限になると考えている」

「そのう、シヴァ將軍」

続いて、おずおずとアノンが挙手しました。

「將軍は、敵将エレナが籠城戦を選択した場合は勝ち目なしと見て撤退すると言われた

が、そうなった場合、その先はいったい、どのように……？」

「その場合は大堰城の完成を、指をくわえて見ているほかない」

シヴァの言葉に、場の空気が冷えました。

「ただし、おれたちは絶対にラディンの脅しには屈服せず、結束を続ける。大堰城が完成し、それでもなおおれたちが従わないとなれば、暴王は容赦なくセド川の恵みを奪うことだろう。北部は大打撃を受け、多くの人々が苦しむことになると思う……。ただ、その有様を、他地域の群雄たちはどう受け止めるか。やはりラディンはみんなの力をあわせて打倒しなければならぬ悪だと断じ、おれたちと同じ旗を仰ごうと決断したなら、まだ勝機はある。もっとも、北部の壊滅的被害を目の当たりにして、逆にラディンの恐怖に群雄たちが屈するなら、本当に終わりで打つ手なしだ」

『本当に終わりで打つ手なし』。

みな、静まり返りました。

「とにかく、おれはこう考えている。大堰城を攻略できればよし、たとえ攻略できなかった場合でも、最後の戦いのためにできる限り多くの兵力を残しておかなければならぬ、と。これで、答えになっただろうか？」

アレリア卿は神妙な顔でうなずきました。

「実際のところ、そのガラックってやつは、ほんとにわかってんのかねえ。自分の動向が、この大陸の行く末を決めちゃうってことを、さ」

シャノーラがどこか投げやりな態度で、誰にともなく言いました。

「わかっているはずだ。やつはわかっている、どちらに着くかの選択する」

シヴァは虚空に視線を放りました。彼は、記憶しているガラックの人となりや脳裏に呼び起こしていたのでしょう。

そのほか様々な意見が出たほか、細かい点についての質問などがありましたが、シヴァの作戦の代替となるような作戦案は提示されませんでした。

「シヴァ。これは賭けなのですね？」

意見が出尽くしたころあいを見計らい、私は彼にたずねました。

「そう思う。でも、おれたちはいくつもの賭けに勝ってきた。それらの賭けのどれかに負けていたなら、今ここでこうして息を^{むくろ}していない。野に骸をさらしていたはずだ」

「……………」

「でも、パッシェリカ——陛下。今までにない大軍を動かす一戦ではあるものの、賭けの勝率に関して言えば、おれたちが過去に経験してきた大博打より、ずっといい。それについて断言できる」

私は微笑し、「シヴァ。あなたの正直で飾らない人柄と物言いが、いつまでもそのままですように」と言いました。幾人かが（おや？）と何かを感じ取った様子で眉を跳ねましたが、かまいませんでした。

「正統なるイスカリエンの女王、パッシェリカの名の下に決定します。シヴァ將軍の立案した作戦を採択します。みな、来たるべき一戦の準備のため、力を貸してください」

私は宣言し、軍議は幕を閉じました。

＊ ＊

さてそれからは、目が回るような忙しい日々となりました。

万単位の兵が動くのです。これまで私たちがしてきた戦いとは規模がまったく違います。野営地や兵糧を確保する、これだけでも大変な作業です。

女王である私は様々な物事に対し、最高責任者として許可を与える、もしくは、一定の範囲で責任を持つ者を指名しなければなりません。

また、大きな戦いが始まると勘づいたのでしょう、私に面会を求めてくる者が、ここへ来て急激に増加し始めました。商人や土地の有力者などが、自ら進んで、金銭や物資の供与を申し出くれるのです。

彼らはみな私の前に出ると、判で押したように、正義のため、公正なるイスカエリエン王朝復活のため、と大義に依って立つ行動だと主張しました。ですが、私が大陸を制した暁にはなにがしかの見返りが欲しい、との本心を隠しきれてはいませんでした。とはいえ、同時に彼らには、暴王が大堰城を完成させたら北部は大変なことになる、事ここに至っては暴王打倒を叫ぶ者を支援せざるを得ない、そういう必死さも感じられました。

これまで、私が各地に檄文を飛ばして協力を呼びかけても、なかなか支援者が集まらなかった経緯を思えば、明らかに人々の意識に変化が生じていました。ラディンは大堰城建造によって北部を一挙に制圧する腹づもりだったのでしょうが、その行為は、これまで日和見でいた者の多くを敵としたのです。

なににせよ、支援があればあるほどいい。金銭や物資に余裕があれば、兵に良い武器や防具を持たせ、生存率を高めることができます。私はこれこそ上に立つ者の仕事と心得て、時間の許す限り、支援者たちと会いました。

シヴァもまた、忙しい日々でした。彼は総大将であり、今回は大軍を指揮します。いくら彼個人が特別な力を持っていたとしても、彼の指揮を受ける兵たちが乱れることなく従わなければ戦いになりません。敵の総大将であるエレーナはすでに南部制圧など大きな戦を経験しており、麾下の兵もそれは同様です。対して、私たちにはまだ大きな戦の経験がない。本番であわてることのないよう、命令を受けたらきちんと動けるよう、シヴァは連日連夜、

兵の訓練に励み続けました。

私がそうであるように、彼も、二人きりの時間を作って、愚痴のひとつもこぼしたい、慰めあいたい、そういう気持ちがあったと思います。

ですが、私もシヴァも、あえて会う機会を作りませんでした。

私は女王であり、シヴァは将軍だからです。

さて、そうやって忙しい日々が十日ほど過ぎたころ……。

「陛下。使者と名乗る男が来訪し、面会を求めています。どこの誰の使者かと尋ねても、言えはわかる、の一点張りなのですが、いかがいたしますか？」

ある日の晩、みなとともに夕食を取り終えたちょうどその時、執事のキルバが奇妙な報告をもたらしました。ピンときた私はシヴァと目配せし、「すぐにここへ」と命じました。

現れたのは、小汚いぼろ服を腰紐で結わえた、いかにも貧しげな装いの男でした。けれど眼光鋭く、顔には戦でついたと思しき刀傷、尋常一様の人物でないのは明らかでした。「パッシェリカ陛下、お初お目にかかります。……ここで、お話をしてもよろしゅうございますか」

男は、がらがらとした太い声でたずねてきました。

「ここにいるのはみな信頼できる者ばかり。人払いの必要はありません」

「では、名乗らせていただきます。ガラック将軍麾下の千人長、コブランと申します」

「遠路、ご苦労でした」

「将軍からの伝言をお伝えすべく参上した次第。『万事順調。エレーナ将軍に、城を出て野戦をさせる旨、段取り完了。さらに、エレーナ将軍麾下の有力な千人長の一人を、味方につけることに成功』とのことでした」

「ああ！ それを聞いて、私も、みなも、安堵しました」

「ガラック将軍からの連絡を、今か今かと待ち望んでおられた心中、お察しします。なお、このコブラン始め、ガラック将軍麾下の千人長はみな、運命を共にする所存です。なにせエレーナは嫌われ者でしてね、あの女にひと泡吹かせてやれるなら……と、みなが前々から思っていたのですよ」

「……………」

「この後も伝令役はこのコブランが務めます。どうか、よしなに」

「あなたはガラック将軍が特に信頼している人物なのですね？」

「はい。ついでながら申し上げますと、同輩の千人長たちを説得する工作において、ずいぶん役だったと自負しております。陛下が大陸を制した暁には、褒美のひとつも恵んでいただきとうございます」

「功あった者には、きちんと礼をすると約束します。あなたに限らず、すべての人々に対して、そうするつもりです」

「噂にたがわぬお人柄。パッシェリカ陛下に、栄光あれ！」

このコブラン来訪の夜、私は思うところあって、シヴァとマウラーをひそかに自室に呼びました。

「おや？ シヴァ將軍も一緒ですか？」

「あれ？ マウラーも呼ばれていたのか？」

二人は首をかしげながら私を見ました。

「マウラー、話があります。なるべく早い段階で言うべきだと考えました」

私が切り出すと、マウラーは時に人を苛^{いら}立たせる察し顔で顎を撫でました。

「さてさて、なんのお話でしょうねえ」

「あなたが持ってきた、政略結婚についてです」

すわ、とシヴァが緊張した顔つきになりました。

「あの話は、断ることにしました」

私は単刀直入に言いました。シヴァを同席させたのは、彼もこの件が心にひっかかっているはずと思い、彼の心のしこりを大一番の前に取り除いておきたいとの配慮からです。

私は……マウラーはこの決定を受けて、不快げな態度をとるだろうと予想していました。ところが、です。

彼は変ににやにやし、シヴァのことをちらちら見やりながら、「それでは陛下、その決定に至った理由をお聞かせ願えますか？」と歌うような声音でたずねてきました。

「先ほどガラック麾下の千人長の男にも言いましたが、私は公正を重んじます。ミレディア神国は強大で、それが味方になってくれれば心強い。しかし、味方になると決めたのは、このままでは自らの首が絞まるという切羽詰まった状況になってから……そうですね？」

「ええ、おっしゃる通り」

「ここにいるシヴァ將軍のように、私のことをずっと前から支えてきた人たちが大勢いると知りながら、私が大陸を制したら政略結婚で中央に影響力を持たせてくれ、とは欲張りにもほどがある。いいえ、そのような申し出をすること自体、私を……なめている」

マウラーの反応が奇妙なので、私はあえて女王らしくない物言いをしました。

するとマウラーは、しきりとうなずきながら、「そうでしょう、そうでしょうとも。パッシェリカ陛下をなめているんですよ、あの連中は」と言いました。

「……マウラー、どういうことです？」

「では、ここだけの話をさせていただきます。ミレディアは、いえ、我々ハイエルフ

の社会は、あまりにも血縁主義に凝り固まっている。ヒュームなど他種族との交わりを嫌い純血を保とうとするのもそうですが、家柄だの家格だのがなにかと幅を利かせています。代々、大神官を務めてミレディアを支配してきたエンディア家が、家格における最上位…。しかし、当代のミューラー・エンディアやその息子のアーロン・エンディアは無能です。中の下の家柄から、この戦乱の世で実力をもって出世した私にとっては、血縁以外に誇るものなどない癖に威張り散らしているあいつらは、目の上のたんこぶなのですよ」

「興味深い話ですね」

「私はミレディアの宰相。権力者の地位にあって国を回していますが、エンディア家の連中は自分たちこそが国の最高権力者だと信じて疑わず、ことごとくに私の足を引っ張ってくる。連中は、この世界は自分たちを中心に回っていると考えているんです。やつらは際限がないほど傲慢です。それゆえ愚かにも、同盟軍の一翼を担ってやるから、その見返りとして、ラクウェルの新たな支配者となる女王は我々と婚姻関係を結べ……などと、恐れ知らずの要求をするに至ったのです。あいつらは身の程知らずにも、こう考えていますよ。純血主義で知られるハイエルフのそれも最高位にある名家がヒュームなんぞと婚姻関係を結んでやるんだ、ありがたいと思え！ とね」

「ではマウラーは、私が政略結婚に応じては、むしろ困るのですね？」

「ええ。エンディア家には没落して欲しい。しかし私はあえて、あのアホどもの言葉をそのまま陛下にお伝えすると決めました。さぞやご不快だったでしょう、陛下としては」

「……ええ」

「さあ、それを踏まえて、陛下に相談したい儀がございます」

ここぞとばかりに、マウラーは身を乗り出しました。

「私もあの害虫どもが不快でたまりませんが、なにせ相手は長く続いてきた家系、国の中枢のあちこちに入りこんでいて、これを完全に排除するのは容易ではない。そこで、陛下が大陸を制した暁には、どうかこのマウラーの後ろ盾になっていただきとうございます。そうしていただければ、どうとでもやりようがある。私はエンディア家を再起不能なまでにたたき潰し、ミレディア神国は、いえ、ミレディアを支配した私は、その恩を忘れず陛下に絶対の忠誠を誓います。いかがです？ お互いにとって損のない話でしょう？」

私は、ふーっ、と聞こえよがしなため息をつきました。

「ラディンを打倒し、真の女王となったなら、あなたのような煮ても焼いても食えない手合いを山ほど相手にしなければならないのでしょうかね」

「さて、それはどうでしょうか。陛下が私に万事任せるとおっしゃってくだされば、陛下の御心をわずらわせるような手合いはことごとく排除してさしあげますよ。もっともそれ

には、それが可能なだけの権力を与えていただかねばなりません。例えばそう、中央政府における宰相とか、王宮顧問官とか。ま、役職名はなんだっていいんですが」

言葉面こそ冗談めかしていましたが、マウラーの瞳の輝きはひどく熱っぽいものでした。「……考えておきましょう。なににせよ、エンディア家はよろしくない、との情報は把握しました」

「ええ、今はそのお言葉だけでじゅうぶんです。では、シヴァ將軍との甘いひと時を邪魔しても悪いですし、このへんで退出してもよろしいですか？ ああ、だいじょうぶです、私は口が堅い方ですので、余計なことをそのへんで洩らしたりはしませんよ」

……エンディア家？ このマウラーの方がはるかに危険人物のように思えます。

「マウラー、口を慎みなさい。そのほうがあなたのためです」

私がたしなめると、彼はむしろその言葉をうれしがっているように薄笑いを浮かべました。

「ご忠告、ありがとうございます。では、これにて」

マウラーがいなくなると、シヴァが呆れ顔で「暴王を倒した後の方が大変なのかもな」とつぶやきました。

「あるいは、そうかもしれない……。でも、シヴァ。私は一人じゃない。そうでしょう？」

「うん。おれがいる。いつまでも、パッシェリカのことを支え続けるつもりだ」

* *

一日一日が瞬く間に過ぎてゆく……。

しかし着々と準備は整い、シヴァやアレリア卿が帰還してから数えることほぼ一か月で、ついに軍団を動かせる状態に漕ぎつけました。

明日は、いよいよ軍団を率いてアレリア自治領を発つという夜、私は不思議な夢を見ました。

戦火に包まれた町。逃げ惑う人々。母と離れ離れになった、忌まわしい日の夢……。

ダンガンは、「母を捜さないと」と子どものように駄々をこねてきかない私を強引にひっかついで走り、町を離れ、そして――。

そこで、不意に場面が切り替わりました。

私は広い道の交差点に立っていて、眼前には二股に分かれた道が伸びていました。

その一方を母がたどってゆきます。

「お母さん！」

私が叫ぶと母は振り返りました。もう長いこと会っていないのに、その夢の中の母の顔

はとても鮮明で、私は懐かしさで胸がいっぱいになりました。

「お母さん！」

もう一度呼びかけると、母はゆっくりと悲しげに首を横に振り、私に向かって、もう一方の道を指でさし示しました。

そして、名残り惜しげにしばし私を見つめてから、再び歩き出しました。

私は母の背を追いかけるべく走り出しました。

ところがどういうわけか、どんなに走っても母の背は遠のいてゆくばかり。はたと、私は走っても走っても交差点から動けないでいることに気づきました。

そこで——目が覚めました。

まだ朝の光が射していない時刻で、部屋は暗い……。

「お母さん」

私は小声でつぶやきました。

私は、みんなに、ひとつだけ嘘をつき続けてきました。

真の女王になったら、多くの人を使って戦火の中で生き別れた母を捜す、と言ってきましたが、それは嘘なのです。

町から逃れた人々の中に、母はいなかった。母はもうこの世の人ではないと、本当は、もうわかっているのです。わかっている、でも認めがたくて、『生き別れた母を捜す』と言い続けてきたのです……。

(でも、お母さん。もう自分はいないものと思って諦めなさい、そう言い聞かせたくて夢に現れたの？)

私はベッドから下りて窓辺へ行きました。

(今日、私は軍団とともに発つ。東リザード自治領にてバルゴ麾下の軍団と合流。そこから南下する途中で、マウラー麾下の軍団とも合流。ジェド騎士団領へ入り、南下してバロード平原に達し、大堰城を攻略。あの城を落とせば、暴王の本拠地である王都は目前。ラディン打倒は、夢ではなくなる！)

白んでくる空を眺めていると、忘れつつあった原点、正義や大義よりも重い、私を突き動かす思い——怒りと憎悪が蘇ってきました。

(お母さん。私は必ずや復讐を遂げます。戦乱を巻き起こした暴王を討ち、あなたの仇をとります。あなたは、父親を知らずに育った私にとって、たった一人の肉親だった。それを奪った戦火を！ 戦火の元凶である暴王を！ 私は決して許さない！ たとえあなたがそれを望んでいなかったとしても、復讐を果たさない限り、私の心に真の平穏は訪れないのです)

ついに、ここまで来た。

その朝、私は女王ではありませんでした。

復讐の黒い炎に身を焦がし、心に剣気を宿した魔物でした。

TURN11

将として大軍を率いる。^{ああ}嗚呼、これぞ男の浪漫！

——柴崎 剣

パッシェリカ麾下、すなわちおれの直属の兵が七千。

盟友・東リザード自治領のバルゴ麾下、リザードマン兵が七千。

新たに同じ旗を仰ぐこととなったミレディア神国のマウラー麾下、ハイエルフ兵が七千。

束ねて二万一千。これを号して三万。総大将はこのおれ、シヴァ。大堰城を陥落させ暴王ラディンの野望を打ち砕くべく、ついに進軍開始となった。

異世界ラクウェルに転移してからこの方、将軍、將軍、と呼ばれてきたおれだが、本当に大規模な、軍団らしい軍団の将として戦いに臨むのはこれが初めてだ。

なお、おれとサラは学生服でこのラクウェルに転移し、その姿で過ごしてきた。日本ではありきたりな服だけれど、この世界では異装であり、とても目立つ。そこで、おれとサラは防御力を高めるべく軽くて丈夫で動きやすいミスリル製のシャツを着用し、その上にいつもの学生服を着ての出陣だった。

「壮観だな」

馬に揺られて街道を行きながら、おれはひとりごちた。

街道を埋めつくすといくともない大行列。先頭はバルゴ麾下のリザードマン軍団、中央はパッシェリカ麾下の軍団、後方はマウラー麾下のハイエルフ軍団の順番だ。おれをふくめパッシェリカ陣営の幹部一同はみな軍馬にまたがり、軍団の中央に位置している。馬に乗ると徒歩よりずっと見晴らしがよくなるが、それでもおれたちの位置からだと、先頭や^{しんがり}殿は遠すぎて確認できない。また、これだけの人数が歩くと地面から舞いあがる土埃もかなりのものとなり、風景は煙っていた。

兵たちはきちんと隊列を整え、規律があって、道中で乱暴狼藉^{ろうぜき}など働きはしない。それでも、完全武装の兵士が大勢で移動するのを目撃した庶民は怖がるはず……とおれは予想していたのだが、実際にはそうではなかった。

「パッシェリカ陛下！」

「イスカリエンの正統なる王位継承者！」

「陛下ー！ 女王陛下ー！」

「シヴァ將軍、ご武運を！」

「正義の御旗に集いし者に、武運あれかし！」

「暴王討つべし！ ラディンに死を！ 乱世に終止符を！」

沿道には人々が蝟集し、老若男女の別を問わず盛大に手を振り、声援を送ってくれた。幼い子どもたちなんてお祭り気分もいいところで、「へいカー！　へいカー！」と叫びながら無邪気にはしゃぎ回っている。

北部はラディンの勢力下ではないから、おおっぴらにパッシェリカを支持したところで捕縛の心配はない。ただ、それを考慮しても、人々の声は熱っぽかった。

「冷酷残忍な暴王によってではなく、正義と公正を旗印とする女王に大陸の支配権を与えたい、そういう庶民のせつなる願いがひしひしと伝わってくる。今日まで陛下をお守りしてきたおれとしては、感無量だ」

おれのすぐ後ろにいた騎士長のダンガンがつぶやいた。振り返ると、彼は男泣きに泣きたいのをこらえるように、そっと目もとを抑えていた。

「ダンガンさん。感無量、は早すぎますよ」

おれはひとこと注意した。

「わかっている。それは重々わかっているんだが、な」

まあ、パッシェリカを幼少時から陰に日向に守り、女王としての旗揚げ以来ずっと支えてきた彼にしてみれば、感情が揺さぶられるんだろう……。ダンガンと駒を並べていたパッシェリカが（このくらいは許してあげてください）と言いたげに、おれに向かって微苦笑を浮かべた。

再び前を向く。

離間工作のため一度は通った道だが、今は風景がまったく違うものに見える。

おれと駒を並べているサラは、そんな風景を眺めながらせっせと手を動かし、絵を描いていた。行軍が開始されてから、ずっと描いている。離間工作の道中では写生できずストレスが溜まっていたのもあるだろうけど、こんな一大スペクタクルな様を我が目で見て描けるのは絵描き冥利に尽きる、ってことなんだろう。

おれはアノンやグレインなど、ほかの幹部たちをざっと見渡した。

みんな少し表情が硬いかな？

無理もない。これから、大陸の運命、女王の運命、そして自身の運命を決する一戦に臨むのだから――。

アレリア自治領を抜け、東リザード自治領を抜け、ジェド騎士団領へ。

領内に踏みこむなり、おれたちはこれまで以上に庶民の皆々様の大声援を受けた。地理

的に見てジェド騎士団領はラディンの脅威が間近にあるし、南部からの脱出に成功した難民も少なからず流入しているそうだから、暴王への反感はかなり強いのだろう。

じきに、アデラス家、ロムロス家の重鎮たちと、デラウス伯が、パッシェリカのもとへ挨拶にきた。

「パッシェリカ陛下！ お目にかかれて光栄です。デラウス家の末裔、レオと申します。ジェド王より ^{たまわ}賜ったこの地が、守護を任されたはずの四騎士の末裔のいさかいにより、このように荒廃しきった様、お目汚し以外のなにものでもありません。ですが、今はみなそれを恥じ、心を改め、騎士の本分に立ち返って、大義のため陛下とともに戦わんとする所存です」

「その心意気や、よし。この危急存亡の^{とき}秋に、正しい側に立って戦おうとすること、ジェド王とともにラクウェルを平定した四騎士の御魂^{みたま}も必ずや見守っていることでしょう」

馬前に片膝をついたデラウス伯の口上を受け、パッシェリカは女王らしい落ち着いた態度で淀みなく語った。ほんと、パッシェリカときたら、おれと同年だけれど、学校でクラスメートだった女の子たちとはぜんぜん違う。生まれながらの王者であり、気品と風格が備わっている。いや、べつに庶民の女の子を馬鹿にしているわけじゃない。とにかく……彼女は『違う』んだ。

「ところでデラウス伯。領内の分からず屋どもに対する交渉はその後どうですか？ ジェド騎士団がこの戦いに出せる兵力はどのくらいで確定しましたか？」

おれがたずねると、デラウス伯は難しい顔をした。

「今、確実に参加できるのは三千五百。これは、すでにラゴス砦に集結させています。ただ、私は両家融和に反対する者たちとの交渉を時間ぎりぎりまで進めるつもりです。こうしている今も、私の部下が説得にあたっています」

「三千五百ならじゅうぶんすぎるほどの数字です。御尽力、感謝します」

「いえ、シヴァ將軍。我々の総兵力から考えれば、三千五百はあまりに少ないと言わざるを得ません。東リザード自治領、ミレディア神国、どちらも七千ずつの兵を出しているとのこと。それを思えば齒がゆい。一人でも多くの者を参戦させるつもりです」

デラウス伯は、そこで、アデラス家当主のユライアとロムロス家当主のザドルーをちらりと見やった。

二人の老人は無表情だった。あるいは……反対派の連中にももの申すべきは、この二人、との思いがデラウス伯にはあるのかもしれない。

と――。

「ハン！ せいぜいがんばれよ。ただし、善意の忠告ってやつをしてやるからよく聞きな。

あたしたちの旗の下に集うのが遅かった上に兵の出し惜しみまでするようじゃ、パッシェリカ陛下が大陸を平定した後が怖いぞ。ジェド王に忠義を尽くした四騎士は、彼の覇業を最初からずっと支えてきて、この領地を賜^{たまわ}ったわけだからな。報酬は戦功の大きさに比例するし、罰は罪の大きさに比例する。これは古今変わらぬ理ってやつだ。だろ？」

不意に、シャノーラが彼らの頬をひっぱたくような言葉を投げつけた。そうとうに失礼、どころか脅し文句同然の物言いだだったので、おれはぎょっとした。

老いた二人の当主はこの思わぬ不意打ちを受けて瞳を揺らした。

シャノーラはおれを見て、悪戯小僧が得意がるような笑みを浮かべた。

もしかして計算ずくの発言……か？

「シャノーラ！ 同じ旗を仰ぐ仲間に対して失礼だぞ！ デラウス伯、ご無礼、お許しください」

アノンがシャノーラを叱りつけつつ、謝罪する。

アノンは本当にあわてた様子だったけれど、シャノーラはそしらぬ風であさっての方を眺めた。良識あるアノンなりダンガンなりが、フォローを入れるのも計算ずみですよ、って顔つきだ。

「いえ。陛下がおっしゃられたように、今は危急存亡の秋。この期に及んでジェド騎士団は、なおまだまとまりきれないのですから、これは臣下の罪。謝罪すべきはこちらの方です。時に……あなたのご芳名をうかがいたい。身なりから魔法使いと思えますが」

デラウス伯がたずねると、シャノーラは「風術師^{ウィンドメイジ}のシャノーラだ。覚えておきな」と、ぞんざいに告げた。

「ふむ。シヴァ將軍といい、若すぎるほど若いすな」

「そうともさ。この戦乱の世じゃ、優れた主君に仕えて実力を示した者がどんどん出世するんだ。戦乱が始まってからこっち、長い歴史以外に誇るもののない無能なお貴族様やご領主様が、どんだけたくさん滅びてきたことやら。ジェド騎士団だけは例外、なんて思っているなら大間違いだよ」

追い打ちとばかりに言い放ったシャノーラが、ちらっとグレインに目配せしたのを、おれは見逃さなかった。

（んっ？ これ、グレインが台本をかいて、シャノーラに言わせている芝居なのか？ まあ確かに、普段から乱暴な言動が多いものの子どもじみた年齢のせいで許されちゃうところのあるシャノーラなら、こういうことを言わせるのにうってつけの役どころだけど）

ただ、忠臣のグレインが、パッシェリカに話を通さずこんなことを独断で行うとは思えない。そうなるこの件、パッシェリカが事前に許可しているはず……。

「まさにその通りですな。シャノーラ殿、ご忠告、この胸にしかと刻みました」

デラウス伯はうやうやしいほどの態度でシャノーラにお辞儀をした。彼は大人だが、それにしたって不自然なほど落ち着いている。

（ははあ。つまり……こうか？ デラウス伯はジェット騎士団をまとめあげて可能な限り多くの兵を参戦させたいが、彼はアデラス家やロムロス家のような大勢力の出ではないため、力関係からいってやれることに限界がある。障壁となっているのは、手を取りあったかに見えて、じつは未だに多くの確執を抱えたままのアデラスとロムロスの当主なんだろう。そんな狸爺どもを動かすため、デラウス伯からパッシェリカに手伝ってほしいと連絡があった。で、パッシェリカの命を受けたグレインが、爺さんたちに冷や汗をかかせる台本をかき、デラウス伯にその旨を事前通告。主演女優はシャノーラってわけだ）

おれは劇を見守る観客の一人って構図だが、のけ者にされたとは思わなかった。それどころか、おれは思わず微笑してしまった。

味方は多ければ多いほどいい。たとえ大堰城を落としても、多くの群雄がパッシェリカの旗の下に集わなければ、暴王ラディンには対抗できない。その点、長年の確執があるアデラス家とロムロス家が真に手を取りあって同盟軍に参加したとなれば、各地の群雄たちに『この旗の下に集え！』とうながす絶好の政治宣伝になる。

おれは將軍で軍団の最高責任者だ。大堰城攻略戦を前に、部隊編制やらなんやら、目が回るほど忙しかった。パッシェリカがおれにこの件を告げなかったのは、きっと、忙しいおれをわずら煩わせたくなかったんだろう。

（おれ一人で戦っているわけじゃない。多くの仲間たちが、知恵を絞り、労を惜しまず、勝つ確率を高める仕事にいそしんでいるんだ）

推測にはかなりの自信があったが、この日の夜、デラウス伯が用意してくれた宿舎に入った後で、おれは機会を見つけてシャノーラに「名女優だったぞ」とかまをかけてみた。

案の定、シャノーラは「冷や汗かいたよ。騎士なんて、がちがちに頭のかたい連中だ。そんなやつらの恨みを買うのは怖いからな」と、演技だったと認める返事をした。

「愚痴るなよ。それだけの若さで幹部に取り立てたんだから、給金に見合うだけの働きはしてもらわないと。だいたい、幹部ともなれば、戦場で魔法をぶっぱなすだけが仕事じゃないってこと、最初からわかっていただろう」

「まーな。ウィードみたいな、あたしとどっこいどっこいの歳で実力も十二分って連中も大量に入ってきているし、見せ場を作ってもらえたのはありがたいと言えなくもない……。もっとも、今後もあたしをああいう、嫌われ者でみんなが言いにくいことを言わせる役どころに使うってのは、勘弁してほしい。將軍、パッシェリカ陛下やグレインにそのへんの

こと言っておいてくれないか」

「わかった」

そんなひと幕も経て、さらに数日を費やし、軍団はジェド騎士団領の端、ラゴス砦に到達した。

ここは敵地入りの前に兵たちが休める最後の場所だ。だが、小さな砦に入りきる人数ではないから、砦の周囲に大量の幕屋を設営することとなり、これがまた壮観だった。

おれはパッシェリカともども砦に入ったが、一般の兵士とは違って、落ち着いて休むことはできなかった。

「ご報告いたします！」

「敵将エレナは、こちらの動きを察知。大堰城の守りを固める動きを見せております」

「材木の切り出しや運搬などの作業はすべて停止。兵士以外の者は王都にほど近いセダック村付近へ避難させた模様です」

……とまあ、敵地へ潜行させている斥候たちから、次々に報告が入る。そうした報告を聞くと、いよいよ戦いが近づいてきたと、いやが上にも心が昂ぶっておさまらない。

「敵将エレナが、罪もない人々を盾として利用するような真似をしてきたら砦への接近さえ容易ではなくなるどころでした。そうならなかったのは幸いですね」

パッシェリカがほっと胸を撫で下ろしながらおれに言った。

「ああ。その戦術をとられることは、おれもかなり危惧していた。正義を旗印とするおれたちにとっては、難しい対処を迫られるから……」

「暴王の配下とはいえ、敵将エレナもひとかどの者、それなりの良心はある、ということでしょうか」

「うーん、おれはそうは思わない。おれたちが攻め寄せた機に乗じて、奴隷的な労働に従事させられて恨みつらみたっぷりの連中が、反乱を起こしておれたちに加担する……そういう困った事態を防止したかっただけだと思う」

ラゴス砦で一泊。

翌朝、すべての兵に食事をとらせた後で、砦の前に整列させた。

パッシェリカは砦のバルコニーに立ち、兵たちに姿を見せた。その背後に、幹部一同が整列する。

「忠勇なる兵士たちよ。私の名はパッシェリカ・イスカリエン。先王アーウィンの子であり、暴王ラディンを討たんとする者です」

静まり返った兵たちに、パッシェリカは凜とした顔で言葉をかけた。

「すでに聞き知っている者も多いことですが、私は王家断絶の事態を防ぐべく、散種

の儀によってもうけられた子です。みなと同様、一庶民として育ちました。自分が王家の血を引いていると知ったのは、戦乱が始まってからです。そのような育ちですから、私は自分を特別な人間だとは思っていません。

ですが、私は女王であると名乗って立ちました。戦火による混乱の中で母と生き別れになり、難民として流浪した経験もある私は、戦乱と、それをもたらした暴王が憎かった。そしてまた、彼を倒す者が現れない限り、ラクウェルに平和と安寧がもたらされる日はこないとわかっていました。

そう……私は、仮にイスカリエンの血を引いておらずとも、暴王と戦うべく立ったことでしょう。そうせずにはいられなかったのです。

今日、小娘にすぎない私のそばに、^{こんなに}こんなにも多くの人々が集ってくれたのは、私が王族だからではなく、ラディン打倒すべしの思いをみなが共有していればこそだと信じています。

南部を制圧した暴王は、北部を脅迫して従わせるべく、大堰城の建設に着手しました。しかし、これ以上、好きにはさせません。私たちが、力を束ねて、彼を打倒するのです！」

さっ、さっ、と物見塔で旗が打ち振られる。兵士たちは歓声をあげ、大いにわいた。

パッシェリカはおれを振り返って、うなずいた。

おれは進み出て、パッシェリカに一礼した。

彼女のかたわらに立って兵士たちを眺め渡す。

以前のおれはこういうシチュエーションでかなり緊張した。けれど今は、場数を踏んで多少は度胸がついたのか、あるいは逃げも隠れもできないところまできたことによる開き直りのためか、自分でも驚くほど落ち着いていた。

彼らに伝えるべき言葉は、事前に、おれなりに練っておいた。学校の英語の授業で習った、マーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の『I have a dream』で始まる演説を参考に、平易なわかりやすい表現で、自分の心を飾ることなく表現したい――。

「陛下より将軍を任されているシヴァだ。大堰城攻略戦の指揮をとる」

兵士たちはあまりにも数が多い。一人一人の顔や名前など、とうてい覚えきれものではない。

だが、一人一人に家族があり、友人があり、恋人があり、人生がある。

それを死の可能性も多分にある行為に参加させるのだから、人の生において、これほど業の深いことはないだろう。

「大堰城を攻略する一戦はラディン打倒へとつながる大きな一歩だ。みんなの力を貸して

ほしい。パッシェリカ陛下は女王だ。おれは将軍だ。だが、そうした肩書きの前に、ラクウェルに平和をとりもどしたいと願う一人の人間だ。あらかじめ、このことを言うておく。陛下も、おれも、みんなに命がけの戦いをさせて後方で偉そうにふんぞり返る、そんな真似はしない。前線に出て、ともに戦う」

厳おごそかに告げて、聖剣を引き抜いた。まるでパッシェリカの魂のように、美しさ、気品、力強さを備えた剣は、陽光を受けて燦然と照り輝いた。

「イスカリエン王家の聖遺物たる、この剣にかけて！ 王を自称する暴虐の怪物を討つ！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

兵士たちは足を踏みならして大地を揺らし、空を落とさんばかりにわきかえった。

おれは聖剣を鞘におさめると、再びパッシェリカに一礼して、元の位置にさがった。

パッシェリカが再び前に出て兵士たちの前に立つ。

すうっ、と彼女は息を吸った。

「いざ征ゆかん。進軍！」

＊ ＊

砦を発した軍団は、肅々と敵地入りを果すと、セド川に沿って大堰上を目指した。

川の周囲は広大な森が広がっているものの、工事のため川岸の大樹はほとんど伐採されてしまったため、開けている。いわば川岸に広い道ができてしまっているも同然なので、船がなくとも容易に大軍を進められる。

切り出し場は無人だった。労働者はみな、エレーナの指示により大急ぎで避難したのでろう、一庶民にとっては大切な品であるはずの生活用品が散乱している。

ただし……シナリオ通りなら、この場所は無人に見えて無人でない。

まだ斧が入っていないこんもりとした森の深部には、ガラック麾下の一万二千の兵が潜んでいる。彼らは戦闘が始まったと見るや、たちまち姿を現し、急進して、大堰城での一戦に加わる予定だ。

と――薪小屋を通りがかった時、ひょいと一人の男が顔を出した。

ぼろ布じみた貫頭衣をまとして腰で紐縛り、いかにも貧相なかつこうだ。だが、顔には刀傷があり、眼光の鋭さがちょっと普通じゃない。

ガラック配下の千人長で連絡役のコブランだ。おれを見ると、ニッと笑みを浮かべた。

「おい待て！」

「この痴しれ者！ 何用で将軍に近づくか！」

事情を知らされていない兵たちが殺気立つ。おれは「待て、味方だ」と制した。

「伝言を持ってきてくれたのか？」

おれの方から馬を寄せていったずねると、「左様で」とうなずいた。

「万事問題なし。始まりましたら、大量の小舟を使って、ひと息に中州へ駆けつける手はずです」

言いつつ、コブランは親指を使って森の奥を示した。

おれは無言でうなずいた。

「では、用件のみにて失礼いたします」

コブランはどこへともなく立ち去った。

「ガラックは、そーとーにマメな性格だよね。このひと月ほど、に一ちゃんに、現況についてかなり頻繁に手紙や使者を寄越していたよね」

サラがそう言っておれを見た。

「そうでなくちゃ困るさ、これだけの大一番なんだから」

「まーね。てゆーかガラックって、女にモテないって自分を卑下して生きてる風だったけど……。マメさはモテる男の条件のひとつだから、それを女性に振り向ければ、なにがしか収穫あるかもしれないって思う」

「ふうん。サラがガラックの似顔絵をかいた時に言っていたことって、本当か？」

「ああ、不細工でも、『いい顔』はあるってやつ？」

「そう、それ」

「ほんとだよ。ガラックは、味のある、いい顔の部類だよ」

「そうか」

それ以外には何がどうということもなし。軍団は粛々と歩を進めて、ついに、巨大な中州にさしかかった。

中州にそびえたつは、大堰城。大半の兵にとっては初めて目にするものだ。まだところどころ未完成だが、威容に打たれて動揺した兵もいたことと思う。

中州に敵兵の姿はない。敵将エレナはすべての兵を大堰城へ入れて、手堅く籠城戦を選択した……かに見える。

だがシナリオ通りなら、籠城戦をする構えは見せかけにすぎない。どこかのタイミングで、一気に討って出てくる。エレナとガラックの軍で、おれたちを挟み打ちにするために……。この中州はラディン陛下に楯突くパッシェリカー党どもの死地になると、今からほくそ笑んでいることだろう。いや、癩癖の強い人間は感情の振れ幅が大きいというから、ひょっとしたらエレナは城内で笑いが止まらなくなっているかもしれない。

「^{とか}渡河に移る！ 周囲を警戒！」

おれの号令で、シャノーラ率いる魔術師隊、またこれを防御する歩兵隊や弓隊が進み出た。

「エアキューブ！」

シャノーラがさっそうと魔法を唱える。空中に縦横数メートルの、空気を圧縮した立方体が出現する。彼女が手を振ると、それが川面に配置される。本来は移動できない地形を移動可能にしてしまう、風術の高位魔法！

シャノーラ隊の魔法使いたち——大半は、マウラーが手配してくれたハイエルフの魔法使いだ——もこれに倣い、次々にエアキューブを生成する。たちまち川の上に中州へ渡るための橋ができた。

「橋を渡れ！ 速やかに！ 駆け足！」

再び号令する。兵たちは続々と駆け足で橋を渡った。その間もシャノーラ隊は忙しく呪文を唱えてエアキューブを生み出し、橋の幅を広げてゆく。

手すりがない上、圧縮空気による透明な橋だから、本当はゆっくりと渡らせてやりたい。例えばノルマンディー上陸作戦なんて、事前に行われた大演習で——つまり、本物の戦闘ではなかったのに——多数の溺死者を出している。水場ってのはそのくらい怖いんだ。

しかし、この演劇、それっぽく見せる必要があるから、「みんな～川に落ちるといけないから、ゆっくり渡ってね～」とは言えない。

やがて、おれ自身も橋を渡って中州へ移った。その後もおれははらはらしながら兵たちの渡河を見守っていたが、ついに最後の一兵が橋を渡り、軍団は中州への移動を完了した。

そこからは、ざっ、ざっ、と足音高く進んで大堰城へと迫る。

城からもこちらからも、弓矢やファイアーボールなどの投射攻撃が届かない、ぎりぎりの距離で停止する。

いよいよだ。

ふーっ、とおれは息を吐いた。

なお、当然のことだが、一般の兵士たちは離間工作がどうこう、そんな話はまったく知らされていない。彼らは、必勝の策があるからこそ、こうして、攻め難きことこの上なく思える巨城へ攻め寄せたのだと、将軍であるおれを信じ、次なる指示を待っている。

……………。

……………。

落ち着くだけの間をとり、おれはかたわらに立つパッシェリカと目交ぜした。

湿度が高いせいか、それとも心理的な影響のせいか、暑い。時刻は昼を大きく回っているが、暗くなるまでにはまだまだ時間がある。

果たして夕闇が訪れるころ、この場所にはどのような光景が現出しているだろうか。

おれの描いた絵図通りに、事は運ぶだろうか？

「攻撃を開始する！」

聖剣を抜いて高く掲げ、おれは号令を発した。

かくてここに、ついに戦いの火ぶたが切られた。

* *

「押せ押せっ！ 巨城といえど、作りかけの脆い箱、力押しに押して踏み破れ！ 城内へ踏みこみ、一番槍をつけた者には莫大な恩賞を与えるぞ！」

ものすさまじいばかりの声をあげて、まずまっさきに大堰城に達したのは、バルゴ麾下のリザードマンたちだった。声を囁^からして督戦するバルゴ。STR（腕力）や VIT（体力）に優れるリザードマンたちは、これこそ戦らしい戦だと躍動した。

攻城兵器——車輪がついた移動式の櫓^{やぐら}で、兵が城内へ侵入するのに使う——三台を押し、またたくまに城壁にはりつける。リザードマンたちは、鎚や戦斧といった重量級の得物をひっさげていながら、軽快にその櫓をかけ登って行く。また、大堰城の中央部はほぼ形ができあがっているものの、一分の隙も無く完成しているわけではない。工事を急がせたため、石組みが緩くて隙間がある箇所も散見される。そうした箇所に鉤縄を投げてひっかけ、足は使わず腕力だけでぐいぐいと力強く登ってゆく命知らずが大勢いる——。

もちろん、城側の兵も黙ってはいない。城内へ入れてなると、高い窓やバルコニーに射手や魔法使いが姿を現し、リザードマンたちの頭上に矢や火炎弾を容赦なく浴びせまくる。

「トカゲどもに遅れをとったとあつては末代までの恥！ 攻めろ攻めろ！」

常は冷静なマウラーも、さすがに今日この時ばかりは、あらん限りに声を囁^からして督戦に励んでいた。ハイエルフたちは、シャノーラのようにエアキューブの魔法を使える術師を前に出し、圧縮空気の階段を積み上げて登ってゆく。

「デラウス伯！ 裏側へ！ 城の裏手を攻めてください！」

「おう！ みな、騎士の名誉をまっとうする時が来たぞ！」

おれの指示で、デラウス伯麾下の三千五百が城の裏手へと回りこんだ。

城攻めの基本は飽和攻撃だ。守備兵が守ろうにも手が回らないほどの数で多くの箇所を攻め立てることにより、守りの薄いところから城内への侵入が成功し、次第に均衡が崩れてゆく。その基本に照らせば、これはいたってシンプル、セオリー通りの指示だった。

ただ……おれとしては、ひどく心が痛む光景だった。

一人一人の兵士は、あるいはパッシュェリカのため、あるいはバルゴやマウラーといった

いきなり城の正門が開いたと思うや、雄叫びをあげて、エレーナ麾下の軍団がどっとあふれ出た。

「かかった！ 敵は計略にかかったぞ！ 挟み撃ちだ、殺せ殺せ！ 手柄を挙げれば、地位も金も思いのままだぞ！」

聞き覚えのある、敵将エレーナの声がした。

なんとしたことか！ エレーナはこれ見よがしのド派手な赤い輿に乗って出陣してきた。八十年代ディスコのお立ち台みたいな円形の台座から棒が生え、それを屈強な兵たちが担ぐ態の輿だ。その上に立つエレーナはといえば、馬鹿馬鹿しいほど派手な金欄きんらんの衣装をまとい、顔には金粉銀粉で戦化粧いくさげしやう ほどこを施して、戦場の女神気どりだった。

もっとも、エレーナの姿は陽炎の中にあるもののように揺らめいている。御輿のそばに風術師がいて、矢などの投射攻撃をブロックするウィンドシールドの魔法でエレーナをガードしているんだ。従って、矢の的になるような間抜けな行為ではない。味方の士気を鼓舞する観点からは、こういうのって、じゅうぶんありなのかもしれない。

「蹴散らせ！ 逆賊どもをひと揉みに押し潰してしまえ！ サンダーストーム！」

エレーナはもう勝ったも同然とばかりに威勢良く吠えると、大ぶりのアメジストで飾られた杖を振りざま呪文を唱えた。

途端、バリバリと大気を引き裂く轟音があたりを揺るがし、稲妻の青い蛇が無数に生じて、幾重にも枝分かれしながらリザードマンたちを襲った。サンダーストームは、おれの自作ゲーム『ラクウェルクロニクル』の最強魔法のひとつだ。広範囲の敵に強力な打撃を与える。ラディン麾下で將軍を任されるだけあって、戦闘能力は折り紙つき！

だが。

「誘い出されたとも知らずに、いい気なもんだ。籠城戦だとおれたちに勝ち目は薄いが、野戦なら勝機がある」

おれがつぶやいた、その矢先……。

「將軍！ ガラックが攻撃を始めました！ かなりの攻撃力です！ 殿が崩れ始めています！」

ミモリーが報告した。

「なっ、なんだって？ ガラックが？ こちらの殿に、攻撃を？」

おれは目を大きくみひらいた。

「將軍！ 早く対応してください、早く！」

ミモリーが悲鳴じみた声でせかしてくる……！

つまり、こういうことだ。

ガラックは、おれたちに味方しなかった。

暴王ラディンの側について、おれたちを殺しにかかった。

正しい側につかず、悪逆非道の怪物に与した……！

「くそう、ガラックのやつ！ あの野郎、こ、このおれを、ハメやがったな！」

おれは聖剣を握った手をわなわなと震わせながら口走った。

一拍の間をとって、ミモリーが「……なんてね！」と明るい声をあげた。

それを受けて、サラが寂しそうに笑った。

「ガラックさん、『いい顔』していると思ったけど、でも——に一ちゃんの読み通りになったわけだね」

「ああ。ここまで全部おれの台本通り。そして、本当の意味での戦いはここからだ」

ふふ……。

じ・つ・は！ ガラックがこちらに味方しない展開になると、おれは最初から読みきっていた。バルゴやマウラーなど、幹部クラスの面々にはこの後のシナリオについて、あらかじめ話を通してある。

「バルゴとマウラーに伝令！ すべて予定通りに進んでいるから、エレナの軍団を食い止めるようにと伝えろ！ おれたちはガラックと戦う！ 反転！」

おれは命令を発して、誰よりも素早く馬首を巡らせた。

おれが率いる直属部隊は、おれを含めて二十一名。パッシュェリカやグレインやアノンやダンガンなど、味方陣営で高い戦闘能力や特殊能力を持つ者を全員集めたオールスター的部隊だ。

「ドラゴンハーツ！」

おれは満を持して主人公専用能力を発動した。赤い魔法のオーラが立ちのぼり、おれとおれの部隊を包みこむ。いと気高き主人公様であらせられるおれのみが使える超強力なエンチャント！ おれの戦闘能力を七倍、直属部隊の小隊長四名の戦闘能力を四倍、その小隊長の下に四名ずつつく一般兵の戦闘能力を三倍にする効果がある。ただし、人馬一体、つまり馬に乗っている今の状態だと人と馬の両方に効果が及ぶかわり、強化係数はほぼ半分となる。

全身に力が漲り、心身相関で闘志も倍増した。おれは「いくぞ！」とかけ声一番、馬の腹を蹴って走らせ、ひと息に敵の前面に出た。

ガラックは將軍らしく軍団の中央に鎮座して多数の部下に守られているかと思いきや、これが傭兵あがりの男の心意気ってやつか、先頭に立って戦斧を振るっていた。猪首で短軀、馬ではなくロバに乗ったその姿は、小さいながらむしろ非常に目立つものだった。

「ガラック！ 裏切ったな！」

おれが浴びせると、やつは振り向いてニッと笑った。

「いいや、裏切っちゃいないぜえ〜。なにせホラ、ラディン陛下に逆らうのはおっかねえからよお」

やつはすっとぼけた顔つきで言って寄越した。挙句、「ふん。なにが大堰城を城ごとたたき潰す策がある、だ。そんな大ボラ同然のはったりがきくわけねえだろ」と鼻を鳴らした。

しかし、

「へー、そうかい。もっともこの展開、おれは予想済みだけどな」

おれがお返しとばかりに不敵な笑みを浮かべると、いくらなんでもこの期に及んではったりはないと直感したのか、やつの顔色が変わった。

「なに？ 予想済みだと？」

「ああ、そうさ。お前は——」

おれはさらにガラックの動揺を煽る言葉^{あお}を紡^{つむ}ごうとしかけたのだが、その間もなく、オオオオオオオオオオ！ と関の声が近づいてきた。

「ガラック様！ 背後に！ 背後に敵が！」

部下の焦りに満ち満ちた報告を受け、ガラックは「なんだと！」と、ただでさえでかいギョロ目をいっぱいにみひらいて叫んだ。

してやったり！

仕掛けは、こうだ。

ガラックがエレーナを裏切ると見せかけ、その実、裏切らないことをおれは最初から読みきっていた。やつはおれの台本を逆手にとり、エレーナの軍団と自身の軍団で挟撃してくるはず……。となると、おれはさらにその裏をかく必要がある。

そこで、おれはひそかに一般人をかき集め、兵士のかっこうでそれらしく振る舞う練習をさせた。その数、約三千。あらかじめデラウス伯に話を通しておき、この三千人を、敵の諜者に察知されないよう、旅人や商人に偽装してジェド騎士団領へ送りこみ、ラゴス砦周辺に集めておいた。で……正規の軍団が行軍を開始し、ラゴス砦に入った段階で、この三千人を正規兵の三千人と入れ替えた。

本当の意味でおれの直属といえるパッシェリカ陣営の中核兵力は七千。このうち、四千の兵と三千の『兵に偽装した一般人』が、バルゴやマウラー麾下の軍団ともども、なに食わぬ顔でラゴス砦を出発。砦に残った三千の兵は、少し時間を置いてから砦を出たんだ。

その三千の兵の仕事は、おれたちの背後を奇襲して「やってやったぜば一かば一か」とほくそ笑むであろうガラックの、その背後へ奇襲をかけること！

ガラックはおれを奇襲したつもりだろうが、おれは予想ずみなのでまったく動揺なしに
対処できる。一方、ガラックの方は本当に奇襲を受けた形だ。おれの手持ちの兵は七千、
対してガラックは一万二千だが、奇襲でしかも挟み撃ちなら、ぎりぎり勝ち目がある！
ちなみに、古代ローマでユリウス・カエサルはおよそ二倍の兵力差を覆してポンペイウス
とカトーの連合軍を撃破したが、一部の兵力を割き、地形をうまく使って側面攻撃を仕掛
けたのが主たる勝因だ。側面や背後を衝かれれば兵は動揺する。動揺すれば士気が下がる。
士気が下がれば兵は浮き足立つ。ひとたび浮き足立てば、後はもうパニック状態、收拾が
つかない混乱に陥り、本来の実力など発揮できず敗北する、そういうものなんだ。

「来ましたー！ 将軍、予定通り、来ましたよー！ ウィード率いる兵、ガラックたちの
背後を襲って切り崩しています！」

ミモリーが頭上から快哉を叫んだ。

「さすがだ」

おれは微笑した。この重要な任務をまかせたのは、ダークエルフのウィード。若干十四
歳、日本でいえば中学二年生の少年だが、難民化した子どもたちを率いて流浪しながら生
き抜いてきた苦勞人で、おれは彼の戦闘能力や胆力を高く評価している。

「落ち着け！ 数の上ではおれたちの方が勝っているはずだ！ 落ち着いて対処しろ！
セーヴォルト！ ジャイナ！ 殿のラドラムを援護しろ！ 後ろの敵を防げッ」

ガラックはすばやく部下に指示したものの、顔には焦りの色が濃かった。

「ありがとう、ガラック。籠城戦を選択されたらおれたちの勝ち目は絶無だったが、お前
がエレーナを説得して野戦にしてくれた。おかげで勝てるよ」

ここは戦場だ。相手の動揺を煽るにこしたことはないから、おれはからかいの声を浴び
せた。ドラゴンハーツで身体能力を強化している状態だと、声量も大幅に増すため、剣戟
の音色や喊声に満ち満ちた戦場でも声がよく通る。

「この後の予定は、こうだ。ガラック、お前を速やかに討ち取れば、ただでさえ動揺して
いるお前の兵は瞬く間に潰走する。そしたら即座に反転、バルゴの七千とマウラーの七千、
デラウス伯の三千五百、それにおれたちが七千、合計二万四千五百の兵で、エレーナ麾下
一万八千を攻撃してケリをつける。命を惜しむなら、逃げた方が身のためだぞ！」

「そーだそーだー！ シヴァ将軍には、伝説のジェド王と同じドラゴンハーツの力がある
んだぞー！ 戦うだけ無駄なんだぞー！」

ミモリーが翼を鳴らして空中でとんぼ返りをきり、嬉々として言い放った。

直後、ミモリー配下のセフィラ隊の者が飛来して、「シヴァ将軍！ 城の裏手に回ってい
たデラウス伯、側面からの突撃を敢行してエレーナの軍団と城の間へ割って入ることに成

功。また、同行していたシャノーラ隊が、エアキューブの魔法により城門を塞ぐことに成功！ これでもう、エレーナたちは城内へ戻れません！」と報告を入れた。もちろんこれも、最初から予定していた筋書き通りだ。

（サーチ！）

おれは心で念じ、戦闘能力を数値として閲覧できる特殊魔法を発動した。

おれの自作ゲーム『ラクウェルクロニクル』において、SPIRIT は最も重要な数値で、士気を示す値だ。これが下がると STR やら VIT やら AGI やら、ほぼすべての能力値ががた落ちになってしまう。そして SPIRIT は、戦いが敗色濃厚になったり、隊長や将軍などのリーダー格が討ちとられたり逃げ出したりした際、特に下がりやすい。実際、古代の戦闘はそういうもので、織田信長が今川義元を撃破した桶狭間の戦いは、敵の総大将を討ちとることにより、数倍の敵を潰走させる結果となった。

ガラックの周囲の兵は、明らかに動揺している風だった。おれは彼らの SPIRIT が加速度的に下がっているのを数値の変化としてはっきりと認識した。

（いける！）

おれは勇躍した。この後、ガラックが逃げ出せばよし、立ち向かってきたところでドラゴンハーツを使うおれには勝てない。おれのドラゴンハーツの能力は自分を含めてわずか二十一名の直属部隊にしか効果が及ばないので、数万単位の兵がぶつかりあう規模の戦いでは戦局にさほど影響をもたらさないが、しかし……敵将の撃破を狙う、これに関してはその限りではない。そして、城に引きこまれては敵将を討ちとるのは不可能だが、野戦ならそれが可能！

（しかもガラックは、おれをからかいたかったのか、それとも勇気があるところを部下に見せたかったのか、間抜けなことに軍団の先頭に立っておれと対峙している！）

だが――。

フフ……。

フフフ……。

ワハハハハハハハハハハハ！

いきなり、ガラックは腹を揺すって笑い出した。

「なんだなんだ、やるじゃねえか、シヴァ。戦場を駆け巡るめぐこと数多あまただが、おれの肝を冷やしたやつはそうはいねえぜ、褒めてやるよ」

「顔に似合わない台詞を吐いたところで、状況は好転しないぞ」

「言ってるボケ。おれを簡単に討ちとれると思っているようだが、そうはいかねえ。目にもの見せてやる。今度はてめえが驚く番だ！」

叫ぶや否や、ガラックは戦斧を高々と掲げた。

「ドラゴンハーツ！」

やつが高らかに唱えた瞬間、その身体から力の奔流があふれ出した。そしてやつとやつの部隊は、おれとおれの部隊がまとっているのと同じ赤い魔法のオーラに包まれた。

「ええええええ！ うっ、嘘だろおー！」

おれは驚いた。ああ驚いたさ、これが驚かずにいられるか！ 神に選ばれし伝説の勇者にして竜族の血を引くドラゴンナイト（そういう設定）である、主人公専用魔法のドラゴンハーツを、なんでこいつが使うんだよ！

おれの驚愕は、ある種のお約束を踏まえたものでもあった。洋ゲー、いわゆる海外のゲームでは、ぶさいくの強キャラって存在が許されている。代表的なのは『オ○リビオン』のマゾーガさんや『スカ○リム』のゴリディアさんだろうか。『ゴッド○ブウォー』のクレイトスさんなんて、主人公なのにつるっばげ、もといスキンヘッドだ。

しかし、日本の^{ロールプレイングゲーム}RPGや^{シミュレーションゲーム}SLGでは、味方だろうが敵だろうが、強キャラは美形で美形は強キャラ、雑魚キャラはぶさいくでぶいさくは雑魚キャラ、そういうお約束的な傾向というか暗黙の了解が厳然としてある。『信○の野望』で、能力値が高い有名武将はみんなカッコいい顔グラフィックなのに、能力値の低い微妙武将だと顔グラフィックもなんかこうそれなり、なんてのが好例だ。ほかに、そうだな、『ファイアーエ○ブレム』で能力的にだめっ子だったリフさんは当然のように顔グラフィックもそれなり……どころか、リメイク版ではリストラされて、だめっ子どころかいらない子扱い、『きずぐすり』というネタだけを残して風のように消えてしまった。

そうした具体例を離れても、大半の国産ゲームにおいては、ラストを盛り上げるため強キャラであることが宿命づけられるラスボスは貫禄がないと困るんで、グラフィック的に一定水準以上の^{そんがん}御尊顔となっている。そうだろ？

なのにつ！

「そんな……そんな、馬鹿な……」

おれはまじまじとガラックを見つめた。そりゃまあ、一介の傭兵からのし上がった男ってことでそれなりの風格はあるっちゃあるんだけどさあ。猪首で短軀、ギョロ目で、でかい鼻の穴からは鼻毛が伸び放題。今は兜を被っているからそれとわからないけれど、兜を脱げばカップハゲ……。

会ったことないけど、暴王ラディンはパッシェリカの異母兄だから、冷酷残忍だがかなりのイケメンで、おれのドラゴンハーツに匹敵する凄い魔法的能力を持っているんじゃないかな、となんとなく想像していた。

し、しかしッ！

「馬鹿な！ まさか、こんな！ こんなぶさいくが、ドラゴンハーツを使うなんて！」

思わず、おれはでかい声で口走ってしまった。

「うっわ！ に一ちゃん、言い過ぎ！ いくらここが戦場でも、それ、言い過ぎだから！

たとえ本当のことでも、言っちゃいけないことがあるから！」

サラがおれをたしなめた。

「い、言いやがったな、この野郎！ ぶさいくだってお前と同じ人間なんだよ！」

ガラックは顔を真っ赤にして怒鳴り返してきた。

「あ。ごめん。そのう、悪気はなかったんだ。いや、ほんと。ただその、意外だったもので、つい——」

おれは弁解の言葉を並べたが、

「許さねえ。てめえだけは許さねえぞお！ シヴァ！ てめえを討ちとって、てめえら全員を潰走させてやる！」

叫んで、ガラックは突撃してきた。

「く……。みんな、ここが正念場だ！ いくぞ！」

認めがたい現実だが、こうなった以上はやるっきゃない。おれは左手に手綱、右手に聖剣、負けてなるかともちらも馬を走らせて突撃し、すれ違いざまガラックと激しく得物を打ち合わせた。

ガツンッ！

（うっ！ こいつ、小柄でずんぐりむっくりの見た目だけど、実際にはかなり強い！）

たった一合打ち合わせただけで腕が痺^{しび}れ、嫌な汗が全身にわいた。

なにしろガラックは本物の戦場で生き抜いてきた傭兵。対しておれは平和な日本で育ったごく平均的な高校生だ。これまで数多の強敵との戦いを制してこられたのは、ドラゴンハーツで身体能力を数倍に強化していたからだ。

しかしこの相手は、ドラゴンハーツを使っている！

（サーチ！）

おれはもうひとつの特殊能力を発動してガラックの戦闘能力を数値として確認し……めまいがした。

（なんてこった。STR（腕力）の値が四百以上ある！ 騎馬状態だと、ドラゴンハーツの術者能力強化係数は三倍。四百割る三は約百三十。素の腕力が、おれの二倍近くあるってことだ！）

この数値だけでも、おれより強いのは明白だった。

「おい！ 敵将シヴァはおれが引き受けたッ！ お前らは態勢を立て直し、落ち着いて敵を防げ！」

その上、あろうことかガラックは、主人公っぽいカッコよさげな台詞まで吐いた。それを受けて、彼の配下の兵が勇気づけられたようにワッとわきかえる。ちくしょうめ。そういう台詞は神から選ばれし伝説の（中略）である、おれしか言っちゃいけないんだよ！

しかし、ここは戦場だ。かっこの善し悪しにかまけている暇などない。

「ミモリー！ 援護できるか？ ミモリー！」

おれはミモリーを振り仰いで、空中からの援護射撃を期待した。だが、ガラックもさるもの、「弓兵！ セフィラどもを近づけるな！」と怒鳴った。

たちまち敵の弓兵に狙い撃たれ、ミモリー率いるセフィラ隊は、おれたちを援護するどころではなくなってしまった。

（だめだ。自力でこの強敵を打ち砕くほか、道はない！）

おれは覚悟を決めて奥歯をきつく噛みしめた。

いつしか周囲の兵は、おれとガラックの戦闘にかかわってはかえって邪魔になると判断したらしく、距離をとっていた。そのためおれとガラックの周囲には自然発生的に、武闘場のごとき広い空間が現出していた。

おれとガラックは、互いに部隊を率いて突撃と激突を繰り返した。

だが、分が悪い！ おれは明らかに力負けして打ち合うたびに馬上で身体がのけぞるのに、ガラックの方はびくともしない！ また、やつの部隊の兵は、当然だが、これぞという手練れが揃っている……！

数度の激突を経た時、おれは肩で息をしていた。対してガラックはといえば、小ゆるぎもしていない。

「シヴァ！ パッシェリカ！ お前らこそ、負けを認めてとっとと逃げるんだな！ そうすりゃ、軍としては負けても、命は助かるぞ！」

小癪なことに、ガラックはおれが言いたかった煽り文句を浴びせてきた。

「愚かな！ お前たちが築いたあの城を見るがいい！ 恵みを与えるはずの大河を腐らせ、北部の人々を苦しめる魔城が、世のためになるはずもなし！ 過ちを悔いるなら、今すぐ武器を下ろすのです！」

これを受けて、パッシェリカが凜とした顔で正邪の道理を突きつける言葉を放った。彼女には『王の威厳』って特殊能力が備わっていて、その言葉には、敵の SPIRIT を押し下げる効果がある。

だが――。

(サーチ！)

おれは特殊能力を発動し、この状況を打開する突破口はないものかと、狂おしく視線をさまよわせた。

(だ……だめだ……)

ガラックは **SPIRIT** の数値が二百五十八もあった。士気をあらわすこの数値が二百以上ある者は極めて稀だ。しかも、**SPIRIT** を押し下げる効果を持つパッシェリカの言葉を受けても減少速度に変化はない。闘志に満ちあふれている。

(まずい。本当にまずいぞ、これは)

周囲で戦っているガラック麾下の雑兵たちの **SPIRIT** の値を確認して、おれはさらに焦りの色を濃くした。奇襲を受けた際、彼らの **SPIRIT** は恐怖と混乱で急激に減少速度が増していた。しかし、それに歯止めがかかりつつある。このままだと彼らは落ち着きを取り戻してしまう。それは、彼らが数で勝っている利を取りもどして、挟撃されている不利を覆すことを意味する。

そうなれば作戦は瓦解する。

おれたちの負けだ。撤退するしかなくなる。

だが、ここで撤退することは、たとえ命を長らえても、ラディンの大陸制覇を許すことと同義だ。

「シヴァ！ 長引けば長引くほど不利です！ あれを使うほかありません！ ちがいますか？」

パッシェリカの声がおれの背中に飛んだ矢先、ガラックが馬首を巡らせて再び突撃してきた。逃げ腰になれば周囲の兵の士気にかかわるから、おれも向かっていかざるを得ない。

あらん限りの力で聖剣を打ち下ろす。身長の関係で、上から下へ振り下ろすおれの方が本来はずっと有利なはず。なのに、下からは跳ね上げてくるガラックの戦斧の凄まじさときたらない。ガツンッ、と打ち合わせるなり、今はもう腕がもぎとられるかとさえ思えるほどの衝撃が走る――。

(切り札を使うしかないのか？ ドラゴンシャウトを？)

身体は汗みどろ、しかし心にはそれ以上の汗をかいていた。おれは必死に理性をかき集めて思考した。

ドラゴンハーツとともに、おれの切り札である必殺技……ドラゴンシャウト。

『ラクウェルクロニクル』においては、部隊に所属している兵の絆の力、チェーンが高くと、部隊全員の力を集めて発動するチェーンアタックって魔法的能力を使える仕様だった。それはこの異世界ラクウェルも同じだ。

(ドラゴンシャウトは主人公専用のチェーンアタックで極めて強力だ。だが、現^{ヒットポイント} H P の半分を消費する。使えば、おれを含め、部隊の全員が疲労困憊^{ひろうこんばい}してしまう)

ガラックの方は？ ドラゴンハーツを使える以上、やつもドラゴンシャウトを使えると考えるべきだろう。使ってこないのは、恐らく、必殺の切り札を出すまでもなくじゅうぶんに押し切れると見ているからだ。

ただ……。

「おい。なにをきよろきよろしてやがんだァ？ 誰も助けちゃくれねえぜ」

ガラックがまたぞろ煽り文句を口にした。

(ただ、やつはおれと完全に同じ能力を備えているわけじゃなさそうさ。なぜなら、やつには恐らくサーチの能力がない。戦闘能力を数値として確認できる能力があれば、数値に大きな変化が生じたと思われる時は発動したくなるはずなのに、そういう……凝視する視線を放っている兆候がない。ガラックは、奇襲を受けた際、味方や敵の SPIRIT の数値を確認してから命令を下しているようには見えなかった)

ということは？

(こいつにはチェーン確認能力——誰と誰が仲がいいか、誰と誰が仲が悪い、確認する能力——も備わっていないはずだ)

チェーン。絆の力。チェーンアタック発動時には、これが威力に大きく影響する。

(おれの直属部隊は、パッシェリカといい、グレインといい、強い絆の力で結ばれている。その点、ガラックの方はどうだ？)

時間が経てば経つほどおれたちに不利だ。それはわかっている。しかし、運を天に任せてイチかバチかは、本当に最後の最後にとるべき手段であって、それ以前に知恵を絞り力を絞って人事を尽くすべきだ。

「いい気になるなよ、ガラック！ おれには切り札がある！ 見て驚くな！」

おれはガラックを睨んで浴びせた。

「ヘッ、使ってみろよ。いざとなればおれも使えるんだぜ、それをな」

案の定、ガラックは自分もドラゴンシャウトを使えると匂わせる発言をした。また、『いざとなれば』との言葉には、ドラゴンシャウトは激しく消耗するのでなるべく使わずにカタをつけたいとのニュアンスも感じとられた。

「そうか。だったら、覚悟はいいな？」

「おうおう、言いやがらァ。そっちこそ覚悟はできてんのか？ それを使っちゃったら後はないって切り札だぜ」

おれは……なにも人生のワンシーンを飾るために、こんな台詞の応酬をしていたわけで

はなかった。あえて時間稼ぎをしていたんだ。

ガラックの直属部隊のチェインを、可能な限り詳細に確認するために。

(なるほど)

その結果、おれは勝機を見いだした。ガラックの部隊は、チェインが低いとはいえないものの、並だ。高くはない！

(ガラックは一介の傭兵から大出世した。エレナがああいう性格ってこともあり、人望は低くないはず。だが、大出世を妬む者もいるんだろう。それと、容姿が容姿だから、あんなやつの下につくなんて、みたいな思いの者もいるってことかな)

いや。そういうこと以前の問題じゃないだろうか。

金があればあっただけいいものだ。資本主義の日本で育ったおれはそのことを否定しない。しないが……大義や正義、人の心の芯にある揺るぎ無い信念は、時に金を上回る強大なパワーとなって人を動かす。本気で大陸の平和と安寧を願い、それに命をかけたパッシェリカの魂は、強い絆の力でおれたちを結んでいる。その絆は、金や出世欲で結ばれたラディン陣営の面々の絆より強いはずだ。

いや、強くあらねばならないはずだ。世界は、そうあるべきなんだ――。

「勝負をかけましょう、シヴァ。もしここで敗北するなら、しょせん、私たちはその程度だったということです」

パッシェリカが馬を寄せておれの背に手をあて、静かにうながした。

「ああ、証明するよ。パッシェリカは暴王ラディンよりも正しいってことを」

おれは聖剣をひっさげ、改めてガラックを睨み据えた。

来る、と直感したのだろう。ガラックは不敵に笑い、「これこれ、この張り詰めた空気が戦場の^{だいがみ}醍醐味だよなァ」とうそぶいた。

おれはちらりと振り返り、仲間たちとうなずきかわしてから、一散に馬を走らせた。

ガラックも、待ってましたとばかりにこれに^{なら}倣う。

真正面から両部隊が激突しようという刹那、おれとガラックが発した「ドラゴンシャウト！」の聲が重なった。

その途端、両部隊がまとっていたドラゴンハーツの赤いオーラが、赤き巨竜の形をとって轟音とともに放たれた。

いわば、至近距離で互いに大砲を撃ち合ったようなものだ。お互いが放った巨竜の激突は、さらなる轟音を呼んで戦場全体の空気をびりびりと揺るがした。

あまりのことに剣戟の音が止んだ。戦場のすべての兵士が何事かと反射的にこちらへ視線を放つ中、ガラックとその部隊の兵たちは、押し勝ったおれたちの竜に弾き飛ばされ、

宙を舞った。

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

味方陣営から大歓声があがる。ガラック麾下の兵たちは顔を青ざめさせた。

だが！

もんどり打って地面に転がったガラックは、戦斧を杖にして、よろよろとではあったが、立ち上がった。

「まだ……まだだッ、逃げるな、戦え！」

足をよろめかせながらも、やつは毅然として言い放った。

(なんて闘志だ。とんでもない数値の SPIRIT の持ち主だってことはもうわかっていただけ——)

敵ながら賞賛せざるをえない。心からそう思った、その時——不意に、おれの心に映像的なイメージが流れこんできた。

(あつ。これ、アノンやバルゴの時にもあった、あれか？)

サーチやチェイン確認能力は、読心術に近い。そのせいか、相手の精神や記憶が、流れこんでくることがある。

おれはその映像的なイメージを通じて、知った。ガラックの幼少時からの思いを。人に見下されまいと、必死になって生きてきた日々を。彼を導いてくれた伯父のグスタフを、今なお敬愛し続けていることを。

金と地位が欲しいだけの、ただの傭兵と決めつけるのはあんまりだ。彼には彼の思いがあった……。

「なあ、ガラック」

おれはためらいがちに口を開いた。

「笑われ、馬鹿にされ、見下されるのは辛いことだ。そうさせないために金や地位が必要だったって言い分にも同意する。だけど……お前は、多くの理不尽に立ち向かってきただろう？ 自分の存在意義をかけて、戦ってきただろう？ おれたちが暴王ラディンと戦うのも、まさにそれなんだ」

「——」

「おれたちは、ここで負けるわけにはいかないんだ。わかってくれ。それと……これは、お世辞で言うんじゃない。ガラックは、ライナスなんかよりずっと凄いやつだ。おれはそう思うし、今は亡きグスタフもきっとそう思っていたはずだ」

するとガラックは瞠目して「なぜ、それを……？」とつぶやき、突然、すべての力を失ったように膝をついた。

将たる者の敗北した姿に、もはやガラック麾下の兵の動揺は止まらなかった。心の弱い者から順に悲鳴をあげて逃げ始め、そうなるともう歯止めがきかず崩壊の一途をたどった。

とはいえ、これで戦いのすべてが終わったわけではない。思いのほか手こずらされ、貴重な時間を消費してしまった。早くバルゴとマウラーに加勢し、エレーナの軍団を崩さなければ。

「反転！ 後はエレーナを潰走させれば、この戦いはおれたちの勝利だ！」

その場にうずくまって、逃げもせず、じっと動こうとしないガラックをちらりと見やり、馬首を巡らせる。

おれたちが攻撃に加勢したこの段階で、エレーナはガラックが敗北したことを察知したはずだ。馬鹿げた派手さの輿に乗っていた彼女は、激しく動揺し、「城へ！ 城へ戻るぞ！

全軍、城へ撤退！」と悲鳴じみた声を放った。

すると大堰城の塔やバルコニーから、弓兵や魔法使いが、エアキューブの魔法で城門を塞いでいるシャノーラ隊とこれをガードしているデラウス伯麾下の三千五百の頭上に猛烈な攻撃を浴びせ始めた。エレーナはこの戦いに臨むにあたり、最低限の保険として、一千くらいの兵は城内に残して討って出たのだろう。

そのこと自体はおれの予想の範囲内の出来事だった。だが、エレーナ麾下の兵が死にもの狂いで城へ戻ろうとし、しかも頭上からも攻撃を浴びせられているときは、城の入り口を遮断している味方の兵は長くはもたない。

「絶対に城へ入れるな！ 攻めろ！ 攻めろ！」

おれは声を哽らして督戦した。ドラゴンハーツを使って敵陣を突破しエレーナに迫りたいところだが、ガラックとの戦いでドラゴンシャウトを使ってしまったため、消耗しきっていて、そこまでの無理はできない。

ここで再び、冷や汗が止まらなくなる展開となった。エレーナは遮二無二サンダーStormの魔法を放ちまくるし、その麾下も死にもの狂いだから、思いのほか粘って容易に崩れない。

(まずい！ シャノーラやデラウス伯はわずか三千五百で敵中に孤立している状態だ、このままでは……)

万策つきたか？ と思われた時、奇跡が起こった。

「あああああああ！ 將軍、しょうぐーん！」

ミモリーが頭上を飛び回りながらわめいた。

「なっ、なんだ？ どうした！」

「なにか来ます！ 後方から来ます！ 大量の小舟が押し寄せてきます！ じきにここへ

到達します！」

「えっ？ 後方？」

もしや、と思った。

「ジェド騎士団か？ そうなのか？」

「そのようです！」

「この目で確認させてくれ！」

セフィラたちに空中へ吊り上げてもらい、おれは後方の様子を確認した。

そして、顔をほころばせた。最後の最後、大詰めも大詰めのおいしい場面で現れやがって！

「ロムロスの将、ハルコン！ 四千の兵にて、パッシェリカ陛下に助勢いたす！」

「アデラスの将、ラナンシー！ 同じく四千にて馳せ参じました！」

中州へ上陸するなり、二名の将が大音声に言い放った。ハルコンは五十がらみのいかにも歴戦の^{つわもの}兵といった大兵。ラナンシーは二十代後半と見える女騎士だった。

（アデラスとロムロスの老当主は、真に和解したか、もしくは、パッシェリカに恩を売っておかないと後が怖いと判断したんだな。合計八千の兵力なら、決定力になる！）

おれはミモリーに指示して、二人の前に降り立った。

「将軍のシヴァだ！ 東へ回りこんで、敵軍の側面を攻撃してくれ！ エレーナに城へ逃げこまれたら終わりだ、ありったけの攻撃を浴びせてくれ！」

「了解！」

「お任せあれ！」

兵を引き連れて駆け出す二人の背を見送る間も惜しんで、ミモリーに「セフィラ隊の者を使って、バルゴとマウラーに伝令してくれ。西側の兵を退かせるように伝えるんだ」と告げた。

「えっ？ 退く？ 退かせちゃうんですか？」

「そうだ。四方八方を完全に囲まれた状態だと、逃げ場がないからエレーナたちは死にもこの狂いで戦うほかない。だが、突破して逃げられる箇所があるとなれば、そこから撤退しようとするはずだ！」

「なるほど！」

これ、歴史上にも良く登場する戦術なんだ。心理学においてパニックとは、危機的状況下、かつ、逃げ場がある状態で起こりやすい。人間、どこにも逃げ場がないとなると、絶望するどころか開き直っちゃうものなんだ。

果たして、おれのこの読みは当たった。

東側に思いもかけぬ新手が加わったのとほぼ同じタイミングで西側が手薄になったため、エレーナは「逃げろ！ 西へ逃げるのだ！」と命じた。

誰だって死にたくはない。エレーナ麾下の兵は雪崩を打って西側へと殺到し、囲みを突破した。

だが、囲みを抜けても、徒歩で行けるのは中州の外縁部まで。その先はセド川だ。泳がなければ渡れない。鎧を脱ぎ捨てて川に飛びこむ者、鎧を脱ぐ手間を惜しんで飛びこみ重さで溺れる者、泳げないのに川に飛びこむ者。あげく、溺れる仲間を救うどころか、それを踏みつけて川を渡ろうとする者……。見るに堪えない醜態であり、酸鼻だった。

「パッシェリカ。ドラゴンハーツを使うから、ありったけの声で、敵兵に投降を呼びかけてくれないか」

おれはミモリーに指示して地上に下ろしてもらい、パッシェリカに頼んだ。

「否やはありません。無益な殺生をさけ、救える命を救うのは当然のことです」

ドラゴンハーツ！

「私の名はパッシェリカ・イスカリエン！ 大義によって立つ女王！ 速やかに武器を捨てて投降しなさい！ 投降した者の命を奪うことはありません！ 投降しなさい！」

ドラゴンハーツの力で声量を増したパッシェリカの言葉が、敵兵を打ちすえた。彼女の言葉には真心がこもっていて、聞く者の心に響いたと思う。

行く手は川で逃げるも地獄と悟った敵兵は、次々に投降し始めた。

エレーナが大堰城に残していた兵は、今さら籠城戦を展開できるほどまとまった数ではなかっただろうし、自分たちを見捨てて逃げ出した將軍の姿に絶望した心境は容易に推測できる。そこへパッシェリカが投降を呼びかけたので、すぐに彼らの心は折れた。城内の窓や塔から、「降伏だ！ 降伏する！」と叫ぶ者があらわれるまでに時間はかからなかった。

「勝った！ 勝ったぞ！ 歓呼三声！」

大勢は決したと見て、おれは聖剣を高く掲げた。

ワァー！

ワァー！

ワァー………！

かくてここに、大堰城の戦いは、おれたちの勝利で幕を下ろした。

TURN12

ゲーマーにとって真のエンディングとはなにか。それはゲーム制作者が用意したトゥルーエンドにたどりつくことではなく、自分が納得するプレイをやりきった上で、ゲームを終わらせることではないだろうか。

——柴崎 剣

暴王ラディンとの最終決戦まで気は抜けない。

とはいえ、大きな一歩となる勝利なのは確かだ。

おれたちは凱歌をあげ、自らを祝福する言葉を口ずさみながら、胸を張って大堰城に入った。

降伏したエレナ麾下の兵たちは怯えきった様子だった。おれは降伏の決定をした隊長に、非道な扱いはしないと約束して、彼らを安心させた。もちろん、身柄はひとまず拘束したけどね。

また城内には、雑事をこなすため残された労働者たちもいた。彼らの大半は、奴隷同然の労働を強いられていたのだろう、笑顔と喝采でおれたちを祝福してくれた。

「シヴァ。兵たちは慣れない遠征で疲れきっています。ひとまず、見張りに立てる者を除き、兵を休ませるとしましょう」

パッシェリカの言に、おれはうなずいた。

「そうだな。それに、この城には三万の兵が立てこもって籠城戦できるだけの食糧ほか物資が貯蔵されているはずだ。酒もあるだろうし、勝利の宴といこう」

城で働かされていた者たちの案内で兵糧庫を開け放つと、焼きしめたパンや干し肉や干しブドウといった保存食ばかりだったものの、膨大な量が貯めこまれていた。また酒樽もこれでもかというほど山積みだった。

かくて、兵たちは城の各所にて飲めや歌えの無礼講^{ぶれいこう}となった。

でも、おれをはじめとする幹部一同は、その輪に加わっている暇などない。

おれたちは軍装を解かないまま、大堰城の一角にある広い会議室——つい昨日までは敵将のエレナやガラックが使っていたはずの部屋だ——に集合して、巨大な円卓についた。

みんな精神的には高揚していても、肉体的には疲労している。食べなければ身体がもたないので、料理や酒が次々に並べられた。

「みな、ご苦労でした。私たちは大勝利し、こうしてこの城を占拠した。それは事実ですが、さらに大変なのはここからです。明日から……いえ、すでに始まっている新たな戦いのため、もうひとがんばりの思いで軍議に臨んでください」

パッシェリカがみな^の労をねぎらいつつ、軍議の開催を宣言した。

「休む間もなくてすまないが、今後の展望について話しておきたい」

おれは立ち上がって、円卓の顔ぶれをざっと見回した。

長らくパッシェリカを支えてきたグレインやミモリーはもちろん、盟友のバルゴも、新たな仲間となったマウラーも、遅まきながらではあったが参戦してくれたアデラス家のランシーとロムロス家のハルコンも、勝利に酔った顔つきではなかった。

「この大堰城はラディンの本拠地である王都を攻める前哨基地として最適の立地だ。だが、それでもなおまだ状況は厳しい。敵将エレナはわりあい速やかに逃げに転じたためおれたちは少ない犠牲でここを落とせたが、見方を変えると、エレナが損じた兵の数も少ない。そしてラディンは、すぐに大堰城失陥を知ることとなるだろう。そうしたら、暴王はどう出るか。やつの、博打的な作戦で一举に南部を手中におさめた戦術眼は侮れない。やつにとってもここが正念場、厳しい一手を打ってくることが予想される」

みんな、もうこらえきれないとばかりに食べ物や飲み物を口にしていた。ただ、目と耳はちゃんとおれに向けられている。

「現在、パッシェリカの旗の下に集った同盟軍と、ラディン軍との戦力比は、まだまだ勝負にならないほどラディンに分がある。頼みの綱は、この勝利によって同盟軍の力は本物だと大陸各地の勢力が判断し、また暴王の下につくことをよしとしない感情も手伝って、同盟軍の力がラディンに対抗できる水準に達すること。そのう、この城をとったすぐ後で、こんなことを言うのはなんだけど……」

おれはいったん言葉を切って唇を軽く噛んだ。

「もし、ラディンが南部を放り出し、あるだけの戦力をかき集めて迅速に大堰城奪還のため攻めかかってきたなら、おれたちがこの城を支えるのは難しい。攻城戦において、守備側は攻撃側より少ない戦力で戦いを展開できるため、一見するとおれたちが有利であるかに見えるが、そうじゃない。というのも、おれたちは本拠地を離れて長征しているため、軍需物資の補充がきかない。対してラディンは、拠点である王都が近いため兵も物資も補充がきく。考えたくもないが、この大堰城でラディンと対峙しているうちに、ラディンに使噓^{しそう}されたどこかの勢力が東リザード自治領やアレリア自治領に攻めこんできたり、おれたちの後背を遮断したりした日には、おれたちはこの地で孤立する。大堰城の攻略に成功したことが、かえっておれたちを窮地に追いこむ可能性さえあるってことだ」

「シヴァ將軍。その点に関して、最低限、アデラス家は寝返らぬものと思っていただきたい。その覚悟なくば、これだけの兵力を割くことはできませんでした」

「右に同じ。ロムロスもアデラス同様、あまりに多くの血が流れた大乱に倦んでおります。このような乱れを呼んだ元凶、暴王ラディンと同じ旗を仰ぐことはできませぬ」

アデラスの将ラナンシーが、ロムロスの将ハルコンが、頼もしい言葉とともに胸を拳で二回たたいた。

「ありがとう。ただし、ほかの群雄たちがこの戦いの結果を受けてどう動くかは、まだ読めない。誰だって我が身がかわいい。おれたちにとって日和見屋はもどかしいが、責めることはできない……。ただ、さしあたり総大将としてこれだけは言うておく」

おれは今一度、みんなの顔を見渡した。

「もし、ラディンの動きがあまりに迅速で勝てそうにないと踏んだ場合、あるいは第三勢力によって背後を遮断される恐れがあると見た場合、残念だが、この大堰城を放棄して撤退する。この一戦は大きな勝利だった。けれど極端な話、何度負けても最後の最後に勝った者が、最終的に大陸を統治することとなる。このことをわかってほしい」

喉を鳴らして酒を飲んでいた者も、鶏の骨つきローストを咀嚼していた者も、みんな動きを止めた。

おれだって、大勝利をおさめたばかりの場で、こんなことを言いたくはない。でも、言わなければだめだ。歴史が教えてくれるが、古代の中国で、後に漢かんを興おこすこととなる劉邦りゅうほうは、宿敵こううの項羽に負けて負けて負けまくったが、次第に捲まくりかえして行って、最後には大勝利をおさめ、霸権を手にした。

そう……途中経過でどんなに輝かしい勝利をおさめたとしても、それはあくまで過程にすぎない。日本の歴史には、全国制覇に王手をかけたも同然の状態から、部下である明智光秀あけち みつひでの反逆によりあえなく討ち死にすることとなった織田信長おだ のぶながの例もある。

おれたちは、最後の最後に勝たなければならない。そうでなければ、途中経過でどれほど連戦連勝を重ねたところで、まったく意味がない――。

「しかしだ、シヴァ。全軍の将たる者、最悪の事態に備えておくのは当然のことだが、良い方へ事態が転んだ場合のことも考えておくべきだろう。おれはこの大勝利、大陸に与える衝撃はかなりのものになると見ている。誰もが犬猿の仲と思っていたリザードマンとハイエルフが、またアデラス家とロムロス家が同じ旗の下に集い、暴王の軍勢を追い払ったのだからな」

バルゴが、ぱし、ぱし、としっぽで床を軽くたたきながら言った。

「うん、そうなんだ。希望的観測を抱くのは危険だとわかっているけれど、今回の勝利で

事態が一気に良い方へ傾く可能性もかなりある」

おれはここでようやく、少しではあるが、笑みを浮かべた。

「このまま黙っていれば暴王の力は増すばかりで、いずれ彼が大陸の覇権を握るのは時間の問題……と思っていたところへ、対抗できる勢力がここにあるぞと示したんだからな。なによりパッシェリカの旗印は正義と公正だ。支配者としてふさわしくない男を追い払って平和を取りもどす大義名分といい、世間一般の、いわゆる普通の庶民の感覚からすれば、ラディンとパッシェリカ、どっちを支持したいかは明白だろう。そういう大多数の『声』を無視して政治は成り立たない。恐怖政治で民衆を完全におさえこみ自分のわがままをすべて押し通すなんてのは、絶対支配を確立していない限り不可能だ。先見の明ある領主はそのあたりを敏感に悟り、こぞってパッシェリカ支持に傾き、ラディン打倒の機運が一举に高まってくれる——決して、ありえない話じゃない」

するとバルゴは、「耳の痛い話だ」とつぶやいた。パッシェリカから聖剣を奪取して覇王の名乗りをあげようとしていた過去の自分を恥じているらしい。

「そこで、だ。そういう機運の醸成のためにも、打っておきたい手がある。ずばり言うぞ。敵の副将ガラックを捕虜としたが、今から彼をこの場に呼んで、寝返ってくれと交渉する。彼が首を縦に振った場合は、満場一致でこれを歓迎してほしい」

おれが告げると、ざわめきが起こった。

「おい待て！ わざわざ離間工作を持ちかけてやったのに、それを逆手にとって我々と戦った男だぞ！」

「危険ではないのか？」

「敵将に情けをかけるのは宣伝効果がある、と思うものの……ラディン配下の将だぞ。ラディンを敵視している者たちにとっては面白くないのではないかと？ 差し引きすると、損になりそうな気もするが」

「よしんば寝返ったとして、簡単に旗を変える男ときては、土壇場で再びラディンに寝返るかもしれんぞ」

「だいたい、顔がいかん、顔が。捕虜となったのでちらりと見てきたが、あれは下衆の顔だ。信頼できる、筋の通ったものが感じられん」

予想はしていたが、否定的な意見が次々に飛んできた。

「みんなの危惧はわかる。ただ、彼は成り上がり者だけに指揮官として実力がある。また、戦場で目のあたりにした者もいるだろうが、どういうわけか……おれと同じくドラゴンハーツの使い手だ。それが味方につければこの上なく心強い。なにより、ラディン麾下の名のある将が寝返ったとなれば、ラディンの軍団そのものに動揺が走るはず。損得勘定でい

えば、確実に得が多いとおれは踏んでいるんだ。これに関しては、悪いが、おれの意見を通させてほしい」

おれはパッシェリカを見た。

「私はこと軍事に関して、ほぼすべてをシヴァに頼っています。ですから、新たに私の旗の下に集った諸将も、彼を信頼してほしいと思います」

鶴のひと声だ。女王陛下がそこまで言うなら……と、異議を唱えていた面々は不承不承といった態度ではあったものの、うなずいた。

「よし。じゃあ——」

おれが手をあげて合図を送ると、グレインが立ち上がって、いったん会議室から消えた。じきに、彼は鉄の鎖を使って嚴重に縛りあげたガラックの、腰縄を引いてもどってきた。

「ふん……」

ガラックはおれたちの顔をひとつまたひとつと眺め、小馬鹿にした様子で鼻を鳴らした。ふてぶてしい顔つきは戦場で見た時のものと変わっていない。捕虜の身でありながら、堂々としている。

「これが、ラディン陛下に楯突く逆賊どもか」

「おい！ パッシェリカ陛下の御前だぞ、^{ひざまず}跪け！」

グレインが軽く小突いたけれど、ガラックは傲然と胸をそらして従わない。

「あ。グレイン、ここはおれにまかせてくれ。それと、ガラック。お互いに憎まれ口の応酬をしたところで時間の無駄だから、そういうのは省いて話をしたい」

おれが言葉を飾らずに話しかけると、ガラックはまた鼻を鳴らした。

「このガラック様と話をしたいなら、まずはこのいまましい縄を解きやがれ。おれは一介の傭兵じゃねえんだ、ラディン陛下のもとで出世した今は、ひとかどの將軍よ。それを扱うには、それ相応の礼儀を尽くすところから初めてもらおうじゃねえか。それともなにか、パッシェリカに仕えるシヴァ將軍てえのは、こんだけ仲間を従えていてもおれ一人が怖くて縄なんざほどけねえってか」

うーん、口の減らないやつだ。放っておくと、おれはよくてもほかのみんなが激怒して、ややこしいことになりかねない。

「わかった。グレイン、縄をほどいてやってくれ」

「えっ？ シヴァ、いいのか？ こいつは——どういうわけか、お前と同じ力を、ドラゴンハーツの力を持っているんだぞ！ 武器はとりあげているものの、危険だ！」

グレインは目を剥いたけれど、おれはガラックをじっと見つめながら「かまわない、ほどいてやってくれ」ともう一度告げた。

「……おかしな真似はするなよ。おれがこの短剣を抜いて背後に立っていることを忘れるな」

グレインは小さな舌打ちとともに、短剣を抜いて鎖を切り払った。ちなみにグレインが装備している短剣は迷宮攻略で得たミスリルを鍛えたものだ。鉄の鎖をあっさり切り払ってしまうんだから、その切れ味たるや脅し文句の必要などないほど凄い。

自由を得たガラックは手首を軽くさすった。

「さて、と。ガラック、おれ以外にもドラゴンハーツの使い手がいたとは驚きだ。お前には聞きたいことがたくさんある」

「けっ。それはこっちも同じこった」

「ただ、まずは先にお前の処遇について話したい。おれとしては、お前を——」

「当ててやるぜ。ラディン陛下を裏切って寝返れ、だろ」

「察しがよくて助かる。ラディン麾下のドラゴンハーツの力を持つ有能な戦士にして将を迎え入れたとなれば、パッシェリカの度量の広さに各地の群雄は感銘を受けるだろうし、ラディン陣営は少なからず動揺するはずだ。あ、ちなみにこれも言うておく。拒否した場合は牢屋に閉じこめ、お前のそっくりさんを探して身代わりに立て、『見ての通りガラックはパッシェリカ陣営に寝返った』と喧伝しまくる予定だ」

「ツラに似合わず、えげつねえことを言いやがる……。が、あいにくだな。おれほどのぶさいくなんざ、ラクウェルを東から西まで捜し歩いたっていやしねえよ」

「そう憎まれ口ばかりたたくな。悪い話じゃないだろ？ ラディン配下で将として扱われていたのと同様、こちらでもちゃんとひとかどの将として扱うから。首尾よく暴王を倒したら、その後は、そう高い地位は与えられないけど、一生食いつぱぐれない程度の身分は保証する。いいかな？」

おれはいちおう、パッシェリカの方を見て確認した。彼女は微苦笑を浮かべつつうなずいた。

ガラックはしばし押し黙って、顎を撫でながらおれを見つめていた。すでに当初の小馬鹿にした態度はひっこめている。おれのことを、恐れてはいないが、力を持った男として認めている、そんな気配だ。

「シヴァ……将軍。その問いにこたえる前に、どうしても聞いておかなくちゃならねえことがある」

「うん？ まあ、答えても差し支えの無い質問なら受けつける」

「なあ。いったいどこでおれの策を見破った？ どこで、おれがどちらにつく気か、心の動きを見抜いた？ お前らは——エレナとおれの仲が悪いって噂に目をつけ、おれに近

づいて裏切りを持ちかけた。そこでおれは、エレーナをぼろくそにけなして、渡りに船とばかりに応じる風を装った。だがお前は、おれが寝返ると見せかけ、それを逆用してお前らをハメるつもりだと完全に読みきっていた……。どうしてもわからねえ。おれとエレーナの仲が悪いってのは有名な話だったはず。それに、おれの演技が下手だったとも思えん」

ガラックは円卓の一席をしめているアノンをちらりと見やった。

そのアノンも、おれがなぜガラックを信用しなかったのか不思議らしく、おれの回答を待っている様子だ。

「ああ、そのことか。じゃあ、種明かしといこう」

おれはうなずいた。

「おれがエレーナとガラックの秘密を見破った発端は、ほんのささいなことだった」

「もったいぶらずに聞かせろ」

「そうせかすな、順序ってものがある。おれは大堰城の工事現場で、工事の進捗状況を確認かめに出てきたエレーナとガラックを目撃した。ほら、地盤が弱くて基礎部分がどうとかって監督の兵士が言い訳していた、あの時さ。噂通り、エレーナとお前は仲が悪そうに見えた。ところが、だ。石かなにかに蹴つまずいて穴の中へまっさかさまになりかけたエレーナを、お前はとっさに駆け寄って支えた。心底嫌っていて、死ぬか怪我でもすればありがたいはずのエレーナを、だ」

「む……。あの時、あの場で、あれを見ていやがったのか」

「とっさのことって、考えてから行動に移る余裕がない。だから、本心が行動に表出してしまう。あれを見た瞬間、この二人って本当に仲が悪いのかなって疑念がわいたんだ」

「あんなささいなことで、か」

「そうだ。そして心配になった。おれたちはガラックに離間工作を仕掛けようとしているが、果たして本当にエレーナとガラックは仲が悪いのか、と」

「……………」

「戦乱の世において、離間工作は大きな意味を持つ。味方と思っていたはずの仲間が寝返れば、ここ一番で大変なことになるからな。だから各地の群雄は諜者を放って、敵勢力に離間工作に応じそうな、待遇そのほかに不満を持つ将はいないか、探っている。ラディン陣営もそれは同じことだろう？」

「まあな。もっとも、おれは諜報がらみの仕事は畑違いだが」

「で、だ。離間工作は成功すれば大きな旨味がある反面、危険も大きい。離間工作を持ちかけられた者がそれを逆用しようと思いつき、応じると見せかけておいて、死地に誘いこ

んでくる可能性があるからだ。そうなったら、離間工作を仕掛けた側はかえって窮地に陥ってしまう。だましていたつもりがだまされる、智者は智に溺れる、ってやつさ」

「……………」

「おれはガラックとエレーナの関係に疑念を抱き、二人の上に立つ暴王ラディンについて想像を巡らせた。実際に会ったことは一度もない。けれど、暴政で大乱を呼んだくらいだから、自分勝手にわがまま、この世で自分が一番、ほかは虫けら同然って考えの持ち主なんだろうな、くらいは察しがつく。また、博打的かつ電撃的な作戦で南部を一举に占領した一戦だが、エレーナとガラック麾下の兵を、旅人や商人のなりで少しずつ南部へ送りこんでおき、それをひそかに敵地で結集させ、敵集団の背後をついたんだろ？ このことから、知恵で——自分の頭から絞り出した『力』によって優位に立つのを好む傾向と、その知恵に絶対の自信をもって大胆な策をとる性格が浮かび上がってくる」

「ふん。会ったことがねえ、と言いながら、見てきたようにいいやがらァ」

「とにかく、こうした分析を総合して、おれが導き出した結論は、こうだ。おそらくラディンはかなり早い段階から、エレーナとお前にこう命じていたんだ。普段から兵たちの前で、ことさら仲が悪いかのように見せかけておけ、と。どこかの勢力が離間工作を持ちかけてきたら、それを逆手にとって大打撃を与えるためだ、と」

「この野郎、当てやがった……。そうだ。ラディン陛下は、おれをエレーナの副将とした時、まさにお前が今言った通りのことをおれたちに命じた……」

「そうか。当たりか。それで、さっきの話にもどるけど。覚えているか？ お前が転びかけたエレーナを支えてくれたあの時、エレーナの方は反射的にガラックの手を振り払おうとしただろう」

「ああ。お前が言った、とっさの時に本音が出るってのを当てはめれば、あれがエレーナの本心だった……ってことか？」

「うん……。そのう、ガラックにとっては聞くのが辛い話だろうけど……。お前がエレーナを嫌っているというのはあくまでラディンの命令通りのお芝居、つまり見せかけだった。それに対して、エレーナはガラックのことを本気で嫌っていたんだ。彼女の方は、お芝居じゃなかったんだ」

ガラックはしょんぼりと肩を落とした。

円卓の誰かが、「すごい洞察力だ……」と感嘆のつぶやきをもらした。

だけど、おれはべつだんこのことを誇る気はなかった。ガラックの手前、そういう態度をとるのは気が引けたってのもある。けれど、敵の奸計を見破れたのは、おれに備わっている超魔法的な特別な力のおかげだ。

そう、おれには各ユニットのチェイン……絆の強さを確認できる能力が備わっている。
(チェインを確認) と念じると相手の頭上に吹き出しと、感情をあらわすアイコンが表示される。誰が誰を好きで、誰が誰を嫌いか確認できる。

だからおれは、エレーナのガラックのあの一幕の際、ひそかに(チェインを確認) と念じた。そしたら、ガラックの頭上には、相手をすごく好きって意味の、ハートマークのアイコンが出ていた。対してエレーナの方には、怒り顔のアイコンが……。それで、はっきりと、ガラックの方はエレーナを嫌っているお芝居をしているだけで本当はかなりの好意を抱いている、対してエレーナの方は本気でガラックが嫌い、と確信したんだ。

もっとも、おれが(この二人に対して、チェイン確認の能力を発動してみよう) と思ったきっかけは、転びかけたエレーナをガラックが支えようとした際の二人の反応を見て、直感的に温度差を感じたためだ。また、離間工作の任務において、エレーナとガラック、二人のチェインを確認できる機会はあれ一度きりだった。それを思えば、ある程度は、洞察力も関係している。

「ガラックにとっては認めたくないことかもしれない。でも事実、エレーナはこの大堰城の戦いで、お前を見捨てて撤退してしまった。そうだろう？」

「おれは、お前に負けたとは思っちゃいねえ……。おれとおれの麾下が敗れても、エレーナが逃げたりせず、死にもの狂いで戦い続けてくれていたなら……。勝ち負けどちらに転ぼうとも、お前らが損じる兵の数はそうとうなものになっていたはずだ。ラディン陛下には、エレーナとおれに任せている兵が全滅したとしても、まだまだ多くの兵がある。広大な南部もおさえたから、徴兵すれば失った兵を補うのもたやすい。対して、お前らは一兵たりとも損じたくないほど兵力に余裕がないはず……。つまり、おれとエレーナはたとえ大堰城で負けても、お前らにある程度以上の損害を与えれば、勝ったのと同じだった。すぐにラディン陛下が大軍団でここへ押し寄せ、おれとエレーナの敗戦を帳消しにしてあまりある勝利を得ていたはずだ……」

ガラックは悔しげにこぼしながら、天井をふり仰いで嘆息した。目尻に光るものが微かに認められた。

彼の悲しみは、好意を抱いていた女性に嫌われていた現実を突きつけられたがゆえのものだろうか？ それとも、相棒として信じていた将の不甲斐なさを目のあたりにして幻滅したせいだろうか？

「慰めになるかどうかかわからないけれど、おれもそう思うよ。今、指摘された通り、おれたちがこの戦いにつぎこんだ戦力は、一兵たりとも失いたくない、貴重でかけがえのない兵たちだった」

おれは大真面目な顔でうなずいた。実際、そうなんだ。

「なあ、ガラック。傷心のところ悪いけど、最初の話に戻るぞ。あくまで推測だけど、エレナはラディンに大堰城失陥を報せる際、責任をお前になすりつける。そうしなければ自分の立場が危ういし、お前の口車に乗って野戦を選択したのは事実だし、なにより、そもそもお前を嫌っていたから。そのあたりを踏まえても、お前には、おれたちの側にくほか道はないと思う」

「……シヴァ」

ガラックはおれを見て苦笑した。

「こんなことをこんな場でたずねるってのは、おれ自身、ちと気が引けるが……。お前は歳に似合わず、人の心の機微ってもんを察するのが得意らしい。だから、正直なところを聞きてえ。男ってのは、ツラがよくなけりゃだめなのか？ おれみてえなむさくるしい醜男は、どんなに戦功を重ね、出世しても、女にはもてねえもんなのか？」

非常に答えにくい質問だった。戦場でおれがうっかり口走ってしまった言葉は、おれが思う以上にガラックを傷つけていたのか……？

「そんなことないよ」

すると、サラが口を開いた。

「といって、『男は顔じゃない』なんて言いぐさは嘘だと思う。問題なのは総合力。女の子が男の子を好きになるのは、色んな要素が関係しているんだよ。顔、経済力、身体、地位、音楽みたいな特殊な技能、性格、服装……。あと、やっぱり相性の問題は確実にあるよ。エレナはあなたを本気で嫌っていたみたいだけど、世の中広いんだから、どこかにあなたと相性のあう女の人もいるはずだし、今そういう人がそばにいらなくても、いつかはあられるんじゃない？」

立て板に水を流すように言っただけのサラを、ガラックは戸惑い顔で見つめ、それから、「なるほど」と神妙にうなずいた。

「ただ、これだけは言っておくよ。ガラックさんの、鼻毛伸ばし放題、それはだめ。ありえない。不潔に見えるし、みっともないし、かつこ悪い。なんでそんなに伸ばしてんの？」

「なにかの願掛け？ 傭兵としての縁起担ぎ？ とにかく、それだけは絶対にやめなくちゃだめ」

サラに指摘されたガラックは、ドキッとしたように喉仏を大きく上下させ、うつむき加減になって、「でも……伸ばして抜くと、気持ちいいんだよ」と、ちょっとすごい言い訳をこぼした。

それから、彼は照れ隠しのように苦笑した。

「なあ。おれは、小さな農村の出だよ。ご面相は十人並でも、金や地位がありゃ女はなびいてくるって環境で育った。傭兵稼業なら荒稼ぎできるし、ラディン陛下の軍団は戦功をたてりゃ出自なんか問わず出世も思いのままだった。だから……いや、よそう」

ガラックは気力をとりもどしたように目に光を宿しておれを見た。

「おれの魅力がわからねえ女のことなんざ、もうとっとと忘れちまうに限る。おう、シヴァ。一介の傭兵からこんだけの出世を果した上に、ドラゴンハーツの力を持つこのおれ様を安く見るなよ。おれは傭兵だ。荒稼ぎにこそ生き甲斐を感じる。そうとも、金がありゃ、うまいもん食っていい服着ていい女抱けるんだ。おれ様を将として雇いたいなら、金を払え。金払いが良かったラディン陛下のもとへは戻れねえとなったが、だからって、金払いが悪いやつに腕の安売りする気はねえ。お前がおれ様の腕に見合うだけの金を払うなら、それで決めてやらァ」

開き直って胸を張るガラックに、おれは腕一本でのしあがってきた傭兵の矜持を見た。「そう言ってくれるなら、むしろ話が早くて助かる。実力は折り紙つきなんだから、それに見合う金は払うよ。なにしろ——」

おれは円卓の面々を見やった。

「敵の兵を一人倒せば敵は一減るから、差し引き一、敵との戦力差が縮まる。けれど、敵の兵を一人味方につければ敵は一減って味方は一増えるんだから、差し引きすると縮まる戦力差は二。二倍違う。これはとても大きい差なんだ」

もちろん、実際にはそんな簡単にな話じゃない。人間は感情を持つ生き物だから、昨日までの敵を受け入れれば、感情的な軋轢^{あつれき}が生じることは容易に予想できる。そしてまた、強い絆の力で結ばれた部隊は数で劣っていても、絆の力が弱い部隊を打ち破れる仕様をおれは理解しているから、数の多寡^{た か}がすべてじゃないってことも骨身にしみている。

「それに、彼が持っている情報……ラディンが実際に保有している兵力はどの程度なのか、どんな長所があり、逆にどんな短所がある軍団なのか、そうした情報はこれみなすべて高い価値がある。そうですね？」

パッシェリカがおれを後押しする意見を述べてくれた。

「うん、そうなんだよ。まさに、そう。ガラックには聞きたいことがたくさんある」

おれはちらっとサラと視線をかわしあった。

確かに、パッシェリカが言うようにラディンの軍団に関する詳細な情報は、暴王打倒の決戦を挑む際に大いに役立つはずだ。

だが、おれとしてはそれ以上に気になることがある。どうしても、この男に聞きたいことがある——。

「なあ、ガラック。そういうわけで、早速、聞きたいんだけど」

おれは、(この場じゃなく、いったん二人で話せる機会を設けてから切り出すべきかな) と思ったものの、一刻も早く『その秘密』について聞き出したい誘惑に勝てなかった。

「味方になった以上はなんでも答えるぜ。……といたいところだが、なんでもかんでも全部話せるかって言やア、そうじゃねえぞ。どうしても破りたくねえ義理ってもんもあるしな。もちろん、できる限りは答えようと思うが」

「ん……。じゃあ、今、答えたくなければ、熟考して後で答えるって形でもかまわないが、その……」

おれはやや声をひそめた。

「お前って、なんでドラゴンハーツを使えるんだ？」

そう！ まさにこれこそ知りたい謎だった。

おれが自作ゲームの『ラクウェルクロニクル』で主人公専用の能力として設定していたドラゴンハーツを、自作ゲームそっくりの異世界ラクウェルに転移したおれも使える、それって感覚的に理解できるものがある。なにしろ『ラクウェルクロニクル』のプレイヤーキャラ、すなわち主人公に、おれは自身を投影していた。デフォルトネームを、おれのあだ名のシヴァとしていたくらいだ。そうとも、下々の皆々様とは格がちがう物語の主人公にしてスーパーヒーロー的位置づけのおれが、ほかのみんなは使えない特別な力であるドラゴンハーツを使えるのは、むしろ当然ってくらいだ。

だけど、なんでガラックが、本来は主人公様専用の偉大な能力であるドラゴンハーツを発動できるんだ？ おれにとっては世界の七不思議レベルの大いなる謎だった。

(ただ、この場での会話でわかったが、ガラックは自分が本気でエレーナに嫌われていると気づいていなかった。となると、戦場での推測通り、ドラゴンハーツの能力はあっても、チェイン確認能力は持っていない。従って、おれと完全に同等の能力を備えているわけじゃない)

それと、もうひとつ不思議なことがある。ドラゴンハーツは大陸の統一を成し遂げたイスカリエン王朝の開祖にして伝説の王であるジェドだけが使えたって話だから、そんな能力を持った男が戦場で活躍すればあつというまに噂になる。しかし、ガラックがドラゴンハーツを使えるなんて情報を運んできた諜者はこれまで一人としていない。

そうとなると、ガラックはドラゴンハーツの力を最近身につけたか、今日の今日まで隠していたってことになる。

(もしかしたらこいつも、ラクウェルの『外の世界』から来ている存在なのか？ とも思ったんだけど、今しがた、出自は小さな村と言っていたし……。このラクウェルで生まれ

てラクウェルで育った、ありふれた人間みたいなんだよなあ)

じゃあ、なんだ。なぜ、この男はドラゴンハーツを使える？

おれは答えを聞きたくて食い入るようにガラックを見つめた。

「うーむ、そのことか……。まあ確かに、聞きたいことのひとつだろうな……。ラディン陛下の軍団内でも、限られた者しか知らねえ秘中の秘ってやつだが……。しかし、こうなつた以上、話さねえわけにもいかんよなあ……」

ガラックは何かを恐れているかのように、少しうつむき加減になってうんうん唸っていたが、やがて顔をあげた。

「ああもう、しょうがねえ、言っちゃおう。おれは魔法や魔法的なもんは苦手だ。そんなおれがドラゴンハーツなんてとんでもねえ力を使えるのは、あのお方から授かったもんだからだ」

「……あのお方って？」

「ラディン陛下だ。南部をひと呑みにした大一番の戦功に対し報償を与えるとおっしゃつてよ、おれにこの力を授けてくださったんだ」

え？

は？

ラディンがガラックにドラゴンハーツの力を与えた……？

円卓の面々もなんだそれはとざわついた。ただ、彼らの驚きは、おれやサラが受けた衝撃には遠く及ばなかったと思う。

「意味がわからないんだけど……。ラディンって、前王アーウィンの息子で、王家の血筋といったって、普通の人だろ？ つまりそのう、本質的にはこのラクウェルにいるほかのみんなと同じなんだろ？ ドラゴンハーツの力をガラックに与えた？ なんでそんなことができるんだ？」

「てゆーか、そんなことができるなら、配下の兵士みんなにドラゴンハーツの力を与えまくれば、あっというまに自分の軍団を向かうところ敵なしにできるんじゃないの？」

おれに続いて、サラも素朴な疑問をぶつけた。

「そう矢継ぎ早に聞くんじゃねえよ、ちくしょうめ」

ガラックはここで再び口を閉ざし、迷い顔になったが、やがて思いきったように「ええい、ままよ」と舌打ちまじりに言った。

「ラディン陛下は、『普通の人』なんかじゃねえよ」

「というと？」

ガラックが怪談話でもするみたいに声をひそめたものだから、自然、おれもそれに倣っ

てしまった。

「うまい表現が見当たらねえんだが……とにかく、あのお方はおよそ普通なんてもものとはかけ離れてんのさ。おれが初めてラディン陛下にお会いしたのは、陛下に逆らったおれの雇い主を殺して、その代わりこいつの家族は許してやってくれ……と願い出た時のことだった。陛下はおれの顔を、じいーっと見つめてきてな。おれァ、生まれてこのかた何かを怖いと思ったことなんざなかった。そうとも、初めて手を血で汚した時でさえ、そうだった。そのおれが、だ。思わず視線をそらしてうつむいちまったよ。どれくらい勢いで心を押してくるような、そんな圧力のある視線だった。魔的、ってのかな」

「魔的……」

「で、陛下に目をかけられ、取り立てられてから知ったんだが、な。陛下は魔術の道に^た長けたお方でよ。エレナは元・宮廷魔法使いで、いわばその道の本職だが、そのエレナも『魔術に関して、自分は陛下の足下にも及ばない』と公言していた。ことに陛下は、そのう、専門的にどう呼ぶのか知らねえが、特別な力を他人に授ける術が得意で、目をかけた者にはなんらかの大きな力を授けてくださるんだ。エレナのサンダーストームもそう、おれのドラゴンハーツもそう……。王城にでかい儀式部屋みたいなのがあってよ、そこで陛下が授けてくださった。ただ、力を授ける術を使うと陛下はえらく消耗しちゃうようだ。だから誰にでもほいほい術を施すわけにはいかねえんだろうな」

「おいおい、なんだよそれ」

風術師のシャノーラがいぶかしむ視線をガラックに送った。

「あたしは歳こそ小娘でも、塔じゃ何十年に一人って言われてたくらいの英才で、魔術に関しちゃ博覧強記だ。そのあたしでも、そんな術は見聞きしたことがない。一時的に腕力を高めたり敏捷性を高めたりする魔法ならいくらでもあるし術者もたくさんいる。エンチャントって総称される系統の術さ。だけど、あんたが言ってるのって、永続的に、それも超強力な能力を与える術ってことだろ？」

「嬢ちゃんよお、そうは言うが、現におれはそのへんにいるただの男だったんだぜ。それがラディン陛下にドラゴンハーツの力を授かった、こいつは嘘いつわりのねえ真実だ。もっとも陛下はこの件について絶対に他言するなと釘をさしてきた。お前らの反応を見て思うが、諜者どももつかんでねえ情報だろうな」

「では、あなた以外にも、ラディン配下には強力な、ドラゴンハーツのような力を授かった者がいるのですか」

パッシェリカが驚きをあらわにして、喘ぐようにたずねた。

「詳しくは知らねえ。陛下の寵を競う軋轢があってよ、将軍同士の仲がいい軍団じゃない

んでな……。とはいえ、ラディン陛下の麾下で将軍やそれに匹敵する役職の者は、例外なくなんらかの力を授かっているとみていいんじゃないかと思う」

円卓の面々はますますざわついた。ガラックの話が事実なら、伝説の王ジェドと同じくドラゴンハーツを使えるおれよりも、ラディンの方が強大な特殊能力を持っていることになる。

(いったい、どういうことなんだ。おれが能力値を確認したところ、王家の血筋であるパッシェリカには特別なスキルが備わっている。周囲の敵の SPIRIT ……士気を下げる効果のある、『王の威厳』ってスキルが。とすると、イスカリエン王家の血筋に連なる者には生まれつきなんらかの特殊スキルが備わるってことなのか？ でも、パッシェリカの異母姉にあたるアノンにはそういうスキルはないんだよな……)

おれが考えこんでいると、ガラックが「おいシヴァ、おれの方でも聞きたいんだが。お前の方こそ、なんだってドラゴンハーツを使えるんだ？ ひょっとして、以前にラディン陛下から力を授かり、その後、離反したってことか？」とたずねてきた。

「え？ おれ？ おれは、その、古代に栄えた竜族の血を引く伝説の勇者にしてドラゴンナイトだから……つまりは、生まれつきの能力で……」

おれはとっさに、自作ゲームの主人公に関する設定を語ってしまった。まあ、パッシェリカたちにもそう説明しちゃってるから、これ以外に言いようがない。

「竜族？ 伝説の勇者だあ？」

ガラックは大与太を聞かされたとでも言いたげに眉をひそめた。

「ネビウス老」

と、ここでパッシェリカが円卓の一席をしめている老人へ視線を飛ばした。

「あなたはシャノーラと同様、魔法使いです。魔術に関する専門知識がある。ラディンの件、あなたはなにか思うところがありませんか？ 考察など、あれば述べてほしいのですが」

すると――。

「えっ？ えっ？」

老人はうろたえた。視線の置きどころに困ったように、きょときょととせわしくあちこちを眺め、そして……。

「わ、わしは！ わしは、なにも知りませんぞ！ ほっ、ほんとうです！ 誓って、ほんとうです！」

彼は怯えたような目をし、枯れ木のような手を振りたくりながら、金きり声をあげた。それは明らかに奇妙な反応だった。もっというところ……「知らない」と言いながら、じつは

何か知っているんじゃないか、そんな風に勘ぐりたくなる反応だ。

「……ネビウス老」

パッシェリカもピンとくるものがあつたらしく、重ねて彼に声をかけた。

その時、だ。

会議室の扉の向こうで衛兵と言い合う何者かの声が聞こえた。会議中とわかっていて静かに話さないあたりに、切迫した気配が漂っていた。

「失礼します！」

ノックもせずにあわただしく入室してきたのは、グレイン麾下の若いケットシーだった。

「なんだ、カーリーナ、どうした。会議中だが——緊急事態か？」

たずねるグレインに、彼は「そうとも言えるし、そうでないとも言えますが、そ、そうじゃないかな、と」とつかみどころのない返事をよこした。

「落ち着いて報告してくれ」

おれが声をかけると、カーリーナは手の甲で顔を洗う猫そっくりの仕草をした。ケットシーは、照れ隠しなど、ちょっとあわてた時にこの仕草をする。

「申し上げます。あの、来客といえますか、その、訪問者が来ておりまして……」

「口ぶりからすると重要人物らしいが」

「はい、そうなんです」

「で、誰が来たんだ？」

「その……」

カーリーナは口ごもってうつむいてから、思い切ったように顔をあげた。

「もっ、申し上げます！ イスカリエン王朝の正統なる王位継承者にして継承順位第一位にある先王アーウィンの息子にして長兄、ラディン・イスカリエンと名乗る男が、パッシェリカ陛下に面会を求めています！」

え？

は？

ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア？ なんだそれー！

「ちょっ……あの……今、なに？ ラディンって言った？ ラディンって、暴王ラディン？ 敵の総大将の人？ 悪のラスボス？」

サラが目を白黒させながらつぶやく。おれだってあまりのことに目を丸くしていたさ。ありえないだろ、なんだそれ！

「いったい何を言っているんだお前は。酔っているのか……？」

呆れ顔になるグレインに、カーリーナは首を横に振って「おれは以前、グレインさんの命

令で王都に潜りこみ諜者として活動していました。ラディンの顔を見知っています！」と反論した。

「どういふことです！ ラディンが軍を率いてすでにこの大堰城に迫り、会見を求めてきた、という意味なのですか？」

パッシェリカが腰を浮かせてたずねると、カーリーナは首を横に振った。

「いえ、一人です。一人でやってきたようです。そっ、その、どこからどう侵入したものか、いつのまにか城内に紛れこんでおり、先ほど廊下ですれちがいざま、おれに声をかけてきたんです……」

ますますありえない。なんで敵の総大将が単身で敵軍のどまんなかにも乗りこんでくるんだよ！

「では、ひとまずどこかの部屋へとどめているのだな？」

アノンが、当然そうなのだろうと問いただすと、カーリーナはまたまた首を横に振った。

「いえ、あのう、ここへ連れてきてしまったんですが、まずかったですか……？」

なにー！

カーリーナの言葉がまだ宙に漂っているかいけないかのうちに、扉の外でわめき声があがった。

次の瞬間――。

バン！

扉を乱暴に蹴り開けて、そいつはおれたちの前に姿を現した。

漆黒の甲冑に身を包んだ若い騎士。キリッと引き締まった顔の伊達男だが、優しさや柔らかさとは縁遠く、切れ味鋭い刃物の印象がある。ていうか、カーリーナも気が動転していたのか、腰に剣を佩いたままじゃないか！ ここへ連れてくるにしてもせめて武器は取り上げてから案内しろよー！

ネビウスがそいつを見るなり「ひいっ！」と悲鳴をあげて椅子からずり落ち、ガラックが「ラディン陛下！」と目を剥いて叫んだ。

おれはとっさに立ち上がっていた。手は聖剣の柄にかかっている。

「ふん……。これがおれの妹たちか」

男は――ラディン・イスカリエンと名乗る人物は、不^ぶ躑^{しつけ}な視線をパッシェリカとアノンに送った。

アノンが「あっ」と声をもらした。アノンはパッシェリカと同様、王家が不測の事態で断絶するのを防ぐため、散種の儀によってもうけられた前王アーウィンの子だ。ただしそのことは、アノン以外では、秘密を明かしてもらったおれしか知らない。そう、異母妹で

あるパッシェリカでさえまだ知らない秘密なんだ。

ほかにこの秘密を知る者がいるとすれば、それは実父であるアーウィン王や、アーウィン王からその情報を得た人物のみのはず！

「おい。イスカリエンの正統なる王位継承者がじきじきにお出ましになったんだ、席を用意したらどうだ？ それと、腹が減った。酒も欲しい。今、この城にあるやつで一番上等なものを用意させろ」

ラディン・イスカリエンはそう言い放つと、びっくりするやらどっきりしたやらで哑然としているおれたちに、悪戯小僧のような笑みを浮かべて見せたのだった。